

GOVERNMENT OF INDIA

ARCHAEOLOGICAL SURVEY OF INDIA

CENTRAL  
ARCHAEOLOGICAL  
LIBRARY

ACCESSION NO. 47275

CALL No. 723.34/Mam

D.G.A. 79.

47275



デリー  
DELHI

I

PUBLICATION OF THE TOYOBUNKA KENKYUSHO

# DELHI

## ARCHITECTURAL REMAINS OF THE DELHI SULTANATE PERIOD

DETAILED REPORT OF ARCHAEOLOGICAL SURVEY  
CARRIED OUT BY THE MISSION  
FOR INDIAN HISTORY AND ARCHAEOLOGY  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

47275

*By*

TATSURO YAMAMOTO

MATSUO ARA AND TOKIFUSA TSUKINOWA

VOLUME I  
*GENERAL LIST*

TOKYO  
THE INSTITUTE OF ORIENTAL CULTURE  
THE UNIVERSITY OF TOKYO

1967

(Publication of the Tojokunko Kenkyusho)

"DELHI"

東京大学東洋文化研究所研究報告

Architectural remains of Delhi-sultanate period

デリー

デリー諸王朝時代の建造物の研究

by  
Tatsuro Yamamoto  
Matsuo Aoi & Tokifusa Tsukinowa

ACC. 47275

山本達郎

荒松雄 月輪時房



K.I. General list

723.34

Yam

第一卷

遺跡総目録

東京大学東洋文化研究所

1967

Tokyo.  
Institute of oriental culture  
Univ. of Tokyo  
1967

# デリー - 諸王朝時代建造物分布図

1 : 40,000

0 500 1000 2000 3000 m

建造物の記号

- モスク
  - 墓塔
  - ★ 墓塔
  - ▽ 水利施設
  - ◆ その他の建造物
- 色方面は2km平方を示す

道路

アップヒルロード	Upper Ridge Road	F-7
カーンロード	Carn Road	H-7, 6
クワッドロード	Quadr Road	H-5, 6
サウスイーストロード	South-East Road	H-13
ステーションロード	Station Road	D-6
シラガッヒロード	Shiragah Dilli Road	H-12
チャウキマールグ	Chauki Marg	H-4
ティムールマールグ	Tim Murr Marg	G-8
リジャグッヒロード	Rajagah Road	D-5
パレードロード	Parade Road	E-3
パスロード	Pass Road	F-8
マハラロード	Mahara Road	I-9, 7, 8, 9
ミヘラロード	Mihra Road	G-11, 12
ミヘラハイウェイ	Mihra Highway	F-13
バハマンロード	Bahmani Road	G-5
ラトロード	Lat Road	H-11
ラムロード	Ram Road	H-10
ラットロード	Lat Road	H-9

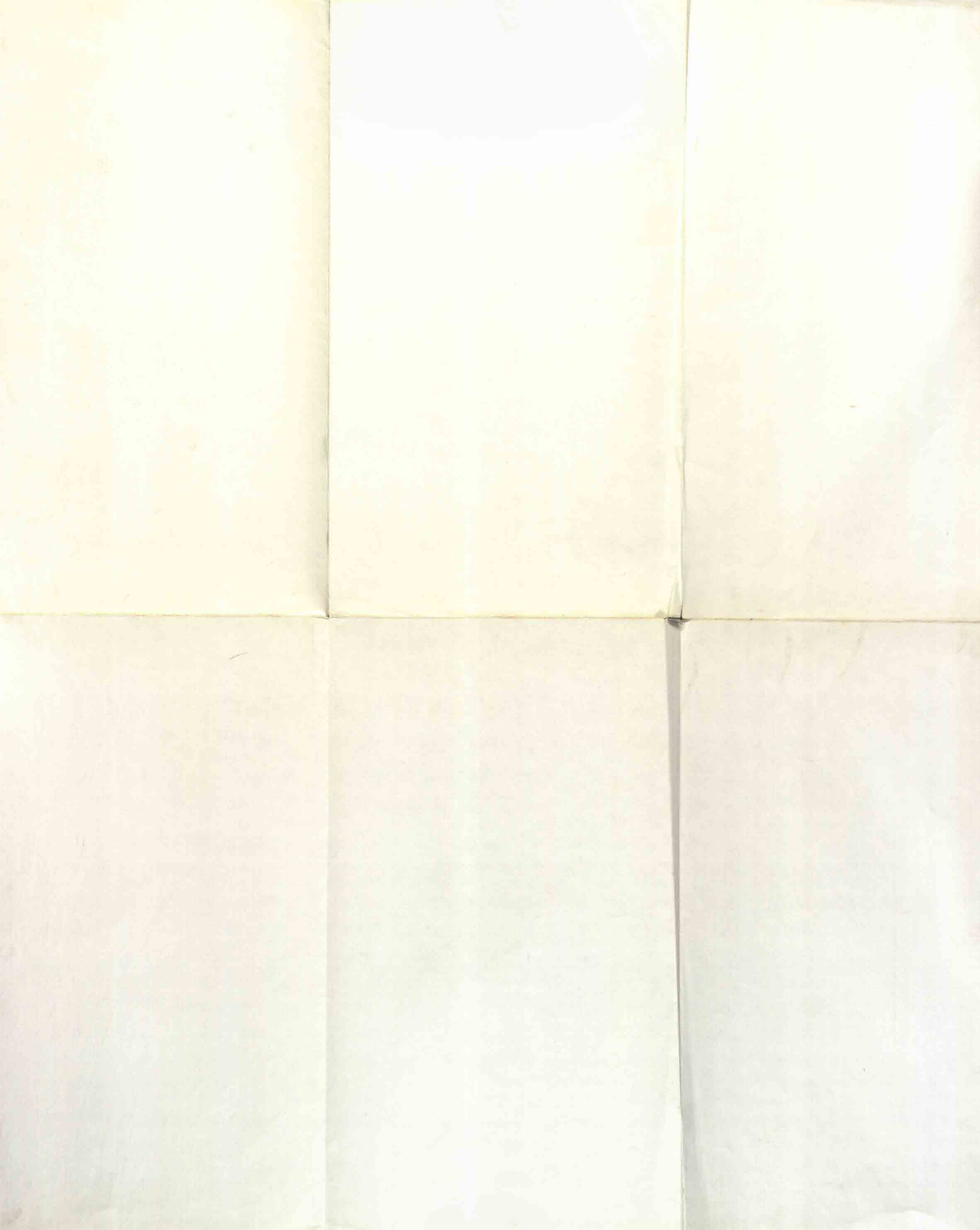
部落および住宅地

アムト	Amrit	G-12
カワキ	Kawki	F-11
カマラ	Kamara	G-4
カキ	Kaki	G-11
カシ	Kashi	G-10
カシ	Kashi	H-12
カシ	Kashi	G-9
カシ	Kashi	G-13
カシ	Kashi	I-11
カシ	Kashi	H-11
カシ	Kashi	H-12
カシ	Kashi	E-14
カシ	Kashi	H-12
カシ	Kashi	H-10
カシ	Kashi	I-9
カシ	Kashi	G-11
カシ	Kashi	G-12
カシ	Kashi	E-10
カシ	Kashi	G-10
カシ	Kashi	G-12
カシ	Kashi	C-10, 11
カシ	Kashi	H-10
カシ	Kashi	H-10
カシ	Kashi	E-11
カシ	Kashi	H-10
カシ	Kashi	F-13
カシ	Kashi	G-12

著名な史跡・公共施設その他

アムト	Amrit	G-6
アムト	Amrit	F-13
アムト	Amrit	I-8, 9
アムト	Amrit	H-6
アムト	Amrit	G-9
アムト	Amrit	F-13
アムト	Amrit	H-9
アムト	Amrit	H-12
アムト	Amrit	C-10, 9
アムト	Amrit	G-3, 4
アムト	Amrit	L-6
アムト	Amrit	H-3, 4, 5, 6, 7
アムト	Amrit	I-6
アムト	Amrit	H-6
アムト	Amrit	I-9
アムト	Amrit	H-6
アムト	Amrit	G-8
アムト	Amrit	J-9
アムト	Amrit	I-8
アムト	Amrit	F-10, 12, 13
アムト	Amrit	H-9
アムト	Amrit	H-2







東京大学インド史跡調査団報告書

© COPYRIGHT 1967 BY  
THE UNIVERSITY OF TOKYO  
ALL RIGHTS RESERVED

47275  
26/3/69  
723.24/Y.8000

写真撮影  
三枝朝四郎

PRINTED IN JAPAN BY  
THE UNIVERSITY OF TOKYO PRESS  
東京大学出版会

## 刊 行 の 辞

東京大学東洋文化研究所は、創立以来二十五年のあいだ、アジア地域を対象とする人文および社会科学の諸領域にわたっての基本問題について研究を行ない、その成果を逐次世に問うてきた。ここにまた、インド史跡調査団の現地調査に基づく、デリー諸王朝時代の建造物に関する研究報告を刊行する運びとなったことは、まことに喜びにたえない。

そもそも、インド史跡調査団は、1959年の春に、飯塚浩二教授が所長として在任中、山本達郎教授と荒松雄助教授とを中心に、三枝朝四郎・大島太市・月輪時房各研究委嘱を加えて組織され、本学生産技術研究所の協力を得て、1959年度および1961年度の二回にわたって現地調査を実施してきたものである。その後、結城令聞・江上波夫・小口偉一各教授の所長在任の期間を経て本年に至るまで、前記団員を中心に、各方面の助力のもとに、資料整理を行ない、それに基づく研究に専念してきた。私自身、この方面の研究に関しては全くの専門外であるが、この調査研究の内容は、幾多の重要な問題を含んでいるにもかかわらず、従来、日本は勿論、インド・パキスタン・イギリス等をはじめとする海外諸国の関連学界において、未開拓の重要分野として残されてきたものである。従って、資料の提供や研究成果の発表による学界への寄与はきわめて大きいものがあると考えられる。

本研究所は、江上教授を団長とする東京大学イラク・イラン学術調査団の現地調査およびその後の研究の成果を、すでに7冊からなる報告書として公刊してきた。その発掘、蒐集してきた資料は、すでにかかりの数量にのぼっており、その研究成果とともに、内外の研究者によって高い評価を受けている。インド史跡調査団の諸資料およびその研究成果もまた、将来、広くこの方面に関心をもつ研究者に利用されることによつて、大きな意義を持つものと信じている。

いま、本研究所においてその研究報告の第一冊を刊行するにあたって、団長山本教授と、長期間にわたり地道な資料整理と研究とをつづけてきた団員各位の労を多とすると共に、現地調査の実施、資料整理と研究、および報告書出版に際して、多大の援助と激励とを与えられた各方面の方々に、本研究所の歴代所長および所員を代表して、深甚なる謝意を捧げる次第である。

1967年1月

東京大学東洋文化研究所長

川 野 重 任



## 序

13世紀の初頭から16世紀の中葉に至るあいだ、デリーを都として活動した五つの王朝は、イスラーム君主たるスルターンを首長としていたところから、“サルタナット”の名を以て呼ばれているが、これら諸王朝の時代に造られた建造物が、現在デリーおよびその周辺に夥しく残存している。その数は単位のとり方によって異なるものの、約450に近いといってもよく、是等の遺跡はインドはいうに及ばず、広く世界の歴史、文化の研究の上に極めて重要な意義を持っている。東京大学インド史跡調査団は1959～1960年、1961～1962年の二回にわたって、是等デリー諸王朝時代の遺跡を中心とする調査、補足調査を行った。

デリー諸王朝およびこれに続くムガル朝の時代は、イスラームを奉じる政治勢力が、インドの広大な地域を統治した時期である。大部分の住民が古来のインド文化の伝統の中に生き、ヒンドゥー社会のカーストと宗教の力が強く民衆の生活を規制する一方、西アジアに起原するイスラーム勢力が外来者として政治的に支配権を握り、社会的にも文化的にもいわば上下に重なる二つの階層が作られていた。イスラームとインドの二大文化が重なりあって、政治的に支配被支配の関係にある状態は前後六世紀にわたって続いたが、その間に両者は互に激しい対立と抗争を繰返すと共に、緊密な接触と衝撃によって、そこに文化の融合と対応が生じ、新しい展開が進んでいった。このようにしてインドにおいて独自の発展を遂げたイスラーム文化として、“インドイスラーム”文化の形成をみたのである。デリー諸王朝ならびにムガル朝は、西北インドを経て南下したトルコ系アフガン系等の外来民族が、支配者として君臨した時代であるから、これを“征服王朝”と称しても差しつかえないが、これらイスラーム系の諸王朝の統治下において、大きく変革されたインドの歴史は、多くの歴史家によって“中世”の名称を以て呼ばれる特色のある時期を作り出したわけである。そしてこの時代の政治、経済、社会、文化は、総体として互に密接不可分の関係において、変化、発展の道を辿った。一神教の普遍原理を主軸とするイスラーム教と、カーストによって組み立てられたインド社会との接触は、下層階級のイスラーム教への改宗を促進したのをはじめとして、生活現象の諸領域に、文化の基本的な差異に由来する多種多様の変化を生み出している。

イスラーム勢力のインド支配時代はインド研究の極めて重要な領域で、現在のインド・パキスタン両国の理解に直結する諸問題を包含していると共に、イスラーム研究の観点からしても、広大な研究分野を成しているのである。西南アジアに起ったイスラーム文化が、西は北部アフリカ・イベリヤ半島から、東は東南アジア群島の東部にまで、広く波及する過程において、インドにおいてどのような変質を遂げたかという問題は、組織的に究明する必要がある。それはインドを経由して東伝した東南アジアのイスラーム文化の理解のためにも、不可欠の研究課題である。更にまた文化の接触・交流の見地からすると、この時代のインドは、世界の二つの大文明が重層をなした状態が、数世紀にわたって継続した時代として、歴史上他に類例のない状況を作り出していたわけである。そしてこのような広大なまた重要な研究領域に対して、現在われわれは歴史と人間の本質を深く掘り下げた見地に立って、科学的な研究を遂行しようとしているのである。文献の表面に現れて来る記述にとらわれずに、対象とする時代のインド人の生活、支配者のみならず民衆の生活に即して考察すると、彼等が深い苦悩の中において解脱を願い、真理を求め美を求めた姿を通じて、旧来の

諸研究とはまた異った視角が現れて来る。一般に研究の課題が重要であり、研究の視角に新鮮さがある場合にも、具体的な研究は史料の欠除のために甚だ限られたものとなるのが普通であるが、デリー諸王朝時代に関するわれわれ東京大学調査団の研究調査も、いうまでもなく局限された作業の一つをなすに過ぎない。ただわれわれとしては、イスラーム勢力のインド支配時代という大きな世界史的課題の新しい角度からする解明を志向し、またそのために不可欠な史料を学界に提供することを意図しているのである。

インド史研究の史料を概観すると、古来インドで歴史書が作られなかったことは顕著な事実で、古代史研究のためには考古学が特に重要な役割を演じているが、イスラーム勢力がインドで発展すると歴史が書かれるようになる。アラビア語の比重の大きい宗教文献とならんで、ペルシャ語で書かれた歴史書や刻文が現れてきて、是等の史料を中心とした歴史の構成が可能になる。しかし史書が存在するといっても、その数量は甚だ少く、同時代の日本・中国・ヨーロッパなどとは到底比較すべくもない状況であるから、歴史構成のための考古学的資料、遺跡・遺物の研究はやはり極めて重要な比重を持っている。この意味では同じくイスラーム時代といっても、デリー諸王朝の遺跡の研究の方が、ムガル時代のそれに比べて重要度が高いといって過言でない。東京大学インド史跡調査団がデリー諸王朝時代の遺跡調査を行うに際しては、この意味での遺跡の重要性に着目しているのである。しかし数は多くはないものの、この時代には史書があり、刻文が残っているから、われわれは遺跡の調査とこれらの記録とを、あわせて研究を進める。およそ調査の報告を発表するに際しては、研究資料の提供を主眼とするものと、研究の最終目標に焦点を置いて研究内容の体系を重視するものがあるといつてよいが、この調査団の報告書は前者の方針をとり、部分的に研究書の性格を具えたものとしてある。従って当然のことながら調査団構成員の個々の研究目標と関心とからすれば、この報告書は外見的には可成り相違した形のものとなっている。われわれは将来他の研究者が種々の角度から利用し得る資料の提供を主眼として報告書を作成し、報告書に掲載し得ない多くの資料は系統的に整理して東洋文化研究所に保存することとしている。

もともと東京大学インド史跡調査団を組織するに当っては、それに先立つ前段階として荒松雄君の調査があった。即ち同君が1954～1956年におたってインド史の研究のためにニューデリーに滞在していた間に、この地方の各種の遺跡の存在を確かめ、広く写真を撮影したのがこの調査の発端をなしている。私は以前からデリー諸王朝時代史に興味を持って、この時代について若干の考察を試みたこともあったが(人文、2巻2号、1948、13～25頁)、荒君はこの時代の歴史を専門としており、帰国後デリー遺跡の調査に関する報告を発表した。それに接して、私は前述のようなこの種の研究の重要性に鑑みて、東京大学として調査団を結成して組織的に調査を行うことを荒君に提案し、東洋文化研究所においてこの計画を進めることとした。その際、近年デリーの都市が急速に発展し、住宅その他多くの建築物が造られて、現存遺跡の調査が困難になり、又遺跡の消滅の恐れもあることは、この調査事業を遂行する一つの重要な動機ともなっている。荒君も私も本来歴史家であり、この種の現地調査遂行のためには考古学者の参加が不可欠であるし、遺跡の実測・写真撮影等の技術的な側面、特に遺跡の高さの測量を短期間に行う方法を解決しなければならないので、私は大学内の各方面の専門家の意見をきき、生産技術研究所の丸安隆和教授の協力を得て、写真測量の方法を採用する方針を立て、学内に作られたインド史跡調査のための専門委員会においてこの調査方法の検討を行い、その承認を受けて企画を実行に移した。当時の専門委員会の構成員は飯塚浩二・石田英一郎・江上波夫・大島清・小口偉一・駒井和愛・鈴木尚・関野雄・高井冬二・多田文男・中村元・仁井田陞・藤島玄治郎・丸安隆和・村川堅太郎・山本達郎・吉岡力・吉川逸治・米沢嘉圃・亘理俊次の諸教官であった。(なお補足調査の

当時には、多田・仁井田・藤島三教授に代わって、太田博太郎・木内信蔵・結城令聞の三教授が加わった。) 調査団は荒君のほか、三枝朝四郎・大島太市・月輪時房の諸君、ならびに私自身、を含む計五人を以て構成した。調査事業は終始一貫した共同作業であり、現地作業分担の詳細は「総論」に記す如くであるが、研究の内容からいえば、荒君が建造物全般の探査確認と、文献研究、遺跡一般の歴史的考察を担当し、月輪君が遺跡の考古学的研究を受持ったものである。そして写真測量を中心とする技術的な面で大島君がこれを担当し、三枝君が遺跡の写真撮影に従事した。私は総括的に調査企画と事業実施を進めると共に、研究の面では、遺跡の様式上の問題を扱う。この調査は歴史的文化的研究が主体であるから、調査における技術的な面は報告書としては副次的に取扱うが、私はこの調査団が我が国の海外遺跡調査としてはじめて採用した写真測量の技術が、その後の進歩改良をまって、将来広く考古学の研究調査に、簡便な形で用いられるようになることを期待している。

東京大学の調査団が、イスラーム勢力のインド支配時代の中でも、特にその対象をデリー諸王朝に限定したのは、前記のような荒君が以前に行なった調査と、遺跡の史料としての価値評価から来ていると共に、デリー諸王朝時代に各地方に割拠した政治勢力の残した遺跡や、時代の降るムガル時代の遺跡は、あまりにも数量が多く、一挙にこれらを含めて調査するのは不可能であることも理由となっており、更にまたデリー諸王朝の遺跡の把握が、ムガル時代の歴史を解明する基礎ともなり、また諸王朝時代の地方政権の問題を考えるために、中央政権としてのデリーの歴史の解明が不可欠と思われるからでもある。地方政権、或はムガル朝の遺跡については、調査団として部分的に写真を撮影し、関係資料の蒐集を行っているので、報告書には附随的にこれを扱うこととする。上記のような事情で調査団の研究の焦点が定められたが、デリー地区の現地作業の実施に際しては、次のような方針を立てた。即ち数百個所に及ぶ遺跡を、短期間に調査して学術的な成果をあげるために、一方ではなるべく多くの遺跡を訪ねてこれを概観すると同時に、他方では幾つかの遺跡を選んで詳細に調査する方法である。詳細な調査といっても、それを三つの段階に分けて、あるものは特に詳しく、あるものはやや簡略に調査する方式をとった。従って報告書に現れる各種遺跡の記述は、粗密の程度を揃えたものとしていない。それは遺跡の選択の当否に見解は分かれ得るとしても、数量の多い対象を短かい時間と限られた費用で調査する場合に、このように精度を区分した計画が最も有効であると考えたからである。そして調査団としては発掘を一切行わない方針とした。一つの遺跡に限定して考えれば、発掘を伴う詳細な調査が望ましいが、地上に現れた遺構が夥しく存在し、種々の事情で調査を急ぐ場合には、発掘を行わない企画とすることが、総体的にみて学術的成果を収める上で賢明であると考えたからである。デリー諸王朝の各種各様の遺跡の中から、調査団においては、特にモスクと墓と水に関する遺跡を取り上げて、その中から幾つかの遺跡を選び、これに対して粗密の精度をわけた調査を行った。ここに出版する報告書の第一冊はデリー諸王朝の遺跡の総体を概観したものであり、第二冊以下に遺跡の種類を分けて、選択調査の結果を中心とした記述を行い、また様式の変遷その他の研究をも発表する予定である。既述の如く報告書の主調は研究資料の提供にあるが、研究の視角は多角的にとっており、歴史的・考古学的であると共に、宗教史・美術史・建築史にわたる諸問題を取扱うこととなる。デリー諸王朝時代の遺跡の研究に際しては、同時代の地方遺跡やムガル朝のそれとの比較、更に諸外国、特に西南アジア・中央アジアの諸遺跡との比較が問題となり、相互の影響関係にも留意する必要があるが、本調査団の報告書はデリーの遺跡、デリーの歴史に焦点をしばっており、広範な比較研究は他日の問題とする。

東京大学インド史跡調査団は、その現地調査を遂行するに当って、東洋文化研究所にその本拠を置くと同

時に、生産技術研究所の協力を得、文学部考古学研究室、工学部建築学科の支援を受け、大学の内外にわたって、多くの援助を与えられた。研究の内容については、前記専門委員会の構成員のほか、学内では建築史の関野克・村松貞次郎・稲垣栄三諸教官、その他東京外国語大学の黒柳恒男助教授、都立大学の石井昭氏から助言を得た。鈴木芳朗氏は立体写真の図化作業に従事し、斎藤菊太郎氏は補足調査に参加したほか、出版技術に関して助言を与え、木村源藏氏は各種図面の作成を担当した。一方、現地調査の経費の面では東京大学の校費その他の国費の外に、外務省からの補助を受け、また東京大学総合研究会を通じていくつかの会社および経済団体からの寄附を与えられた。また調査遂行の後に各種の資料を整理研究する段階では、東洋文化研究所の校費、科学研究費のほかに、三島海雲記念財団から特別の援助を受けた。調査実施に当ってはインド政府、特にインド考古調査局(Archaeological Survey of India)、特にフマユーン=カビール(Humayun Kabir)、ゴージュ(A. Ghosh)、デーシュ=バンデー(M. N. Deshpande)、ジャルマ(Y. D. Sharma)、ラカーニー(G. F. Lakhani)その他の諸氏から、多大の便宜を与えられ、また各大学、研究機関の方々から多くの示唆を与えられた。在インド日本大使館では那須皓大使、松田修三書記官その他多くの方々から一方ならぬ御世話をいただいた。そして本年度に国費による出版費を受けて、ここに報告書の第一巻を刊行する運びとなったものである。調査団としては私が現在文学部長の用務のために時間の余裕に乏しく、この巻の執筆は専ら荒・月輪両君が担当した。

東京大学の茅誠司、大河内一男両総長、東洋文化研究所歴代の結城令聞・飯塚浩二・江上波夫・小口偉一・川野重任各所長をはじめとして、所員各位はこの事業をつねに励まし、援助してくださった。文部省では岡野澄審議官その他大学学術局学術課、研究助成課の担当の諸賢、その他、東京大学では、生産技術研究所の福田武雄・藤高周平・岡本舜三の三所長、丸安隆和教授とその研究室員各位、附属図書館の伊藤四十二館長、本部事務局の鶴田酒造雄・藤吉日出男両事務局長はじめ経理関係の方がた、東洋文化研究所の、工藤松之助・宮本健の両事務長をはじめとする事務関係の職員各位、わけでもインド史跡調査事務担当の今城治子事務官に各種の御援助をいただいた。第一巻の出版に当っては、東京大学出版会、特に石井和夫・太田行生両氏の御世話になった。その他、調査団が現在に至るまでに恩恵を受けた個人や団体、機関の数はまことに多い。ここに、深く感謝の意を捧げる。一々お名前を列挙して謝意を表する筈であるが、この調査結果の整理、研究、出版の事業は現在なお継続中で、完成までには更に各方面の御教示と御協力とを仰ぐこととなると思われるので、調査団の報告書としてはその最後の巻に、事業の終結までの経過の報告と併せて、各位の御名前を一括して掲載することとしたい。

1967年1月

東京大学インド史跡調査団長

山本達郎

インド史跡調査団の構成

山本達郎 団長

荒松雄 副団長 (歴史学)

三枝朝四郎 団員 (写真撮影)

大島太市 団員 (写真測量)

月輪時房 団員 (考古学)

木村源蔵 (図面作製)

技術協力

東京大学生産技術研究所

写真測量研究室



## 目 次

刊 行 の 辞	川 野 重 任 v
序	山 本 達 郎 vii

## 総 論

は じ め に	3
第一章 現地調査と資料整理の概要	
第一節 現地調査の経過と内容	4
第二節 資料整理の経過と内容	7
第二章 デリー諸王朝の支配の変遷	
第一節 初期の状況	
1 デリー＝サルタナットの成立	10
2 サルタナット支配の拡大	11
3 イスラームの波及とスーフィーズム	13
4 サルタナット初期のデリー	14
第二節 中期の状況	
1 サルタナット体制の動揺	16
2 サルタナット中期のデリー	18
第三節 末期の状況	
1 サイイド朝とアフガン人の制覇	20
2 サルタナット末期のデリーと地方勢力	21
第三章 建造物に関する従来諸研究	
第一節 19世紀前半の状況	25
第二節 19世紀後半の状況	28
第三節 20世紀の状況	33

#### 第四章 建造物の種類とその現状

第一節 建造物の種類 ..... 39

第二節 建造物の現状 ..... 41

### 遺跡総目録

まえがき ..... 47

1 遺跡総目録の構成について ..... 47

2 遺跡の分類と配列について ..... 48

3 個々の建造物の叙述について ..... 49

モ ス ク ..... 51

墓 地 ..... 64

墓 建 築 ..... 71

水 利 施 設 ..... 92

その他の建造物 ..... 102

#### 附 録

附 録 1 ..... 115

附 録 2 ..... 117

附 録 3 ..... 118

建造物固有名詞索引 ..... 119

附図 デリー諸王朝時代建造物分布図

本報告書の執筆の分担はつぎのとおりである。「総論」については、第一章を荒と月輪とが共同で執筆し、第二章から第四章までは、荒が執筆した。「遺跡総目録」は、若干の建造物について山本が担当したほかは、荒と月輪とが討議を重ねたうえ、共同で執筆した。これらの原稿の一部については、山本が若干の補訂を加えた。

図版および挿図に用いた写真は、その大部分が三枝氏の撮影によるものであるが、あわせて、山本・荒・月輪が撮影した写真をも、適時、使用した。図版の編輯には、山本・荒・月輪があたったほか、とくに技術的な点については三枝氏をわずらわした。巻末の「附録」、および現存する遺跡の分布をあらわす附図は、荒と月輪とが作成した。なお、附図の製図は小川政博氏に依頼した。

「デリー」の題字は山本の筆になるものであり、また、表紙の押型文様は、デリーに現存するベ-ガンブ-リー-マ-スジ-ッドのディスクの一つの漆喰文様を写したものである。

## 図版目次

- 図版 1 M. 1 クーワットゥル=イスラーム=マスジッド 礼拝室南端のアーチの背面とクトゥブ=ミーナールの西面全景
- 図版 2 a M. 1 クトツブ=ミーナール 最下層のグェランダ附近 東面  
b M. 1 同上 最下層の碑文と文様
- 図版 3 a M. 1 クーワットゥル=イスラーム=マスジッド 最古の部分の礼拝室東正面と北廻廊の一部  
b M. 1 同上 礼拝室東正面中央アーチの上部
- 図版 4 a M. 1 同上 最古の部分の東廻廊と南北廻廊の一部  
b M. 1 同上 東廻廊 内部 北より  
c M. 1 同上 北廻廊中央部のドーム天井内部
- 図版 5 a M. 1 同上 最古の部分の東正面入口  
b M. 1 同上 北廻廊入口  
c M. 1 同上 北廻廊 北面
- 図版 6 a M. 1 同上 最初の拡張部分の南部礼拝室東正面と南廻廊の一部  
b M. 1 同上 礼拝室東正面の中央アーチ下部の文様と碑文
- 図版 7 a M. 1 同上 二度目の拡張部分の南門アラーイー=ダルワザ 南面  
b M. 1 同上 東面  
c M. 1 同上 内部東北隅
- 図版 8 M. 1 同上 東面入口のアーチ
- 図版 9 a M. 1 同上 二度目の拡張部分の南廻廊と南門 北より  
b M. 1 同上 南門 北面
- 図版 10 a M. 1 同上 アラーイー=ミーナール 南面  
b M. 1 同上 同ミーナール 南面
- 図版 11 a M. 2 ジャマート=ハーナ 東正面  
b M. 2 同上 礼拝主室 内部西側
- 図版 12 a M. 2 同上 西背面  
b M. 3 トッグルカーバードのジャーマ=マスジッド 礼拝室の廢墟 東より
- 図版 13 a M. 4 ベーガンブーリー=マスジッド 全景 北より  
b M. 4 同上 東門と東廻廊の一部
- 図版 14 a M. 4 同上 礼拝室 東正面  
b M. 4 同上 南部礼拝側室 内部 北より
- 図版 15 a M. 5 フィーローズ=シャー=コートラのジャーマ=マスジッド 礼拝室西面と北門  
b M. 5 同上 北門 北面
- 図版 16 a M. 5 同上 内部 西側と北側  
b M. 5 同上 崩壊した東側の部分と内部南側の一部
- 図版 17 a M. 6 カーリー=マスジッド 東南より  
b M. 6 同上 東門 正面
- 図版 18 a M. 6 同上 礼拝室 内部崩壊部分 南より  
b M. 6 同上 礼拝室 中央ミヒラーブ  
c M. 6 同上 通路 内部 南より
- 図版 19 a M. 7 キルキ=マスジッド 南門と外部東南隅  
b M. 7 同上 屋上
- 図版 20 a M. 7 同上 内庭と柱廊の一部  
b M. 7 同上 中央ミヒラーブ  
c M. 7 同上 柱廊 内部
- 図版 21 a M. 8 カレーン=マスジッド 東門 正面  
b M. 8 同上 礼拝室正面と内庭
- 図版 22 a M. 9 カール=サラーイーのモスク 礼拝室 東正面  
b M. 9 同上 西背面
- 図版 23 a M. 10 シャープル=ジャートのモスク 中央礼拝室 東面と南面  
b M. 10 同上 中央礼拝室南面と崩壊した南部礼拝側室  
c M. 10 同上 中央礼拝室 内部西側
- 図版 24 a M. 11 ハウズ=ハースのモスク 西背面  
b M. 11 同上 礼拝室 東正面
- 図版 25 a M. 12 チョーサト=カンバー 礼拝室東正面  
b M. 12 同上 西背面
- 図版 26 a M. 12 同上 東側の附属建物 東面  
b M. 12 同上 同建物 内庭に面する東北部分
- 図版 27 a M. 13 クトツブ=ロードのモスク 礼拝室 東正面  
b M. 13 同上 礼拝室 内部 南より
- 図版 28 a M. 14 モスク 礼拝室 東正面  
b M. 15 スルター=ジョーラー=東方のモスク 礼拝室 東正面
- 図版 29 a M. 16 モスク(?) 残存する南の部分  
b M. 17 モスク(?) 東正面
- 図版 30 a M. 18 ワジーターバードのモスク 東南より  
b M. 18 同上 礼拝室 東正面

図版目次

- 図版 30 c M. 18 ウジーラーバードのモスク 内部  
南より
- 図版 31 a M. 19 モラーダーバード=バハーリーの南の  
モスク (向って左) 東正面  
b M. 19 同上 (向って右) 西背面
- 図版 32 a M. 19 同上 中央礼拝室 内部北側  
b M. 20 ムニールカのモスク 東正面
- 図版 33 a M. 21 カダム=シャリーフのモスク 東正面  
b M. 21 同上 内部西側
- 図版 34 a M. 22 サイドゥル=アジャーイブ西方のモ  
スク 東正面  
b M. 23 モスク 崩壊の状態 東より
- 図版 35 a M. 24 モスク 東正面  
b M. 25 モスク 東正面  
c M. 26 アーホンドジーのモスク 東正面
- 図版 36 a M. 27 モスク (?) 東正面  
b M. 28 モスク 南より  
c M. 28 同上 礼拝室 東正面
- 図版 37 a M. 29 モスク 西背面  
b M. 30 モスク 西背面  
c M. 31 モスク 西背面
- 図版 38 a M. 32 ムバーラクブル=コートラのモスク  
東正面  
b M. 32 同上 西背面  
c M. 32 同上 内部 北より
- 図版 39 a M. 33 マフドゥーム=サーヒブのモスク  
東南より  
b M. 33 同上 礼拝室 西背面  
c M. 33 同上 東正面
- 図版 40 a M. 34 モラーダーバード=バハーリーの北の  
モスク 中央礼拝室 東正面  
b M. 34 同上 内部西北隅  
c M. 34 同上 南部側室 内部西南隅
- 図版 41 a M. 35 バラー=グンバッドのモスク 北より  
b M. 35 バラー=グンバッド 南面  
c M. 35 同上 内部東北隅
- 図版 42 a M. 35 同上モスク 礼拝室 東正面  
b M. 35 同上 内部 北より  
c M. 35 同上 東側の建物 西面
- 図版 43 a M. 36 モートゥ=キ=マスジッド 東門西面  
b M. 36 同上 礼拝室 東正面
- 図版 44 a M. 36 同上 内部 北より  
b M. 36 同上 西背面
- 図版 45 a M. 37 ニーリー=マスジッド 東正面  
b M. 37 同上 内部 北より
- 図版 46 a M. 38 ムハンマディーワーリー=マスジッド  
東正面  
b M. 38 ムハンマディーワーリー=マスジッド  
内部 北より
- 図版 47 a M. 39 ラージューン=キ=パーイーンの  
モスク 東正面  
b M. 39 同上 内部 北より
- 図版 48 a M. 40 パスティーのモスク 東正面  
b M. 40 同上 礼拝室 ミヒラーブ  
c M. 40 同上 西北隅と天井
- 図版 49 a M. 41 マフドゥーム=サマーウッディーンの  
モスク 東正面  
b M. 42 モスク 崩壊の状態 東より  
c M. 43 マッキー=マスジッド 東正面  
d M. 44 モスク 東正面  
e M. 45 モスク 東正面 南の部分
- 図版 50 a M. 46 ユースフ=カッタールのモスク 東面  
b M. 46 同上 内部 西側と南側
- 図版 51 a M. 47 シェイフブルのモスク 東正面  
b M. 48 ムハンマドブルのモスク 東正面
- 図版 52 a M. 49 モスク 東正面  
b M. 50 モスク 崩壊の状態 東南より  
c M. 51 モスク 東正面
- 図版 53 a M. 52 モスク 東正面  
b M. 53 モスク 東正面と南面  
c M. 54 モスク 東正面
- 図版 54 a M. 55 アードチーニーのモスク 東より  
b M. 55 同上 西背面
- 図版 55 a M. 56 イクバル=ハーンのイードガー  
東正面  
b M. 56 同上 西背面
- 図版 56 a G. 1 墓地 東正面  
b G. 2 墓地 西南より  
c G. 2 同上 東正面
- 図版 57 a G. 3 墓地 東正面  
b G. 3 同上 西背面  
c G. 4 墓地 東正面  
d G. 4 同上 西背面  
e G. 5 墓地 東正面  
f G. 5 同上 西背面
- 図版 58 a G. 6 墓地 東正面  
b G. 7 墓地 (?) 東正面  
c G. 8 墓地 西背面  
d G. 9 墓地 東正面  
e G. 10 墓地 (?) 西南隅の部分  
f G. 11 墓地 西南隅の部分
- 図版 59 a G. 12 墓地 東正面  
b G. 13 墓地 東正面  
c G. 14 墓地 東正面

- 図版 60 a G. 15 墓地 東南より  
 b G. 16 墓地 東より  
 c G. 17 墓地 東より  
 d G. 18 墓地 東南より  
 e G. 19 墓地 東南より  
 f G. 20 墓地 東南より  
 g G. 21 墓地 東南より
- 図版 61 a G. 22 墓地 西背面  
 b G. 23 墓地 東正面  
 c G. 24 墓地 東正面  
 d G. 25 墓地 西南より  
 e G. 26 墓地 西北より  
 f G. 27 墓地 東南より  
 g G. 28 墓地 西北より
- 図版 62 a G. 29 墓地 東正面  
 b G. 30 墓地 東正面  
 c G. 31 墓地 東正面
- 図版 63 a G. 32 墓地 東正面  
 b G. 33 墓地 東正面  
 c G. 34 墓地 東正面  
 d G. 35 墓地 東正面  
 e G. 36 墓地 東正面  
 f G. 37 墓地 東南より  
 g G. 38 墓地 西背面  
 h G. 39 墓地 西北部分
- 図版 64 a G. 40 墓地 東正面  
 b G. 41 墓地 東正面  
 c G. 42 墓地 東正面  
 d G. 43 墓地 東正面  
 e G. 44 墓地 東正面  
 f G. 45 墓地 東正面  
 g G. 46 墓地 西背面
- 図版 65 a G. 47 墓地 東正面  
 b G. 48 墓地 東正面  
 c G. 49 墓地 東正面  
 d G. 50 墓地 東正面  
 e G. 51 墓地 西背面  
 f G. 52 墓地 東正面  
 g G. 53 墓地 東北より
- 図版 66 a G. 54 墓地 東正面  
 b G. 55 墓地 東正面  
 c G. 56 墓地 東正面
- 図版 67 a G. 57 墓地 東南より  
 b G. 58 墓地 東正面  
 c G. 59 墓地 東南より
- 図版 68 a G. 60 墓地 西背面  
 b G. 60 同上 中央ミヒラーブ
- 図版 68 c G. 60 墓地 東正面
- 図版 69 a G. 61 墓地 東より  
 b G. 61 同上 西背面
- 図版 70 a G. 62 墓地 東正面  
 b G. 63 墓地 礼拝壁東正面と附属建物  
 c G. 64 墓地(?) 附属建物 北面
- 図版 71 a G. 65 ソーハン・ブルジ 東より  
 b G. 65 同上 礼拝壁東正面と附属建物  
 c G. 65 同上 礼拝壁西背面
- 図版 72 a G. 66 墓地 東より  
 b G. 66 同上 礼拝壁と附属建物 東面
- 図版 73 a T. 1 スルターン・ガーリー 東面  
 b T. 1 同上 西背面と南面
- 図版 74 a T. 1 同上 内庭 東南より  
 b T. 1 同上 西側列柱部分のミヒラーブ  
 c T. 1 同上 地下墓室 内部西側
- 図版 75 a T. 2 インドゥミッシュの墓 北面と東面  
 b T. 2 同上 南面 中央部分  
 c T. 2 同上 内部西北隅
- 図版 76 a T. 3 ベルバンの墓 南面  
 b T. 4 アラーウッディーン・ヘルジーの墓  
 北面  
 c T. 5 墓建築 西面
- 図版 77 a T. 6 ガースッディーン・トゥグルクの墓  
 東より  
 b T. 6 同上 南面と東面
- 図版 78 a T. 7 ザファル・ハーンの墓 西南より  
 b T. 7 同上 内部 西南より  
 c T. 8 ラール・グンバッド 東面と南面  
 d T. 8 同上 内部西北隅
- 図版 79 a T. 9 フィーローズ・シャー・トゥグルクの  
 墓 南面と東面  
 b T. 9 同上 内部 東北隅  
 c T. 9 同上 内部 ドーム天井
- 図版 80 a T. 10 墓建築 南面と西面  
 b T. 11 シェイフ・オスマーンの墓 南面  
 c T. 12 墓建築(?) 南面と西面  
 d T. 13 墓建築 南面と東面  
 e T. 14 墓建築(?) 南面  
 f T. 15 墓建築(?) 西面と南面
- 図版 81 a T. 16 墓建築 南面  
 b T. 17 墓建築(?) 西面と北面  
 c T. 18 カーラー・グンバッド 西面  
 d T. 19 墓建築(?) 南面  
 e T. 20 墓建築(?) 東面  
 f T. 21 墓建築(?) 西面と南面
- 図版 82 a T. 22 墓建築

図版目次

- 図版 82 b T.23 墓建築 (?)  
 c T.24 墓建築 (?)  
 d T.25 墓建築  
 e T.26 墓建築  
 f T.27 墓建築 北面  
 g T.28 墓建築 (?) 北面
- 図版 83 a T.29 墓建築 南面と西面  
 b T.30 墓建築 南面と東面  
 c T.31 墓建築 南面と西面  
 d T.32 墓建築 南面と東面
- 図版 84 a T.33 墓建築 南面と東面  
 b T.33 同上 内部西北隅  
 c T.34 墓建築 南面と東面  
 d T.34 同上 内部西側
- 図版 85 a T.35 ラードー・テラーイーの岩の上の墓  
 南面  
 b T.36 墓建築 南面と東面  
 c T.37 墓建築  
 d T.38 墓建築 (?) 北面と西面  
 e T.39 墓建築 南面と東面  
 f T.40 墓建築 南面と西面
- 図版 86 a T.41 墓建築 (?) 南面と東面  
 b T.42 ドー・シーリーヤー・グンバッド  
 東面  
 c T.43 墓建築 南面と東面  
 d T.43 同上 内部西南隅
- 図版 87 a T.44 墓建築 南面と西面  
 b T.45 カーレー・ハーン・カ・グンバッド  
 南面と西面  
 c T.46 墓建築 南面と東面  
 d T.47 墓建築 南面と西面
- 図版 88 a T.48 サジールブル・カ・グンバッド  
 同墓建築とその周辺の建造物群  
 b T.48 同上 南面と西面  
 c T.49 墓建築 南面と東面
- 図版 89 a T.50 チョーデー・ハーン・カ・グンバッド  
 南面と西面  
 b T.50 同上 内部西側とドーム天井  
 c T.51 シージュ・グンバッド 南面と西面  
 d T.51 同上 内部西側
- 図版 90 a T.52 墓建築 同建物と附属礼拝壁  
 西南より  
 b T.52 同上 南面と西面  
 c T.53 墓建築 南面と西面
- 図版 91 a T.54 バレー・ハーン・カ・グンバッド  
 南面と西面  
 b T.54 同上 内部西北隅
- 図版 91 c T.54 バレー・ハーン・カ・グンバッド  
 ミヒラーブ
- 図版 92 a T.55 シェイフ・シハーブッディーン・  
 タージュ・ハーンの墓 南面と西面  
 b T.55 同上 内部西側  
 c T.56 墓建築 南面  
 d T.56 同上 内部西側
- 図版 93 a T.57 墓建築 南面  
 b T.58 墓建築 南面と西面  
 c T.59 ブーレー・ハーン・カ・グンバッド  
 南面と西面  
 d T.59 同上 内部西側
- 図版 94 a T.60 墓建築 南面と西面  
 b T.61 墓建築 西面と南面  
 c T.62 墓建築 南面と西面  
 d T.63 墓建築 東面と北面
- 図版 95 a T.64 墓建築 南面と西面  
 b T.64 同上 内部西北隅  
 c T.65 墓建築 南面  
 d T.66 墓建築 (?) 南面
- 図版 96 a T.67 墓建築 南面  
 b T.68 墓建築 (?) 南面  
 c T.69 イードガーワーラー・グンバッド  
 東面  
 d T.70 墓建築 東面と北面
- 図版 97 a T.71 ムハンマドブルのティーン・ブルジー  
 東面と北面  
 b T.72 墓建築 南面
- 図版 98 a T.73 グリーン・パークのパーラ・カンパー  
 東面  
 b T.74 墓建築 南面と東面  
 c T.75 墓建築 東面  
 d T.75 同上 西面
- 図版 99 a T.76 ハーネ・ジャハーン・ティランガミー  
 の墓 東面  
 b T.76 同上 東北面 部分  
 c T.76 同上 内部南側
- 図版 100 a T.77 ムバーラク・シャー・サイイドの墓  
 西面  
 b T.77 同上 内部 東北の側  
 c T.77 同上 回壁の南門 南面
- 図版 101 a T.78 ムハンマド・シャー・サイイドの墓  
 南面  
 b T.78 同上 廻廊の一部  
 c T.78 同上 内部 北側と東北の側
- 図版 102 a T.79 シカシダル・シャー・ローディーの墓  
 南西面

- 図版 102 b T.79 シカンドル・ジャー・ローディーの墓 囲壁 南面
- 図版 103 a T.80 墓建築 北面  
b T.81 墓建築 北面と西面  
c T.82 メヘコーリー西方の十二本柱の墓 南面  
d T.83 モラーダーバード・バハリーの十二本柱の墓 東面
- 図版 104 a T.84 墓建築 東面と南面  
b T.85 ラーナー・サーヒブの墓 東面  
c T.86 シェイフ・サラフッディーン・ダルヴェーシュの墓 南面と東面  
d T.87 墓建築 南面と西面
- 図版 105 a T.88 シェイフ・ズィヤーウッディーン・ルーミーの墓 南面と東面  
b T.89 シャーヘ・アーラムの墓 東面と南面  
c T.90 シェイフ・ハイダルの墓 南面  
d T.91 シェイフ・シハーブッディーン・アークの墓 南面
- 図版 106 a T.92 ムイッズッディーン・パヘラームの墓 東南より  
b T.93 墓建築 西北より  
c T.94 墓建築 (?) 東北より  
d T.95 墓建築 (?) 東北より
- 図版 107 a T.96 墓建築 南より  
b T.97 墓建築 東南より  
c T.98 ゴルフ・コースのパーラ・カンバー 東面
- 図版 108 a T.99 カダム・シャリーフ 中央建物 東面  
b T.99 同上 内部 東より  
c T.99 同上 東北の十二本柱の部分 南面
- 図版 109 a T.100 ダリヤー・ハーンの墓 東より  
b T.101 墓建築 (?) 南より
- 図版 110 a T.102 墓建築 上の部分 西面  
b T.103 ラージューン・キバーイーンの十二本柱の墓 南面と東面  
c T.104 ユースフ・カッタールの墓 南面と東面
- 図版 111 a T.105 マフドーム・サマーウッディーンの墓 東面  
b T.106 墓建築 東南より  
c T.107 墓建築 南面と東面
- 図版 112 a T.108 墓建築 同建物と西側のモスク 東北より  
b T.109 シーリー・東南のラール・ダンパッド 同建物と囲壁 東北より
- 図版 113 a T.110 バスティーの墓 東南より  
b T.110 バスティーの墓 墓壇の東北隅に立つ  
チャハトリ 西南より  
c T.110 同上 ドーム天井
- 図版 114 a T.111 墓建築 南面と西面  
b T.111 同上 ドーム天井  
c T.112 墓建築 南面と東面  
d T.113 ナラフ・デリーのパーラ・カンバー 南面と東面
- 図版 115 a T.114 墓建築 南面と西面  
b T.115 墓建築  
c T.116 動物公園内の十二本柱の墓  
d T.117 墓建築 南面と西面
- 図版 116 a T.118 サイド・ヤーシンの墓 北面  
b T.119 墓建築 西面と南面  
c T.120 墓建築 (?) 南より  
d T.121 墓建築 (?)
- 図版 117 a T.122 墓建築 南より  
b T.123 墓建築 (?) 南より  
c T.124 墓建築 北東より  
d T.125 ブラーナー・キラール西北の八本柱の墓 西より
- 図版 118 a T.126 墓建築 (?) 西より  
b T.127 墓建築  
c T.128 墓建築 東南より  
d T.129 墓建築 南面
- 図版 119 a T.130 シェイフ・アラウッディーン・スール・タージの墓 南面  
b T.130 同上 内部西側  
c T.131 墓建築 (?) 南面と西面  
d T.132 墓建築
- 図版 120 a T.133 パハール・ローディーの墓 南面と東面  
b T.133 同上 ミヒラーブ  
c T.133 同上 内部 東北より
- 図版 121 a T.134 ニザームッディーンのパーラ・カンバー 東面と北面  
b T.134 同上 主室 内部  
c T.134 同上 廻廊
- 図版 122 a W.1 スルターンブルの円井戸 西より  
b W.2 トゥグルカーバード城壁内の円井戸 I  
c W.3 トゥグルカーバード城壁内の円井戸 II
- 図版 123 a W.11 チャーヘ・ハース 残存する内部北側の石積み  
b W.12 グリーン・パークの円井戸 残存する内部西南部分の石積み  
c W.14 ラードー・サライーの円井戸 残存する内部石積みと廻廊の一部



図版目次

- 図版 124 a W.15 トッグルカーバードの貯水井戸 北側  
にのこる石積みと揚水施設  
b W.16 ビール=ガーイブ西南の井戸 内部  
東北の側
- 図版 125 a W.17 フィーローズ=シャー=コートラの  
円井戸 北より  
b W.17 同上 内部南側
- 図版 126 a W.18 ガンダタ=キ=パーオリ= 西北より  
b W.18 同上 内部南側  
c W.18 同上 内部北側
- 図版 127 a W.19 ニザームッディーンのパ=オリ=  
内部南側  
b W.19 同上 内部北側と西側
- 図版 128 a W.20 ミラーダーバード=バ=パーオリ=の  
パ=オリ= 内部北側  
b W.20 同上 内部南側
- 図版 129 a W.21 ハウズ=ラー=ニー=東南のパ=オリ=  
内部南側  
b W.22 チョール=ミー=ナル南方のパ=オリ=  
内部西側  
c W.23 トッグルカーバード西北のパ=オリ=  
内部南側
- 図版 130 a W.24 トッグルカーバード西南のパ=オリ=  
内部西側  
b W.24 同上 内部東側  
c W.24 同上 井戸の部分 西南より
- 図版 131 a W.25 スルターンブルのパ=オリ= 内部  
西より  
b W.25 同上 井戸の部分 北より
- 図版 132 a W.26 ラージュ=オン=キ=バ=イー=ン 同パ  
=オリ=とモスタおよび墓建築 北より  
b W.26 同上 内部 南側と東側  
c W.26 同上 井戸の部分 南より
- 図版 133 a W.27 パスティ=パ=オリ=  
残存する部分 西南より  
b W.28 ムバーラクブル=コートラのパ=オリ=  
内部南側  
c W.29 ウガル=サインのパ=オリ=  
内部北側
- 図版 134 a W.30 ワジールブル=カ=グシバッド南方の  
パ=オリ= 東北より  
b W.31 アードチ=ニー=のパ=オリ=  
内部西側  
c W.32 クトッブ北方のL字型パ=オリ=  
内部南側
- 図版 135 a W.36 トッグルカーバードの堰堤 I  
残存する西面の石積み  
b W.37 トッグルカーバードの堰堤 II  
崩壊の状況 西より  
c W.39 ステーション=ロードの堰堤 残存す  
る部分 東南より  
d W.40 デリー大学構内の堰堤 残存する部分  
西北より  
e W.41 ワジールバードの堰堤 南より  
f W.42 マールチャの堰堤 南より  
g W.43 ボーリー=パティヤリー=カ=  
マハルの堰堤 残存する部分 東南より  
h W.43 同上 附属水門 東面
- 図版 136 a W.44 マヒパールブルの堰堤 南の部分  
西北より  
b W.44 同上 同部分 南東より
- 図版 137 a W.47 トッグルカーバードの水門 東より  
b W.47 同上 西面
- 図版 138 a W.48 サート=ブラ 北面  
b W.48 同上 南面
- 図版 139 a W.49 ワジールバードの水門 東面  
b W.49 同上 内部北側
- 図版 140 a W.50 ワジールバードの橋 西より  
b W.51 橋 南より  
c W.52 橋 東より
- 図版 141 a O.1 シーリーの城壁 城壁の西南部分  
北東より  
b O.1 同上 城壁の西の部分 南より  
c O.1 同上 城壁の西南部分のバステイオン  
南より
- 図版 142 a O.2 トッグルカーバードの城壁  
南城壁の一部  
b O.2 同上 南城壁の一部  
c O.2 同上 南城壁の一部
- 図版 143 a O.2 同上 宮廷地域の城壁の一部  
南西より  
b O.2 同上 宮廷地域の廢墟 南東より
- 図版 144 a O.3 アーディラーバードの城壁(後方)と  
堰堤城壁(前方) 東北より  
b O.4 アーディラーバード東方の小城壁  
西南より  
c O.5 ジャヘンパナーの城壁 南の部分  
東より
- 図版 145 a O.6 ビジャイ=マンドイル 主要部分  
南より  
b O.6 同上 望楼風の建物 西南より
- 図版 146 a O.6 同上 主要部分 北より  
b O.6 同上 北端の建物 北面
- 図版 147 a O.7 フィーローズ=シャー=コートラ

- 宮廷地域北部の階段状の建物 東南より
- 図版 147 b O. 7 フィーボーズ・ジャーン・コートラ  
宮廷地域南部の建物 西北より
- 図版 148 a O. 7 同上 宮廷地域に通じる門 東面  
b O. 7 同上 城内の建物 北東より  
c O. 7 同上 もとジャムナー河に面していた  
東の部分
- 図版 149 a O. 8 カダム・シャリーフの城壁 部分  
b O. 8 同上 部分  
c O. 9 ニザームッディーン南部の聚落遺蹟  
東北隅 東より
- 図版 150 a O. 11 ニザームッディーンのラール・マハル  
西より  
b O. 11 同上 東より  
c O. 11 同上 附属建物 西より
- 図版 151 a O. 12 マールチャ・マハル 南面  
b O. 13 ビール・ガリーブ 北面
- 図版 152 a O. 14 ハウズ・ハースの湖上の亭 西北より  
b O. 15 ボーリー・バティヤリー・カ  
マハル 東壁の一部  
c O. 15 同上 東北隅にある内門 西面
- 図版 153 a O. 17 宮廷建造物(?) 崩壊の状態  
b O. 18 宮廷建造物(?) 残存する部分  
c O. 19 宮廷建造物(?) 南面
- 図版 154 a O. 21 ベーガンブル東方のマハル  
内庭とそれをとり囲む部屋 東南より  
b O. 22 ジャハーズ・マハル 東面
- 図版 155 a O. 23 アラーウッディーンのマドラッサ  
西側の部分 東面  
b O. 24 ハウズ・ハースのマドラッサ  
北側の部分 西面
- 図版 156 a O. 24 同上 西側の部分 北面  
b O. 24 同上 中核部分 西北より
- 図版 157 a O. 24 同上 南側の附属建物 東より  
b O. 24 同上 北側の部分 東面
- 図版 158 a O. 25 サイドゥル・フジャーブのハーン

- カー 北の部分 北面
- 図版 158 b O. 25 サイドゥル・フジャーブのハーン  
カー 基壇の上の西側の建物 南面  
c O. 26 シーリーのペーラダリー 東面  
d O. 27 宗教施設(?) 崩壊の状態 西より  
e O. 29 ニザームッディーン・オーリヤの  
チャター 東面  
f O. 30 ランガル・ハーナ 北面の一部
- 図版 159 a O. 31 宗教施設(?) 西面  
b O. 32 宗教施設(?) 崩壊の状態 西より  
c O. 33 宗教施設(?) 北面
- 図版 160 a O. 34 ハルブーゼー・カ・グンパッド  
b O. 35 宗教施設(?) 南面 中央入口附近  
c O. 37 宗教施設(中央の建物) 北面
- 図版 161 a O. 39 門(?) 東面  
b O. 40 門 西面  
c O. 41 門(?) 西面と北面  
d O. 43 門 南面と東面
- 図版 162 a O. 44 門 西面  
b O. 45 門(?) 西面と北面  
c O. 47 不明の建造物 西面  
d O. 48 チュール・ミーナール 東南より
- 図版 163 a O. 51 シェイフブルのハンマーム  
b O. 51 同上 内部
- 図版 164 a O. 52 トッブルカーバードの地下倉  
地表面の状態  
b O. 52 同上 別の地下倉の内部 天井  
c O. 52 同上 別の地下倉の内部  
d O. 53 アーディラーバードの地下倉  
崩壊した上部の状態  
e O. 53 同上 内部
- 図版 165 a O. 54 不明の建造物 南より  
b O. 55 不明の建造物 南より  
c O. 56 不明の建造物 西南より  
d O. 57 不明の建造物 西南より  
e O. 58 不明の建造物 南より

## 挿 図 目 次

- 挿図 1 M. 3 トゥグルカーバードのジャーマ=マスジッド  
礼拝室西背面の石積みの状態 52
- 挿図 2 M. 8 カーラーン=マスジッド 礼拝堂 内部  
南より 53
- 挿図 3 M. 11 ハウズ=ハースのモスク 東南隅にある門  
南面と東面 54
- 挿図 4 M. 13 クトゥブ=ロードのモスク 東側の建物  
西面と北面 54
- 挿図 5 M. 14 モスク 北の部分の崩壊後の状態 東正面  
55
- 挿図 6 M. 15 スルターン=ガリー東方のモスク 崩壊後  
の状態 北より 55
- 挿図 7 M. 19 モラーダーバード=バハリーの南のモスク  
東方にのこる曲壁の南部分 56
- 挿図 8 M. 19 同上曲壁の北の部分の小建物 南面 56
- 挿図 9 M. 29 モスク ドーム崩壊後の状態 西背面 57
- 挿図 10 M. 33 マブドゥーム=サーヒブのモスク 北側の門  
西面 58
- 挿図 11 M. 38 ムハンマディーワリー=マスジッド 南門  
南面 59
- 挿図 12 M. 40 モスクを囲むバスティアの遺跡群 東北より  
60
- 挿図 13 M. 42 モスク 西背面 60
- 挿図 14 M. 45 モスク 西背面 61
- 挿図 15 M. 57 モスク(?) 北西隅の残存部分 南より  
62
- 挿図 16 M. 58 モスク 中央の残存部分 東南より 62
- 挿図 17 M. 59 モスク 北西隅の残存部分 東より 62
- 挿図 18 M. 60 ナラージュデリーのモスク 南側面 63
- 挿図 19 M. 61 メヘローリーのイードガー 東面 東南より  
63
- 挿図 20 G. 7 墓地(?) 礼拝壁の南側の門 西面 64
- 挿図 21 G. 10 墓地(?) 西南隅の塔のなかば倒壊した状  
態 65
- 挿図 22 G. 54 墓地 礼拝壁南部分の崩壊後の状態 東正面  
68
- 挿図 23 G. 67 墓地 東北より 70
- 挿図 24 G. 68 墓地 東正面 70
- 挿図 25 G. 69 墓地 東正面 70
- 挿図 26 G. 70 墓地 東正面 70
- 挿図 27 G. 71 墓地 中央ミヒラーブ 東正面 70
- 挿図 28 G. 72 墓地 崩壊した門のドームと曲壁の一部  
南より 70
- 挿図 29 T. 3 バルバンの墓 主室内部のスタインテアーチ  
71
- 挿図 30 T. 3 バルバンの墓 南方にある建物 北東より  
72
- 挿図 31 T. 26 墓建築 北側の門 北面 75
- 挿図 32 T. 77 ムパーラク=シャー=サイイドの墓 曲壁の  
西門 西面 81
- 挿図 33 T. 82 メヘローリー西方の十二本柱の墓 墓域の礼  
拝壁 東正面 82
- 挿図 34 T. 109 シーリー東南のラール=グンバッド ドーム  
天井 87
- 挿図 35 T. 114 墓建築 ドーム天井 87
- 挿図 36 T. 122 墓建築 礼拝壁 西背面と南面 88
- 挿図 37 T. 126 墓建築(?) ドーム天井 89
- 挿図 38 T. 135 シェイフ=ナジール=ディーン=チラーゲ  
ディョリーの墓 南面と西面 90
- 挿図 39 T. 136 墓建築 地上にあらわれている部分 90
- 挿図 40 T. 137 墓建築(?) 南面 90
- 挿図 41 T. 138 墓建築(?) 南面 90
- 挿図 42 T. 139 墓建築(?) 白塗りのドーム 東より  
91
- 挿図 43 T. 140 墓建築(?) 北面 91
- 挿図 44 T. 141 墓建築 南面 91
- 挿図 45 T. 142 墓建築 内部西北隅 91
- 挿図 46 W. 1 スルターンブルの円井戸 内部西側 92
- 挿図 47 W. 3 トゥグルカーバード城壁内の円井戸Ⅰ 内部  
南側 92
- 挿図 48 W. 4 トゥグルカーバード城壁内の円井戸Ⅱ 内部  
南側 92
- 挿図 49 W. 5 トゥグルカーバード城壁内の円井戸Ⅲ  
南より 93
- 挿図 50 W. 6 トゥグルカーバード城壁内の円井戸Ⅳ  
全景 93
- 挿図 51 W. 7 トゥグルカーバード城壁内の円井戸(?)Ⅴ  
残存する部分 93
- 挿図 52 W. 8 円井戸 全景 93
- 挿図 53 W. 9 円井戸 南より 93
- 挿図 54 W. 10 円井戸 内部西側 94
- 挿図 55 W. 13 ラール=クワーン 現状 94
- 挿図 56 W. 14 ラード=サラーイーの円井戸 東側通路の  
入口附近 北より 94
- 挿図 57 W. 25 スルターンブルのパーオリー 東側にあるチ  
ャハトリ 東南より 96
- 挿図 58 W. 33 ラーイー=ビトラー南城壁北方のパーオリ  
ー 現状の一部 97
- 挿図 59 W. 34 カダム=ジャリーのパーオリー 井戸の外  
縁と思われる石片 98
- 挿図 60 W. 35 メヘローリー西南のパーオリー 東北より  
98
- 挿図 61 W. 39 ステーション=ロードの堰堤 堰堤に接した  
建造物 北側の一部 99

- 挿図 62 W. 46 ジョージンバナー南城壁の城壁 部分 北面  
100
- 挿図 63 O. 8 カダム・シ・リーの城壁 城壁内の聖域の  
東門 東面 104
- 挿図 64 O. 9 ニザーム・ディーソ南部の聚落西壁 北側の  
圓壁の門 北面 104
- 挿図 65 O. 10 キーロタリー東南の遺壁 一部の石積みの状  
態 東面 104
- 挿図 66 O. 16 ネルマハウス庭内のクーン・ク 東面  
105
- 挿図 67 O. 20 チューブルジー 南面 106
- 挿図 68 O. 24 ハウズ・ハースのモドラ・ナ 南西隅の門  
東面 107
- 挿図 69 O. 28 宗教施設 (?) 崩壊した建物の一部  
南より 108
- 挿図 70 O. 36 ビービー・ズライハのテッラーガー  
東面と南面 109
- 挿図 71 O. 37 宗教施設 西北建物の内部 東北より  
109
- 挿図 72 O. 38 モーシ・ネ・チラーゲ・ディー・リーのゲルガ  
ーの東門 東面 入口上部 109
- 挿図 73 O. 42 門 北面 110
- 挿図 74 O. 46 ニザーム・ディーソ・オ・リヤのゲルガー  
の北門 北面 110
- 挿図 75 O. 49 モーディー公園の円形の塔 全景 111
- 挿図 76 O. 50 メヘモリーのビジョン・ハウス 南より  
111
- 挿図 77 モスク (ASL I-372) ドームのクィニアルと思われ  
るもの一部 116
- 挿図 78 墓建築 (ASL V-31) 崩壊寸前の状態 (1955年)  
南面 116
- 挿図 79 墓建築 (ASL V-33) 崩壊前の状態 (1955年) 東面  
116



## 總 論



## はじめに

東京大学インド史跡調査団の調査研究の目的と意義、および現地調査の実施に至るまでの経緯の一端については、山本の「序」に述べてあるが、報告書の第一巻として、ここに「総目録篇」を刊行するにあたって、われわれの調査研究に関する一般的な問題について、「総論」のかたちで、4章において記しておきたい。

現地調査と資料整理の内容と経過とについては、これまでもさまざまな機会に、口頭あるいは文書をもって公表してきた。1962年6月7日および8日には、東京大学において、調査資料の展示会を催し、われわれの調査研究の一端を一般に紹介したが、ここに総論の第一章として、その主要な点を明らかにしておこう。

われわれの調査研究の視点と方法とは、単に、せまい意味での考古学、建築史学、あるいは美術史学などの分野に限られるものではなく、歴史学、宗教史学などの諸領域にわたつてのさまざまな問題をも包含するものである。その際、建造物に関する歴史的な背景の理解は、当然のことながら、はなはだ重要な意味をもっている。本篇の「遺跡総目録」には、諸王朝時代に属すると思われるデリー現存の建造物のほとんどすべてを網羅的に採録したが、個々の建造物に関する歴史的背景については、主要なものについて簡単にふれた場合をのぞけば、ほとんど言及する余裕がなかった。多くの建造物のうちから、調査団がとくに選んで詳細な調査を実施したものについては、報告書の続篇において、個々に歴史的な考察を行なう予定であり、本篇においては、それらの緒論として、デリー諸王朝時代の、デリーにおける政治権力の支配の変遷を、歴史的に概観した。これを総論の第二章とする。ただし、第二章に記す歴史的概観は、いわゆるデリー諸王朝の単なる通史ではなく、われわれの研究対象であるデリーのムスリム建造物の歴史的背景を明らかにする意図をふまえて叙述したものである。したがって、政治権力の変遷をたどるとともに、それぞれの時代におけるイスラームの宗教思想や、それに関連する社会的諸問題についてとくに注意を払い、また、デリー地域における城砦都市の移動と変遷の事情をはじめ、建造物に関連する種々の歴史的問題にも、できる限り言及するように努めた。

つぎに第三章として、デリーおよびその周辺に存在するデリー諸王朝時代の建造物に関して、従来行なわれてきた諸研究を概観した。これまでも、さまざまな調査報告や著書論文の類いが刊行されてきたが、それらの多くは、従来、わが国においては、ほとんど手にすることができないものであった。われわれは、現地調査を計画して以来、現在に至るまで、これらの論著や報告書を、でき得る限り蒐集するとともに、それらを参照するように努力してきた。それらの先人の業績のなかには、われわれの現地調査やその後の研究にとって、重要な資料としての役割りを果たしてくれたものが少なくない。

最後に、調査の対象とした建造物の種類と分布状況とについて、インドにおけるムスリム建造物の特殊な性格との関連において概観し、これを第四章とした。また、現地調査の過程で、インドという国、デリーという地域におけるさまざまな条件が、これらの建造物の現状とその保存のあり方に、かなりの影響を及ぼしていることを、われわれは痛感した。そこで、デリーに残存する遺跡の現状についても、われわれの調査の経験に照して、二、三の問題点をつけ加えておいた。これらの、4章にわたる「総論」によって、われわれの調査研究の意義が、いささかでも明らかになればさいわいである。



## 第一章 現地調査と資料整理の概要

### 第一節 現地調査の経過と内容

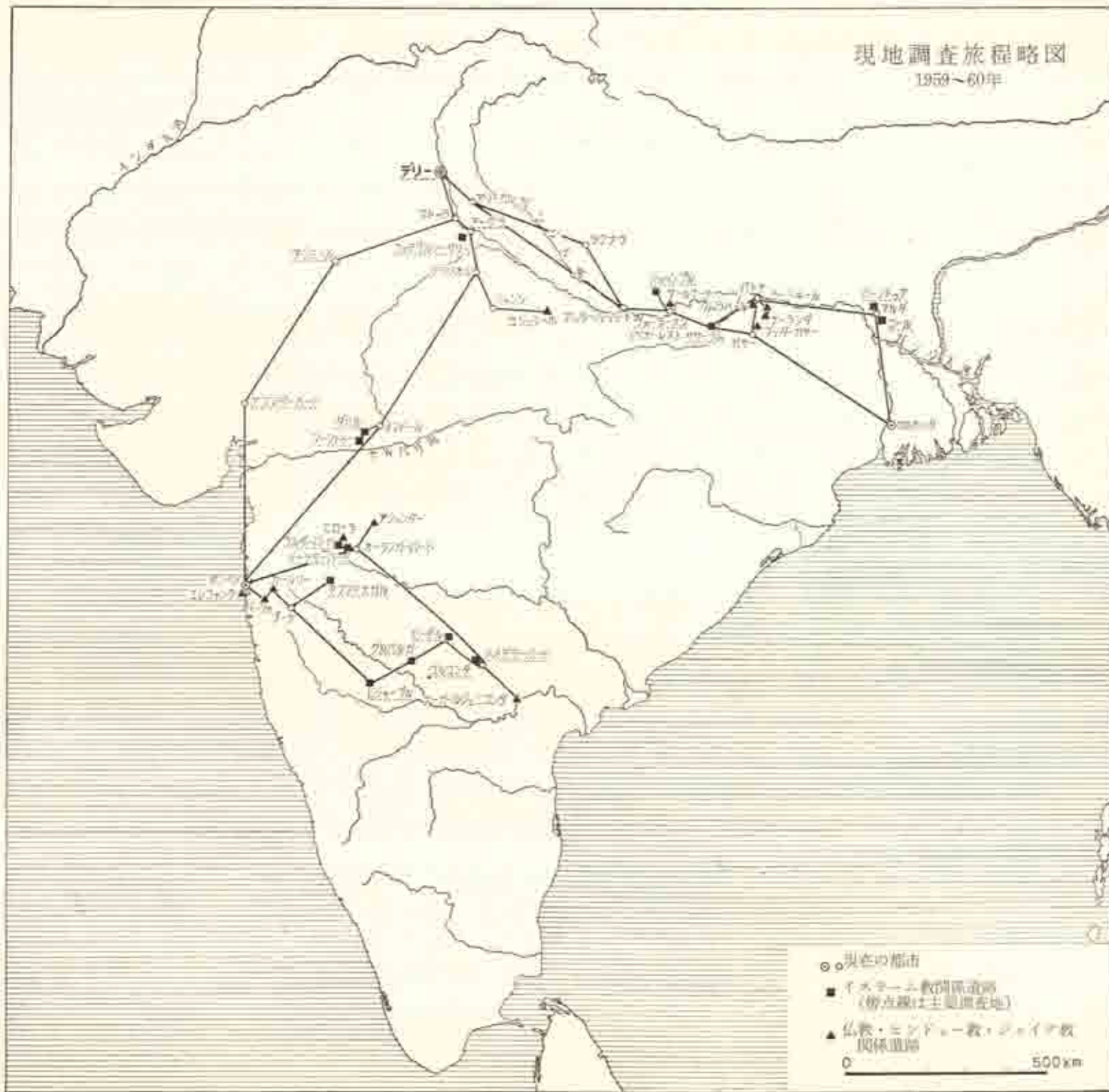
現地調査は、1959年10月末から、約5ヵ月にわたって行なわれた。団長の山本は、出発直前の急病入院のため、やむなく、1ヵ月あまり遅れて参加することになったが、荒・三枝・大島・月輪の4名の団員は、10月28日夜、東京羽田を出発し、翌29日夕刻、インド国ニューデリーに到着した。ニューデリーの東南部の市街地、ニザームッディーン・イースト (Nizamuddin East) 地区の一家屋を借り受け、現地調査の全期間、そこを本拠として活動した。この間、駐インド日本国大使館、とくに松田修三氏が、設営その他に関してさまざまな援助を与えられたことは、調査活動の順調な実施にあずかって力があつた。また、同大使館の武藤友治氏および鈴木茂伸氏の助力がわれわれを励ましてくれたことも記しておきたい。

われわれの現地調査は、すでにふれたように、デリー地域における諸王朝時代に属すると思われる遺跡を対象とするものであつたが、同時に、インドの各地に現存している同時代のムスリム遺跡や、それらと関連する若干のムガル朝時代の遺跡をも、当然のことながら、その調査研究の対象に加えた。従つて、デリー地域の調査のあいだに、のちに述べるように、約50日間にわたつて、これらの地方諸遺跡を中心とする調査旅行を行なつたのである。

デリー地域の現地調査は、これらの地方旅行を行なつた期間をのぞくニューデリー滞在の全期間を通じて、連日、実施され、その総日数は、約100日に及んだ。調査団員は、現地のインド人の助手とともに、昼食を携行して、早朝、宿舎を出、その日の調査作業を終え、日暮れて宿舎に帰り、さらに、夜間は写真の現像・作図・文献整理や調査内容の検討を行なうという、相当の強行作業を、毎日、つづけた。

現地における遺跡の調査作業の内容は、ほぼつぎのとおりである。すなわち、遺跡の探査とその現状の把握、遺跡の状態の観察と記録、各種の写真撮影、測量作業、および拓本の採取などである。数百にのぼる関連遺跡は、デリー地域の各所に散在しており、後述するように、都市の建設と発展の結果、その有無を確かめることすら、ときには、予想もしなかつた困難をとまなうことがあつた。しかし、19世紀前半以来の記録や研究書の記すところを手がかりとして、ほとんどすべての建造物の所在を確認し、その現状を、一応、把握することができた。この作業には、主として、荒があつた。これらの数多くの遺跡のなかから、われわれの研究の目的に従い、遺跡の現存する状態や、現地におけるさまざまな条件を考慮したうえで、われわれは、遺跡の種類に応じて、数十の建造物を選び出した。そして、それらの選ばれた対象について、とくに精密な観察を行ない、詳細な記録をのこすことに努力を払つたのである。この作業は、主として、山本と月輪とによつて行なわれた。その際、建造物にのこっている碑文や文様、その他、建築資材にほどこされた刻印などの拓本を採取した。

これらの主要な建造物について、調査団は、詳細な測量を実施した。実測や、トランジット・レベルおよび平板を用いる従来の測量方法のほかに、われわれは、地上立体写真撮影による測量方法を採用した。この方法は、従来、歴史的建造物に対しては、ほとんど利用されることがなかつたものである。この測量方法を



本調査に採用することは、山本の発案であり、東大生産技術研究所の協力を得て、写真測量研究室(主任、丸安隆和氏)の大島氏が担当し、月輪がこれを補佐した。この写真測量の方法は、限られた日数と人員とをもつて行なわれる調査、とくに、われわれの調査のように、短時日に数多くの対象をとり扱う場合には、比較的有効である。しかし、その反面、この方法の実施には、高い技術と豊かな経験とが必要とされ、また、現地の環境と、対象のおかれた条件などによって、さまざまな制約を受ける点が少なくない。写真測量の成果と将来の問題点については、本報告書の第二冊以降においてとり扱う。ちなみに、調査団が現地で使用した撮影機は、東京大学が所有していた、ツァイス社製のC3B地上写真経緯儀である。

この調査研究の目的と内容とからして、遺跡の現状を写真撮影によって記録することは、調査作業のうちでも重要な部分をなすものであった。この作業は、主に三枝氏が担当した。なお、われわれは、インド政府考古調査局とのあいだのとり決めにもとづいて、調査の対象を、建造物の、地上にあらわれた部分のみに限定し、一切の発掘作業を行なわなかったことを附記しておきたい。

なお、遺跡の現場や建造物の内部に、さまざまな調査器材を持ちこみ、使用する自由を大幅に与えてくれ、

現地における調査活動に、多くの便宜をはかってくれた、インド政府考古調査局の好意が、われわれの調査の円滑な実施に、大きな力となった。

以上に述べた、デリー地域の建造物の調査と並行して、インドの各地に現存している、同時代のムスリム建造物の調査を主な目的とする旅行を、われわれは、二回にわたって実施した。最初の旅行には、荒・月輪に三枝・大島の両氏が参加し、1959年11月12日から同年12月6日にかけて、北部および東部インドの各地を訪ねた。すなわち、デリーを出発したのち、ラクナウ (Lucknow)・アッラーハーバード (Allahabad)・ヴァーラーナシ (Varanasi)・ガヤー (Gaya)・カルカッタ (Calcutta)・マルダ (Malda)・パトナ (Patna) などの諸都市をまわり、その間、一部の汽車旅行をのぞいて、われわれのワゴン型ジープの走行距離は、5200キロに達した。この旅行における主要な調査対象は、ジョウンプル (Jaunpur)・ゴール (Gaur)・パードゥア (Pandua) およびヴァーラーナシなどの各地にのこる、同時代のムスリム建造物で、調査期間は、それぞれ、つぎのとおりである。すなわち、ジョウンプルに11月16日、および12月2日から4日までの4日間、ゴールおよびパードゥアに11月23日から26日にわたる4日間、ヴァーラーナシに12月5日の1日であった。この調査旅行では、ほかに、ササーラム (Sasaram) とアッラーハーバードに現存する、スール朝およびムガル朝時代に属する建造物についても簡単な調査を実施し、あわせて、ヴァーラーナシ附近のサールナート (Sarnath)、ガヤーに近いブッダーガヤー (Buddha Gaya)、パトナ近郊のクムラハール (Kumrahar)、その他ラージギル (Rajgir) およびナーランダ (Nalanda) などの古代遺跡をもおとずれた。

第二回の旅行では、中央インド、デカン地方、および西部インドの各地を、1960年2月5日から3月8日にかけておとずれた。デリーを出発ののち、グワリオル (Gwalior)・インドール (Indore)・ボンベイ (Bombay)・オーランガーバード (Aurangabad)・ハイデラーバード (Hyderabad)・プーナ (Poona)・アフマダーバード (Ahmadabad)、およびアジミール (Ajmer) などの諸都市をまわった。この旅行における主な調査対象は、ダハル (Dhar)・マードゥー (Mandu)・ドーラターバード (Daulatabad)、およびフルダーバード (Khurdabad) とその周辺地域、ゴルコンダ (Golconda)・ビーダル (Bidar)・グルバルガ (Gulbarga)・アフマドナガル (Ahmadnagar)・アフマダーバード、およびアジミールなどに現存する建造物である。調査を行なった日時は、つぎのとおりである。すなわち、2月7・8日にダハル、2月8日から10日にかけてマードゥー、2月15日から20日までの6日間にドーラターバードとフルダーバード、およびその周辺地域、2月23日にゴルコンダ、2月24・25日にビーダル、2月26日にグルバルガ、2月29日にアフマドナガル、3月4日から6日にかけてアフマダーバード、そして最後に、3月7日にアジミールを調査した。この調査旅行では、ハイデラーバードおよびビジャープル (Bijapur) に現存する後代のムスリム遺跡をも、あわせて調査し、また、エレファンタ島 (Elephanta Is.)・アジャンター (Ajanta)・エローラ (Ellora)・オーランガーバード・バージャ (Bhaja)・カールリー (Karli) などの諸窟院、さらには、ナーガールジュニコンダ (Nagarjunikonda) の古代遺跡の発掘現場などをおとずれた。なお、この調査旅行では、荒と三枝氏とが全行程に参加し、山本・月輪および大島氏は、デリーにおける調査作業の日程の都合で、一部の地域を割愛せざるを得なかった。なお、われわれは、この旅行とは別に、1960年1月12日から15日にかけて、アグラ (Agra) およびファテプルシークリー (Fatehpur Sikri) のイスラーム建造物についても簡単な調査を行ない、また、一部の団員は、マトゥラ (Mathura)・ジャンシ (Jhansi)、およびカジュラーホ (Khajuraho) などの遺跡をもたずねた。

われわれの調査研究は、すでに述べたように、現地における建造物の調査作業とともに、同時代および後代の文献史料や、さまざまな記録・研究書などにもとづく詳細な考証や研究をも必要としている。従って、

現地における建造物の調査作業と並行して、文献諸資料の蒐集とその複写にも努力を傾倒した。われわれは、貴重な写本や入手不可能の文献、書籍類の閲覧と複写をつぎの諸機関で行なうことができた。Library, Department of Archaeology (ニューデリー)・Oriental Public Library (Khudali Bakhsh Library, バトナ)・National Library (カルカッタ)・Library, Asiatic Society of Bengal (カルカッタ)・Library, Muslim University of Aligarh (アリーガル)などがそれで、この複写作業には主として荒があたり、当時、東洋文化研究所から研究のため現地に出張していた山崎利男・中村平治両氏の協力を得た。

また、われわれは、現地滞在中、下に記す各地の大学、研究機関、博物館、図書館、中央および州政府の遺跡の管理を担当する諸部局などをたずね、本調査に関連する諸問題について、関係者と意見を交換し、しばしば有益な助言を得ることができた。それらを列挙すれば、デリー・アリーガル・ラクナウ・アッラーハーバード・ヴァーラーナシ・カルカッタ・バトナ・インドール・ダハル・ハイデラーバード・ボンベイ・ブーナ・デーラドゥーン (Dehra Doon) などの各地の大学、研究機関、デリー・ラクナウ・サールナート・カルカッタ・マルダ・バトナ・サーランダ・マトゥラ・グワリオル・ボンベイ・ハイデラーバード・ビジャープルなどの各地にある博物館、図書館などである。

1959年月10末から約5ヵ月にわたった現地調査の結果、われわれは、デリー地域に限っても、調査・研究の対象とすべき建造物が、予想をはるかに上まわって、多数、現存していることを知った。さらに、調査と資料整理をすすめる過程で、われわれの研究領域も多方面におよび、また、解明されるべき問題も著しく多岐にわたっていることが、次第に明らかになっていった。従って、すでに得られた調査の成果をもってしては、資料的にも、また、技術的にも、かなりの不足や欠陥を痛感せざるを得なかった。そこで、デリー地域の建造物のみを対象とする補足調査の計画を立てられ、1961年11月中旬から約4ヵ月にわたって、ふたたび、現地調査を実施することになったのである。この補足調査は、さきの1959~60年の現地調査に参加した、山本・荒・三枝・大島・月輪の5名の団員によって行なわれ、短期間、斎藤菊太郎氏の助力を得た。

この補足調査の作業は、選び出されたいくつかの建造物に対して、集中的に行なわれ、とくに、測量作業に重点がおかれた。この作業においては、たまたま現地に留学中の辛島昇・小野田文彬両氏の助力を得た。この補足調査においては、建造物の探査と現状把握に遺漏のないよう、一層の努力が払われたが、その過程で、従来の記録や研究・報告書の類にまったく紹介されたことのなかった相当数の建造物についても、調査することができたのである。

なお、その後、山本が1963年と1964年に、また、大島氏が1964年と1966年に、それぞれ別個に、ヨーロッパ旅行の帰途に、ニューデリーに、数日間、立ち寄り、若干の写真撮影その他を行なった。なお、調査団の2回にわたる現地出張中に、東京にあつて連絡と運営との衝に当たったのは、東洋文化研究所の関野雄氏であり、現地調査の準備、資料整理、報告書出版には、同研究所の事務職員諸氏の協力のもとに、とくに今城治子氏が専門事務を担当した。ここに附記しておきたい。

## 第二節 資料整理の経過と内容

現地作業によって得られた膨大な調査資料を、計画的かつ総合的に整理することは、われわれの研究にとって、まず必要なことがらであったが、それには、多くの時間と労力を要した。この整理作業の内容を企

画し、のちに記す人びとの助力を得て、個々の作業の実施に際して責任を負ったのは、荒と月輪とである。われわれは、これらの資料が、単にその報告書作成の材料として使用されるばかりでなく、将来、それらが公開され、ひろく研究者に利用されることをのぞむものである。ちなみに、これら一切の資料は、東洋文化研究所に、一括して保管されている。

調査資料の主なものはつぎのとおりである。すなわち、各種の大きさの遺跡写真、一般測量および写真測量による図面関係の諸資料、碑文および文様の拓本類、同時代およびムガル期の文献史料や19世紀以降の研究・報告書の複写写真などである。これらの諸資料のうち、遺跡写真については、すべてのネガティブに番号をつけ、大型のネガは、四つ切りの大きさに、また、小型のネガの場合には、必要なもののみをキャビネの大きさに、それぞれ引き伸ばし、遺跡ごとに分類、整理した。

図面関係の資料のうち、実測や、トランシット・レベルおよび平板などによる資料については、東洋文化研究所において、木村源蔵氏の手によって、製図作業を進めている。また、立体写真測量による諸資料については、生産技術研究所写真測量研究室において、スイス国ウィルド社製のA7図化機によって、現在、図化作業が進行中である。この作業については大島氏がこれを担当しているが、同研究室の鈴木芳朗氏の助力に負うところが多い。写真測量を海外の歴史的建造物の調査に応用することは、わが国では最初の試みである。この新たな方法と従来的一般的方法とを並用して、遺跡の平面・立面・断面の組合せ図面を作成しようとする山本の構想は、当初には予想しなかった技術的な問題を生み、異なった種類の資料を結びつけるために多くの時間を要することとなったが、その処理は、月輪および木村氏が主として担当している。

拓本資料は、保存のための裏打ちをほどこされ、また、文献の複写写真は、印画紙に引き伸ばされたうえで、参照に便利なかたちで整理されている。これらの遺跡および文献の写真資料の整理その他の作業には、これまでに、岸川栄一・鈴木政和・飯塚キヨ・鶴田和子・上條安規子・伊勢田涼子・佐藤皓子・佐多正子・古沢宣子・山田稔などの諸氏の助力を得た。この際、ベルシア語の古文書の整理と読解には、東京外国語大学の黒柳恒男氏の助言と協力を得たことをとくに記しておきたい。

これらの調査資料を整理する段階で、調査の対象となったすべての遺跡に対して、整理のための一連番号がつけられた。まず、デリーとその周辺の調査地域を、ほぼ、北から南へ、第Ⅰ地区から第Ⅹ地区に至る10地区に分けた。この地区割りには、現存の行政区劃、あるいは地形などにもとづいた厳密なものではなく、単に、遺跡の密集地を中心に、その周辺をもふくめた便宜的なものである。この地区割りは、ほぼ、つぎのとおりである。

第Ⅰ地区は、ワジーラーバード (Wazirabad) 部落を最北端とする、いわゆるオールドデリーの北方にあたる地域と、そこから、オールドデリー・ニューデリーの主要市街地の西側に沿って、ほぼ南南西の方向へ走るデリー＝リッジとを指している。

第Ⅱ地区は、旧シャージャハーンバード (Shahjahanabad) をふくむオールドデリーの中心部分と、コンノート＝ブレイス (Connaught Place) や中央政庁 (Central Secretariat) 前の広場などを中心とするニューデリー市街地の中央の部分とをふくんでいる。

第Ⅲ地区は、ローディー公園 (Lodi Park) ・ゴルフ＝コース (Golf Course) ・ニザームッディーン (Nizamuddin) 住宅地を中心とする地域と、そこからマトゥラ＝ロード (Mathura Road) に沿って南につづく地域である。

第Ⅳ地区は、ディフェンス＝コロニー (Defence Colony) 住宅地・ムバーラクプル＝コートラ (Mubarakpur Kotla) 部落の周辺、およびキドワーイー＝ナガル (Kidwainagar) 住宅地などをふくむ地域である。

第Ⅴ地区は、ザマッルドプル (Zamarrudpur) 部落とムジャーヒドプル (Mujahidpur) 部落を中心とし、リング＝ロード (Ring Road) とシーリー (Siri) の城壁とにはさまれ、メヘローリー＝ロード (Mehrauli Road) の東に位置する地域を指している。

第Ⅵ地区は、メヘローリー＝ロードの西側、グリーン＝パーク (Green Park) 住宅地からハウズ＝ハース (Hauz-i Khās) にいたる地域と、フマーユーンプル (Humayunpur) 部落の周辺とをふくんでいる。

第Ⅶ地区は、ハウズ＝ハースの西方にあたる地域で、ムハンマドプル (Muhammadpur) ・ムニールカ (Munir-ka) ・バサントナガル (Basantnagar) の諸部落をふくむ一帯である。

第Ⅷ地区は、すでに述べた第Ⅴ地区の南に位置する地域で、シーリー城壁の北の部分とジャハーンパナーの南城壁とを南北の両端とし、メヘローリー＝ロード沿いの場所から東にひろがる一帯である。チラーグ＝デリー (Chiragh-Delhi) 部落・シェイフプル (Shaikhpur) とキルキ (Khirki) の両部落・マラヴィヤナガル (Malaviyanagar) 住宅地・ベガンプル (Begampur) 部落・シャープル＝ジャート (Shahpur Jat) 部落・ハウズ＝ハース＝エンクレーヴ (Hauz Khas Enclave) 住宅地・カールー＝サライー (Kalu Sarai) 部落、およびアードチーミー (Adhehimi) 部落などが、この地区のなかに入っている。

第Ⅸ地区は、もっとも多数の遺跡が現存している地域で、メヘローリー部落の周辺と、そこから西方および南方につづく一帯である。われわれが調査した、この地区の最西端の遺跡は、マヒパールプル (Mahi-palpur) 部落に現存する遺跡であり、最南端のものは、スルターンプル (Sultanpur) 部落にのこるパーオリー [W.25, 図版.131] である。

第Ⅹ地区は、クトゥブ＝ミーナールの近くから、ほぼ東へ走る、クトゥブ＝バダールプル＝ロード (Qutb-Badarpur Road) に沿った一帯であり、ラド＝サライー (Lado Sarai) 部落、サイイドゥル＝アジャイブ (Saiyidul Ajaib) 部落の周辺から、東は、トゥグルカーバード (Tughluqābād) [0.2, 図版.142~143]、およびアーディーラーバード (Ādilābād) [0.3, 図版.144a] の両城砦の附近までを指している。

このように、デリーとその周辺地域を10地区に分け、地区ごとに、それぞれの建造物に一連のナンバーがつけられている。このような、整理のための遺跡ナンバーは、それぞれの地区のなかでの各建物の位置関係によるものではなく、また、遺跡の種類やその年代などを考慮したものでもなく、整理の過程で、作業の進行状況に応じて、順次につけられた場合が多い。本篇の「遺跡総目録」において、各遺跡についての一般的な記述のあとに附記した、「東研」(東洋文化研究所の公式略称)の名を冠したナンバーは、上述の、調査団による資料整理のための一連番号である。

## 第二章 デリー諸王朝の支配の変遷

### 第一節 初期の状況

#### 1 デリー＝サルタナットの成立

7世紀の前半に西アジアにおこったイスラームは、アラブ諸民族による政治的支配の拡大にともなう、周辺の地域に浸透していった。10世紀のなかごろには、アッバース朝の支配体制が確立したが、やがて、イスラームの思想と文化とは、首都バグダードを中心に、古代イランの遺産を継承しながら、華々しく開花した。アッバース朝時代の政治体制のもとで、トルコ人は、次第に重要な役割りを演じるようになっていったが、やがて、イラン東部やアフガニスタンの台地にかけて、イスラームを信奉するトルコ系諸民族が抬頭し、大きな勢力を占めるようになっていった。10世紀の後半におこったГазニー (Ghazni) 朝と、12世紀の後半にそれに代わったゴール (Ghur) 朝の両勢力とがそれである。

マフムード (Mahmūd) によるГазニー勢力のインド侵入は、トルコ系ムスリムがインドに直接その影響を及ぼした最初の歴史的な事件で、十数回に及んだГазニー軍のインド侵攻は、のちのゴール朝のムハンマド (Muhammad) の軍隊のインド侵入への道をひらいたものといえよう。1191年、ゴールのムハンマドの軍は、チョーハーン＝ラージプット (Chauhān Rājput) のプリトヴィ＝ラージ (Prithvī Rāj) の率いる軍に一度は敗退したものの、翌1192年にはそれを破り、さらに、デリーからラージャスターン北部に進撃したのである。ゴールの軍隊は、その後、北インドにおいてたがいに権力争いをつづけていた諸勢力をつぎつぎに倒し、その一隊は、13世紀のはじめにはベンガルの地にまで進撃している。西北インドから遠く離れたベンガル地方が、トルコ系民族の支配を受け、比較的早くからイスラームの影響のもとにおかれたのも、その歴史的要因の一端は、ここに見出すことができるのである。

1206年、ムハンマドが暗殺され、ゴール朝の勢力が分裂すると、デリーおよびラーホールをふくむ西北インド一帯の征服地は、彼の奴隷出身の武将たちの支配のもとにおかれた。その一人クッブディーン＝アイバク (Qutb al-Din Aibak) は、ラーホールとデリーとに拠り、インド人にとっては外来の異民族であるトルコ人支配者として、ゴールの宮廷から独立して、西北インドの地域に君臨したのである。4年後の1210年にアイバクが死ぬと、その宮廷奴隷から身を立えた武将イレトミシュ (Iltutmish) が、スルターン＝シャムスディーン (Sultān Shams al-Din) を称して、デリーとラーホール地方一帯の支配権力を継承した。デリーを首都として、スルターンをその支配体制の頂点におく政権を、ふつう、デリー＝サルタナット (Saltanat-i Dīhlī, the Delhi Sultanate) とよんでいる。イレトミシュは、やがて、ベンガル、中央インド、さらにインダス河下流域などの地域にまでもその権力を伸ばし、サルタナットの支配を確立し、それを拡大していったのである。

アイバクおよびイレトミシュをいただくデリー＝サルタナット最初の王朝は、そのトルコ系の部族名を冠して、アルバリー (Albarī) またはイルバリー (Ilbarī) 朝 (1206～1290 A.D.) とよばれるが、一般には、むしろ、「奴隷王朝」 (Khāndān-i Ghulamān, the Slave Dynasty) の名で知られている。その後、サルタナットの支配権力は、同じトルコ系のハルジー (Khalji, またはヒルジ-Khilji) 朝 (1290～1320 A.D.) によって継承されたのである。

われわれの報告書のなかで、デリー諸王朝時代の「初期」あるいは「第Ⅰ期」とよんでいるのは、ほぼ、このアルパリーおよびハルジー両朝の支配していた時期に照応するものである。サルタナットの権力は、やがて、同じくトルコ系のトゥグルク (Tughluq) 朝 (1320~1413A.D.) の手にうつった。われわれは、この王朝の支配する時期を、諸王朝時代の「中期」あるいは「第Ⅱ期」とよんでいる。トゥグルク朝衰退のあとをうけて、サルタナットの支配は、いわゆるサイイド (Saiyid) 朝 (1414~1451A.D.) の勢力によって受けつがれていくのであるが、やがて、デリー=サルタナットの覇権は、トルコ系諸民族の支配体制のもとで次第に抬頭してきたアフガン人の手に移り、15世紀後半に入ると、ローディー (Lodhi) 朝 (1451~1526A.D.) がデリーに君臨するに至る。この報告書で、デリー諸王朝時代の「末期」あるいは「第Ⅲ期」とよぶのは、ほぼ、サイイドおよびローディー両朝が支配した時期をいうものである。

やがて、アフガン勢力内部の権力争いの間隙をぬってデリーに進攻し、西北インドにおける支配者の地位を継承したのが、アフガン台地のカーブルの地の小王国を掌握していたムハンマド=バーブル (Muhammad Bābur) であった。彼は、ティームール (Timūr) 直系のトルコ系の民族に属し、また、モンゴルの血をもひいていたので、その後デリーを中心に北インドに君臨するに至ったこの勢力は、一般に、ムガル (Mughal) 朝として知られるようになった。このムガル朝 (1526~1858A.D.) の第二代皇帝ムハンマド=フマーユーン (Muhammad Humāyūn) の治世を中絶して、もとビハール地方を支配していたアフガン人の一派の勢力が、一時、フマーユーンをイランに追放して、デリーの王座にすわった。これがスール (Sūr) 朝 (1538~1555A.D.) の支配の時期で、さきのローディー朝とともに、インドにおけるアフガン人の支配の時代とされている。しかし、デリーを拠点に支配したものの、これらのムガル・スール両朝は、一般には、デリー=サルタナットのなかにはふくめないのがふつうである。しかしながら、ムガル勢力による支配の初期はもちろん、同じアフガン人のスール朝の支配下における諸問題が、ローディー朝時代と密接な関連をもつものであることは当然のことであり、デリーにおける建造物の研究についても、そのことはあてはまるのである。

「奴隷王朝」とよばれてきたアルパリー=トルコ族の政権は、少数の異民族による軍事的征服国家として、北インドを支配するにあたっては、当然のことながら、既存の体制をひろく利用することを余儀なくされた。地税の収入は、多量の戦利品とともに、支配の存続の経済的基礎として重要なものであったが、その地税の徴収にも、従来のヒンドゥー王国の制度が、そのまま利用された。異民族として、しかも異なった宗教を信奉する少数の外來の支配者としてあらわれたトルコ人は、支配される側にまわったヒンドゥーの王や貴族たち、あるいは都市や農村の一般民衆に対しても、表面上は、征服者の威厳をもつて臨んだけれども、実際には、社会的、宗教的な面では、寛容な政策を採らざるを得なかった。しかし、新しい外來の、異民族・異宗教の支配者のまえに、ヒンドゥーの王族や貴族やその周辺のものなかには、すすんで、イスラームに改宗するものもあらわれた。経済の面では、西北から来た征服者の北インド制覇によって、インドと、アフガン台地・中央アジア、さらに西アジアとの交渉は、これまでになくさかんとした。インドの富を求めて、異民族が、個人と集団とを問わず、インドに移動してくるのが目立った。すでにアラブとイランとの文化遺産を継承していたトルコ系ムスリムによる支配が、北インドに、文化と思想の面で、新風をもたらしたことはいうまでもない。

## 2 サルタナット支配の拡大

スルターン=イレトミシュによって確立されたデリーの新しい王権は、彼の死後、その直系子孫によって



継承され、約30年のあいだに5人の継承者があらわれた。そのあとに登位した、イレトミシエの宮廷奴隷出身のガヤースッディーン=バルバン (Ghayāth al-Dīn Balban) の約20年におよぶ治世には、王権は、貴族勢力を抑えて、かつてないほどに強化された。しかしながら、西北からのモンゴル侵入の脅威に直面して、国内では一種のテロ政治を行なったこのスルターンも、対外政策においてはきわめて慎重であり、彼の治世には、サルタナットの領域は、ほとんど拡大されなかった。彼の死後、その反動による混乱のなかでスルターン位を継承したムイッズッディーン=カイクバード (Mu'izz al-Dīn Kaiqbād) の支配も、やがて1290年に、ハルジー=トルコ族の武将ジャラーッディーン=フィーローズ (Jalāl al-Dīn Firūz) によって倒されたのである。このハルジーの老将の甥で養子となっていたアラウッディーン=ムハンマド (Alā' al-Dīn Muḥammad) は、デカン地方への遠征を終えたのち、伯父を謀殺して即位し、北方のモンゴルに備えるとともに、貴族層を懐柔しおわると、サルタナットの支配の拡大をはかった。

アラウッディーン=ハルジーの採った政策は、デリー諸王朝時代のスルターンのなかでも、著しく目立つ、大胆な内容をふくんでいる。一たび懐柔した貴族勢力を抑え、またデリー地域周辺勢力に軍事的打撃を与えると、彼は、数次にわたってモンゴルの勢力に対決を挑み、北方からの不安を退けるのに、一応成功した。一部の歴史家が、このスルターンを、ヒンドゥーを抑圧した狂信的なムスリム支配者とするには、いささか疑問の余地がのこされている。アラウッディーンは、その権力の経済的基礎を確立するために、地税の増徴をはかって従来の徴税制度にいくつかの改変を試み、また、税制や諸規則を改革して物価の低下や価格の統制と維持とをはかり、通貨改革をも行なった。もちろん、これらの諸政策は、ガンジスとジャムナーの両河にはさまれた、いわゆるドー=アープ (Duaab, Doab) の一部の地域のみを中心として施行されたにすぎないものであるが、一応、流通市場は統制され、経済生活も、表面上は安定を示したのである。このような彼の政策が、ヒンドゥー支配勢力の抑制と、南インド征略をふくむ帝国の体制の確立をはかろうとするための前提であったことは、容易に想像されるどころである。彼が「シカンダル=サーニー」(Sikandar Thāni)、すなわち、「アレクサンダーⅡ世」とよばれたのも、そのためである。奴隷出身のアビシニア人の宦官でマリク=ナーイブ (Malik Naib, 副王) の地位にまで重用されたマリク=カーフル (Malik Kafur) に率いられた軍隊は、1306年から1310年にわたって、南インドのヒンドゥー諸勢力の拠っていた各地を蹂躪した。彼は、1316年にスルターン=アラウッディーンが病死した直後、子孫の継承争いのあいだをぬって、一時、専権をほしいままにしたが、結局、暗殺されてしまったのである。強力な帝国体制のあとの数年にわたる反動と混乱の時代のあとを受けて、今度は、トゥグルク朝の創始者、老将ガヤースッディーン=トゥグルク=シャール (Ghayāth al-Dīn Tughluq Shāh) がデリーに君臨することとなった。インド人を母にもつこの支配者の出現は、デリー=サルタナットの成立以来一世紀あまりを経て、その王統に、インド人の血が混じってきたことを示して興味があるところである。

このようにデリーの王権の歴史をたどってみると、アラウッディーン=ハルジーの時代以後には、北インドにおけるトルコ系サルタナットの支配が、デリーを中心に根をおろし、その拡大にむかっていったことを、よく示している。モンゴルの脅威を避けてインドに避難してきた西北からの外来者に代わって、今度は、地位を求め、富を追うタイプの外国人の到来が、一層、目立つものになっていった。こうした事情は、宮廷の支配層のあいだでは、奴隷の採用、学者や詩人、芸術家などの重用の傾向として、つぎのトゥグルク朝の時代に至るまでの目につくできごととして指摘できる。これらの外来者のおとずれとともに、イスラームの文化や思想の面でも、さらに新しい刺激がもたらされたことはいうまでもない。そして、全体として、イス

ラームの影響とムスリム王権の支配体制とは、北インドの各地に、もはや、はっきりと土着化していったのである。上層のヒンドゥー支配層に属するものなかから、イスラームに改宗して、ムスリム支配体制を支える役割りを担うものもさらに多くあらわれるようになった。アラウッディーンの改革、とくにその農業・商業政策は、ヒンドゥーのいわゆる中間地主層や官吏に打撃を与えた。一方、ヒンドゥーの大衆層のなかには、かえって、集団的にイスラームに改宗するものがあらわれたことも想像されるのである。

### 3 イスラームの波及とスーフィーズム

イスラームのインドへの波及が、トルコ系諸民族による北インド征服の過程と並行して行なわれたことは、上に述べてきたところであるが、イスラームのインドへの波及の事実が、それに先立つ時代に、別の径路で行なわれていたことも、ここに簡単に指摘しておく必要がある。8世紀のはじめのころ、インダス河の下流デルタ地帯に侵入したウマイヤ朝下のアラブの軍隊による、いわゆる「シンドの征服」も、その初期のできごとの一つである。ヒンドゥーおよび仏教が行なわれていたその地域に、8世紀以後、イスラーム教徒の社会が成立をみたのは、こうした歴史的事実を背景とするものである。また、インドの西および南の海岸地方に、イスラームを信奉するアラブやイランの商人が来航することによって、その地方の海港都市を中心にイスラームの影響がみられ、やがてムスリム社会が成立していったことも忘れることはできない。これらの西および南インドにおけるイスラームの浸透は、ヒンドゥー社会の文化や思想にも、地方的な範囲において、いくばくかの影響をもたらしたことは明らかであり、さらに、後代におこった各地のムスリム諸王国の成立にも、その影響を及ぼしているところである。

インドへのイスラームの波及の歴史のなかでは、さきに述べた西北インドからのトルコ系諸民族による北インド支配が、その後のインド史に及ぼした影響の広さと深さにおいて、もっとも重要な問題である。サルタナットの支配層は、イスラームのなかでも、主として、スンニー、すなわちいわゆる正統派のイスラームの影響を受けており、政治権力の背後にも、その統治と支配とを正当化する政治的理念として、正統派に属するウラマー (Ulamā, 数学者) たちをかかえていた。インドにおいては、イスラーム法学は、とくに、いわゆるハナーフィー (Hanāfi) 派に属するものが主流を占めている。しかしながら、これらのスルターンの支配体制を支えるイスラームの教学・法体系とともに、インドにおけるイスラームの思想とその内容、とくに社会的な影響の問題を考える場合に、忘れることのできないのは、スーフィーズム (Sufism) と総称されているところの、イスラームの、いわゆる神秘主義一派の思潮である。もともと、アッバース朝のもとでさかんとなったこの思想は、のちに、11世紀後半から12世紀初頭にあらわれたアル・ガッザーリー (Al-Ghazzālī) によって、正統派神学と融和しつつ大成されたものである。スンニー派が主流を占めるインドに波及してきたスーフィーの思潮が、このアル・ガッザーリーの思想を中心とするものであったことは、スーフィーズムがインドにひろく根をおろし得た要因の一つと考えてよいであろう。ハーンカー (Khānqāh, 日本流にいえば庵) に住み、ときには宗教的ニクスタシーの境地に入るほどの瞑想に専念するスーフィー聖者の実践が、バグティの思想と実践とがようやく前面にあらわれてきた当時のヒンドゥーイズムの思潮と、容易に結びつきやすい性格をそなえていたことは注目すべき点である。事実、早くは12世紀末葉にはじまり、サルタナットの支配が着々と根をおろしていった13世紀前半にかけて、西方において名をあらわしたいく人かの聖者が、インドを布教と修業の場として、定住しはじめていたのである。

これらのスーフィー諸派のなかで、サルタナット時代に、インドのイスラーム教徒をはじめとするインド

人の社会に影響を及ぼしたのは、1230年代にアジミールで死んだシェイフ＝ムイーヌッディーン＝チジュティイー (Shaikh Mu'in al-Din Chishti) による、いわゆるチジュティイー派と、ムルターンを拠点として活躍した、シェイフ＝シハーブッディーン＝スフラワルディー (Shaikh Shihab al-Din Suhrawardi) による、いわゆるスフラワルディー派とである。そのうち、チジュティイー派は、ムイーヌッディーンの後継者 (Khalifah) となったシェイフ＝クトゥブッディーン＝バフティヤール＝カーケー (Shaikh Qutb al-Din Bakhtiyar Kaki) によって、当時のデリーの周辺に布教の中心が設けられた。のちに、この聖者は、デリー地域のみならずインド中の信徒から、クトゥブ＝サーヒブ (Qutb Sahib, 日本流にえば、おクトゥブさま) としたわれて、そのダルガー (Dargah, 廟) はインド中にあまねく知られるほどに著名となったのである。チジュティイー派は、その後、彼の流れを汲んでデリーに活躍したシェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤー (Shaikh Nizam al-Din Auliya) によって、14世紀の前半に、デリーのイスラーム教徒に、支配層から大衆層に至るまで、大きな影響を与えることになった。ニザームッディーンの影響で、スーフィーズムは、彼の弟子たちによってインド各地にひろげられていったが、デリーにおいては、その後継者のひとりであるシェイフ＝ナシールッディーン (Shaikh Nasir al-Din), 一般にはローシャネ＝チラーグ＝ディッリー (Rushan-i Chiragh-i Dihli, デリーのお灯りさま) として知られている聖者によって、さらにより広汎な民衆のあいだに伝えられたのである。一方、スフラワルディー派は、シェイフ＝シハーブッディーンののちも、ムルターンを中心地として、パンジャブおよびシンドの地に深く根をおろし、その影響は、しばしば、デリーをはじめ、ひろく北インドの各地にも及んだのである。

スーフィーの聖者たちは、上にあげた二つの派以外の派に属する聖者もふくめて、デリーやその他の各地にハーンカーを設けて修業や布教の場としたのであるが、聖者の死後につくられた彼らの墓を中心として、その附近には、王や貴族、また富裕な商人などによって、モスクや墓がつぎつぎに建てられ、さらにそれらの建造物を中心に、次第に、部落やバーザールが形成されていくという経過をたどっている。首都デリーに例をとれば、すでに述べた3人のチジュティイー派の聖者のダルガーは、現在、それぞれ、メヘローリー (Mehrauli) ・ニザームッディーン (Nizamuddin) ・チラーグ＝デリー (Chiragh Delhi) とよばれている著名な大部落の成立のもととなった。本篇の「遺跡総目録」、あるいは附図によってわかるように、これらのダルガーと、それを取り囲む、上述の諸部落の内部およびその周辺地域には、サルタナット時代に属する、さまざまな建造物が、多数、現存している。部落成立の要因が、もとをたどれば、スーフィー聖者たちの宗教的実践の場所やその墓を中心としたダルガーに発するものであることは、否定できない事実なのである。こうした聖者崇拜と、聖地へのあやかり、あるいはダルガーへの巡礼などの慣習は、のちのムガル朝時代にも、そのままつづけられた。その結果、これらのサルタナット時代のスーフィーの聖地には、諸王朝時代の建造物にまじって、多くの後代の建造物も建てられており、その数だけをとってみても、今日なお、おとずれるものをして、かつてのスーフィーズムが支配層や一般民衆に与えた影響力を、あらためて考えさせずにはおかないほどのものをもっているのである。

#### 4 サルタナット初期のデリー

さて、トルコ系ムスリムの侵攻を受ける以前から、デリーの地は、すでにラージプート勢力によって、地方的な拠点として利用されていた。ラージプートの拠点としてのデリーは、現在のニューデリーのはるか南方の地域にあつた。たとえば、トゥグルカーバード大城砦の東南端のさらに南南東、約2.7キロメートルの岩丘地帯中に現存する、いわゆるスーラジ＝クンデ (Sūraj Kunda, 太陽の池) とよばれる大貯水池の遺構は、その

一つの例といえよう。ムハンマド・ゴリーの軍に敗退したチョーハーン＝ラージプートの王ブリトクヴィー＝ラージは、現在のメヘローリー部落の東北にのこる城砦の内部に宮廷を設けていた。彼の勢力を破って、サルタナットの権力の基礎を築き、それを確立したクトゥブッディーン＝アイバクとシャムスッディーン＝イレットミシュも、サルタナットの首都として、この城砦都市の内部に、そのまま宮廷をおいたと考えてよいであろう。奴隷王朝時代の史書『タバカーテ＝ナーシリー』(Tabaqāt-i Nāsiri) に記されている「ハズラト＝ダールル＝ムルク」(Hazrat Dār al-Mulk, 聖なる都)、あるいは「ハズラト＝ディラーリー」(Hazrat Dihli, 聖なるデリー) などというのは、具体的には、宮廷の所在地を中心とする、かつてのラージプート王のこの城砦、すなわち、のちにその名をインド＝ペルシア風になまって、「ラーイー＝ピトラーの城砦」(Qila'ī Rāi Pithaurā) とよばれた都市を中心に営まれた新しいサルタナットの首都をよんだものにほかならない。奴隷王朝とハルジー朝のスルターンの時代に、このデリーの城砦には、しばしば、補修や補強の工事が施され、また、その一部が拡大されたものと思われる。この城砦都市の内部に生まれ、今日までその名をのこしているクワットゥール＝イスラーム (Qūwat al-Islām) とよばれたモスク [M. 1, 図版 1~10] が、イレットミシュとアラウッディーン＝ハルジーの治世に、それぞれ、拡張されたのは、その象徴とっていいかも知れない。モスクの拡張は、支配者たるスルターンの権威を誇示する目的によるものでもあったが、同時に、現実の面においても、当時のデリーにおけるムスリム人口の増加を示すものと考えてよいであろう。

アラウッディーン＝ハルジーは、当初は、このヒンドゥー時代以来の大城砦に拠っていたが、モンゴルの脅威に対抗するために軍の露营地としていたシーリー (Siri) の地に、地形を利用して大規模な城砦を建設した。同時代の史書にもその名がみえるシーリー城砦がどの地にあったかについては、これまで異説もあらわれたが、現在のニューデリー南郊のシャープル＝ジャート (Shahpur Jat) 部落をその西の部分にもつところの、ほぼ楕円形をした城砦の廃墟がそれにあたることはほとんど疑いをいれないところである [O. 1, 図版 141 参照]。

アルボリー朝の末期にあたる、スルターン＝バルバンのあとに立ったカイクバードの治世には、それ以前から貴族の邸宅も建てられていたというジャムナー河の西岸の地キーローグリー (Kilukhri) に、いわば第二の首都ともいえるべき小都市が建設されたらしい。その名は、サルタナット前期の史書にしばしばあらわれるところである。現在、同じ名をもつ部落が、ニザームッディーン住宅地の東南約 1.2 キロメートルの地にあるが、あえて推測をくたせば、本来のキーローグリーの遺跡は、その同名の村落の附近か、あるいはさらに約 700 メートル東南方の、城壁を思わせる廃墟や石片が現存している場所にあたるものかも知れない [O. 10, 挿図 65 参照]。いずれにせよ、この新しい都市は、ハルジー朝時代になってからもつづき、デリー上層の居住地として栄えていたものと思われる。さきにふれた聖者シェイフ＝ニザームッディーン＝オーリヤーがそのハーンカーを営んだガヤスブル (Ghayāthpur) も、このキーローグリーの建設以後は、両者が近接していたところから、さらに人びとを集める著名な地域となっていくにちがいない。

もつとも、現在では、シーリー城砦の遺跡の内部には、ハルジー朝時代のものと思われる建造物は、ほとんどのこっていない。しかし、この都市は、のちにサルタナット時代中期および末期にも利用されていたものらしく、同時代、あるいは後代の史書にも、その名が、しばしばあらわれているのである。しかし、16世紀の前半、シール＝シャー (Shir Shah) が、彼の城都をデリーに新設するにあたって、この古い城砦から、その建築資材を運び去ったといわれている。従って、シーリー城砦は、ムガル時代に入ってから、その都市としての意味を失ってしまったのかも知れない。

さらに、ここに簡単につけ加えておきたいのは、デリーの水利施設の一つとしての水源地についてである。アルバリー朝のスルターン=イレトミシュは、そのデリー都市の附近に、人工の貯水池をつくりあげたとされている。アルバリー朝の史書である『タバカーテ=ナーシリー』には、現在でもクトゥブ地域の東方に遺構をとどめている貯水池ハウゼ=ラーニー (Hauz-i Rānī, 王妃の池) の名がすでにみえているところから、トルコ系ムスリムの首都となったころのデリー地域に、さきあげたス=ラジ=クンデとともに、ほかにも人工貯水池がすでにあつたことは容易に想像することができる。現在でも、スルターンの名にちなんでシャムシ=ターラーブ (Shamsī Talāb, シャムスッディーンの池) とよばれている、メヘローリー部落の南端にある貯水池が、おそらくは、このイレトミシュのハウズにあたるものであろう。シーリーに新しく築城したアラウッディーンは、古いデリー都市の北で、シーリーの西方にあたる地域に、さらに、大きな人工貯水池を設けた。この池のほとりに、のちに、トゥグルク朝のフィーローズ=シャーが大規模な建設工事を行なったので、その貯水池の本来の建設者たるスルターンの名を冠したハウゼ=アライー (Hauz-i 'Alā'i) の名よりも、ハウゼ=ハース (Hauz-i Khās, すばらしい池) として、現在に至るまで、ひろく、デリー地域の住民たちに知られてきている。

## 第二節 中期の状況

### 1 サルタナット体制の動揺

ハルジー朝に代わって、トゥグルクの支配を確立したスルターン=ガハースッディーンは、新しい王朝の権威を示す目的もあって、デリーの城砦の東方約8キロの地に、ほぼ梯形をした巨大な都市の造営を命じた。彼は、まもなく、ベンガルへの遠征の途についたのであるが、このトゥグルク朝の創始者は、みずから、その新しい都城を見ることなくして、この世を去った。彼はベンガル長征の帰途、デリーを間近かにして、宿営した地に設けられた仮りの行在所が崩壊したため、死亡したのである。彼に代わってスルターンの位を継承したその子のムハンマド=シャー (Muhammad Shāh), 一般には、ムハンマド=ビン=トゥグルク (Muhammad bin Tughluq) として知られている人物は、サルタナット歴代の君主のなかでも、特異な性格の持主であつたらしく、天才と狂人との両面を備えた人物とさえいわれている。彼は、従来支配が及ばなかった西方や北方の地域に遠征の軍隊を派遣することを企てて失敗し、その治世の末期には、かえって、ベンガル地方や、ナルバダ河以南の領土を、事実上、ほとんど失ってしまっている。しかし、この特異な支配者の失政のなかでも、もっとも著名なものは、デリー地域から、遠く離れたデカン西部のドーラターバード (Daulatābād, 富の都) と名づけられた新都へ、首都を強制的に移転する計画を実行したことである。前代のアラウッディーン=ハルジーの治世における南インドへの征討のあとをうけて、デカン高原から南インドに拡大されたサルタナットの版図を保持しようとした支配者としては、デリー地域は、首都として、たしかに、やや北に寄りすぎていたかも知れない。また、西北方からのモンゴルの脅威が、首都南遷の一つの動機であつたことも疑いをいれないところである。しかしながら、ムハンマドが、この遷都に際してとった手段は、きわめて強引なものがあつた。もともと、デリー周辺の農業地帯の村落民の生産は、デリー諸都市に住む貴族や支配層および一般民衆の需要に依存していたものである。一方、権力者の側も、これらの農業生産者やそれに寄生する地主の地税によって、その経済的基盤を維持することができたのである。父王が新たに建造したトゥグルカーバード在住の民衆をもふくめて、デリー地域の人口の大部分を、遠く離れたデカンの新しい都にむけて大規

模な移動を強行させたことは、史上にその例をみないほどの大胆な事業であった。しかも、新しい南の都市ドーラターバードへ移された民衆の多くは、やがて、またもや、もとのデリーへ帰還することを強制されたのである。一たび荒廃したデリーとその周辺の諸地域は、ムハンマドの無謀な計画によって受けた経済的、社会的な打撃から、容易には、立ち直ることができなかつた。そうした状況をさらに悪化させるものとして、デリーの首都回復直後に、旱魃と飢饉とが、デリー地域ばかりか、サルタナットの穀倉地帯であった、デリー東方のいわゆるドーアープの地域一帯を襲ったのである。食料事情の逼迫と社会不安の増大のために、ムハンマドは、デリーの人口を、またもや、ガンジス中流域の別の地に移動させるという措置を採らざるを得なかつた。ムハンマドは、このガンジス河中流域の地方からデリーに帰還すると、事態の改善のために、さまざまな農業水利振興政策を採用したといわれる。しかし、それとでも、デリー地域を、たび重なる痛手から立ち直らせることは、なかなかむずかしいことであつた。まして、計画遂行のための莫大な支出が、かえって、官吏の汚職を生み、やがて、農民の反乱を誘発し、また、インド各地の支配層のなかには、中央からの離反を企てるものもあらわれるようになっていった。ムハンマドシャーは、そうした情勢のなかで、グジャラートの反乱の鎮圧の途次、世を去つたのである。

ムハンマドのあとを継いだその従弟、フィーローズシャー (Firūz Shāh) は、まず、デリーの権力の回復と安定をはかるために、サルタナットを、その経済的、社会的な混乱から立ち直らせることに、まず力を用いなければならなかつた。彼の治世のもとで、デリー周辺の地域の農業生産の事情は、かなり好転したとされている。トゥグルク朝末期に完成された、宮廷文人の手になる史書が、この君主の治世の繁栄を筆をきわめて讚美しているのは、宮廷史家の、みずからの寄生する権力に対するおもねりからばかりではなく、すぐのちのティームールのデリー侵攻によって受けた打撃が、それに先立つスルターン=フィーローズの「よき時代」を、ことさらバラ色に描かせている点をも考慮する必要がある。しかし、デリー地方をふくめて、西北インド全般の経済情勢が回復したことは、このスルターンの治世にとられた諸政策、とくに、サルタナットの歴史のなかでしばしば指摘されるどころの、公共事業推進の結果とみられる点もたしかである。フィーローズシャーの治世には、ジャムナー河と、サトレジ河とを利用して、いくつかの人工運河が開きくされた。また、数多くの、大小の堰堤が建設され、さらに、道路や橋も整備された。もちろん、このことは、単に民生の安定を目的としたものではなく、それによってサルタナットの税収をふやし、支配の経済的基礎を回復し、整備することにあつたことはいふまでもない。フィーローズシャーが、各地にモスクを建設し、ハンカーやマドラッサ (学校) などを数多く建てさせたのも、敬虔な宗教心から生まれたものだけでなく、こうした社会秩序の回復と安定とを目的としたものである。シ=イフ=ナシール=スディ=ン=チラーゲ=ディフリーの死後、著名な聖者はあらわれなかつたが、この正統派ムスリムたるスルターンは、スーフィーの組織的な活動に対しても、むしろ、それを助長してきたといつてもよいであろう。スーフィーの諸文献は、先代のムハンマド=ビシ=トゥグルクに対するのとは対蹠的に、スルターン=フィーローズに対しては、かなりの讚辞をおくっているのである。

しかしながら、スルターン=フィーローズの権勢回復への努力にもかかわらず、38年に及んだその治世の末年、さらにそれにつづくトゥグルク朝末期には、フィーローズによって一たびは回復されたかにみえたサルタナットの権力も、急速に衰えていったのである。王朝の経済的基礎の動揺とともに、宮廷支配層内部の権力をめぐる争いは、中央の地方への影響力を著しく低下させる要因となつた。こうしたサルタナットの衰勢に決定的な打撃を与えたのが、1398年末に行なわれた、ティームールによるインド侵入とデリーの掠奪で、

その結果、デリーをはじめ北インドの広汎な地域にわたって、荒廃と窮乏とがみられたのである。デリーの政治権力は、決定的に弱体化し、各地の地方政権が、その間隙をぬって、独立の姿勢をとりはじめた。ガンジス中流域のジョウンプル (Jaunpur) と、デカン地方のバフマン (Bahman) 王国の両勢力とは、その代表的なものであり、さらに南方のヴィジャヤナガル (Vijayanagar) 王国も、こうした情勢のなかで、独立の体制を次第にかためていったのである。

## 2 サルグナット中期のデリー

すでにふれたように、トゥグルク朝初代のスルターン＝ガースッディーンは、トゥグルカーバードの大都市を造営させたが、次代のムハンマド＝シャーは、この新しい都市をふくむデリーの首都を捨てて、デカンに遷都を試みた。彼が、ふたたび、デリー地域にもどったときには、トゥグルカーバードは荒廃してしまっていたらしい。スルターン＝ムハンマドは、さらに、「ブラーニー＝ディョリー」(古いデリー)、すなわちラーイー＝ビトラーの旧城砦と、ヘルジー時代に建設されたシーリーの都市とを結び、新たな大城壁を設けることによって、デリーに新しい都市区域をつくらうとした。それは、ジャハーンパナー (Jahānpānāh, 世界の栄光) とよばれたのである。すでに、この地域は、デリーの住民の居住地域をなしていたのであるが、この新しい都市の建設計画が、デカン遷都の打撃からくるデリーの混乱した経済・社会情勢を、どこまで立ち直らせるのに力があつたかはよくわからない。しかしながら、かつてガースッディーン＝トゥグルクが、トゥグルカーバードの大都市の建設に際して、城壁・堰堤・水門などを利用する大規模な水利計画を実施させたように、ムハンマドもまた、ジャハーンパナーの南城壁を利用して、集水・貯水の水利計画を実現させたのである。この施策が、すでにふれたような困難な農業事情回復の一助に利用されたいことは、その成否はともかく、トゥグルク朝時代の土木技術上の点からも注目されることである。しかし、このようなトゥグルク前期の支配層の計画した水利政策が、さらにきめこまかく、地域的にも拡大されて実施されたのは、フィーローズ＝シャーの治世にはなつてからのことであつた。このスルターンは、すでに述べたように、大規模な運河や道路造営をも、その公共事業のなかにおりこませていたのである。

フィーローズ＝シャーの治世には、デリー地域に、さらに一つの、新しい都市建設の工事が施行された。それは、この君主の名を冠して、フィーローザーバード (Firuzābād) とよばれた都市である。このフィーローザーバードの地域的な拡がりに関する同時代の史書の記録には誇張が認められるし、また、この都市は、他の既存の城砦都市と異なつて、あるいは、城壁をめぐるすはつきりした都市の境界線というべきものをもつてはいなかつたものかも知れない。いずれにせよ、この新都市が、従来のデリーの諸都市のさらに北方にあつて、建設されたのである。のちに、ムガル皇帝によって建てられたシャージャハーンバードの南や西の部分をも包括し、現在のいわゆるデリー＝リッジ (Delhi Ridge) にまで及ぶ広大な地域にわたるものであつたことは、ほぼ疑いをいれないところである。このフィーローザーバードのなかの宮廷区域は、現在、いわゆるフィーローズ＝シャー＝コトラ (Firoz Shah Kotla) として知られている、城壁に囲まれた遺跡群の残存する場所にあつている [M. S. O. 7: 図版. 15~16, 147~148]。しかしながら、フィーローズ＝シャーの死後、後継者たちがスルターンの位を争って権力争いが激しくなると、トゥグルク朝の支配層の諸勢力も、デリー地域内においてさえ、分裂、対立する状況となつた。こうした権力斗争は、14世紀末葉にティームールがデリーを攻略した直後のデリーの混乱のなかで、さらに露骨なものとなつていったのである。そしてもっとも南に位するデリーの旧城砦に立てこもるもの、あるいは、シーリー城砦、さらにフィーローザーバードに拠

るものが、それぞれの城砦内の宮廷区域に本拠をおいて、たがいに対立抗争するという状況がみられたのである。こうして、デリー=サルタナットは、内部的に分裂し、その衰勢は、もはやおおいがたいものになってしまったのである。

ところで、トゥグルク朝後期の時代に書かれた二つの特異な文献、『フィーローズ=シャーの勝利』(Futūhāt-i Firuz Shāhī) と『フィーローズ=シャーの歴史』(Tārīkh-i Firuz Shāhī) とから、彼の治世に、さまざまな建造物が建てられ、また、既存の多くの建造物が補修、改築されたことが知られる。もともと、この君主は、西北インドにも、ファトゥハバード (Fatuhābād)・ヒサーレ=フィーローザ (Hisār-i Firūzah) とよばれた二つの都市を建設し、その後、デリーに、さきに述べた新都を造営したのである。彼の治世のもとにおけるさまざまな建造物の建設事業は、中央政府の統轄と管理のもとに、組織的に行なわれたものと推測される。デリー地域に現存する大型のモスクのうち、このスルターンの名とその治世の年号を記している碑文をもつものもいくつか現存しているが、また、様式からみて、この時代の造営と推定される墓やモスクや、宗教・教育施設などの遺跡も数多く現存しており、さきの文献の記載を裏づける役割りを果たしている。同じことは、文献にも言及されているところの堰堤 (Band, バンド) についても、指摘することができるのである。重要なことは、スルターン=ガースッディーンからフィーローズ=シャー時代に至るトゥグルク朝時代の建造物が、その構造や様式において、さきのアルパリー朝およびハルジー朝に属する建造物のそれと、著しく異なった特徴を示していることである。さらに、それらは、のちのサイイド・ローディー両朝の時代、すなわち、本書で第Ⅲ期としている時代の建造物とくらべてみてかなりの相違点をもっており、しかも、同時に、その端緒的な特徴をも示しているといえるのである。これらの問題は、われわれにのこされた将来の課題として、ここでは、これ以上述べることは控えておきたい。

1398年、ティームールはインドに侵入し、デリー地域にもその軍を進めてきた。その結果、デリーは、2日間にわたって、このサマルカンドの覇者の軍隊によって、破壊と掠奪の対象とされたのであった。ティームール自身が書かせたというものをふくめて、ティームールの軍隊のインド侵入について記した二つの文献、すなわち『マルフーズ=ティームーリー』(Marfūzāt-i Timūri) と『ザファル=ナーメ』(Zafar Nāmah) とから、断片的ではあるが、当時のデリーの状況についての、貴重な記述を拾うことができる。この同じイスラームを信奉するトルコ人の侵入軍が、デリーのサルタナットの建造物、とくに墓やモスクやハンカーなどの、信仰に直接関係をもつ建造物までをも、すすんで破壊したことは、ほとんど考えられない。しかし、デリーにおけるその軍隊の破壊と掠奪とは著しいものがあつたらしく、当時のサルタナット支配層内部の抗争による政治情勢の混迷と相まって、デリーの経済的、社会的な混乱は、その極に達したらしい。そうした情勢が、建造物の歴史にも大きな影響を及ぼしていることはいうまでもないことであろう。一度はティームールに追われてデリーの宮廷から逃散したトゥグルク朝の直系の君主マフムード (Mahmūd) がデリーの旧城砦にいながら、首都の実権は、マッルー=イクバル=ハーン (Mallū Iqbāl Khān) の手にわたった。シーリーの城砦を拠点としていたこのイクバル=ハーンが、その城砦の西方に建設した、やや小型のイードガー (Idgāh) [M. 56, 図版. 55] の南の部分にのこる碑文は、ティームール劫掠後のデリーの窮乏について記している。なお、この簡単な概観において、一言記しておきたいのは、ティームールの侵入軍がインドから引きあげるに際して、インド各地から多くの工匠や技術者を連れ去ったということである。これらの工人たちがインドから去ったことは、その後のサマルカンドの建築の発展には寄与したとしても、15世紀のデリーの建築技術発展の歴史においては、大きな空白をもたらしたこともまた、当然考えられて然るべきことといえよう。



## 第三節 末期の状況

## 1 サイイド朝とアフガン人の制覇

ティームールがデリーからひきあげたのちのマフムード・トグルクの治世の混乱に乗じて、アフガン人のローディー勢力が抬頭してきた。それを抑えて、デリーの権力を掌握したのが、ティームールのもとでムルターンなどの地方の統治を代行していたヒズル＝ハーン (Khizr Khān) である。1414年にデリーの支配の坐上ってからのち、彼の子孫が3人、スルターンに登位し、その間およそ37年に及んだ。ヒズル＝ハーンが、予言者ムハンマドの後裔であるといわれたところから、ふつう、この王統を、サイイド朝とよんでいる。ヒズル＝ハーンは、あくまでティームールの子孫の権威を代行する総督として、その治世を終った。そのあとを継いだその子ムバーラク＝シャー (Mubārak Shāh) の十数年に及ぶ治世も、つぎのスルターンのムハンマド＝シャー、さらにその子の治世も、いずれも、この王朝の勢力をつよめることはできなかった。それどころか、サルタナットの権力は、もはや、デリーとその近傍の地域に辛うじて及ぶにすぎないほどになってしまった。こうして、ティームールの劫掠ののち、サルタナットの権威は、半世紀のあいだ、ほとんど回復されなかったのである。

ヒズル＝ハーンも、つぎのムバーラク＝シャーも、弱小な支配権力しか保ち得なかったにもかかわらず、デリーの歴代の強力なスルターンの例にならって、その名を冠した新しい都市を建設しようとした。前者はヒズラーバード (Khizrābad)、後者はムバーラカーバード (Mubārakābad) とよばれたらしく、いずれも、ジャムナー河のほとりに計画されたといわれる。現在、ニューデリーの東南部のニザームディーン住宅地の東方に、同じくヒズラーバードという名をもつ部落があるが、あるいは、両者の名称には歴史的な関連があるものかも知れない。いまなお、同部落の住民は、他所から移してきたという、部落のほずれにあるヒズル＝ハーンの墓と称する墓所を、崇敬の対象としている。また、ニューデリー南郊のムバーラク＝シャー＝コートラ (Mubarak Shahi Kotla) とよばれる、もと城壁に囲まれていた部落のうちに、ムバーラク＝シャー＝サイイドのものとしてきた八角形の墓建築 [T.77, 図版.100] があるが、この墓のある場所は、さきあげたスルターン＝ムバーラクが計画したという新しい町とは、おそらくは、相互に無関係のものであったと思われる。多分、実際には、ヒズラーバードもムバーラカーバードも、計画だおれにおわり、完成はされなかったものであろう。ほぼ半世紀に近い時代を、デリー周辺地域に限られていたとはいえ、ともかくも持ちこたえたサイイド朝の支配者の弱小な権力は、あたかも、この二人のスルターンの都市造りの試みに象徴されているかのようである。

サルタナットの権力は、サイイド朝最後のスルターンから、ラーホールその他の地の総督であったアフガン人バハール＝ローディー (Bahāl Ludhī) に移譲された。彼は、アフガン諸部族のなかのローディー族に属していたので、彼と、その死後にスルターンの位を継承したその子シカンドル＝シャー (Sikandar Shāh) と孫イブラーヒム＝シャー (Ibrāhim Shāh) との三代を、一般に、ローディー朝とよんでいる。

アフガン人は、ローディー・ローハニー (Lūhāni)・ファルムリー (Farmūrī) をはじめ、多くの諸部族にわかれていたが、12世紀末葉におけるゴール朝の軍隊のインド侵攻の直後、はやくも、北インドの各地に移住してきている。これらのアフガン人たちは、とくに、トグルク朝後半の時代から、西北インドを中心とする各地において、次第にその勢力をもたげはじめていた。サイイド朝の弱小なスルターンの権威のもと

で、ローディーをはじめとするアフガン諸族の影響力は次第に強まり、その結果、ローディー朝が、七十余年にわたって、デリー＝サルタナットの権力を掌握することになったのである。それまでのデリーのトルコ系諸王朝の場合にくらべると、アフガン人の権力支配のあり方、とくに君主権と貴族勢力との関係は、かなり異なった性格を持っていることが、これまでも、しばしば、指摘されてきた。最初のローディー＝スルターンとしてデリーに君臨したバハロールは、同じアフガン人の諸部族の権力者に対しては、最後まで低姿勢をとっていたといわれる。このことが、いまやローディー朝のもとに結集したアフガン諸勢力の連合体ともいべき性格をもつに至ったデリー＝サルタナットの内政を、トゥグルク朝末期からサイイド朝の時代にかけてみられた政治的混乱の状態から立ち直らせる一つの要因となったと思われるのである。

1489年に、バハロールのあとを継いだスルターン＝シカンダル＝シャーの治世になると、サルタナットの支配はさらに拡大してゆき、一時は、東は、ビハールからベンガル地方にまで及び、また、ラージプート諸勢力をも抑えるまでに成長した。彼は、ラージプートに対抗することを一つの理由として、宮廷の所在地を、1504年、ラージャスターンと中央インドへの門戸ともいべきアグラ (Agra) の地に移した。1517年にシカンダルが死んだのも、このアグラの地においてである。父バハロールにくらべて、彼は、君主権を次第につよめ、アフガン貴族勢力を抑えることに努力した。この君主権強化の傾向は、ローディー朝の最後のスルターンとなった、その子イブラーヒム (Ibrahim) の時代には、さらに高められていった。しかし、このローディー＝スルターンの専権への姿勢は、同じローディー族をもふくめてアフガン諸族の貴族勢力を刺戟し、サルタナットの支配層は、権力をめぐる対立抗争にまきこまれた。こうして、一時は、パンジャーブからビハールに及んだアフガン人による支配体制も、まさにその内部からゆらぎはじめていったのである。その結果、ローディーの分裂した一派は、同じ部族出身のスルターンに対抗するために、ティームールの血をひくカーブルの王国の支配者ムハンマド＝バーブル (Muhammad Babur) をインドに迎え入れることになった。こうして、インドにおけるはじめてのアフガン人によるサルタナット支配は内部の闘争に端を発して崩壊の道をたどり、かわって、新しいトルコ系の、いわゆるムガル勢力による北インドの支配が成立したのである。

## 2 サルタナット末期のデリーと地方勢力

サイイド朝からローディー朝に至る7人のスルターンの、デリーにおける宮廷所在地がどこであったかについては、はっきりしたことはわからない。さきにもふれたように、ローディー朝のシカンダル＝シャーは、16世紀のはじめに、アグラの地に新しい都市を建設したが、このことは、アフガン人のサルタナットの中央権力の中心拠点が、デリーからアグラに全面的に移ったということを意味してはいないようである。デリーは、依然として、サルタナット支配の中心地であり、ローディー朝を倒してムガル朝をひらいたバーブルも、それを継いだフマーユーンも、この地に宮廷を置いている。サイイド朝からムガル朝第三代のアクバルの時代にかけて書かれたいくつかの史書の内容からうかがうと、サイイド朝のスルターンやローディー朝の支配層は、デリーにおいては、主に、アラウッディーン＝ハルジーが建設し、その後トゥグルク朝末期までしばしば宮廷が置かれていたシーリーの城砦を利用しつづけていたことがわかる。しかし、同時に、彼らは、ムハンマド＝ビン＝トゥグルク以来のジャハーンパナーの市域内の宮廷建造物や、さらに、フィーローズ＝シャーが造営したフィーローザーバードの宮廷施設、すなわち、今日フィーローズ＝シャー＝コートラとして知られている城内に、しばしば支配の中心拠点を置いていたことも、当時の史書から知ることができるのである。すでに述べたように、新都市の建設を意図しながら結局は果せなかったサイイド朝の二人の

スルターンをはじめとするサルタナット末期の支配者たちは、シカンダル＝ローディーをのぞくと、経済的にも、またそれぞれの治世の政治情勢からいっても、新都を造営する余裕は到底なく、すでに建設され、多年にわたって使用されてきていたハルジー朝やトッグルク朝以来の城砦や宮廷建造物を、そのまま利用せざるを得なかったものと思われるのである。14世紀末葉のティームールによるデリー劫掠が、これらの前代の城砦や宮廷建造物を、どの程度破壊したかについてはよくわからない。しかし、いずれにせよ、デリーにおけるサルタナット中央の権力の衰退は、かつてみられたような大規模な城砦や宮廷の建造をもはや不可能とするまでに至っていたといってもよいかも知れない。もちろん、この時期にも、ラーイー＝ビトラーの城砦を中心とする、当時のいわゆる「プレーニー＝ディッリー」、すなわちオールド＝デリーは、ソーリー・ジャハーンパナー・フィーローズ＝バードなどの城内とならんで、デリーの支配層や一般の民衆のための主要な居住地域の一部であった。しかし、サイイド朝の勢力は、そのもつとも衰えたときには、広いデリー地域のうちでも、このプレーニー＝ディッリーの西方や南方の郊外や近隣の地域に、わずかに及ぶに過ぎなかったのである。

トッグルク朝の後期から、とくに、ローディー朝のなかごろにかけて、デリーとその周辺地域には、大小さまざまな墓建築や墓地、さらに小型やそれほど大きくはないモスクが、数多く建てられた。このことは、現存する遺跡の状態からも、よく知ることができるのである。こうした中小の建造物がつぎからつぎへと、各地につくられたことの一つの背景には、すでに述べたように、トッグルク朝末期から中央の王権が弱まってきたこと、あるいはまた、アフガン諸部族のあいだにみられた、前代までのトルコ系君主権の絶対性とは著しく性格を異にする、権力構成における一種の分散的構造などが、反映したものと考えてみても、あながち、誤まりとはいえないであろう。もっとも、ローディー朝中期、とくにシカンダル＝シャーの治世に、デリー地域に、墓やモスクについての一種の建築ブームともいえるような風潮が、上層支配者のあいだに認められたよりである。今日、デリー地域にのこっている多くの建造物のなかには、ローディー朝のシカンダル＝シャーの名やその治世にあたるイスラーム暦の年号を記した碑文をのこしているものが十指をこえている。このことは、デリー諸王朝時代の、他のいかなるスルターンの時代にもみられないところである。シカンダル＝シャーの時代には、トッグルク朝のフィーローズ＝シャーのときと同じように、デリー地域において、既存の建造物の補修や改築がしばしば行なわれたことも、さまざまな資料から推測することができるのである。また、中小の墓建築やモスク、あるいは墓地が数多く建設されたという事実については、当時の支配層にもふかく根をおろしていた、イスラームの宗教思想、とくにスーフィーズムのもとでの墓に対する考え方や、あるいは聖者崇拜などの慣習と関連して考える必要もあろう。

すでに述べたように、デリー地域にみられたスーフィーの影響は、ハルジー・トッグルク両朝の時代のニザームッディーン＝オーリヤーや、そのハリーファ（後継者）の一人であったナシールッディーン＝チラーゲー＝ディッリーによって、その頂点に達したのであった。これらのチシュティ派聖者たちには、政治権力に対してつねに一定の距離を保ち、むしろ、それとの交渉を拒否するものが多かったのである。一方、みずからの信仰の念において、スーフィーズムに傾倒する支配者もいたが、一般的にいえば、権力者の側としては、スーフィーの、貴族層や一般の民衆に及ぼす影響を考える場合、聖者たちの存在を無視することができず、しばしば、彼らに接近しようと努力する支配者もあつたのである。しかし、強大な君主権を実現したトッグルク朝のムハンマド＝シャーや、つづくフィーローズ＝シャーの治世のあとには、さきあげた聖者たちに比するような大きな影響力を持ったスーフィーは、デリー地域にはあらわれず、聖者を中心とする目立った

組織的活動も行なわれなかった。スーフィーの宗教思想の社会的な影響は、支配層や民衆の宗教意識や慣習儀礼に依然として大きな影響を与えながらも、デリー諸王朝の末期においては、そのままデリーの住民の生活のなかに、むしろ、地道なかたちで定着していったものと考えられるのである。フィーローズ・シャー・トッグルクが記したといわれる文献には、その治世に、百十余に及ぶハーンカーが建てられたことが述べられているが、現存する建造物からのみする判断は危険であるにせよ、サイイド・ローディー両朝期の宗教施設の遺跡は、トッグルク朝後期のそれとくらべるとその数が少なく、両者のあいだに大きなひらきがあることも指摘できるのである。おそらくは、小型のモスクや、ミヒラーブをそなえた礼拝壁をもつ墓地、さらには墓建築そのものまでが、ときには、スーフィー的な瞑想や修業の場として使用されていたのではないかと考えられる。こうして、イスラームの信仰生活は、デリー諸王朝末期には、いわば、より小さな単位に分解しつつインド人ムスリムの生活に定着していったのではないかとということが、建造物の面でも、ある程度は裏づけられるのである。スーフィーズムの思潮や宗教的実践の影響は、ニザームッディーン・オーリアーの死後には、地域的にも、インド各地に拡散していった。チジュティー派を中心とするスーフィーズムが、インドにおける権力者によって、中央において、ふたたび脚光を浴びてあらわれるのは、16世紀後半の、アクバルの時代になってからのことであったのである。

トッグルク朝末期の中央権力の衰退と、それに拍車をかける結果となったティームールの侵入の結果としてのデリーの混乱は、地方におけるヒンドゥーやムスリムの諸勢力の動向に大きく影響し、その結果、いくつかの王国が、インドの各地に独立した。その一つの例は、ガンジス河の中流域のヴァーラーナシ (Varanasi、ふつうは、ベナーレス、Benaresともいう) に近いジョクンブル (Jaunpur) の王国に見出すことができよう。1393年に、トッグルク朝の支配を脱して独立したこの「東の王国」 (Mamulkat-i Sharqi) は、サイイド朝からローディー朝時代にわたってデリー＝サルタナットの中央勢力と対抗し、八十余年に及ぶ支配をつづけたのである。また、南インドの諸地域は、一時は、ハルジー・トッグルク両勢力による征服の対象となったが、同地域のヒンドゥー諸勢力は、依然として存在をつづけていった。とくに、16世紀前半に、トゥンガバドラー (Tungabhadra) 河の岸辺の岩丘地帯に壮大な首都を造営したヴィジャヤナガル (Vijayanagar) 王国の権力は、一時、マラバル (Malabar) の海岸から東はベンガル湾にまで及び、南インドの歴史のなかでの特異な存在となり、17世紀中葉に至るまで、その支配をつづけていったのである。一方、デカン地方には、トッグルク朝前期に、バフマン王国が成立したが、ローディー朝の時代に入ってから、内部の諸勢力の対立によって分裂し、ベターール (Bitar) ・アフマドナガル (Ahmadnagar) ・ビジャーブル (Bijapur) ・ゴルコンダ (Golkunda)、およびビダール (Bidar) などの、いわゆるデカンにおける五つのムスリム王国が相次いで独立し、それぞれ、地方的な支配権力をうちたてた。やがて、これらの王国のあいだにおいて、さらには、これらのムスリム諸勢力とヴィジャヤナガル王国とのあいだに、闘争や妥協の歴史がくりかえされていったのである。

デリーの王権にとって、ラージャスターンや中央インドのラージプート諸勢力は、つねに、その権力の確立と支配の拡大とを阻む敵対勢力であった。デリー諸王朝末期には、さらに、これらのラージプート諸族の割拠する諸勢力に加えて、マールワ (Mālwa) とグジャラート (Gujarāt) との二つのムスリム勢力が、それぞれ、ダハル (Dhar) ・マーンドゥー (Māndū) と、アフマダーバード (Ahmadābād) とに拠って、デリーのスルターンの権力の及ばない地域に、地方的な支配権を打ち立てたのである。

われわれは、主要な研究対象として、デリー地域に現存する、デリー諸王朝時代の建造物を選んだが、上に述べたデリー＝サルタナット時代の後期に、インドの諸地域に興亡したムスリム諸勢力がのこした建造物

にも、当然、注意を払わなくてはならない。しかし、それらの建造物が造営された歴史的背景に関しては、別に、巻を改めてその遺跡を紹介するときに、ふたたびふれることにして、本篇においては、以上の簡単な言及にとどめておきたい。

最後に、一言、記しておきたいことがある。われわれが研究の対象とした、デリー＝サルタナット時代の建造物の大部分は、ときの支配層に属する人びとが、その建造を命じたものであった。いくつかの大規模な城壁はもちろん、巨大なモスクや塔、あるいは墓建築などは、いずれも、これらの支配層ののこした遺産である。しかし、その数はわずかではあるが、一部の建造物、たとえば、小規模な宗教施設や、あるいは水利関係の建造物のなかには、村落の首長、あるいは共同体によって建設されたものもあったと推定される。さらに、支配層によって建設された建造物でも、たとえば、モスクやハーソカーやマドラッサなどは、デリーのムスリム民衆の生活と関連をもつものであり、また、堰堤や水門、あるいは、バーオリをふくめての各種の井戸などの構築物のなかには、農民や都市の一般民衆の、生産活動をもふくむ生活面に、直接、かかわりをもつものが、明らかに認められるのである。従来、これらの民衆の生活につらなることがらにふれた文献資料は、諸王朝時代のものとしては、ほとんど、なきにひとしかった。われわれの建造物の研究が、こうした面での、なんらかの資料的価値をもつとすれば、あるいは、これらの問題に関する将来の研究に有用な役割りを果し得るかも知れない。

そのほか、上に記してきたサルタナット時代の支配の変遷の概観のなかでほとんどふれることができなかったものに、建造物の建設に関する技術上の諸問題と、その建設に動員された労働力、および、それらと支配層との関係などの問題がある。これらの諸問題も、歴史学の分野においてはもちろん、建築史学の領域においても、これまで、ほとんど等閑に付されてきたところである。同時代、あるいは後代のムスリム文人による文献の記載内容からは、これらの諸問題に関する史料は、ほとんど期待することができないといっても過言ではあるまい。これらの建造物の造営に関する技術の展開の問題、あるいは、その建設に関する権力と労働力とに関する諸問題は、われわれの得た諸資料の検討、あるいはその比較研究などによって、将来、その解明になんらかの手がかりを得ることが期待できると考えられる。それは、今後の研究における重要な課題の一つであることを、この際、強調しておきたい。

### 第三章 建造物に関する従来<sup>1)</sup>の諸研究

#### 第一節 19世紀前半の状況

デリーに残存していたサルタナットやムガル時代の建造物に関する研究的な関心は、18世紀の後半から次第に高まってきた。それも、はじめは、好奇心からする傾向がつよく、比較的目につきやすく、当時、一般に知られていた建造物に集中して向けられた。デリーの建造物のなかでは、ムガル時代の城砦や宮廷をはじめ、巨大なモスクや墓建築などが、まず、人びとの注目するところとなったのは当然のことであろう。デリー諸王朝時代の建造物としては、クトゥブ地域のモスクや塔、あるいは、フィーローズ＝シャー＝トゥグルクの宮廷やモスクのごとく、ひとの眼をひきやすい少数のものをのぞくと、あまりにもその数が多かったデリー諸王朝時代の建造物の大部分は、おとずれる人びとのつよい興味や関心をひくには至らなかった。個々の建造物そのものも、ムガルの壮大な建造物と比較すると、その様式や規模からみて、あるいは美的見地からみて、それほど魅力ある対象として、一般の興味をそそらなかつたということもあろう。しかしながら、18世紀の末葉から19世紀にかけて、ようやく、デリー諸王朝時代の建造物について、いくつかの報告が公刊されはじめた。ここに、デリー地域に現存するデリー諸王朝時代の建造物に関して、これまで公刊された主要な業績を、ほぼ時代を追って概観しておくことは、われわれの調査研究と報告書刊行の意義を明らかにするためにも有用なことと考える。そこで、まず、18世紀末から19世紀前半にかけて公刊された二、三の報告を紹介することから始めよう。

18世紀末葉からカルカッタにおいて刊行された『アジア研究』(*Asiatick Researches*)と題する雑誌のいくつかのナンバーに、デリーにのこるサルタナット時代の建造物についての論文が掲載されている。それらは、ジェイムズ＝ブラント (James Blunt)、ヘンリー＝コールブルック (Henry Colebrooke)、ウォルター＝ユワー (Walter Ewer) などの寄稿したもので、クトゥブ＝ミーナール (M. I, 図版. 1~2) やその周辺の建物についての、碑文の紹介をもふくめた解説や、フィーローズ＝シャー＝コートラに残存する建造物とアジョーカの石柱などについての紹介論文である。<sup>1)</sup>なかでも、1795年刊行の同誌の第Ⅳ号に載ったジェイムズ＝ブラントのクトゥブ＝ミーナールについての小論文は、この塔の高さの計算値や、1794年に描かれたミーナールの画もふくまれており、デリー諸王朝時代の遺跡に関する紹介・研究の初期の論考として、大いに注目されるところである。また、1801年の第Ⅶ号に載っているコールブルックの論文も、その目的がアジョーカ王石柱の碑文の紹介におかれてはいるものの、それが立っている階段状の宮廷建造物 (O. 7, 図版. 147a) について、1797年当時のものと思われる挿図をのせていて、きわめて興味がある。さきのブラントの論文にしても、18世紀末葉における、クトゥブ＝ミーナールとその周辺の状況を知るうえで、その挿図は、まことに貴重なものといえるのである。

1) James Blunt, A Description of the Cuttub Minar, *Asiatick Researches*, Vol. IV, 1795, pp. 313-316. Henry Colebrooke, Translation of one of the Inscriptions on the Pillar at Dehlee, called the Lāt of Feerōz Shah, *A. R.* Vol. VII, 1801, pp. 175-182, with plates. Walter Ewer, An account of the Inscriptions on the Cootub Minar, and on the Ruins in it's Vicinity, *A. R.* Vol. XIV, 1822, pp. 480-489, with plates.

1830年代に入ってロンドンで刊行されたエンマ・ロバーツ (Emma Roberts) による3巻からなるインド紹介書のうちのデリーに関する章は、デリー地域に散在する遺跡をかなり丁寧に紹介しているが、そのなかには、ムガル時代の建造物とならんで、サルタナット時代に属する城砦や、モスクおよび墓建築などもふくまれていて、やはり、19世紀前半の数少ない欧文報告書としては貴重なものとなっている。

しかしながら、上にそのいくつかの例をあげたような、主としてイギリス人によって書かれたデリーの遺跡についての論著は、その対象も、一般の人びとに比較的目につきやすく、当時もよく知られていたものを主にとり上げており、その選び方も、いわば恣意的である。また、当然のことながら、論者のデリーの歴史や建造物そのものに関する知識にも、その関心のもち方にも、きわめて限られたものがあった。このような状況のなかで、デリーに残存する建造物に関して、画期的な意味をもつ著書が、19世紀のなかばに至って、インド人ムスリムの手によって、公刊されることになったのである。それは、一般の外国人には読むことができなかったウルドゥー語で書かれていた。しかし、その総合的な内容からみて、また、デリーの歴史の変遷をとらえ、そのなかで建造物を解説するという著者の視点と方法とからみても、さらに、その公刊の時期からいっても、デリーの建造物についての研究著作の歴史のなかで、まず、特記されなければならない最初の大きな業績である。それは、サイイド・アフマド・ハーン (Saiyid Ahmad Khān) による『アール・サーハブ・ナーディード』 (*Āthār al-Ṣanā'id*, 王たちののこしたもの) と題された書物である。

この書物は、大きく分けると、1847年に刊行された第一版と、さらに1854年に、まったく稿を改めて出版された第二版とに分けることができるであろう<sup>1)</sup>。初稿本は、サイイド・アフマドが、デリーの町なかや近郊の荒地のなかを遺跡を探しもとめて歩きまわった努力の所産であるが、さらに、建造物にのこされていた碑文の読解という難事をはじめ、デリーの変遷や建造物の歴史的背景をさぐるためにさまざまな史書を渉猟しなければならぬという、骨の折れる研究と肉体労働とを経てはじめて完成することができたものである。その苦心の一端は、たとえば、クトゥブ・ミーナールの調査に際して、彼がみずから記している一節からも、うかがうことができよう。「クトゥブ・サーヒブの塔 (すなわち、クトゥブ・ミーナール——筆者) の碑文は、あまりにも高いところにあるために、読むことができなかった。そこで、それらを読むために、私は2本の綱のあいだに、碑文に面してひとつのチンカー (かご) をさげた。そして私自身も上に登り、かごに腰かけ、それぞれの碑文を書きとったものである。私がかごにのっていたときに、モーラーナー・サハブ・イーは、愛情のあまり、おろおろしてしまつて、恐ろしさのために真青になってしまった。」しかし、さまざまな困難にもかかわらず、著者の序文によれば、この書物は、わずか一年半のうちに刊行されたという。これは、まことにおどろくべき努力の結晶というほかはない。

当然、このウルドゥー語の著書は、イギリス人の関心をよび、イギリスの王立アジア協会 (The Royal Asiatic Society) の会員のなかから、その英訳を刊行したいという希望があらわれた。サイイド・アフマドも、ちょうど、初稿本の叙述を補訂したいという気持をもっていたという。そこで、彼は、内容を新しく書き直し、遺跡の配列の順序をもまったく変えて、改稿本ともいふべき第二版を用意したのである。たしかに、初稿本には、抽象的な形容詞や修飾語が、随所に、しかも、くりかえし用いられており、そのため、叙述の内容も、著しく形式的で誇張されたものとなっていたし、また、建造物に関する歴史的な叙述にも、数多くの疑問点や不明の個所がのこされていた。稿を改めた第二版では、文章の内容も簡潔なものとなり、誇張や形式性が

1) Emma Roberts, *Scenes and Characteristics of Hindostan, with Sketches of Anglo-Indian Society* Vol. III, London, 1835, Chapter VI, Delhi, pp. 167-199.

2) Saiyid Ahmad Khān, *Āthār al-Ṣanā'id*, Lakhnau (Lucknow), 1847 (1st edition), 1854 (2nd Revised edition).

かなり排除され、また、建造物の配列の順序も、彼の考えにもとづいて、一応、時代を追ってなされている。彼は、また、新しい版のために、細心の注意を払って、その挿図をも書き直させたという。この改稿本は、1854年に、はじめて出版されたのであるが、この改稿初版本は、不幸にして、2年後に起こった、いわゆるセポイの反乱の戦火に、その大部分が焼かれてしまったらしい。

すでに述べたように、このアフマド＝ハーンの著書の英訳についても、準備は進められていたのであるが、ちょうど時を同じうして、つぎに紹介するガルサン＝ドゥ＝タシー (Garcin de Tassy) によるフランス語訳が公刊されたのである。こうした事情もあって、『アーサールッ＝サナーディード』の英語による完訳は、今日に至るまで、実現されないままに終わっている。ドゥ＝タシーのフランス語訳は、『ジュールナル＝アジアティーク』(Journal Asiatique) に、1860年から1861年にかけて、5回に分けて掲載されたが、それは、原著者の改稿本の内容の大部分を、ほぼ完訳したものである。当時としては、まことに画期的な訳業で、ウルドゥー語で書かれた原著を読解できなかった西欧人に対して、デリーの歴史とその建造物について紹介した啓蒙的な役割りは、大きいものがあつたといえよう。もっとも、訳者が高名なイスラーム学者であつたにもかかわらず、訳文中の特殊な固有名詞の音写やその他の点において、今日から見れば、明らかに誤まりと思われる点があるのも、サルタナットの歴史やデリーの遺跡の歴史的背景についてそれほど通じてはいなかったらしい訳者としては、無理もないことといえるかも知れない。したがって、サイイド＝アフマドのこの著書については、このフランス語訳だけに依存する場合には、いささか注意が必要であると考えらる。

ところで、サイイド＝アフマド＝ハーンの『アーサールッ＝サナーディード』は、彼が1898年に世を去つてからのち、その初稿本がはじめて刊行されてからはほぼ半世紀あまりを経た1904年に、モハンマド＝ラフマツトラー＝ラーダ (Muhammad Rahmat al-Allāh Ra'ad) によって、彼の言葉に従えば、「初版と第二版とのそれぞれの長所を一つに集めて、第三のものとして完全な姿で」、いわば第三版ともいふべき新版が、カーンプル (Kanpur) で刊行されたのである。<sup>2)</sup> この書物の特徴は、デリーの建造物に残存していた歴史碑文の多くを、巻末に、時代を追って、まとめて紹介した点にあるといえよう。

サイイド＝アフマドの労作の内容は、デリーにおけるサルタナット時代の建造物の紹介と研究という見地からみれば、多くの長所とともにいくつかの欠点をももっている。のちに19世紀のインド人ムスリム社会の指導者となつたこの人物にふさわしく、そのデリーのムスリム王権の支配の時代の遺跡に対しても、ムスリムとしての情熱が、行間ににじみでている。そして、彼の博識の一端を示した、建造物にまつわる伝承や説話、歴史的背景の紹介は、貴重なものといわなければならない。こうした面では、当時はもちろん、後代の西欧人の著作が到底なし得ない資料的価値をもつ著作であるといえる。しかし、その一面、彼の読書家としての豊かな蓄積や、イスラームの信徒としての宗教的立場が、これらの伝承や古文献の内容に対して、批判的な吟味をあまり試みることなしに、そのまま採用紹介している点は、今日から見れば、この著作のもつ限界として指摘することができるのである。しかし、そのような限界はあるにせよ、このアフマド＝ハーンの著作が、その後、インド、あるいは外国の研究者や読書家に、著しい影響を及ぼし、また、デリーとその建造物の歴史に関して、大きな啓蒙的役割りを果たしたことは、すべての人びとの認めるところであらう。

1) M. Garcin de Tassy, Description des Monuments de Delhi en 1852, d'après le Texte Hindoustani de Saïyid Ahmad Khan, *Journal Asiatique*, Juin, 1860 (pp. 508-536), Aout-Septembre, 1860 (pp. 190-254), Octobre-Novembre, 1860 (pp. 392-451), Décembre, 1860 (pp. 521-543), Janvier, 1861 (pp. 77-97).

2) Saïyid Ahmad Khan, *Āghar al-Sanādīd*, Kanpur, 1904. English title, *Asar-oos-Sanadid*, i. e. *The first literary venture of Jawūd-ud-doula Arif-Jang Dr. Sir Syed Ahmad Khan*, 1904, Cawnpore.



## 第二節 19世紀後半の状況

サイイド・アフマドの著書が、人びとをしてデリーとその建造物への眼を開かせる一つの契機となったとすれば、それよりやや遅れて、インド人やイギリス人、さらにひろく西欧の人びとの関心を、学問的にまで高めるのに重要な役割りを果たしたのが、19世紀の後半からのインドにおける考古調査事業の基礎づくりに大きな役割りを演じたアレグザンダー・カニンガム (Alexander Cunningham) によってなされた一連の調査研究の成果である。イギリス支配のもとで、支配者としての特権を行使して、各地の遺跡調査に精力的な活躍をしたこの軍人考古学者は、まず、1862-63年季における遺跡探査の報告書のなかで、約50ページにわたって、デリーにおけるさまざまな建造物についての彼の最初の報告を政府に提出したのであった。<sup>1)</sup> このA. カニンガムの報告書があらわれたことは、イギリス支配下におけるインド各地の考古学的調査と遺跡保存のための組織的な措置が、政府当局によってはじめてとられるに至った直接の成果である。しかし、それが可能となった背景には、のちにふれるように、19世紀後半に至るまでに、次第に紹介されはじめた、デリー諸王朝からムガル帝国の時代にかけてのムスリム文人によって著わされたさまざまな史書が、あるいは活版あるいは石版に付せられ、あるいはその英訳が抄訳または全訳のかたちで紹介されるに至ったという状況が、考えられなければならない。ところで、この1864年に政府に提出されたA. カニンガムの報告書は、同じ年のベンガル=アジア協会の会誌に、図版をのぞいて掲載され、<sup>2)</sup> さらに1871年にはじまるインド考古調査局の報告書第1巻に、若干の補訂を経て収録されたのである。このカニンガムの報告書は、「古いデリーの“七つの城砦”」の変遷について述べ、ヒンドゥーとイスラーム関係の遺跡とに大別して、城砦や、モスク・墓建築その他について紹介したものである。この報告書の内容が、デリーの建造物の紹介と研究の歴史のなかで、大きな意味をもつのは、それが、単に、建造物の状態に関する詳細な叙述に終ることなく、彼が利用し得た限りの歴史的文献を引用しながら、建造物に関する文献あるいは碑文などを利用した考証を、慎重に行なっている点である。このことは、イギリス人や西欧人の関係論著のなかで、カニンガムの報告書の新しい内容を示すひとつの特徴といえるのである。この報告書を第1巻として、インド考古調査局 (Archaeological Survey of India) は、その後、カニンガムの統轄のもとで、1871年刊行の第1巻から1887年刊行の第XXIII巻まで、つづいて報告書を刊行するのであるが、デリーに残存していたデリー諸王朝時代の遺跡に関していえば、さきの第1巻のほかに、第IV巻および第XX巻とを、<sup>3)</sup> 挙げておく必要がある。

なかでも、その第IV巻は、1871年の夏季におけるJ. D. ベグラ (J. D. Beglar) の遺跡調査と考証の結果をのせているものであるが、このベグラの報告は、彼の所論が、カニンガムの従来の所説に対する批判的な見解に満ち、カニンガム自身がそれを受け入れなかったところから、ベグラの報告のまえに、それをつよく批判したカニンガムの序文がつくという形式をとっている。ベグラの所説は、クトゥブ=ミーナールとクトゥブ=モスクの建立のヒンドゥー起源を論じたものをはじめ、ツリーの城砦の比定に関する異説など

1) Alexander Cunningham, *Report of the Proceedings of the Archaeological Surveyor to the Government of India for the season of 1862-63*, [1864]

2) *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. XXXIII, Supplementary Number, pp. i-lxxxvii, 1864.

3) Alexander Cunningham, *Report of Operations of the Archaeological Surveyor to the Government of India during season 1862-63*, *Archaeological Survey of India Reports*, Vol. I, Simla, 1871, pp. 131-231, with 4 plates. J. D. Beglar, *Report on Delhi for the half-year ending September 1871*, *A. S. I. R.*, Vol. IV, Calcutta, 1874, pp. 1-91, with 10 plates and index. A. Cunningham, *Report of A Tour in Eastern Rajputana in 1882-83*, *A. S. I. R.*, Vol. XX, Calcutta, 1885, pp. 139-161, with Plates XXXI-XXXVIII.

をふくむものであるが、結局は、のちに書き加えられた前文においてベグラー自身が記しているように、カニンガムの所説をくつがえすことができなかつたのである。しかしながら、両者の論争が、主として、建造物の時代区分や、ヒンドゥー・ムスリムの技術史的問題をはじめ、その他さまざまな歴史的諸問題を中心として展開されていることは、注目されて然るべき点であろう。ところで、その後10年以上もたったのちの第XX巻に載せられたA.カニンガムの報告をみると、調査研究の対象が、初期の報告書に載った、著名で大規模な遺跡から、比較的目立たない、小規模のものもふくめて、歴史的に意味のある建造物にまで及んでおり、調査研究の進歩を感じさせるものがある。ともかく、A.カニンガムを主任とする初期のインド考古調査局の報告書は、デリーのみならず、インド各地におけるイスラーム建造物の紹介と調査研究の系譜のなかで、考古学的な成果を総合的にまとめた最初のものとして、歴史的な意義をもつものといえよう。

デリーの建造物に関するA.カニンガムの調査報告の内容は、インドに在住するイギリス人を中心として、デリーの建造物に対するかなりの関心をよびおこした。その一端は、たとえば、その後、ベンガル-アジア協会の会誌に載せられた諸論考によっても知ることができるが、ここでは、その例として、デリーの遺跡についての興味ある報告を投稿したC.J.キャンベル(C.J. Campbell)、およびJ.D.トレムレット(J.D. Tremlett)の二人の論文をあげておくことにとどめよう<sup>1)</sup>。このベンガル-アジア協会の会誌は、すでに、さきに述べたアフマド-ハーン<sup>2)</sup>の著作の刊行とはほぼ同じ時期の1847年の号に、デリー考古学協会を主宰していたグループの一人ヘンリー-コープ(Henry Cope)、およびヘンリー-リュイス(Henry Lewis)による、フィーローズ-シャー-トゥグルクの建造した都市と建造物とに関する報告<sup>3)</sup>を載せているのであるが、これも、19世紀前半における貴重な現地報告の一つである。その後、この会誌は、19世紀後半から20世紀にかけて、デリーの建造物に関する、いくつかの有益な報告を載せているが、ここでは省略せざるを得ない。なお、上にふれたH.コープらがつくっていたデリーの考古学協会も、会誌(*Journal of the Archaeological Society of Delhi*)を発行しており、デリーのムスリム遺跡に関しての断片的報告を載せている。さらに、H.コール(H.H. Cole)がインドにおける建造物の保存事業の責任者として、1880年代前半に公けにした簡単な報告書<sup>3)</sup>やその他の報告が版になっていることに、一言、ふれておきたい。

A.カニンガムを責任者として、政府の事業として行なわれたインドにおける遺跡の組織的な調査研究とその成果を載せた報告書の刊行は、イギリス人・インド人や西欧の人びとに影響を与え、デリーの建造物についても次第に関心が高まり、それについての研究著作活動も、ようやく活潑になっていった。そうした傾向のなかで、のちに述べるような、デリーの遺跡や歴史的建造物に関する、かなり高度な案内書の類がつづいて刊行され、さらに多くの西欧人や、ようやく自国の文化遺産に新しい立場からの関心をもちはじめた一部のインド人に、大きな刺激を与える結果となっていったのである。しかし、それについて述べるまえに、ここで、デリーの建造物の紹介、研究の歴史において、大きな影響を与えてきた、いくつかの著作について、とくにふれておきたい。

その一つは、美術史および建築史の啓蒙的研究において、インドの建造物を、他の西欧、および西アジア、

1) C. J. Campbell, Notes on the History and Topography of the Ancient Cities of Delhi. *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. XXXV, Part I, No. IV, —1866, Calcutta, 1867, pp. 199-218. J. D. Tremlett, Notes on Old Delhi, *J. A. S. B.*, Vol. XXXIX, Part I, No. II, Calcutta, 1870, pp. 70-88.

2) Henry Lewis and Henry Cope, Some account of the "Kalān Musjeed", commonly called the "Kalee Musjeed" within the new town of Delhi. *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, Vol. XVI, Part I, 1847, pp. 577-589, with 5 plates. H. Cope and H. Lewis, Some Account of the Town and Palace of Feerozabad, in the vicinity of Delhi, with Introductory Remarks on the sites of other Towns. *J. A. S. B.*, Vol. XVI, Part II, 1847, pp. 971-986.

3) Henry H. Cole, *Preservation of National Monuments. India, Delhi*, with plates, (1884).

東南アジア、東アジアなどの建造物との対比において、美的価値判断についてのすぐれた見解をもふくめて紹介した、ジェームズ＝ファーガスン (James Fergusson) の、著名な業績である。独特な挿図を豊富に載せた2冊本からなるこの建築史に関する著書は、1855年にロンドンにおいて初版を出しているのであるが、著者は、その後、アジアのみについての建築史を著わし、両書において、クトゥブ＝ミーナールやクトゥブ＝モスクその他を中心に、デリー＝サルタナットの建造物についても建築史や美術史上の特徴を強調したのである<sup>1)</sup>。他の著書もふくめて、ファーガスンの著作が、西欧人やアジア人に与えた影響は、インド建築に対する興味をも著しく高めたのである。イギリスのインド支配が急速に進展し、イギリス人のインドとの関係がますます深まっていくとともに、とくに歴史的都市としてもっとも著名であったデリーの建造物に対する一般の関心が、さらに刺戟されていったことは当然のことである。

さて、つぎに注目すべきことから、インドにおけるムスリムの支配に関する歴史的な認識が深まり、それに応じて、ムガル時代やサルタナット時代に、インド人によって、主にペルシア語で著わされた歴史書やその他の文献類が、ペルシア語のまま版に付せられ、あるいは、その英語訳がつぎつぎに刊行されていったことである。その初期に属する代表的なものとしては、たとえば、ムハンマド＝カーシム＝ヒンドゥラー＝シャー＝フィリシタ (Muhammad Qasim Hindū Shāh Firishṭah) の『イブラーヒームのぼらの園』 (Gulshan-i Ibrahimī), 一般には『フィリシタの歴史』 (Tarikh-i Firishṭah) として知られている史書である。アクバルの時代に著わされたこの史書は、J.ブリッグズ (J. Briggs) とミール＝アリー＝ハーン (Mir 'Alī Khān) とによって、1829年、ロンドンにおいて、英語訳のかたちで刊行され<sup>2)</sup>、さらに1832年には、その最初のペルシア語刊本が、ボンベイにおいて刊行されたのである<sup>3)</sup>。このフィリシタの史書は、そのはじめの部分に、デリー諸王朝時代の支配の歴史の概説をふくむものである。実は、ブリッグズによる英訳に先立って、この原著は、すでに、アレクザンダー＝ダウ (Alexander Dow) によって、1768年に英訳紹介されていた<sup>4)</sup>。このA.ダウの書物も、またJ.ブリッグズによる、いわゆる英訳本も、いずれも、翻訳としては、きわめてずさんで、ときには原著の内容も固有名詞も、省略されたり、あるいは、まったく変えられてしまっていることさえあり、今日、フィリシタの英訳として使用する場合には、厳密には、その文献的価値はきわめて低いものである。それにもかかわらず、このフィリシタの史書が、ともかくも英文によって紹介されたこと、なかでもJ.ブリッグズの訳著は、デリーの遺跡に関する調査研究を裏づける文献資料として、しばしば、さきに紹介した諸著の筆者たちによって利用されてきた。その後、アクバル時代に書かれた他の著名な史書の刊本や、それらの翻訳の類が、19世紀の後半から20世紀のはじめにかけて、つぎつぎに公刊されるようになり、そのなかには、デリー諸王朝時代の歴史に関する基本的な史料として、しばしば用いられるようになったものも少なくないのである。

インドにおけるムスリム王権の支配の歴史を裏づけるこれらの文献は、1870年代に入って、ヘンリー＝エリオット (Henry Elliot) ののこした訳業と、それに対するジョン＝ドゥソン (John Dowson) の精力的な補足作業とによって、8冊からなる大部な英訳史料大成として刊行されるに至った<sup>5)</sup>。この書物が、インドにおける

- 1) James Fergusson, *The Illustrated Handbook of Architecture*, 2 Vols, London, 1855. *History of Indian and Eastern Architecture*, London, 1876.
- 2) John Briggs, *History of the rise of the Mahomedan power in India, till the year A.D. 1612. Translated from the Original Persian of Mahmud Kasim Ferishta*, London, 1829.
- 3) Muhammad Qasim Hindū Shāh Firishṭah, *Tarikh-i Firishṭah*, Bombay, 1831-32 (1247A. H.), ed. by J. Briggs and Mir Khairāt 'Alī Khān.
- 4) Alexander Dow, *The History of Hindostan: from the Earliest Account of Time, to the Death of Akbar: translated from the Persian of Mahmud Casim Ferishta of Delhi*, 2 Vols, London, 1768.
- 5) Henry M. Elliot and John Dowson, *The History of India as told by Its own Historians*, 8 Vols, London, 1867-1877.

イギリスの支配の正当性を主張する目的を担って、過去のインドの歴史、とくにムスリムの王権によるインド支配の状態を明らかにする意図をもって編纂されたことは、その著者自身はその序文に記しているところであり、史書や抄訳の個所の選択などにも、たしかに、植民地の支配者としてのイギリス人の編著者の立場からする偏向が、明らかに認められる。しかしながら、この英訳史料大成は、ベルシア語の読めなかった西欧人や一部のインド人にとって、インドにおけるムスリム王権の支配の歴史的知識を得る材料として、今日に至るまで、ひろく利用されてきているのである。この著作の刊行以後は、遺跡や建造物に言及する場合にも、同書、とくにその第Ⅱ巻および第Ⅲ巻を引用することが、西欧人やインド人による著書や論文・報告書の類に、しばしば見られるようになった。このようにして、18世紀後半から19世紀後半にかけて行なわれたムスリム王権の支配に関するさまざまな史書・文献類の原典の紹介やそれらの翻訳の刊行が、カニンガム以来の組織的な遺跡の調査研究事業の進展とあいまって、ムスリム支配の遺産としてのデリーの建造物についての研究を正しく発展させる一つの要因となっていったのである。

文献資料に関する研究と出版とが進み、デリーとその遺跡に関する歴史的な知識が拡大してゆくのと並行して、建造物とともに残存する碑文に対する学問的な関心も、当然、高まっていった。しかし、碑文が、つぎつぎに発見、紹介され、それらが正しい翻訳を付して、多数、紹介されるようになるのは、のちに述べるように、20世紀に入ってからのことである。このことに関連して、見落とすことのできないのは、19世紀後半の、エドワード・トーマス (Edward Thomas) による、貨幣学的な研究にもとづくところの、サルタナット時代のデリーの支配者についての、編年史的な研究の成果である。『デリーのパターンの王たちの年代記』と題されたこのE.トーマスの著書は、単に、それぞれのスルターンの治世に発行された貨幣のみならず、いわゆる歴史碑文や文献史料その他をひろく利用して、諸王朝時代のデリーの支配層の治績を、時代を追ってたどったものである。1871年に刊行されたこの著書は、他のインド史に関する歴史的著作とともに、その後の西欧人やインド人の著作にも、かなりの影響を与えたのである。

以上に述べてきたような、さまざまな分野における調査研究や著作活動の成果の上に立って、19世紀の70年代から20世紀の初頭にかけて、デリーの遺跡と建造物とは、歴史書や案内記などのかたちをとる書物のなかで、ひろく世界に紹介されていったのである。もちろん、それらの著書のなかには、サルタナット時代の建造物よりは、より規模の大きい、ムガル時代の城砦・宮殿・庭園などをはじめ、著名な王や貴族の墓建築、さらにセポイの反乱にまつわるデリーの史跡などに、叙述の重点をおいたものもあった。しかし、トロイをはじめとして、あのバグダードやカイロなどについて、異なった時代に、いくつかの城砦や都市が変遷したことに関心がむけられたのに似て、インドの古都デリーも、その地に興亡した諸勢力の都城のたび重なる変遷の事実によって、外国人の興味と関心とを、つよくひきつけたのであった。「デリーの七つの都市」(Seven Cities of Delhi) とか、「デリーの十五の都市」(Fifteen Cities in Delhi) というような呼称がつけられたのも、こうした傾向を示すものである。旅行記や案内記のなかには、無責任で、いわゆるきわものに類する小冊子や、ときには荒唐無稽な内容をもつものもあったが、これまでに述べてきたような研究内容をよくふまえたうえで書かれた著書も、いくつか刊行されたのである。それらのなかでも、とくに初期の著作として注目されるのが、カー・スティーブン (Carr Stephen) によるデリーの遺跡に関する著書<sup>1)</sup>である。この著書は、1876年に、ペンジヤープのルディアナ (Ludhiana) その他で出版されたもので、その内容は、著者の前文にも記されてい

1) Edward Thomas, *The Chronicles of the Pathan Kings of Delhi, illustrated by Coins, Inscriptions, and other Antiquarian Remains*. London, 1871.

2) Carr Stephen, *The Archaeology and Monumental Remains of Delhi, Ludhiana*, [1876].

るように、アレクザンダー＝カニンガムの報告とサイド＝アフマド＝ハーンの著書とに拠るところが多いが、同時に、さきに紹介したヘンリー＝エリオットとジョン＝ドースンの英訳史料大成を、しばしば利用して書かれている。この書物が、その後、今日に至るまで、デリーの建造物を紹介した文献の代表的なものとしてひろく利用されていることは、そうした内容によるものである。カー＝ステューフンの著書に比べれば、案内記的な性格がずっとつよいものに、同書より10年以上もまえに出たフレデリック＝クーパー (Frederick Cooper)<sup>1)</sup> による、きわめて有益なデリーの案内書をはじめ、それより10年のちに刊行されたヘンリー＝キーン (Henry Keene)<sup>2)</sup> による『デリー』(Delhi) という100ページ足らずの著書などがある。このうち、H. キーン<sup>2)</sup> の書は、20世紀に入ってから、E. A. ダンカン (E. A. Duncan) によって書き直され、一般にひろく利用されてきた書物である。その他、一般の人びとにもひろく読まれてきた書物のなかで、デリーの建造物に関する歴史的な参考資料として利用し得るものに、H. C. ファンショウ (H. C. Fanshawe)<sup>3)</sup>、G. R. ハーン (G. R. Hearn)<sup>4)</sup> などの著書があり、さらに、時代は下るが、同じ傾向を追うものとして、ヘンリー＝シャープ (Henry Sharp)<sup>5)</sup> や、T. G. パーンヴァル＝スピーアー (T. G. Percival Spear)<sup>6)</sup> などの、小冊ではあるが、随所に卓見があり、信頼するに足るデリー史跡の啓蒙紹介書があることを記しておこう。

ところで、インドの建造物とともにのこされ、あるいは断片的に発見されたいわゆる歴史碑文が、19世紀末からインド政府の手によって、組織的につぎつぎと刊行されることになった。そのうち、ムスリム関係の碑文は、『インド＝ムスリム碑文集』(Epigraphia Indo-Moslemica) として、1907-08年号(1911年刊)を第一冊として、逐次、刊行されるようになった。その1909-10年号に掲載されたJ. ホロヴィッツ (J. Horovitz)<sup>7)</sup> による、従来なんらかの書物で紹介されていたムスリム碑文の総目録は、デリー諸王朝時代に関する38の碑文をふくめて、ムスリム碑文を地域・年代順に紹介したすぐれた業績であった。この『エピグラフィア＝インドモスレミカ』のつぎの号から、デリー＝サルタナット時代に属するさまざまな建造物に関連した数かずの碑文が、J. ホロヴィッツ<sup>8)</sup> やその業績を継承したG. ヤズダーニー (G. Yazdani)<sup>9)</sup>、あるいはモールヴィー＝ザファル＝ハサン (Maulvi Zafar Hasan)<sup>10)</sup> などによって、つぎつぎに紹介、翻訳されていったのである。なお、ムスリム碑文のいくつかを保存しているデリー考古博物館 (Archaeological Museum of Delhi) のカタログが、1908年に、J. ヴォーゲル (J. Vogel)<sup>11)</sup> により公刊されたが、のちに、1926年、改訂増補した第二版も刊行された。それらのなかには、もとデリー＝サルタナット時代に属する建造物に見出され、保存のためにこの博物館にもちこまれ

- 1) Frederick Cooper, *The Handbook for Delhi. With large additional matter, illustrative notes, descriptions and extracts from scientific travellers, archaeologists and other authors, on the historic remains and points of modern interest in Delhi...*, Delhi, 1863.
- 2) H. G. Keene, *Delhi, Agra, 1873* (1st edition). *Keene's Handbook for Visitors to Delhi*, re-written and brought up to date by E. A. Duncan, Calcutta, 1906 (6th edition).
- 3) H. C. Fanshawe, *Delhi: Past and Present*, London, 1902.
- 4) Gordon R. Hearn, *The Seven Cities of Delhi*, London, 1906.
- 5) Henry Sharp, *Delhi: Its Story and Buildings*, London, 1921.
- 6) T. G. Percival Spear, *Delhi: Its Monuments and History*, London, 1943.
- 7) J. Horovitz, A List of the Published Mohamedan Inscriptions of India. *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1909-10, Calcutta, 1912, pp. 30-144.
- 8) J. Horovitz, The Inscriptions of Muhammad ibn Sam, Qutbuddin Aibeg, and Iltutmish, *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1911-12, Calcutta, 1914, pp. 12-34, with 28 plates.
- 9) G. Yazdani, The inscriptions of the Turk Sultans of Delhi-Mu'izzu-d-Din Bahram, 'Ala'u-d-Din Mas'ud, Nasru-d-Din Mahmud, Ghiyathu-d-Din Balban and Mu'izzu-d-Din Kaiqubad, *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1913-14, Calcutta, 1917, pp. 13-46, with plates IV-XVI. Inscriptions of the Khalji Sultans of Delhi and their contemporaries in Bengal. *E. I. M.*, 1917-18, Calcutta, 1921, pp. 8-42, with plates.
- 10) Zafar Hasan, Inscriptions of Sikandar Shah Lodi in Delhi, *Epigraphia Indo-Moslemica*, 1919-20, Calcutta, 1924, pp. 1-11, with plates I-VI.
- 11) *Catalogue of the Delhi Museum of Archaeology (Founded in January, 1909)*, compiled by J. P. Vogel, Calcutta, 1908. Second Edition (revised and enlarged), with Preface by J. F. Blakiston, Calcutta, 1926.

た、ペルシア語やサンスクリットの歴史碑文が、いくつか収録されており、われわれも、許可を得て、それらを調査し、一部を拓本にとることができたことに、一言、ふれておきたい。このように、20世紀に入って著しく進展した、碑文の所在の確認、およびその出版・紹介や翻訳は、デリー諸王朝時代の建造物の研究、とくにその年代の決定や比較研究に、有用な根本資料を提供するものであった。こうしたことがら、建造物の歴史的な研究、とくに、さまざまな問題にかかわる時代区分の決定的な基準を設定するうえに、とくに大きな寄与をしたことは、改めて、ここに述べる必要もあるまい。なかでも、クトゥブ・ミーナールや、しばしば拡張をくりかえしたクトゥブ・モスクなどの建造物や、また、トッグルク朝やローディー朝時代に属する建造物などの年代の比定・考証に、重要な決め手の役割りを果たしたのである。

### 第三節 20世紀の状況

1911年、イギリスは、インド帝国の首都をカルカッタからデリーの地に移すことを宣言し、ムガルの旧都シャージャハナーバードの南方に、整然たる計画にもとづいて、新都市ニューデリーの建設に着手しはじめた。このニューデリーにふくまれる新しい都市区域は、デリー諸王朝時代の初期および中期に建てられたプレーニー・ディョリー・シーリー・ジャハーンパナーなどの諸城市を南にひかえ、トッグルク朝後期のフィローザーバードの宮廷跡をその東北部に包含するという、広大な地域にわたるもので、そこには、多くの古い建造物が散在していたのである。このニューデリー建設計画の進展が直接の契機となって、インド政府は、考古調査局に命じて、デリー地域における遺跡・建造物に関する大規模な総合調査を実施させ、その結果を文化財保存措置のための資料にも利用しようとしたのである。この調査は、デリー州 (Delhi Province) の全域にわたって行なわれたもので、当時アーグラに置かれていた考古調査局の北部地区 (Northern Circle) の、ムスリムおよびイギリス時代の建造物の総管理官 (Superintendent, Muhammadan and British Monuments) であったゴードン・サンダースン (Gordon Sanderson) によって着手、統轄された。そして、この大規模な調査計画のために、とくに、ザファル・ハサンが副管理官 (Assistant Superintendent) として任命され、精力的な調査活動を行なったのである。これよりさき、デリーの遺跡の調査の結果つくり上げられた、建造物の目録としては、たとえば、われわれは見ることはできなかつたが、1904年に刊行されたJ.ロジャース (J. Rodgers) によるパンジャブ地方の建造物に関する遺跡目録<sup>1)</sup>などがあるのであるが、その調査の詳密さや、調査した地域の広さ、建造物の数などにおいて、20世紀10年代のインド考古調査局による目録編纂の事業は、既往のものとは比較にならない大規模なものだったのである。

このザファル・ハサンらの献身的な作業の結果は、G.サンダースンと、その後任者たるJ.A. ペイジ (J.A. Page), および、J.F. ブラキストン (J.F. Blakiston) などによって補筆されたうえで、それぞれの序文を付して、4冊に分けて、1916年から1922年にかけて、行政上のみの使用限定の但し書 (for Administrative use only) をつけて出版されている<sup>2)</sup>。この報告書は、第I巻 (1916年刊) が、Shahjahanabad, 第II巻 (1919年刊) が、Delhi Zail (Excluding Shahjahanabad), 第III巻 (1922年刊) が、Mahrauli Zail にあてられ、最終の第IV巻には (1922年刊), Badarpur, Badli, Nangloi, Bawana, Khanjaola, Najafgarh, Palam, Shahdara などの八つの地域がふくまれている。各

1) J. Rodgers, *Revised List of Objects of Archaeological Interest in the Punjab*, Lahore, [1904.]

2) Archaeological Survey of India, *Delhi Province. List of Muhammadan and Hindu Monuments*. Vol. I, Preface by Gordon Sanderson, Calcutta, 1915-16; Vol. II, Preface by J. A. Page, Calcutta, 1919; Vol. III, Preface by J. F. Blakiston, Calcutta, 1922; Vol. IV, Preface by J. F. Blakiston, Calcutta, 1922.

巻は、いずれも、一連番号を付して紹介された建造物について、名称、地域、状態、歴史的背景その他についての詳細な内容が記載されている。これら4巻の報告に収められた建造物は、その整理番号に従うと、それぞれ、第Ⅰ巻410、第Ⅱ巻418、第Ⅲ巻347、第Ⅳ巻142を数えるが、このうち、デリー諸王朝時代に属すると思われるものは、その数がきわめて多いのである〔なお、このインド考古調査局の報告書の時代区分に従うと、正確にはスール朝、あるいはムガル初期の時代のもと思われる建造物もこれにふくまれる場合があり、その点が明確には区別しがたい。これについては、本書の遺跡総目録のまえにつけられた「まえがき」を参照されたい〕。この点、サルタナット時代あるいはそれに近い初期ムガルの時代の建造物を収録した報告書としては、まことに画期的なものといわなければならない。われわれが、デリーにおける現地調査を実施して、建造物についての研究資料を十分に整えることができた一つの基盤は、この20世紀の10年代におけるインド考古調査局の調査事業の成果にあつたといつても、決して過言ではない。もちろん、その後、40年以上の年月を経過した今日では、のちにふれるように、この『遺跡リスト』の各項目に記されている内容、とくに建造物の所在地あるいは所在場所の地方名はもちろん、当時の建造物の状態に関する叙述のなかには、そのままでは現状にあてはまらない個所が多々あることはいうまでもない。しかし、この業績は、デリーの建造物に関する報告書のもっとも詳細なものなので、今回、われわれが、建造物の総目録をつくるにあたって、この4冊本の『遺跡リスト』の巻数と一連番号とを、それぞれの建造物の解説の末尾に、あわせて記録することにした。

インド政府は、この1910年代の調査報告を、文化財保護の措置をとるための資料として利用する意図もあつたので、建造物の各項目には、その建造物の所有権あるいは保存措置に対する勧告をも記しているのであるが、とくにそのU)項に記されている、建造物に関する、測量数値をもふくむ、詳細なディスクリプションと、建造物によって精粗の差はあるにせよ、一応載せられている主要建造物の歴史的背景に関する説明などは、とくに、われわれにとって示唆に富むものであつた。しかし、その歴史的背景の説明に関する内容においては、しばしば、在来の資料に対する批判的な立場がとられていないために、地方的な伝承や、宗派的な伝説、あるいは古文献の記述などが、そのまま、歴史的事実として、なんらの疑いもなしに紹介されているという欠陥もあるのである。しかし、調査に従事した当事者の立場や、当時の歴史学や考古学のもつ限界などを考慮すれば、そのことをもって、このすぐれた業績を、ただちに非難するのは、当を得ていないところであろう。

デリー地域の遺跡・建造物に対して、以上に紹介してきたような大規模な調査が行なわれ、詳細な報告書が準備されていたころ、ほぼ時を同じくして、一人のインド人ムスリムの手によって、サルタナット時代の建造物をもふくめたデリーの遺跡に関する、かなり詳細な著書が準備されつつあつたのである。それは、すでに、ビジャーブルの歴史に関する著書やその他の業績を公けにしていた、デリーのタールクダールであつた、バシールッディーン＝アフマド (Bashir al-Din Ahmad) による『首都デリーのことも』 (Waq'at-i Dār al-Hukumat-i Dihli) と題する、ウルドゥー語で書かれた3冊からなる著作で、前半の部分の歴史の叙述のあとを受けて、その後半が、デリーの建造物の解説にあてられているのである。この書物は、著者のはじめの予定では、2冊で完結されるつもりであつたらしいが、デリー地域の建造物をなるべく数多く紹介しようとする意図から、建造物の解説にあてられた第Ⅱ部が、予定より紙数がふえて、結局、全3冊となつてしまったという。著者がその序文で述べているように、「蛇が口の中にいれてしまったねずみのように、飲みこむことも

1) Bashir al-Din Ahmad Dihlawi, *Waq'at-i Dār al-Hukumat-i Dihli*, 3 Vols, Dihli, 1919. (English title), *History of Delhi the Imperial City, A most Comprehensive Account of the History and Archaeology of Delhi (with Numerous Illustrations)* by Bashir-ud-din Ahmad, Delhi, 1919.

できず、さりとて吐き出すこともできなかつた」というその内容は、たしかに、デリーの遺跡の膨大な紹介書としては、とくに建造物の選択とその叙述内容とに、無方法ともいえるような一種のアシバランスが目立っている。著者バジール・ディーンは、サイイド・アフマド・ハーン『アーサールッ=サナーディード』というすぐれた業績がありながら、なおこの書物を著わす志を抱くに至った事情を、イギリス支配の結果、考古調査局その他によって調査・考証・研究が進められ、さらに歴史碑文の紹介と研究とが進んだ20世紀に入ってからの状況の変化が、サイイド・アフマドをこえる新しい著書の執筆を必要とさせたのだと説明している。なるほど、この書物の叙述内容をみると、アフマド・ハーン2)の著書に拠るところが多く、また、A. カニンガムやJ.D. ベグラーの論考も、ときに利用されている。しかし、叙述にあたってとくによく用いられているのは、さきに紹介したカー=ステイフソンの著書で、ときには、その逐語訳とさえ思われるほどに、これを利用している個所もある。しかしながら、自分の「すべての仕事をたな上げし、外出も見物も散歩も、ひととの交際も絶ち、昼寝もやめて、夜のわずかな時間もそのために使った」という著者の努力の結果は、大いに評価されてよく、とくに、アフマド・ハーンや、その他の論著に紹介されていなかった、いわば中小の建造物に関する叙述は、たしかに有用なものといえよう。

ここで、これまでに従来の研究書にほとんどその成果が利用されていない、いわば地道な調査研究の一つにふれておく必要があるであろう。それは、フリードリヒ・ヴェッツェル (Friedrich Wetzel) による、彼のいうところのデリーの「軍人皇帝 (Soldaten-Kaiser) の時代」の墓建築について、1918年に、ドイツで刊行された書物である<sup>1)</sup>。このドイツ文の報告書は、1911年から1914年にかけての、著者の三回におたる現地調査の結果、1320年から1540年に至る時代の墓建築について研究したもので、とくに様式による分類にもとづく、約44の墓についての詳細な調査記録を、それぞれ一つの橋とバーオリーとの記録を付して発表したものである。四角平面の墓建築、六本柱と八本柱、および十二本柱からなる墓建築その他に分けて、それぞれの様式と構造の特徴を探り、遺跡ごとの詳しい記述を、簡単な図面とともに載せているその内容は、ほとんど、他書に類例をみないところである。ただ、建築の様式や状態の記録に重点が置かれ、その歴史的な問題点について手薄な点は、この労作の目立った欠点といえよう。

以上に述べてきた、さまざまな調査・研究のうえに立って、20世紀の30年代になると、デリー諸王朝時代の総合的な流れを説く論考が、いくつかあらわれてくる。なかでも、とくに注目されるものとして、ここにはつぎの二つをあげておきたい。その一つは、ジョン=マーシャル (John Marshall) によって書かれた概観的記述であり、他は、パーシー=ブラウン (Percy Brown) が著わしたインド=イスラームの建築史に関するすぐれた概説書である。J. マーシャルの業績は、『ケンブリッジ=インド史』(The Cambridge History of India) の、デリー諸王朝時代を扱った『トルコ人とアフガン人』(Turks and Afghans) と題する第Ⅲ巻に載せられた「イスラーム=インドの建造物」と題された一章である<sup>2)</sup>。流暢な英文で書かれた、このデリー諸王朝時代の建造物の概観は、とくにインド各地に残存している建造物に関しての要領を得た紹介とともに、デリーに残存する建造物の歴史的な発展を、おもにその様式や構造を中心として、美的価値に対する著者独特の評価を述べつつ、簡潔に記したものである。デリーの建造物については、わずかに著名なものの一部のみが例として引かれているにすぎないにもかかわらず、西方諸国の建築との関連においても、またインドウーの建築技術との結びつきにおいても、歴史的視点から、たくみに問題点を浮彫りにしている簡潔な概論として、高く評価されて

1) Friedrich Wetzel, *Islamische Grabbauten in Indien aus der Zeit der Soldaten-Kaiser, 1320-1540*, Leipzig, 1918.

2) John Marshall, *The Monuments of Muslim India, The Cambridge History of India, Vol. III, Turks and Afghans*, Cambridge, 1928, Chapter XXIII, pp. 568-640, with 51 plates and bibliography.



然るべきであろう。ただ、多年にわたるインド考古調査局の責任者として、インド史にも造詣の深い著者にも、建造物の歴史的な問題に関しては、かなりの疑問点がある。従って、その様式や技術の展開についての彼の所説も、今後、部分的に修正される必要があると考えられる。

上に述べたことは、P. ブラウンの、よりくわしい業績<sup>1)</sup>にも、ほぼ、あてはまるどころである。デリー諸王朝時代の建造物に関しては、その著『インドの建築』(*Indian Architecture*)の第二冊目にあたる「イスラーム時代」(*Islamic Period*)の巻の前半に述べられているが、この論考も、概説書としてよくまとまったもので、歴史家もふくめて、その後のインドや諸外国の学者が、インドのムスリム建築にふれる場合に、ほとんど例外なしに、参照あるいは引用する書物である。J. マーシャルと同じように、仏教・ジャイナ教やヒンドゥー教関係の建築にもよく通じていた著者だけに、インド=イスラームの建造物を概観する場合にも、つねにそれ以前のインドの建造物との関連に注意し、とくに異なった建築技術の交流については、慎重に考察している。また、西方の建築と対比する場合に、この著者に特徴的な一つの点は、サルタナット初期の建築について、とくに中央アジア・アフガン台地における、いわゆるセルジューク=トルコの要素との関係を指摘している点である。ともかく、このジョン=マーシャルとパーシー=ブラウンとの二人の業績によって、デリーに現存する諸王朝時代の建造物は、同時代のいわゆる地方建築とともに、その発展の歴史が、たくみに要約、紹介されるようになったといえよう。ただし、さきにもふれたとおり、建造物の歴史的な背景に関する問題については、この二人のすぐれた業績も、とくに歴史学の見地から見るときには、なお、訂正あるいは補足説明されるべき余地があることを、くりかえして指摘しておきたい。

さきに紹介した、1910年代に行なわれたデリー地域の建造物に関する網羅的な調査は、当時のインド政府の遺跡保存事業の前提であったが、一部の建造物については、20世紀に入ってから、政府は、大規模な発掘や補修・改築・再建などの作業を実施してきた。それらの事情をここにいちいちたどることはできないが、その一部は、インド考古調査局の「年報」(*Annual Reports*)<sup>2)</sup>に報告されている。これらの報告書の巻末に付せられた、補修前の建造物の写真と改修後のそれとの対比は、しばしば、読者の感慨をそそるものがある。この年報のなかには、たとえば、G. サンダースンによるクトップ地域の発掘調査報告<sup>3)</sup>をはじめ、そのほかにも簡単な報告などが載せられたこともあるが、インド考古調査局が別に発行した「紀要」(*Memoirs*)のなかにも、デリー諸王朝時代の建造物に、直接関連するものが、いくつか、ふくまれている。とくに、ザファル=ハサンによるニザームディーン地域の建造物の紹介<sup>4)</sup>(第10冊、1922年)、J. A. ペイジによるクトップ地域における建造物の紹介<sup>5)</sup>(第22冊、1926年)、さらに、デリーに現存するムスリム建造物に残存しているコーランの章句と、いわゆる歴史碑文をのぞく他の宗教的碑文の所在を、網羅的に紹介したところの、ムハンマド=アシュラフ=フセイン (*Muhammad Ashraf Husain*) 編纂の報告書<sup>6)</sup>(第47冊、1936年)、および、J. A. ペイジによるフイローズ=ジャー=コートラの建造物の歴史的紹介<sup>7)</sup>(第52冊、1937年)などがそれであり、いずれも、啓蒙的

1) Percy Brown, *Indian Architecture (Islamic Period)*, Bombay, [1942]

2) Archaeological Survey of India, *Annual Reports of the Director General of Archaeology in India, 1902-03 to 1936-37*, Calcutta, 1904-1931; Delhi, 1933-1940.

3) Gordon Sanderson, Archaeological work at the Quth, Delhi, 1912-13, *Annual Report of the Director General of Archaeology in India, 1912-13, Part II*, Calcutta, 1916, pp. 120-31, with 8 plates.

4) Zafar Hasan, A Guide to Nizamu-d Din, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 10, Calcutta, 1922.

5) J. A. Page, An Historical Memoir on the Quth: Delhi, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 22, Calcutta, 1926.

6) Muhammad Ashraf Husain, A Record of All the Quranic and Non-Historical Epigraphs on the Protected Monuments in the Delhi Province, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 47, Calcutta, 1936.

7) J. A. Page, A Memoir on Kotla Firoz Shah, Delhi: with a translation of *Sirat-i-Firozshahi* by Mohammad Hamid Kuraisi, *Memoirs of the Archaeological Survey of India*, No. 52, 1937.

あるいは学術的な意義をもつ労作ということができよう。

第二次大戦後に刊行されはじめた、独立後のインド政府の考古調査局によって逐次刊行されている『古代インド』(*Ancient India*)にも、デリーの遺跡に関する調査の結果が、いくつか、小論文のかたちで公表されている。S. ナクヴィー (S. A. A. Naqvi) によるスルターン・ガーリー (Sultān Ghārī) に関する調査報告 (第3冊, 1947年) と、ヒラリー・ワディントン (Hilary Waddington) によるアーディラーバード (Ādilābad) の調査・発掘報告 (第1冊, 1946年) とは、その代表的なものであり、種々の図面とともに、貴重な資料を提供するものである。なお、インド考古調査局には、20世紀の初頭以来の、デリー諸地域の建造物の写真類あるいは測量図面とその複写写真などが整理保存されており、そのなかには、これまでの諸報告に公刊されていない測量図面もふくまれている。われわれも、それらの資料を参照することを許されたが、いずれも、調査研究のうえで、大いに参考となった。

デリー諸王朝時代の歴史に関しては、20世紀の後半に入ってから、インド人の歴史家をはじめ諸外国の研究者によって、概説書・通史や、その他、多数の特殊研究が公刊されて現在に至っている。それらのなかには、デリー諸王朝時代の建造物に関するまとまった叙述をふくんでいるものもあるが、ここでは、ほとんど言及しないことにする。ただ、1960年代に入って公刊された二つの著作にふれて、この研究史に関する章を終りたい。その一つは、『イスラーム百科全書』の新版 (*The Encyclopaedia of Islam, New Edition*) の「ディラリー」(Dihli) の項目にふくまれているところの、J. バートン・ページ (J. Burton-Page) の筆になる、デリーの歴史とその建造物との概観 (1961年) である。これは、われわれの視点からすれば、依然として疑問とすべき箇所がいくつかのこされているが、簡便にして要を得た紹介といえよう。他の一つは、『デリーとその附近』(*Delhi and its Neighbourhood*) と題された小冊子で、インド考古調査局の Y. D. シャルマ (Y. D. Sharma) によって編纂されたもので、もともと、1964年春に、ニューデリーにおいて開催された第26回国際東洋学者会議 (XXVI International Congress of Orientalists) のために用意されたものである。この報告書も、簡単ではあるが、デリー諸王朝時代に属するさまざまな建造物について、要領よく紹介している。

なお、デリー諸王朝時代をもふくめて、インドにおけるムスリム建造物についての従来の研究業績について、これまでにどのような報告書や著書が出版されているかについて知るためには、イスラーム建築史学の碩学 K. A. C. クレスウェル (K. A. C. Creswell) が、1961年に刊行した膨大な文献目録によるのが、まず、便利である。また、1906年以降の雑誌に発表された欧文論文に関しては、J. D. ピアソン (J. D. Pearson) の論文目録によるのが、もっとも詳細で網羅的であるということにも、一言、ふれておきたい。

サルタナット時代はもちろん、インドにおけるムスリム建造物についての研究は、わが国においては、啓蒙的な紹介書の類をのぞけば、ほとんど行なわれないうちにひとしかった。われわれの調査資料も、やがては公開利用の便に供せられるはずである。そして、南アジア研究の進展とともに、今後は、この領域における研究成果が発表されるようになることを期待したい。さしあたっては、われわれの調査団に属するものの、こ

1) S. A. A. Naqvi, Sultān Ghārī, Delhi, *Ancient India*, No. 3, 1947, pp. 4-10, with 12 plates.

2) Hilary Waddington, 'Ādilābad: A part of the 'fourth' Delhi, *Ancient India*, No. 1, 1946, pp. 60-76, with 10 plates and 7 figures.

3) J. Burton-Page, Dihli (History, Monument); Dihli Sultanate, Art, *The Encyclopaedia of Islam*, New edition, Vol. II, Leiden-London, 1961, pp. 255-266, p. 274.

4) Y. D. Sharma, *Delhi and its Neighbourhood*, prepared by Organizing Committee, XXVI International Congress of Orientalists, New Delhi, 1964.

5) K. A. C. Creswell, *A Bibliography of the Architecture, Arts and Crafts of Islam to 1st Jan. 1960*, Cairo, 1961, Part I. Architecture, India, pp. 97-194.

6) J. D. Pearson, *Index Islamicus 1906-1955: A catalogue of articles on Islamic subjects in periodicals and other collective publications*, Cambridge, 1958. *Index Islamicus Supplement, 1956-1960*, Cambridge, 1962.

れまでに発表した若干の関係論文を註記しておくにとどめよう。<sup>1)</sup>

デリー地域に残存する諸王朝時代の建造物に関する従来研究の状況の概要は、ほぼ、上に述べてきたとおりである。本章を終るにあたって、最後に、われわれの調査研究の意義と目的および方法とに照らして、これまでの調査研究にみられる二、三の問題について、簡単に記しておきたい。

その一つは、従来調査研究の成果が、インド考古調査局による、1910年代の総合的な遺跡調査にもとづく報告書をのぞくと、いずれも、著名な遺跡を対象としたものが大部分で、デリー地域に残存するサルタナット時代の遺跡を網羅的に扱ったものは、まったくないということである。さらに、今日に至るまでの調査研究に関する著作の大部分にみられる共通した問題点の一つは、建造物の紹介や研究にあたって、その歴史的な背景に関する究明が不徹底かつ不正確であるという事実である。従来諸研究の場合、歴史的背景に関連をもつ文献史料や地方的伝承その他の在来の諸資料が、批判的な立場からする検討をほとんど加えられないことなしに、そのまま、歴史的事実を示すものとして、安易に受け入れられ、遺跡の紹介や研究の基礎として利用されてきたことが多いのである。そればかりか、建造物の比較研究をはじめ、構造や様式などに関する技術的な問題や、文化交流に関する歴史的な諸問題までが、それらの曖昧な考察をもとにして論じられていることさえみられる。そして、今日においてすら、この時代の歴史に関する研究書や通史・概説書などにおいても、従来所論が、その方法的な欠陥に対してほとんど注意が払われることなしに、歴史学者によつてさえ、そのまま受けつがれ、利用されているという状況である。

これらの問題は、いってみれば、これらの遺跡に関する研究に、歴史学の批判的な方法が、正当に適用されていなかったところに由来しているものとみてよいであろう。とはいえ、われわれが対象とするデリー地域に現存するサルタナット時代の建造物のように、直接それらに関連する歴史碑文や文献史料がきわめてとぼしい場合には、歴史的背景の解明という仕事は、実際には、きわめて困難な問題をもっているといえるのであって、一つの結論を導き出すことが、かえって決定的な誤まりをおかすことになる場合も十分に予想されるのである。われわれは、従来研究にみられる方法的な欠陥をつねに意識しながら、このような困難をできるかぎり克服するように努力している。われわれが、現地調査において、従来調査研究書がとり扱ってきた著名な遺跡のみにかぎらず、現存する建造物を網羅的に探査し、また、研究報告の公刊に当たっても、まず、ここに「総目録篇」を公表するのも、上に述べたような歴史学的な立場に立つ以上、当然のことと考えるのである。

1) 山本達郎、「デリー諸王朝の遺蹟」東洋学、第21冊、1961年、pp.134-137。  
荒松雄、「デリーに現存する奴隷王朝初期の墓について」、東洋文化研究所紀要、第33冊、1964年、pp.1-131。 荒、「デリーに現存する奴隷王朝中期の墓について」、同紀要、第34冊、1964年、pp.1-50。 荒、「デリーに現存する奴隷王朝末期の墓について」、同紀要、第35冊、1965年、pp.1-62。 荒、「デリーに現存するサルタナット時代の塚墓および水門の遺蹟について」、同紀要、第36冊、1965年、pp.1-218。

## 第四章 建造物の種類とその現状

### 第一節 建造物の種類

デリー地域に現存している諸王朝時代に属する建造物は、さまざまな種類をふくんでいる。そのなかでも、もっとも数が多いのは、モスクと墓建築、および墓地であるが、そのほかに、水利関係の諸施設、橋などの、いわば水に関係をもつ建造物が目立っている。また、デリーに興亡した諸王朝がそれぞれ支配権力の中心的な拠点とした城砦や宮廷建造物も、デリーの諸地域に残存している。さらに、支配層に属するものやその他の人びとの手によって建てられたマドラッナ(学校)、ハーンカー(庵)などの、いわば宗教・教育施設の遺跡もこっている。われわれの研究報告のうち、本篇は、それらすべての遺跡について網羅的に紹介するものであるが、今後は、建造物の種類に応じて、それぞれ別個に報告書を作成する予定なので、各種の建造物に関する詳細は、それぞれの篇において述べられるはずである。本篇では、遺跡の種類や分布状態、あるいはその時代区分などの問題に関して、総合的な見地から、きわめて簡単にふれておくにとどめる。

モスクは、大小さまざまな形式をもつものに分類することができる。それについては、本篇でもうかがうことができるが、別に一篇を設けて、その代表的なものについての詳細な報告を公表するはずである。ただ、ここでふれておかなければならないことは、モスク、すなわち、ムスリムのあいだでふつうにマスジッド(Masjid)とよばれている宗教建造物は、本来は、イスラームの信徒全部に対して、宗教的連帯性にもとづく公共の場として開放されるべき性格のものである。それにもかかわらず、実際には、婦人に対しては礼拝の場として閉ざされている場合が多く、さらに、世俗的権威による差別も、現実にはみられるところである。さらにまた、モスクの設けられた場所や環境、あるいはその規模によっては、その公共性に、さまざまな限界も認められる。デリー地域に現存する数多くのモスクの場合にも、このことはあてはまるのである。支配層が、その拠点とする城砦内の宮廷やバーザール、あるいは一般の居住地域と関連して、民衆をもふくめて、集団的な礼拝の目的、とくに金曜日の礼拝のために設けたのが、いわゆるジャーマーマスジッド(Jama' Masjid、あるいはマスジッド-ジャーマ; Masjid-i Jama')とよばれるモスクである。このモスクが、ふつう、かなり大きな規模をもっているのは、その目的からしても当然なことといえよう。これに対して、デリー地域のモスクのなかには、とくにサルタナット時代の後半に入ってから目立つことであるが、中小の規模をもつものが、数多く建てられている。こうした事実の歴史的背景に関しては、すでに前章においても、簡単にふれておいたが、この事実、建造物の構造や様式の変遷という観点からばかりでなく、ムスリムの宗教意識、社会関係などの視角からみても、興味ある問題をふくんでいるといえよう。

モスクに関連して述べておかなければならないのは、「イードガー」(Idgah)とよばれる宗教建造物についてである。イスラームの儀礼と慣習のなかで、ラマザーンの月の断食明けにくるイード(I'd)の祭りは、もっとも重要なものの一つである。イードガーは、ふつうは、長い礼拝壁からのみなる建造物であるが、本来は、イードの祭日に行なわれる集団的な礼拝のために設けられたものであった。サルタナット時代に属するイードガーも、本篇に収録したトゥグルク朝末期のもの[ML 56, 図版 55]が、デリー地域にも現存しているの

である。なお、ふつうのモスクでありながら、地方的に、しばしば、「イードガー」という俗称で呼ばれてきたものもあるというところを、ついでに、一言しておきたい。

建造物のうち、デリー地域において、「墓」といわれているもののあり方は、大きく分けて、三つに分類することができよう。その一つは、単に、遺体を埋葬した場所に、墓石あるいはそれに代わるなにかがのこっている場合である（この場合に、いわゆる「墓石」が、必ずしも、文字どおり石造であるとは限らず、砕石と漆喰、あるいはその他の資材からできているものも、日本語では、ふつう、「墓石」とよんでしまう場合が多い）。第二は、いくつかの墓石が集まって、墓地をかたちづくっている場合である。そして、デリー地域においては、単に1基の墓石をもつ墓地から、数基の墓石をふくむもの、さらに多数の墓石をもつ相当な規模の墓地に至るまで、種々の形態を見出すことができる。これらの墓地のなかには、その西側に、「礼拝壁」と呼ぶにふさわしい、ミヒラーブ (Mihrāb) を一つまたは三つ以上（もっとも多い例は11、たとえば、G. 60, 図版. 68を参照）備えている壁をもつものが多い。さらに、この形式の墓地には、西側の礼拝壁の両端に、いわば「袖壁」ともいうべき部分、すなわち、ふつう英語で「リターン・ウォール」(Return wall) といわれている側壁が設けられているものも多いが、また、東・南・北を囲壁にとりかこまれたり、その一部に門をそなえているもの、あるいは、さらに、他の建造物が附設されている場合もあるのである。本篇に「墓地」として採録したものは、すべて、上に述べた礼拝壁をもつものである。このような礼拝壁をそなえた墓地を、ウルドゥー語では、「カナートイー・マシッド」(Qanāṭī Masjid, ふつうは「ガナーティー・マシッド」Ganāṭī Masjidとも発音されている。「カナート」とは囲壁を意味する) と呼んでいるが、これは、墓地そのものとしての本来の意味よりも、ミヒラーブをそなえた礼拝壁をもつ、この建造物の形態に重きをおいて用いられた名称といえよう。もっとも、これらの墓地が、スーフィーの慣習と関連して、ある場合には、瞑想や礼拝の場所として用いられ、モスクの場合によく似た機能を果たしたことも、十分に考えられるところである。

墓が、建造物研究の観点から、より重要な意味をもってくるのは、屋根をいただいた、墓建築と呼ぶにふさわしい構造をもつ構築物の場合である。われわれの調査研究においても、それらは、墓建築として、墓石や墓地のみの場合と区別して扱っている。これらの墓建築は、四角、六角、あるいは八角の平面をもつものがふつうで、構築物そのものが、このような各種の形をとっているわけである。それらを大きく分けると、単に柱が天井をのせているものから、壁が天井を支えている場合、およびその中間形式などが認められるのである。

水の利用に関連する建造物は、われわれが歴史学的な視点から、とくに大きな関心をもって調査研究した対象である。水利施設には、大きく分けて、堰堤と、多くの場合それに附設されている水門、さらに、各種の井戸、すなわち小規模で単純な構造をもつものから、複雑な様式をもち、さらに、附属施設をもそなえるものまでの各種のものがあげられよう。これらの井戸のなかには、階段をそなえた大規模な円井戸や、さらにふつうの円井戸とならんで、四角や長方形のタンクをそなえ、その水面に直接達することのできるようにした階段をもつ構築物まである。これらの階段をそなえたタンクと井戸との結合した形式の構築物を、インドでは、一般に、バーオリー (Baoli, または Bāuri) とよんでいるが、この形式は、ムスリム勢力の浸透する以前から存在していたものと推定されている。水利施設としては、このほかに、大小の規模をもつハウズ (Hauz), すなわち貯水池があるが、それに関しては、調査の対象からは、一応、はぶいている。なお、水利施設ではないが、水に関連をもつ建造物として、本篇には、橋をつけ加えておいた。

すでに述べたように、デリーに興亡した諸王朝の支配者たちは、その権威を誇示する目的もあって、デリ

一地域の各地に、城砦都市を新しく建設し、それらの都市の中心的な区域に宮廷を営み、さまざまな規模の建造物がつくられた。さらに、支配者や貴族たちのあるものは、防衛のため、あるいは趣味と行楽その他の目的のために、宮廷地域や城砦のそとにも、建造物を造営した。デリーのスルターンの場合には、いわゆる「シカールガー」(Shikārgāh)、すなわち、日本流に言えば「お狩り場」ともいうべき区域やその他の場所に、小規模な、いわば屯営あるいは離宮的な建造物を設けている例が指摘されるのである。これらは、ふつう、地方的には、「クーシャク」(Kūshak)、あるいは「マハル」(Mahal)、すなわち「宮殿」を意味することばで呼ばれている(たとえば、O. 15, 16; 図版. 152 b, c; 挿図. 66などを参照)。

デリー=サルタナット時代には、すでに述べたように、政治的支配そのものがイスラームの理念と密着しており、また、デリーの一般の民衆のあいだにも、支配層と同じく、イスラームの思想と慣習、とくにスーフィズムの影響が根をおろしていったのであるから、そのころ建てられた宗教と教育とに関連する建造物が、デリー地域の各所に、相当に多く、残存しているのも、また当然のことといえるのである。たとえば、支配層が、一部の上流子弟の教育のために設けたマドラッサすなわち学校、あるいはスーフィー聖者の宗教的活動のために建てられたハンカーやその他の宗教施設、あるいは宗教信仰や儀礼にまつわる諸種の建造物などが指摘されよう。

デリー諸王朝時代に属する建造物の種類は、ほぼ、以上に述べたものにつきるが、その他にも、数はわずかではあるが、さらに異なった目的で建てられたと推定されるものがあり、本篇にも、その若干が収められている。たとえば、ハンマーム (Hammām)、すなわち蒸し風呂の遺跡などもその一つである [O. 51, 図版. 163]。ムガル時代に入ると、ハンマームはかなり一般化したらしく、相当数の遺跡が現存しているけれども、デリー諸王朝時代のものと認められるのは、本篇に収録したもののほかには、われわれも他にその例を知らない。さらに、ムスリム建造物とはいえないが、墓と同じような形式のものに、ヒンドゥー教徒の火葬、行者の土葬、あるいはサティー (Sati, 妻女殉死の因襲) を記念するために建立されたいわゆるサマーディー (Samādī) とよばれる建造物がある。これらの建造物は、ふつうには、規模が小さいものが多く、その建立の時代もよくわからないことが多いのである。ある場合には、墓との区別がつけにくいものもあるが、本篇では、あるいは、サルタナット時代に建造されたかと思われるものについて、いくつかの例を収録しておいた。しかし、それらがサマーディーであるかどうかについては、断言はできない。

## 第二節 建造物の現状

サルタナット時代に属する遺跡は、現在のデリー州のなかでも、とくに、ニューデリーの東および南の部分と、その南郊一帯のひろい地域にわたって現存している。建造物の分布状態は、本書に付した地図に、その詳細を示しておいたが、それらの建造物が、とくに上にあげた地域に多くみられることは、すでに述べたとおり、サルタナット時代における諸王朝の中央権力の所在地域が、ほぼ、それらの地域を中心として、移動変遷してきたという歴史的事実に対応するものと考えてよいであろう。

約330年にわたって、五つの王朝の首都となったデリーのなかで、デリーの住民の居住地域、商業区域などがどこにあったかは、時代によって移動していたものらしく、その位置をあとづけることは、今日ではきわめて困難である。しかし、城砦あるいは宮廷の所在地に関しては、その変遷をたどることが、ある程度は可能と思われるのである。すなわち、13世紀のはじめには、現在の、いわゆるクトゥブ地域を中心とする、現

在のニューデリー南郊の地域に、サルタナット権力の中心がおかれていたが、つぎのハルジー朝時代にはやや北方に移動し、さらに、トッグルク朝の治世に入ってから、一挙に、はるか東方の、まったく新しい地区が城市として選ばれたのであった。しかし、その王朝の後期には、宮廷は、さらに北方に移され、新しい都市にふくまれる地域は、東はジャムナー河に沿い、西はいわゆるデリーーリッジにかけて、のちのシャー・ジャハーン建設の大都市の西と南の部分をも包含するまでに拡大されたのである。従って、トッグルク朝後期に属すると思われる建造物が、それに先立つ時代の遺跡の現存する地域的な限界をはるかに越えて、現在の、いわゆるオールドデリー (Old Delhi) の内部や、さらにその北や西方にかけてまで、ひろく見出されるのも、こうした中央権力の拠点とそれにとりまわり都市区域の移動と拡大との結果によるものである。また、われわれの調査の結果は、ローディー朝時代のものと思われる墓地や墓建築、モスク、およびその他の建造物が、現在のニューデリーの東南地域、あるいは南郊の各地に、地域的にみてもかなり集中して分布していることがわかった。これらの事情を考えたうえで、さらに研究をすすめれば、この時代におけるデリーの支配層や一般民衆の居住地域や墓地などの地理的分布も、ある程度わかり、当時のデリーの状況をさらに明らかにすることができるかも知れない。その際には、シカンダル・シャー・ローディーの時代に、中央権力の中心が、アーグラの地に移されたということをも、あわせて考慮しなければならないであろう。当時、デリーは、依然として支配層の居住地ではあったにしても、遺跡の現状から推すと、デリーのいくつかの旧都市のあいだの一部の地域は、あるいは、一種のネクロポリスと考えられていた感さえあるのである。

これら各種の建造物の地理的分布に関して、それぞれの時代の歴史的背景におけるさまざまな問題を考察することは、われわれにのこされた将来の課題の一つであって、ここに詳説する余裕はない。ただ、デリー地域におけるサルタナット時代の建造物が、今日なお残存している状態に関して、われわれの現地調査の経験から、若干の見解を、つぎに、簡単に記しておきたい。

これらの建造物は、一部のモスクや聖者の墓などをのぞくと、大部分が、いわば廃墟のなかの遺跡として、そのまま、長年月にわたって風雨にさらされてきたといっている。その数が多く、また、その所在地もまったく拡散していたところから、それらの建造物の本来の姿における保存は、ムガルの政府にとっても、またイギリス支配下の政府当局にとっても、むずかしいことがらであったであろう。そして、一部の建造物は、そのまま荒廃するにまかされ、他の一部のもの、当局や一般の住民その他によって、他の目的に転用されてしまっていたのである。近代になってからは、文化財保存事業がいずれの国においても突きあたる一つの壁、すなわち、所有権や占有権、あるいは管理権などをめぐる問題が、この場合にもおこっている。建造物が、個人の私有に属し、商業や農業その他の生業に用いられていた場合のほか、それらが、教団の所有物、あるいはワクフ (Waqf) として存在してきた場合や、さらに伝統的に部落の共有物として考えられてきた場合なども、数多くあったのである。

一方、長い時間の経過が、これらの建造物を、自然の荒廃にまかせてきたことはいうまでもない。しかし、その反面、人工的な補修や改築によって、建造物の当初の状態が著しく改変されたものもあった。建造物が、他の用途に転用された場合はもちろん、宗教施設として、信仰の直接の対象としてとり扱われてきた場合にも、そのことはあてはまる。すでに前章においてふれたとおり、インド考古調査局が、1910年代に行なった当時の遺跡の状態の調査と、その結果、一部の建造物の保存のために実施された各種の処置は、適切なものであったといわなければならない。しかしながら、政府による建造物に対する保護措置が、その建造物の種類、その歴史的価値、破損状態の進度、あるいは所有権の問題など、さまざまな複雑な条件からして、サル

タナット時代の遺跡の多くにおよぶことは、到底、困難なことからであった。その結果、数多くの建造物のうちには、歴史的には大きな意味と価値とをもつものであっても、政府による保護の範囲からもれてしまったものが、相当数、あったのである。独立後のインド国政府も、首都デリーに現存する遺跡には、慎重な配慮をもって臨んだ。われわれの調査した時期、すなわち1959年末から1960年はじめにかけての建造物の状況を、19世紀以来の諸記録や写真などに照らしてみると、インド考古調査局の採ってきた遺跡保護の対策は、独立後のさまざまな困難な条件を考えれば、まず、高く評価してよいであろう。

さて、ふりかえってみると、これらのサルタナット時代の諸種の建造物の保存の歴史のなかで、近年において、もっとも現実的な問題を生む要因となったのは、1911年にはじまる、英領インド政府の新しい首都ニューデリーの建設であった。新都市の建設工事の実施にあたって、当然のことながら、一部の建造物は、新しい計画実施の障碍となった。しかし、このときにも、遺跡の保存には相当な配慮が払われたらしく、ほとんど意味をもたない建造物が整理されたかたわら、一部のモスクや墓は、都市建設の計画を修正してまで、そのまま保存されたい。このような新しい都市開発とその計画実施のまえに立ちはだかる古い史跡や建造物の処理は、インドの独立後においても、首都ニューデリーの人口の増大の結果として計画されるに至った新市街地の造成の場合に、切実な問題となった。われわれの調査に際して感じたところでは、この問題についても、インドの当局者は、相当な考慮を払ったことがわかる。古い墓が、新しい住宅地の内部に設けられたロータリーの中央にそのままのこされ、古いモスクが、新しくつくられた公園のなかに、その風致を生かすように工夫されつつ保存されているなどの例を、われわれは、ニューデリー南郊において、いくつかみることができたのである。しかし、その反面、建設工事の実施の過程で、それほど歴史的重要性をもたないいくつかの遺跡は整理された。都市生活の環境の整備のためには、やむを得ないことであろう。

ただ、最近におけるニューデリー市郊外の著しい開発と発展とは、遺跡の調査には、著しく不利な条件を生み出した。従来の建造物のおかれた環境や立地条件には、しばしば、決定的な変化が与えられ、たとえば、かつてはその全容を容易に一望のもとにおさめることができた建造物が、新しい建物のために、コンクリートやレンガのかけに、その姿をまったくひそめてしまったこともあった。こうした場合には、全景の写真撮影はもちろん、近接して行なう観察や測量による記録作業なども、技術的にきわめて困難となり、場合によっては、ほとんど不可能となってしまった。われわれは、ニューデリー南郊における宅地造成の形勢を予想して、この調査研究を早期に実施することに努力してきた。インドの首都の急速な発展という歴史的必然に照らして考えてみると、遺跡保存と建造物に関する調査資料の整備という観点からすれば、われわれの行なった調査は、その後のニューデリー郊外の変化からみても、時宜を得たものであったと考えている。

建造物の調査に際しては、現地におけるさまざまな事情や条件によって、ときに、思わざる困難な状況に直面したこともないではなかった。それらは、民族を異にし、社会慣習や宗教儀礼に著しいちがいをもち外国における現地調査には、しばしば、みられるところである。この調査研究の場合には、とくに、対象が、イスラームの宗教信仰と関係するものが多いだけに、われわれは、宗教施設として、あるいは信仰の対象として、現在なお使用されている建造物の場合には、とくに慎重に配慮した。また、建造物が、単に遺跡としてのこっているのではなく、個人あるいは集団によって、他の用途に利用されている場合には、当然、それらの人びとの意向に従い、調査作業をある限度にとどめざるを得なかった。ムスリムの社会の一部になおこのるパルダ(Pardah、女性隔離の因襲)やその他の特殊な慣習は、外来者のわれわれが、とくに慎重に注意を払わなければならなかったところであって、この面からの制約も、調査活動に際して、大いに問題となった。さ



らに、国際政治の情勢も、われわれの活動に若干の影響をあたえた。すなわち、現地調査をはじめた1959年以後は、国境問題を主とする、いわゆる中印紛争が生んだ緊張が次第に高まっていった時期で、容易に中国人とまちがえられる容姿をもっていたわれわれの一行は、誤解がもとであったにせよ、調査の途中で、まったく予期しなかった状況のなかにまきこまれたことさえあった。また、軍事施設、あるいはそれに関連ある立入禁止区域内にある遺跡や、あるいはそれらに近い建造物については、残念ながら、調査計画をまったく放棄し、あるいは大幅に変更することを余儀なくされた場合もあったのである。こうしたさまざまな困難な条件のもとで、ともかくも、二回におたる現地調査を終了し、一応、予期したとおりの諸資料をもち帰ることができたのも、インド側の関係当局、とくにインド考古調査局の当事者の、われわれの調査研究に対する理解と配慮とがあったからにはほかならないことを、くりかえし、述べておきたい。

# 遺跡總目錄



# まえがき

## 1 遺跡総目録の構成について

東大インド史跡調査団は、「総論」において述べたように、1959～60年に現地調査を実施し、さらに、1961～62年に補足調査を行なった。ここに刊行する調査研究報告第一巻は、その際に、デリー地域において調査した、諸王朝時代に属すると思われるすべての遺跡の総目録である。

この遺跡総目録につづいて刊行される予定の第二巻以降の各篇においては、モスク・墓建築・水利施設などの諸遺跡を別個にとり扱い、それぞれの種類のなかからとくに選ばれた、いくつかの主要な建造物を重点的にとりあげ、これらの建造物についての詳細な記述を中心に、調査と研究の成果を報告する予定である。これに対して、この遺跡総目録は、すべての建造物を網羅的に配列し、のちに述べるような叙述の形式に従って、簡潔な紹介と解説とを試みている。

すでに述べたように、デリー地域に現存する建造物については、1910年代に、インド考古調査局の手によって、網羅的な遺跡のリストが作成され、4巻からなる報告書として公刊されている。しかし、このリストは、文章のみによる遺跡の実態の報告であるために、必ずしも遺跡のイメージを髣髴させない場合がしばしば認められた。従って、われわれの遺跡総目録においては、記述による解説とあわせて、すべての建造物についてもれなく写真を掲載した。もちろん、これらの限られた数の写真をもってしては、建造物を理解するためには、到底不十分なことはいままでもない。また、そのなかには、撮影角度が不適當なもの、画面が鮮明でないもの、小型写真を無理に引き伸ばしたものなどが混じっており、さらに建造物の周囲の状況から、建造物の全景写真が撮影できず、やむを得ず、部分写真をもって代用しなければならなかった場合もあった。しかし、いずれにせよ、一枚の写真が、遺跡の理解のために有効であることは疑いをいれないところであろう。そして、この点が、われわれの遺跡総目録の特徴のひとつといえるかもしれない。

この遺跡総目録においては、建造物の配列についても、

前述のインド考古調査局の遺跡リストとは異なった方法を採用している。すなわち、後者においては、デリーとその周辺地域をいくつかの区域に分け、その区域ごとに、遺跡を地理的な位置関係に従って配列している。これに対して、われわれは、その性格や機能に応じて、すべての建造物を、モスク・墓地・墓建築・水利施設およびその他の建造物に分類し、必要ある場合には、それらをさらに小区分し、それぞれの分類あるいは小区分のなかでは、建造物をはば年代順に配列した。こうした分類と配列の方法によって、デリーにおける建造物の種類と、その歴史的な変遷の過程とを明瞭に把握することができるように配慮した。

さて、われわれが遺跡総目録に採録した建造物は、上述のインド考古調査局の遺跡リストとは、必ずしも一致していないことはいままでもない。リストの作成後今日に至るほぼ半世紀のあいだに、新首都ニューデリーの建設と近年の都市区域の膨張とによって、数多くの遺跡が消滅してしまっている。また、最近の社会的、あるいは軍事的な情勢から、今日では、立入ることができなくなってしまったものもある。このような建造物は、われわれの総目録からは、やむを得ず除外せざるを得なかった。しかし、一方では、われわれの遺跡調査の過程で、これまでだれも紹介しなかった建造物を新たに見つけ出し、この総目録にはじめて紹介した場合もある。また、このような事情とは別に、同じ建造物について、年代に関する見解の食い違いのために、とりあつかいを異にしたこともしばしばあった。たとえば、インド考古調査局の遺跡リストが、その時期区分を“Pathan”あるいは“Afghan”としている遺跡を、われわれがムガル時代に属するものと判断して、本篇の遺跡総目録から除外した例も多く、また、それとは反対に、前者がムガル時代に比定している建造物を、われわれが、デリー諸王朝時代に属するものと推定して、採録した場合もある（この「まえがき」の末尾の註を参照）。以上述べてきたような事情によって、遺跡総目録に採録されなかった建造物については、巻末の附録に列挙しておいた。

## 2 遺跡の分類と配列について

この総目録においては、採録するすべての建造物を、モスク・墓地・墓建築・水利施設、およびその他の建造物の五つの項目に分類した。これら各種の建造物の内容については、すでに、「総論」の第四章において、若干ふれたところである。「その他の建造物」のなかには、城壁と宮廷建造物、マドラッサやハンカーなどの宗教・教育施設など、さらには、わずかながら、ハンマムや、一部の城壁にのこる地下倉などのめづらしい建造物をもふくんでおり、また、性格の不明な若干の遺跡をも、このなかでとり扱っている。

このような遺跡の分類の過程において、われわれは、さまざまの問題に直面した。この遺跡総目録の作成にあたって、その解決にもっとも苦心した問題は、とくにつぎに述べる三つの点である。

その第一は、建造物の性格や機能を明確に判断しにくい場合に、それらを、上述の項目のうちのいずれに分類したらいいかという問題である。しばしばみられる例は、建造物自体が、本来のかたちをよくのこしているにもかかわらず、その形態や構造および周囲の状況からしても、それらの性格や機能を推定することがむずかしい遺跡である。たとえば、ドームをいただく四角平面の建造物は、デリー地域における墓建築にもっとも普通の形式であるが、一方、墓やモスクなどに附設される門も、この形式をとるのが一般的である。普通、この両者は、周囲の状況や、入口の開く方向、あるいは墓石やミヒラブの有無などによって区別されるのであるが、ときには、その区別が明瞭につけにくい場合があるのである。また、建造物の崩壊や、補修・改築などによって、すでに、建造物の本来の状態をうかがうことができなくなったり、あるいは、建造物が、その後、住居や倉庫などに利用されていて、詳細な検討を行うことができなくなったために、その性格や機能の判定がぐくし難いこともあった。しかし、このようないずれの場合にも、遺跡に関するさまざまな条件を勘案し、また、他の建造物の例からの類推などによって、一応の推定を試み、もっとも妥当と思われる項目のなかで分類してある。この総目録においては、このような問題をもつ遺跡に対しては、建造物の種類の名称のあとに、疑問符をつけ、また、それぞれの叙述のなかにおいても、それらの疑問の内容について、具体的に言及するように注意を払った。

遺跡の分類にあたっての第二の問題は、異なった性格をもつ二つ以上の建造物が、たがいに密接な関連をもって建てられ、建造物の複合体ともいべきものを形成している場合におけるとり扱い方である。もっとも多くみられる例は、墓建築とモスクとが結びついている場合で、一般には、

モスクの前庭のはぼ中央に、礼拝室の中心線の延長上に、ドームをいただく墓建築が立っていることが多い。その位置関係からみて、両者が密接に関係していることは明白であるが、どちらの建造物が主体をなしているのか、または、両者の建設の時期の前後関係はどうであるかなどの点について、容易に断定をくだすことはできない。この総目録においては、このような場合には、両者を分離し、それぞれ、墓建築とモスクとの項目において、別個にとり扱っている。しかし、相互の関連を示すために、一方の叙述にあたっては、必ず他方にも言及するように配慮してある。また、墓建築とモスクとの組合せに、さらに、たとえばパーオリーが加わっているような場合、あるいは、墓建築とマドラッサとが接して建てられているようなときにも、同じようにとり扱い、それぞれの建造物の記述のなかで、相互の関連についてふれておいた。

しかし、墓建築が、その西側に礼拝壁をもつ墓城のなかで立っているような場合には、つぎのような二通りの異なったとり扱いをしている。すなわち、この墓城および礼拝壁が、明らかにその墓建築のために附属して設けられたものであり、墓建築自体が主体をなしているようなときには、墓城および礼拝壁を独立させて紹介することなく、墓建築の記述のなかでふれるにとどめた。しかし、この墓城が、その墓建築のためのみならず、他の墓石をもおさめる墓地となっており、従って、礼拝壁も、墓建築そのものよりも、むしろ、その墓地全体に附属するものと考えられる場合には、その墓地を、墓建築から分離して、墓地の項目のなかで別個にとりあげている。

遺跡の分類に際しての第三の問題は、城壁、あるいは城壁に囲まれた都市の遺跡をとり扱う場合につねに直面したことがらである。一般に、これらの遺跡は、さまざまな性格をもつ建造物を数多くふくんでいる一種の総合遺跡をなしている。この場合には、城壁および城門と、城内にのこる各種の宮廷建造物とを一括してとり扱っているが、対象によっては、個々の建造物を別個にとりあげて記述したこともある。たとえば、城内に建設されたモスクや、井戸などの水利施設、あるいは地下倉などの場合がそれで、城壁や都市の遺跡から切りはなして、それぞれの項目のなかで別にとり扱っている。

われわれの総目録においては、このようにして、遺跡の全体を、モスク・墓地・墓建築・水利施設、およびその他の建造物の五つの項目に分類したのであるが、さらに、必要に応じて、これらの項目を小区分した場合もある。たとえば、墓建築の項目においては、形態と構造との違いに従

って、四周が壁面からなる四角平面の建物、同じく八角平面の建物、4本ないし12本の列柱が天井を支えている形式のものなどに大別してある。一方、水利施設においては、井戸・パーオリー、および堰堤と水門などのように、建造物の種類によって小区分した。水利施設とはいきなり、橋もまた、水に関係する建造物として、この項目に加えておいた。「その他の建造物」は、そのなかに、性格の異なったさまざまな建造物をふくむものである。従って、この場合には、建造物の性格や機能の相違に応じて、城砦と宮廷建造物、宗教および教育施設、門・塔・パシマーム・地下倉などに小区分してある。さらに、あるいはヒンドゥー教徒のナマーディかと疑いをいだかせるような不明の建造物をも、一応、この項目にふくめておいた。

以上のような分類あるいは小区分のなかで、それぞれの建造物は、ほぼ年代順に配列されている。その場合、デリー諸王朝時代を、初期または第Ⅰ期、中期または第Ⅱ期、末期または第Ⅲ期の、三つの時期に分別し、それぞれの建造物の年代を推定して、これらの時期のいずれかに比定し、各建造物の記述の末尾にそれを記載しておいた。その際、年代の比定に関して断定し難い場合には、疑問符を附し、あるいは二つの時期にまたがる旨を示しておいた。第Ⅰ期・第Ⅱ期および第Ⅲ期の時代区分のそれぞれの範囲については、すでに、「総論」第二章において詳述したので、ここでは繰り返さない。

建造物の編年に関する問題は、多数の遺跡をふくんでいるデリー地域を対象とするわれわれの調査研究においては、もっとも基本的で、また、もっとも困難な研究課題の一つである。これらの建造物の編年の作業においては、もちろん、歴史碑文あるいは同時代の文献資料の記載によって、その建立の時期を明確に知ることができる遺跡が、年代比

### 3 個々の建造物の叙述について

つぎに、個々の建造物の叙述について一言ふれておこう。それらは、ほぼ、つぎのような内容をもっている。まず、はじめに、建造物の名称と、その位置についての説明を記した。ついで、建造物の形態や構造について記述し、そのあとに、関連する歴史碑文や同時代の文献資料、あるいはその建造物にまつわる伝承などについて簡単にふれ、さらに、必要に応じて、遺跡の現状についても若干の説明を加えておいた。最後に、それぞれの建造物について、われわれ調査団が資料整理の過程で附した資料整理番号と、インド考古調査局が1916～22年に刊行した4巻本の遺跡リストの巻数と遺跡番号とを並記した。

建造物の名称については、その建造物がのこされている地域において慣習的に呼ばれてきた名称、あるいはデリー

定のための基準となることはいうまでもない。これらの遺跡を年代順に配列して、その様式や構造、あるいは文様などを詳細に比較検討してみると、それらの時代的な変遷の過程をたどることができる。さらに、このようにして明らかにし得た変遷の過程は、年代の不明とされてきた他の遺跡の編年に際して、ひとつの有力な根拠となり得るものである。この場合、年代の明らかな遺跡の数が多ければ多いほど、それだけこの作業の確実性は増してくるわけである。しかし、デリー地域に現存する、デリー諸王朝時代の建造物に関するかぎり、このような遺跡の数は30にも満たないのである。

さて、以上のような手続きによって分類され配列されたすべての建造物には、さきあげた五つの項目ごとに、配列の順序に従って一連の番号がつけられている。その際、モスクの場合にはM (Mosque の頭文字)、墓地の場合にはG (Graveyard の頭文字)、墓建築においてはT (Tomb の頭文字)、水利施設にはW (Waterworks の頭文字)、その他の建造物についてはO (Other monuments のはじめの文字)を、それぞれ、一連番号の前につけることにした。このような遺跡番号は、この総目録ばかりでなく、今後刊行を予定している続巻においても、その建造物について言及される場合には、つねにその建造物の名称とともに、あるいはそれに代わるものとして、用いられるはずである。

これらの建造物の分類については、それが本報告書作成の根幹となるものであり、また、今後の研究の重要な前提となるものであるだけに、われわれは、慎重な討議を重ねてこれに対処した。しかし、将来の研究によって、その内容については、若干、修正されることがあるかもしれない。なお、この建造物の分類の作業は、主として、荒と月輪とが行なったものである。

地域の建造物に関する従来の研究書や報告書などにおいて用いられてきた名称を、われわれが、さまざまな観点から検討を加えたうえで採用した場合と、われわれが、この遺跡総目録を作成するにあたって、新たに名づけた場合とがある。前者においては、「……とよばれている」、あるいは、「……として知られている」などの表現を用い、後者においては、「……とよぶ」というように記して、これらの二つの場合を区別した。われわれが新たに名づけた場合は、主として、建造物が位置している地域やその近くをはしる道路の名、あるいは附近にある著名な遺跡や建物などの名称に因んで名づけた例が多い。ただし、いずれの方法によっても名称を定めにくい場合には、単に、遺跡の分類や小区分を与えられた名称のみを記しておいた。

つぎに、建造物の位置を示す場合には、二通りの方法をあわせ採用した。第一の方法では、現地における、顕著な建物・公共施設・著名な遺跡・道路・住宅地あるいは部落などを基点として、方位と建造物までのおおよその距離とによって、建造物の位置を示すこととした。さらに、第二の方法では、本巻に添付した、デリー地域の建造物分布図のうえに、2キロメートルの間隔をもつ縦と横との線をひき、それによってつくられるそれぞれの区画に、アルファベットと算用数字とからなる符号をつけた。従って建造物の位置は、たとえば、附図A-7、あるいは附図G-13というように、区画につけられた符号によって示されるわけである。建造物の位置に関する、うえのような記述があるいは、現地に遺跡を訪ねる人びとにとって、ささやかな一助ともなればさいわいである。なお、この位置を示す符号につづいて、図版番号を掲げておいた。

さて、遺跡の形態や構造についての記述に関しては、限られた紙数のもとで数多くの対象をとり扱うために、簡潔をこころがけ、その結果、建造物の細部にわたる説明や、従来の研究書あるいは報告書への言及をほとんどしなかった。しかし、インド考古調査局の遺跡リストについては、その記述の一部に、必要に応じて言及し、しばしばわれわれの見解に従って、その内容を批判し、あるいは訂正した。また、建造物に関する記述のなかで、関連する歴史碑文や同時代の文献資料にみえる記載、あるいは建造物にまつわる伝承などについて、簡単にふれておいた<sup>2)</sup>。さらに、他の建造物との関連、あるいは遺跡の現状や、後代の補修改築などについて、とくに注意すべきことがらがある場合には、それらの点にも言及した。建造物に関する叙述の末尾には、すでに述べたように、われわれの考察にもとづく時代比定の結果を、Ⅰ、ⅡおよびⅢの符号によって記しておいた。

最後に附した、東研の名を冠する番号は、すでに「総論」第一章においてふれたように、東京大学東洋文化研究所において、われわれが資料整理の過程でつけた資料整理番号

である。われわれが現地調査によって得た遺跡に関する各種の資料は、すべてこの番号によって整理・保存されている。従って、将来、この資料を利用する人びとも、この番号によって容易に検索することができよう。また、この東研番号につづく、ASIの符号を冠した番号は、すでにしばしば紹介した、1916~22年にインド考古調査局 (Archaeological Survey of India) が刊行した遺跡リストにおける、巻数と遺跡の整理番号である。われわれの総目録においては、このASIの遺跡リストに紹介されていない建造物をも採録しているのだから、当然、東研の整理番号を附するのみにとどめている。

- 1) インド考古調査局によって1916~22年に刊行された遺跡リストは、遺跡の時期区分に関する限り、歴史的にはきわめて曖昧かつ不正確である。とくに、建造物の建設の時期を示す場合に、年代や王朝名を用いているかたわら、“Pathan”、“Afghan”などの用語をしばしば用いている。建造物の時代区分は、多くのむずかしい問題をふくんでおり、諸先学の労苦は、われわれも、よく理解し得るところである。しかし、Pathanという言葉は、これまでしばしば誤解を与えてきたもので、時代区分の用語としては不適当である。また、Afghanという言葉は、本来は、民族名を表わすものとして使用されているが、15~18世紀の時代区分の用語としては、一般に、デリー諸王朝最後のローディー朝と、ムガル朝初期にあたるスール朝の支配の時期を示すものとして用いられている。従って、上述の遺跡リストが、“Pathan”あるいは“Afghan”としている遺跡の場合、われわれが調査研究の対象としているデリー諸王朝時代に属する建造物ばかりでなく、ムガル朝初期のものをもふくんでいるわけである。これらの遺跡に関しては、われわれは、この「まえがき」で述べているような、時代区分に関する独自の基準に従って、慎重に対処した。
- 2) イスラーム暦の西暦への換算に際しては、歴史碑文もふくめて、イスラーム暦の月日がはっきりしないものについては、西暦の年次を2年にわたって記載するのを原則とした。イスラーム暦の月あるいは月日が明確な場合には、該当する西暦年次のみを記した。

M.1 クワットゥル=イスラーム=マスジッド(Qūwat al-Islām Masjid)とよばれ、一般には、クトゥブ=モスクとしてひろく知られている。メヘローリー部落の東北隅にあり、このモスクの一角に立っているクトゥブ=ミーナールによって、容易にその位置を知ることができる。附図 F-12 図版 1~10

このモスクの遺跡は、異なる時期に建てられた三つの部分からなっており、最古の部分を中心に、二度にわたって拡張されたものである。最古の部分は、内庭を囲んで、西側の礼拝室と、それぞれ一つの門を開く他の三方の廻廊とからなっている。主室の大部分は、すでに崩壊しているが、その正面を飾るスクリーンは、南端の部分をのそいでかなりよくのこっており、アーチの構造や壁面の文様に、ヒンドゥー建築の影響が著しく認められる。この最古の部分は、東門と北門、および主室のスクリーンに、それぞれ、587 A. H. (1191-92 A. D.), 592 A. H. (1195-96 A. D.), 594 A. H. (1197-98 A. D.)の年次がみえ、さらに創建に関連して、クトゥブッディーン=アイバクとムハンマド=ビン=サームの名が記されている。この部分は、デリーに侵攻してきたイスラーム教徒の勢力の、もっとも初期に属するもので、建設にあたっては、ヒンドゥー教およびジャイナ教の神殿・寺院の建築資材を豊富に利用し、また、建築技術や芸術感覚においても、在来の要素を大幅にとり入れたのも当然といえよう。

最初の拡張部分は、最古の部分の約三倍の規模をもち、主室を南北に延長し、最古の建物をつつむかたちに廻廊を拡大したものであるが、現在では、上の部分がくずれてしまったスクリーンと、廻廊の一部とをのこすのみである。スクリーンの壁面の文様は、前代のそれにくらべると、一層イスラーム的な色彩が濃くなってきている。この拡張部分は、そのスクリーンに、627 A. H. (1229-30 A. D.)の年次を記した碑文をもっているので、奴隷王朝のシャムスッディーン=イレトクミシュの治世に建設されたことは明らかである。

このモスクは、さらに後代になって、もう一度、北と東に大幅に拡張されたが、現在では、南門、すなわちアライー=ダルワーズ(Alai Darwāzā)とよばれている建物と、廻廊の東南隅とをのこしているにすぎない。この門は、ドームをいただき、四方に入口を開く四角平面の建物で、外部の壁面は、赤い砂岩と白大理石とを巧みに配合し、全面

を、碑文と文様とでうずめつくしている。この時代に至って、建築技術と装飾におけるイスラーム化の傾向は、一層著しくなったことが知られよう。この第二の拡張部分は、アライー=ダルワーズにのこる碑文に、三カ所にわたって、710 A. H. (1310 A. D.)の年次があるので、ハルジー朝のアラーウッディーン=ソームハジヤドの治世に、追加建設されたことを示している。

クトゥブ=モスクの、最古の部分の東南隅の外側に、クトゥブ=ミーナール(Qutb Minār)としてひろく知られている塔が立っている。このミーナールは、現在、五層からなる、高さ70メートルあまりの建造物で、各層は、装飾豊かなヴェランダによって区切られている。下の三層は、赤い砂岩からなり、フルーディングと帯状文様とによって、特色ある外観を呈しているが、上の二層は、大部分が大理石からなっていて、異なる様相を示している。

各層には、時代を異にする碑文がのこっていて、それぞれの部分の建立の時期を示している。第一層の碑文には、奴隷王朝の創始者であるクトゥブッディーン=アイバクの称号と、その主人にあたるゴール朝のスルターン、ムハンマド=イブン=サームの名がみえているので、この塔が、アイバクの治世に建てはじめられたことはほとんど疑いない。その後、この塔は、奴隷王朝のスルターン=シャムスッディーン=イレトクミシュによって完成された。しかし、トグルク朝のフィーローズ=シャーの治世に、落雷によって上部が破壊されたので、新たに改築が行われた。この塔は、おそらくは、このモスクに附属するミーナールとして建てられたものであろうが、また、この地に侵攻してきた、イスラームを奉ずる征服者の勝利を記念する意味をももっていたであろう。

このモスクの、ハルジー朝のスルターン=アラウッディーンが拡張した部分のほぼ中央に、アライー=ミーナール(Alai Minār)として知られている塔が立っている。現在、巨大な基部のみがのこっているが、この塔が、アラウッディーン=ソームハジヤドの命によって着工され、未完成のままに放置されたことは、同時代の文献に記されているところである。

クトゥブ=モスクをとり囲む一帯は、現在では、美しい緑の公園となっており、デリー市民の行楽の地としてにぎわっている。第1期。

東研 K-4, 5, 7, 8; ASI III-3, 4, 6, 7.





**M.2** ジャマート=バーナ (Jamā'at khānah) として知られており、ニザームッディーン=オーリヤーの墓のすぐ西側にある。 附図 J-9 図版 11~12

この建物は、赤い砂岩を豊富に用いた美しいモスクで、東側にそれぞれ入口を開く三つの部屋からなっている。中央の部屋は、比較的平坦なドームをいただく四角の平面をもっており、西側には、中央ミヒラーブとそれをはさんで二つの龕が設けられている。東側には、入口の左右に窓があげられ、南側と北側には、側室に通じるそれぞれ二つの通路が開かれている。中央ミヒラーブの周辺や四隅のスクインチアーチには、東側の入口外部と同じように、碑文と文様がほどこされ、第Ⅰ期の特徴をよく示している。南北の側室は、長方形の平面をもっており、いずれもアーチによって二つの部分に仕切られ、それぞれ二つのドームをのせている。これらの側室は、中央の部屋と異なって、装飾にとほしく、現在では、白い塗装が全面にほどこされている。

このモスクの建設の歴史については、さまざまな伝承が伝えられ、また、異なった見解が述べられているが、おそらく、ニザームッディーン=オーリヤーの宗教活動に関連して、デリー諸王朝時代の初期の後半に建てられたものと思われる。このモスクは、今日もなお、礼拝の場として使用されており、内部には、随所に改変や彩色がほどこされている。とくに、ニザームッディーン=オーリヤーのダルガーは、インド有数のイスラーム教徒の聖地としてひろく知られているので、イスラームの祭日には、ダルガーをおとずれる信徒でにぎわっている。第Ⅰ期。

東研Ⅲ-7; ASIⅡ-200

**M.3** トッグルカーバードのジャーマ=マスジッドとよぶ。トッグルカーバードの大城壁の中央部の、やや東南寄りに位置している。 附図 J-13 図版 12

現在、その周囲には、部落の民家が立ち並んでいる。このモスクは、かつては、トッグルカーバード都市のジャーマ=マスジッドであったと認められる。東西約124.5メートル、南北約115メートルの方形をなし、その西の部分にある礼拝室は、本来、間口9間・奥行2間の建造物で、その中央部分は、とくに柱間がひろくなっており、その間隔が、ほぼ20メートルに達している。礼拝室の奥行きは、約28メートルに及び、柱は、それぞれ、割り石を用いて構築された巨大なものであるが、現在では、その下部をのこすのみである。礼拝室の上部や屋根の状態を知る手がかりはないが、現在、この部分の地表が小高くなっているのは、崩壊した多量の建築資材が堆積したためであると認められる。このモスクには、礼拝室の柱間に対応する幅のひろい廻廊はのこっていない。主室附近の西壁に当たる部分は、現在もなお、多く残存しており、そこには二つの大きな窓があ

る。窓の上部は、かつては、アーチ型をなしていたものようである。この壁の外側すなわち西面には、小口をみせた長い切り石が数多く突出した形でのこっているが、これは、この壁面が長手・小口を組み合わせた切り石でおおわれていたことを示すものであろう〔挿図1〕。このモスクの床面は、本来の地表から相当高く構築されているが、この



挿図 1 M.3 礼拝室西壁面の石積み状態

基壇の部分の側面に、アーチ型の大きな凹みがつくられていたことは、現在の北面の状態から明らかに知ることができる。基壇の東面の南部に接して、方形の台がつくられている。第Ⅱ期。 東研 X-4-13; ASIⅣ-1

**M.4** ベーガンブリー=マスジッド (Bigampūri Masjid) として知られており、ベーガンブル部落の西南隅にある。 附図 G-12 図版 13~14

このモスクは、現存するデリー諸王朝時代に属するモスクとしては、最大の規模をもつものの一つであって、外辺が東西95メートル・南北91メートルに達する。広い内庭を囲んで、西側に礼拝室をもち、その他の三方には、奥行1間の廻廊をめぐらしている。これらの廻廊の中央には、それぞれドームをいただく門があり、そのうちでは東門が最大で、主入口をなしている。西側の礼拝室は、高いドームをいただく中央礼拝室と、その南北につづく、それぞれ間口8間・奥行3間の礼拝側室とからなっている。中央礼拝室の正面には、ミーナールを模した塔を両端にもつ、巨大なパイロン風のアーチが力強く立ち、このモスクに堂々たる風格をそえいる。礼拝側室の、南北にはしるなかの間と、廻廊のすべての間の上に、それぞれ、小さなドームが連続して並んでいるさまもまた壮観である。北側の礼拝側室のさらに北側には、16.7メートルと21.3メートルの、東と北とにヴェランダをもつ建物が張り出しているが、これは、おそらく、限られた人びとのために用意されたものと思われ、従来も、ムッラー=バーナ(聖職者のための部屋)、あるいはザナーナ(婦人のための部屋)といわれてきた。

このモスクは、一般には、トッグルタ朝のフィーコーズ=シャー時代に建てられたものといわれてきたが、その建立の歴史に関しては、なお、検討の余地がのこされているように思われる。しかし、構造・様式からみて、トッグ

ルク朝時代に属することは、ほぼ疑いない。ちなみに、このモスクの北方約60メートルのところには、トゥグルク朝のムハンマド・シャーの建立と伝えられ、後にビジャイ・マシディルとよばれてきた宮廷建造物〔0.6, 図版145～146〕の礎礎がのこっているが、それとの関連についても、十分な考慮が払われて然るべきであろう。第Ⅱ期。

東研Ⅴ-33; ASIⅢ-270

**M.5** フィーローズ・シャー・コートラのジャーマ・マスジッドとよぶ。デリー門の東南約750メートル、マトゥラー・ロードの東約350メートル。フィーローズ・シャー・コートラの内庭、宮廷地域の北の部分にある。附図1-6、図版15～16。

このモスクは、四周に数多くの部屋をめぐらす高い基礎の上に立っており、壮大な規模をもつものである。現在では、中央の部分に五つのミヒラーブをそなえた西壁と、その他の壁の一部がのこっているにすぎないが、かつては、奥行3間の部屋が内庭をとり囲んでいたものと推定される。このモスクの北側には、ドームをいただく正門が張り出していて、高い階段をのぼって、その三方に開く入口に達することができる。このモスクは、フィーローズ・シャー・コートラとして知られている城壁〔0.7, 図版147～148〕の東の部分の、もとジャムナー河に面して建てられたもので、同時代の史書の記述から、トゥグルク朝のフィーローズ・シャーの治世に建立されたものと推定される。第Ⅱ期。

東研Ⅱ-4-1; ASIⅡ-116

**M.6** カーリー・マスジッド (Kali Masjid) として知られており、ニザームディーン・オーリヤーの墓の南南東約200メートルにある。附図1-9、図版17～18。

内庭の西側に、開口11間・奥行3間の礼拝室があり、他の三方を、奥行1間の廻廊がめぐっている。東・南・北の三面には、それぞれ門が張り出しており、内庭は、南門と北門、東門と礼拝室の中央の間を結ぶ二つの通路によって四分されたかたちになっている。このモスクの四隅と、三つの門および中央ミヒラーブの背後の左右両側には、それぞれ、ミーナール風の小塔がそえられている。礼拝室・廻廊および通路のすべての間には、小さなドームがのせられているが、現在では、その過半数が崩壊してしまっている。

東門の入口の上方に掲げられている碑文には、772A. H. (1370/71 A. D.)の年次と、トゥグルク朝のフィーローズ・シャーの名とが記されており、このモスクの建立の時期を示している。第Ⅱ期。

東研Ⅲ-13; ASIⅡ-240

**M.7** キルキー・マスジッド (Khirkī Masjid) として知られており、キルキー部落の中央にある。附図11-12、図版19～20。

このモスクは、周囲に部屋をめぐらす基礎の上に立ち、15間四方の、正方形の平面をもっている。各面の中央には、それぞれドームをいただく張り出しの部屋があり、西側のものはミヒラーブをもち、他の三方のものは、それぞれ、階段をそなえた門となっている。建物の四隅には、バステーション風の塔があって、張り出しの部屋のそれぞれの両端に立つ小塔とともに、このモスクの外観を特徴あるものとしている。もうひとつの特徴は、西をのぞく三面のそれぞれの間ごとにひらいている、格子をはめた窓 (セルカー) の連続で、これがこのモスクの俗称のおこりとなっているのである。このモスクの内部は、各面の壁にそって、奥行3間の列柱の間がめぐっており、それによってつくられる内庭を、さらに、奥行3間の柱脚が十字形にはしっていて、四つの小さな内庭をつくり出すかたちとなっている。柱脚の間がぶつかり合う九つのブロックは、それぞれ九つの間からなっており、いずれも、小さなドームをのせているが、一つのグループの中央のドームは、他のものにくらべると、やや高くなっている。このように配置された81個の小さなドームは、屋上のすがたに、ひときわ変化を与え、見るものに感興をもよおさせる。第Ⅱ期。

東研Ⅴ-29; ASIⅢ-215

**M.8** カーラーン・マスジッド (Kalan Masjid) あるいはカーリー・マスジッド (Kali Masjid) とよばれており、オールドデリーのトルコマーン門の西北約350メートルにある。附図11-6、図版21。

東西約15メートル、南北約21メートルの内庭を囲んで、西側に開口5間・奥行3間の礼拝室があり、東・南・北の三方には、奥行1間の廻廊をめぐらしている。礼拝室および廻廊の間は、東門の西側のそれをのぞいて、すべて小さなドームをのせている。礼拝室の左右および裏側に、平屋根の部屋をもっているのがこのモスクの特徴であるが、その用途はあきらかではない。この建物の全体は、周囲に多くの小部屋をそなえた高い基礎のうえに立っており、その四隅には、ドームをいただくバステーション風の塔が設けられている。東廻廊の中央部には、その左右にミーナール



附図2 M.8 礼拝室 内庭 南より

を模した小塔をもつ正門が東に張り出しており、高い階段をのぼってそれに登ることができる。

正門の東入口上方に、789 A. H. (1387 A. D.) の年次と、トッブルク朝のフィーローズ・ジャーの名を記した歴史碑文があり、この建物の建立の時代を示している。このモスクは、今日なお、礼拝の場として使用されており、後代の補修と改変が認められる(図版 2)。第Ⅱ期。

東研Ⅱ-2; ASIⅠ-138

**M.9** カールー・サライーのモスクとよぶ。ペーガジブルのモスクの西北方約400メートル、カールー・サライー部落の西端にある。附図 G-12 図版 22

このモスクは、基壇の上に立ち、間口7間・奥行3間の礼拝室をもつ建物であるが、現在では、南の部分が崩壊してしまっている。奥行3間のうちの東西の間には、小さなドームがつらなり、なかの間は、交叉ヴォールトの天井をもっている。元来は、南北両端の間から、東へ廻廊がのびていたと思われるが、現在では、失われてしまっている。ミヒラーブの周辺と、一部のスタインテにのこる後装文様が特徴的である。第Ⅱ期。東研Ⅲ-35; ASIⅢ-275

**M.10** シェーブル・ジャートのモスクとよぶ。シェーブル・ジャート部落の西のはずれにある。附図 G-11 図版 23

現在では、ドームをいただく、外辺11.7メートルの四角平面の建物がのこっているが、これは、本来は、モスクの中央礼拝室をなしていたもので、その南北に、奥行2間の礼拝側室の痕跡がつづいている。また、南側と北側とにのこる遺構から、ここに、袖室と開壁とがあったことが知られる。中央礼拝室は、西側に三つのミヒラーブをもち、東正面に、大きなアーチに囲まれた三つの小さな入口が開かれていたらしいが、この部分は、崩壊してしまっていて、二本の近代の柱によって補強されている。また、南側と北側とには、それぞれ、礼拝側室につづく二つの通路を開いている。第Ⅱ期。東研Ⅳ-4; ASIⅡ-294

**M.11** ハウズ・ハースのモスクとよぶ。ハウズ・ハースの貯水池の東南隅にある。附図 G-11 図版 24

このモスクは、ハウズ・ハースの貯水池に沿い、マドテッサ(O.24, 図版 155b~157)の北につづいて建てられ、間口9間・奥行1間の礼拝室と、南北両端から東に張り出す、それぞれ、間口4間・奥行2間の袖室とからなっているが、北の袖室は、すでに崩壊している。礼拝室の九つの間のうち、中央をふくむ五つの間は、そのミヒラーブの位置が、背面にまで貫かれており、中央のものは、ドームをいただく四角平面のチャハトリに通じ、そこから左右にわかれる階段によって貯水池の水面に達する。他の四つは、張



図版 2 M.11 東南隅にある門 南側と東側

り出し窓になっているが、同じようなものは、南北両端の側壁にも認められる。このモスクの前庭は、開壁によってとり囲まれており、その東南隅には、ドームをいただく四角平面の門(図版 3)が設けられている。第Ⅱ期。

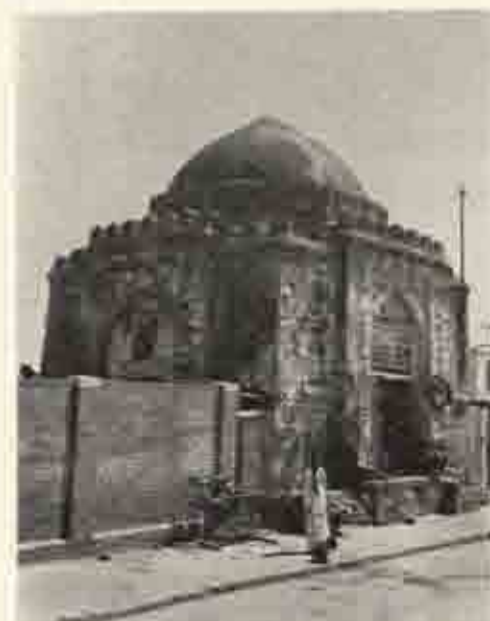
東研Ⅳ-11-3; ASIⅢ-310

**M.12** チョーサト・カンバー (Chousath Khamba) とよばれていたもので、デリー門の西南約800メートル、マトゥラーロードの西方約600メートルにある。附図 I-6 図版 25~26

せまい内庭の西側には、南北5間・奥行1間の礼拝室があり、その南北両端の間から、それぞれ東へ3間の袖室を張り出している。内庭をはさんで、この主建物と対称の位置に、同じ平面の四角形の建物が附置され、外部に向かって開かれている。東側にあるこの建物は、四側のモスクの附属施設として使用されたものであったと思われる。チョーサト・カンバー(64本の柱)という俗称は、この建物の柱の数に由来するものであろう。このモスクは、現在もなお、信仰の場として用いられており、西側の主建物は、白い塗装がほどこされている。第Ⅱ期。

東研Ⅱ-3; ASIⅡ-105

**M.13** クトップ・ロードのモスクとよぶ。ニューデリー



図版 4 M.13 東側の建物 西側と北面

一鉄道駅の北方約600メートル、クトップ・ロードがしばらく二つに分かれているその東側の道路をはさんで存在している。

附図 H-6 図版 27

このモスクは、道路をはさんで東と西とにある

二つの建物からなっている。西側の建物は、間口7間・奥行1間の礼拝室と、その南北両端の二つの間から張り出している、間口2間・奥行2間の袖室とからなっている。礼拝室の中央の間をふくむ五つの間にはドームをのせている。道路の東側の建物は、ドームをいたたく四角の平面をもち、現在では、店舗に使用されているので、その内部の様子を知ることができなかった(挿図4)。この二つの建物を、ASIは別項目としてとり扱い、西側の建物を、イマームバーラー(imāmbarā)、あるいはマドラッサすなわち学校として紹介し、東側のものを墓としているが、両者のプランや相互の位置関係、さらには様式上、同時代に属していることなどからみて、モスクとその東門と推定してよいであろう。第Ⅱ期。

東研Ⅱ-8, 9; ASIⅡ-361, 362

**M.14** モスク ベーガンブルのモスクの東北東約400メートル、キラーダ・デリー・ロードにそって、その南側にある。附図G-12、図版28a

このモスクは、間口5間・奥行2間の建物で、すべての



挿図5 M.14 北の部分の崩壊後の状態(東正面)

間に小さなドームをのせている。東側中央ドームの内面をめぐる碑文や、それぞれの間の四隅のスクインチをかざる文様は、この建物の特色をなしている。写真(挿図5)にみられるように、この建物の北側の二つの間は、1961年8月に崩壊してしまった。第Ⅱ期。

東研Ⅷ-12; ASIⅢ-264

**M.15** スルターン・ガーリー東方のモスクとよぶ。グロップ・ミナールの西方約4.9キロメートル、マヒバール部族の東南約1.4キロメートル、メヘローリー・ロードの南側にある。附図D-12、図版28b

間口5間・奥行2間のモスクで、交叉ヴォールトの天井と平坦な屋根をもっている。周囲の痕跡からみて、おそらく、その前庭は、四壁によって囲まれ、その東側に、小さな門を開いていたと推定される。このモスクは、叙諫王朝初期に建てられ、フィロズ・シャー・トクグルクが補修したとされている。スルターン・ガーリーとよばれる墓建築(T.1、図版73~74)の、ほぼ東南東約70メートルに位置している。なお、このモスクは、1959年の現地調査と、



挿図6 M.15 崩壊後の状況(北より)

1962年の補足調査とのあいだに、(挿図6)に見るように、壁をのこして完全に崩壊してしまった。第Ⅱ期。

東研Ⅷ-3; cf. ASIⅣ-106

**M.16** モスク(?) シェイフブル部族の東北約300メートル、キラーダ・デリー・ロードの南側にある。附図H-12、図版29a

本来は、南北に長く、東に面する建物であったと推定されるが、現在では、わずかに南の部分の一部をのこしているにすぎない。のこされた部分は、奥行3間で、四つのドームがなお認められる。この部分の北側には、崩壊した建物の断片が、堆積となって約50メートルのあいだつづいているので、かつては、かなりの規模の建物であったと思われる。あるいは、モスクであったかも知れない。第Ⅱ期。

東研Ⅷ-39; ASIⅢ-256

**M.17** モスク(?) ベーラダリー(Bārahdarī)とよばれていたもので、シェイフブル部族の西北西約400メートルにある。附図H-12、図版29b

外辺21メートルと10メートルの、南北に長い、東に面する建物で、間口は7間・奥行は3間で、平坦な屋根をもっている。この建物は、あるいは、モスクであったかもしれない。第Ⅱ期

東研Ⅷ-18; ASIⅢ-258

**M.18** ワジーラーバードのモスクとよぶ。ワジーラーバード貯水池の西北約100メートル、運河の南側にある。附図H-2、図版30

間口5間・奥行2間の建物で、中央と南北両端の奥の間はドームをいただき、その他の間は、すべて、交叉ヴォールトの天井で蓋われている。北側の奥の間には、中二階があって、スクリーンで囲まれた部屋をなしているが、これは、おそらく、ザナーナ、つまり婦人たちのための部屋であったのかもしれない。前庭の東には、ドームをいたたく四角平面の正門があり、また、南側にも門の基台がのこっている。前庭の中央には、十二本柱からなる墓建築(T.89、図版105b)がある。このモスクの北方にある橋(W.50、図版140a)と水門(W.49、図版139)とは、おそらくは、

同時代に構築されたものと思われる。第Ⅱ期。

東研. I-1-1; ASL I-408

**M.19** モラーダーバード・バハリーの南のモスクとよぶ。ムニールカ部落の西北西約2.4キロメートル、バサントナガル部落の南西約1.2キロメートルにある。

附図 D-10. 図版 31~32a.

このモスクは、南北約28メートル、東西約15メートルの建物で、ドームをいただく中央の部屋と、その南北にある側室とからなっている。中央の部屋は、内辺約9メートルの四角平面のもので、西にミヒラブをもち、南北の中央に、側室に通じる入口を開いている。側室は、それぞれ、アーチによって、南北に長い三つの部屋に仕切られ、平坦な屋根をもっている。中央の部屋や側室の随所に見られる、円形あるいは矩形の碑文と文様、および外部壁面のつよい傾斜は、この建物の特徴を示している。このモスクは、カサーイーワラー・グンバッド(Qasāiwalā Gumbad)とよばれていたという。このモスクは、北に接する後代のモスク(M.34, 図版 40)とともに、囲壁に囲まれた廃墟の西北の部分を作している。

この囲壁は、現在でも断続的にのこっており、その内部に、石や漆喰の堆積が散在している。この囲壁の内部に、本来、どのような建造物があったかは、今日ではほとんど知ることができない。南囲壁の一部は、比較的よくのこっていて(挿図 7)、約4メートルの厚さをもっており、狭間やバットゥルメントをそなえ、内側には、小部屋が並んでいる。北囲壁の一角には、ドームをいただく四角平面の小さな建物(挿図 8)があるが、おそらくは、門であったであ



挿図 7 M.19 東方にのこる囲壁の崩壊部分



挿図 8 M.19 北上囲壁の北の部分の小建物 南面

ろう。この囲壁の北側には、ほぼ同時代のものと思われる、大きなバーオリ (W. 20, 図版 128) と、小さな墓建築 (T. 83, 図版 103d) とがのこっている。第Ⅱ期。

東研. VI-29-1, 3, 4; ASL VI-135

**M.20** ムニールカのモスクとよぶ。ムニールカ部落のほぼ中央附近にある。附図 F-11. 図版 32b.

この建物は、ドームをいただく中央の礼拝主室と、その南北につらなるそれぞれ間口3間・奥行1間の部屋とからなっている。中央の主室に近いそれぞれ二つの間は、東に大きく開いているが、両端の間は密室になっていて、その東には、屋上に到る階段が張り出している。さらに、その南北にも、なんらかの建物がつづいていたらしく思われるが、現在では、改変が著しく、また民家が密集しているので、本来のすがたを明らかにすることはむずかしい。第Ⅱ期。

東研. VI-12; ASL VI-310

**M.21** カダム・シャリーフのモスクとよぶ。ニューデリー鉄道駅の北北西約600メートル、タトゥブ・ロードの西約200メートルにあるカダム・シャリーフの城壁の西端にある。附図 H-6. 図版 33

間口3間・奥行2間の小さなモスクで、交叉ヴォールトの天井と平屋根とをもっている。屋上には、ピラミッド型の屋根をいただく八角平面のチャハトリが立っている。この建物の天井の随所に、帯状と円形の文様がほどこされているのはめずらしいが、現在なお、モスクとして使用されているために、厚い塗装におおわれている。このモスクは、南にあるカダム・シャリーフ (T. 99, 図版 108) と関連して建てられたものと思われる。第Ⅱ期。

東研. II-7; ASL II-350

**M.22** サイドゥル・アジャーイブ西方のモスクとよぶ。サイドゥル・アジャーイブ部落の西方約100メートルにある。附図 G-13. 図版 34a

この建物は、約7メートルと約5メートルの、間口3間・奥行2間のモスクで、交叉ヴォールトの天井と、平坦な屋根とをもっている。西側背後の両端には、八角形の平面をもつ塔の下部がのこっている。前庭には、現在、いくつかの墓石が散在している。第Ⅱ期。

東研. X-18; ASL X-210

**M.23** モスク ジェイブル部落の東北約300メートル、チラーグ・デリー・ロードの南側にある。附図 H-12. 図版 34b

このモスクは、間口3間・奥行2間の、平坦な屋根をもつ建物であるが、現在では、西壁をのこして、ほとんど崩壊してしまっている。このモスクは、その南東わずかの距

離にある。シェイフ・サラーブディーン (Sheikh Salah al-Din) を葬ったと伝えられる墓建築 [T. 86, 図版 104c] と、なんらかの関連をもって建てられたものかもしれない。第Ⅱ期。 東研 Ⅷ-66; ASI Ⅲ-255

**M. 24** モスク メヘローリー部落の西方、部落を南下する道路から西へ約300メートルにある。 附図 F-13 図版 35a

このモスクは、13.2メートルと、4.2メートルの、開口3間・奥行1間の建物で、交叉ヴォールトの天井と平坦な屋根とをもっている。中央の間は、ミヒラブをそなえているが、左右の間は、ミヒラブの位置が、背後につきぬける窓のかたちになっているのが特徴的である。前庭は、低い壁によって囲まれ、現在では、くずれた墓石がのこっている。このモスクの北東に、ドームをいただく十二本柱の墓建築 [T. 82, 図版 103c] が立っているが、このモスクと同じ時代に、なんらかの関連をもって建てられたものと推定される。第Ⅱ期。 東研 Ⅷ-52; ASI Ⅲ-113

**M. 25** モスク メヘローリー部落の南端に近く、この部落から南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 35b

開口3間・奥行1間の建物で、交叉ヴォールトの天井と平坦な部屋とをもっている。現在では、住居に使用されているため、塗装がほどこされ改変が著しい。第Ⅱ期。

東研 Ⅷ-75; ASI Ⅲ-84

**M. 26** アーホンドジー (Akhandji) のモスクとよばれていたもので、メヘローリー部落の北にあたり、クトゥブ・ミーナールの西方約1キロメートルにある。 附図 F-12 図版 35c

このモスクは、8.8メートルと5.3メートルの、三つの入口をもつ奥行1間の建物で、屋根は平坦である。前庭は、低い壁によって囲まれ、北側に門がある。ASIは、中央入口の上方に、1270 A. H. (1853-54 A. D.) の年次と、アーホンドジー (先生の意) とよばれた人物による補修を記した碑文があったと述べているが、いまは失われてしまっている。第Ⅱ期。 東研 Ⅷ-56; ASI Ⅲ-135

**M. 27** モスク (?) メヘローリー部落の南端に近く、この部落より南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 36a

この建物は、現在では、東に面する三つのアーチからなる列柱の部分ののこすのみで、その全貌を推定することはできないが、おそらくは、モスクであったのかもしれない。この建物は、わずかにのこる痕跡からみて、南北にさらに接続する部分をもっていたらしく、また、東にある墓建築

[T. 84, 図版 104a] ともなんらかの関係があったものと思われる。第Ⅱ期。 東研 Ⅷ-37-2; cf ASI Ⅲ-80

**M. 28** モスク ムニールカ部落の東方約800メートル、ハウズ・ハースの貯水池の西南隅から西南西約700メートルにある。 附図 F-11 図版 36b

このモスクは、それぞれ入口をもつ三つの部屋と、その北に連なる二つの部屋とからなっている。前者は、それぞれドームをいただき、中央のものがわずかに高く、花菱形をなしており、後者は、交叉ヴォールトの天井と、平坦な屋根とをもっている。さらに、その北側には、天井の低い小部屋がつづいている。このモスクの前庭は、現在のこる痕跡からすると、囲壁によって囲まれていたらしく、また、このモスクの東方約40メートルのところに現存する、同じく花菱形のドームをいただき、四方に入口を開く四角平面の建物が、このモスクの門をなしていたものと思われる。前庭のなかほどには、四角平面のドームをいただく墓建築 [T. 13, 図版 80d] が立っている。このモスクは、ハッジーランガ (Haji Lunga) のモスクとよばれていたという。第Ⅱ期。 東研 Ⅷ-8, 10; ASI Ⅲ-321, 323

**M. 29** モスク サイイドゥル・アッシャーイブ部落の西北約850メートル、クトゥブ・バーダルブル・ロードの北側にある。 附図 G-12 図版 37a

この建物は、それぞれドームをいただく三つの部屋からなっている。1959年末の調査のときには、南北の両ドームがなかば崩壊していたが、1962年の調査時には、(附図 9) のように、北のドームは全壊し、中央ドームの重荷もくずれてしまっていた。第Ⅱ期。 東研 Ⅷ-11; ASI Ⅲ-205



附図 9 M. 29. ドーム崩壊後の状態 西竹彦

**M. 30** モスク クトゥブ・ミーナールの東南約900メートルにある。 附図 F-13 図版 37b

現在では、なかば崩壊しているが、元来は、それぞれ、ドームをいただく三つの部屋からなる、小さな建物であったらしい。南端のドームのみが、いまなお、かろうじてのこっている。第Ⅱ期。

東研 Ⅷ-79

**M.31** モスク サイイドゥル・アジャーンブ部落の西のはずれにある。 附図 G-13. 図版 37c

現在では、この建物は、部落民によって住居として使用されており、内部の状況をまったく知ることはできないが、おそらく、モスクであろう。部屋の数は不明であるが、屋上には、やや距離をおいて二つのドームが見える。ドームと、西面背後の壁面は、第Ⅱ期の特徴を示している。第Ⅱ期。 東研 X-16; ASIⅢ-208

**M.32** ムパーラクブル・コトラのモスクとよぶ。ムパーラクブル・コトラ部落の西端にある。 附図 H-10. 図版 38

間口2間・奥行2間の建物で、中央と南北両端の奥の間に、ドームをのせているが、両端の間は、ドームの下に、さらに、浅い円天井をもっているのが注目される。このモスクの東側には、石敷のひろい前庭がある。このモスクの東北東には、サイイド朝のスルターン・ムパーラク・ジャーの墓と伝えられる建物 [T-77, 図版 100] がある。このモスクは、その墓をとり囲んでいたと推定される囲壁の西壁に接して、その西門のすぐ南に位置している。第Ⅲ期。

東研 V-4; ASIⅣ-42

**M.33** マブドゥーム・サーヒブ (Makhdum Sahib) のモスクとして知られており、シャール・ジャート部落の西南西約600メートルにある。 附図 G-11. 図版 39

このモスクは、七つの部屋をもつ礼拝堂と、その南北両端から東へ張り出す、それぞれ二部屋からなる袖の部分とをもっている。礼拝堂の中央の間と、南北両端の間には、ドームがのせられている。袖の部分のさらに東方には、それぞれ、二部屋からなる延長部分がつづいていて、東端のものは、ドームをいただき、北側の西寄りのものは、前庭に入る通路となっている。一方、礼拝堂の北の外側には、花菱形のドームをいただき、東西に入口を開く門が設けられている [挿図 10]。礼拝堂の背後には、七つの小部屋をもつ張り出し部分がある。このモスクの前庭の東側には、囲壁に囲まれた墓地があり、そのほぼ中央に、十二本柱からなる墓建築 [T-108, 図版 112a] が立っている。マブドゥ



挿図 10 M.33 北門の門 西面

ーム・サーヒブとは、墓地の一角に葬られたと伝えられる聖者の通称である。第Ⅲ期。

東研 Ⅷ-9-1; ASIⅢ-298

**M.34** モラーダーバード・バハリーーの北のモスクとよぶ。ムコールカ部落の西北西約2.4キロメートル、パサントナガル部落の南西約1.2キロメートルにある。

附図 D-10. 図版 40

このモスクは、南北約29メートル、東西約15メートルの建物で、中央の部屋と、その南北につづく側室とからなっている。中央の部屋は、ドームをいただき、内辺8.7メートルの四角平面の部屋で、西にミヒラブをもち、南と北とに、側室に通じる三つの入口を開いている。側室は、それぞれ間口2間・奥行3間からなる部屋で、六つの間が、おのおの、小ドームをのせている。しかし、北の側室は、ほとんどくずれ落ち、南のものも、東の部分が崩壊してしまっている。このモスクは、囲壁 [挿図 7] に囲まれた建物群の西の一角にある別のモスク [M.19, 図版 31~32a] の北に接して、後代に追加建設されたものである。第Ⅲ期。

東研 Ⅶ-29-2; ASIⅣ-136

**M.35** バラー・グンバッド (Bara Gumbad) のモスクとよぶ。サブダル・ジャングの墓の東北東約1キロメートル、ローディー・ロードの北約300メートル、ローディー公園の内部にある。 附図 H-9. 図版 41~42

東西約32メートル、南北約26メートルの内庭をはさんで、西側にモスク、東側に附属の建物が向かい合っており、さらに、内庭の南側に門が張り出し、この門の巨大さのゆえに、一般には、バラー・グンバッド (大きなドーム) とよばれてきた。モスクは、外辺27.2メートルと7.3メートル長方形の建物で、五つの部屋からなっており、中央の三つの間にはドームをのせている。東正面の中央の間は、わずかに張り出していて、小さな龕が入口のアーチの周囲をとり囲んでいる。このモスクの南と北との外面には、床面と同じ高さで、それぞれ一つずつの張り出し窓が設けられている。また、西側外面の中央部分の上方には、赤い砂岩のブラケットがのこっているが、おそらく、かつて、テーブル状の台がのせられていたものと思われる。この西面の両端と、中央の突出し部分の左右には、ミーナールを模した小塔がそえられている。このモスクの内部は、中央の三つの間に、それぞれ三つのミヒラブを、両端の間に一つずつのミヒラブをそなえている。この建物のアーチのスペンが、高さに対して著しく大きいのと、内外の壁面やドームの内部を、漆喰の碑文・文様が一面に覆っているのが、このモスクの目立った特徴となっている。

内庭の南側にある門は、ドームをいただき、外辺約19メートル、内辺約12メートルの四角平面の建物で、四方に入口を開いている。各面は、中央の部分がわずかに張り出し

ており、入口を開く二重の大きなアーチの周囲に、小さな龕列をめぐらしている。その左右の壁面は、龕列によって外観が二層をなしており、入口の左右に窓を開いている。十六角をなしているドラムの各面にも、それぞれ一つの龕が配されている。この門の内部の床面には、四方の壁にそってベンチが設けられている。入口アーチとスタインチアーチの下部分をつらぬく帯状の文様と、ドーム基部をめぐる32の龕列とが、単調な壁面にわずかな変化を与えている。

モスタと向かい合って内庭東側にある建物は、外辺27.2メートルと6.3メートルの長方形をなし、五つの部屋と二つの小部屋とからなり、平坦な屋根をもっている。この建物は、モスタに関連して、なんらかの宗教・教育施設としての役割をはたしていたものであろう。なお、内庭のはば中央には、一辺7.8メートルの基台があって、その上に一基の墓の痕跡が認められるが、モスタとの関連はまったくわからない。上に述べた三つの建造物は、同じ高さの基壇の上に建てられており、モスタと東側の建物の下にあたる部分には、多くの地下室がつくられているが、現在では、倉庫として用いられているので、その内部については明らかではない。また、門の基壇にも、大小の龕が設けられている。

モスタの南端の部屋の西壁上方には、漆喰の碑文があって、900 A. H. (1494 A. D.) の年次と、ローディー朝のシカンドル・シャーの名を記している。この碑文の内容については、このモスタを含む建物の建立の時期と関連して、なお疑問の点がのこされていることに一言ふれておきたい。第Ⅲ期。 東研・Ⅲ-2: ASI Ⅱ-45

**M. 36** モートゥ・キ・マスジッド (Moth ki Masjid) としてひろく知られており、ムジャーヒドゥル部族の西端にある。 附図 H-10。 図版 43~44

このモスタは、龕をめぐらす基壇の上に立ち、五つの部屋からなる礼拝室と、低い囲壁にとり囲まれた前庭とからなっている。東側の囲壁の中央には門があり、北東および南東隅には、ドームをいただき、六本柱の小さなチャハトリが立っている。モスタの中央の部屋および南北両端の部屋は、ドームをいただき、その他の二つの部屋は、花崗形の天井をのせている。背後の両端には、二層のバルコニーをもつ塔が設けられており、また、南と北との側面には、張り出し窓が開かれている。このモスタの正面の、中央入口を彩る大理石と赤い砂岩の組合せや、入口をかざる小さな龕列は、きわめて特徴的である。また、東門の西面にのこる、砂岩の色彩の配合や、彫刻文様にうかがわれる繊細さは、このモスタに独特な美しさをそえている。ローディー朝の貴族であったと伝えられるこのモスタの建設者が、スルターンから賜わった、モート (moth) の穀粒にまつわ

る伝説が、このモスタの俗称のおこりとなったといわれている。第Ⅲ期。 東研・Ⅴ-9: ASI Ⅱ-301

**M. 37** ニーラー・マスジッド (Nili Masjid) とよばれており、ハクズ・ハース・ニクテレーグ住宅地の内部、メヘローリー・ロードの東側にある。 附図 G-11。 図版 45

このモスタは、16.4メートルと6.2メートルの、三つの部屋からなる建物で、中央の間にドームをのせている。西側背後の両端をはじめ、建物の随所にかかげられている小塔や、入口の上方をはしる帯状の文様と青いタイルなどが、この建物の外観を印象深いものにしてている。ニーラー・マスジッド (青いモスタ) という俗称も、このタイルの装飾から生まれたものである。この建物には、15メートルと10.1メートルの、囲壁に囲まれた前庭が設けられている。中央入口の上方に、このモスタが、ローディー朝のシカンドル・シャーの治世の 911 A. H. (1505 A. D.) に建てられたことを記す、大理石の碑文がある。第Ⅲ期。

東研・Ⅷ-1: ASI Ⅱ-379

**M. 38** ムハソマディー・ワーリー・マスジッド (Mohammadwali Masjid) とよばれており、シャープル・ジャート部族の北方約700メートル、シーリー城郭の北の外側にある。 附図 H-11。 図版 46

このモスタは、それぞれ入口をもつ三つの部屋からなっており、中央の部屋は、ドームをのせている。正面の入口を飾る小さな龕列と、上方をはしる帯状のタイルとが、内部の目立った装飾とともに、この建物の特徴をなしてい



附図 11 M. 38 南門 南面

る。このモスタの前方には、約50メートルと60メートルの、囲壁に囲まれた広場があり、南壁の西寄りと、東壁の北寄りのところに、それぞれ、門が設けられており、そのうち南のものは (附図 11)、美しくつくられている。第Ⅲ期。

東研・Ⅷ-2: ASI Ⅱ-296

**M. 39** ラージューン・キ・バーイーノ (Rajun ki Ba'ann) のモスタとよぶ、ダトッブ・イーナーの南南西約700メートルにある。 附図 F-13。 図版 47

三方に龕をもつ高い基壇の上に立っており、東側は、ラージューン・キ・バーイーノとよばれるバーオリー (W. 26,



図版 132) に接している。モスクは、それぞれ入口をもつ三つの部屋からなっており、屋根は平坦である。正面を飾る小さな龕列や円形文様、内部の花曇形の天井やスタインチ、および中央ミヒラーブの周辺の碑文・文様などが注目される。モスクの前庭は、南に小さな門をもち、バーオリーによって切断されたために、梯形になってしまったものであろう。前庭の北隅には、16世紀初頭の碑文をもつ十二本柱の墓建築〔T-103、図版 110b〕が立っているが、このモスクと、墓建築およびバーオリーとは、ほぼ同時代に、なんらかの関連をもって建てられたものと推定される。

第Ⅲ期。 東研. K-12-2; ASI. III-164

**M. 40** バスティー (Basti) のモスクとして知られており、セーナガル鉄道駅の東方約 600 メートル、ディフュンスコローの北端、線路にそって南側にある。 附図. I-9、図版 48

それぞれ入口をもつ三つの部屋からなる建物で、屋根は平坦である。この屋根の、東側の中央の部分と、西側の左右の二箇所に、テーブル状の台を支えていたと思われるブラケットが、現在もなおのこっている。この建物の東面の庇の上に、横に並んでいる龕列がめずらしい。なお、東面の左右には、屋上に到る階段の入口があるが、北端のものは、東側に階段を張り出している。内部の中央の部屋の天井は、中心の円形文様や交叉アーチ、および周囲の帯状の碑文・文様によって飾られ、また、中央ミヒラーブの周辺も、豊富に装飾をほどこされている。このモスクは、東側にあるバーオリー〔W. 27、図版 133a〕や、南側にある門〔O. 44、図版 162a〕、および東南方の墓建築〔T-110、図版 113〕と関連をもつものと思われる。(挿図 12) 第Ⅲ期。

東研. N-1-2; ASI. IV-38



挿図 12 M. 40 モスクを囲むバスティーの遺跡群 東北より

**M. 41** マフドーム・サマーウッディーン (Makhdum Samā' al-Dīn) のモスクおよび、メヘローリー部落の南端から南西約 300 メートル、南下する道路から西へ約 150 メートルにある。 附図. F-13、図版 49a

このモスクは、平坦な屋根をもち、七つの部屋からなっている。両端の間をのぞく五つの部屋は、入口を開いてい

る。現在では、全面に白い塗装がほどこされており、すぐ南に接する、いわゆるマフドーム・サマーウッディーン

の墓〔T-105、図版 111a〕と関連して使用されている。

第Ⅲ期。 東研. K-45-1; ASI. III-93

**M. 42** モスク ジャーブル・ジャーナト部落の北東約 800 メートル、シーリー城砦の内部にある。 附図. H-11、図版 49b

現在では、西壁をのこすのみで、ほとんど崩壊しているが、本来は、三つの部屋からなり、中央に、ドームをい

たくモスクであったと思われる〔挿図 13〕。第Ⅲ期。



挿図 13 M. 42 西壁面

**M. 43** マッキー・マスジッド (Makki Masjid) とよばれており、デリー門の南南西約 700 メートル、マトゥラ・ロードの西方約 350 メートルにある。 附図. I-6、図版 49c

三つの部屋からなり、平坦な屋根をもつモスクで、入口の周囲をかざる龕列が特徴的である。ASI は、このモスクを、その東北にあるムガル初期の聖者の墓と結びつけて、時代区分をムガルとしているが、構造・様式からみて、ここでは一応、第Ⅲ期に属するものと考えたい。現在なお、礼拝と居住のために使用されており、随所に改変が加えられている。第Ⅲ期。 東研. II-12; ASI. II-108

**M. 44** モスク メヘローリー部落の南端から南西約 300 メートル、南下する道路から西へ約 150 メートルにある。 附図. F-13、図版 49d

このモスクは、平坦な屋根をもち、それぞれ入口をひらく三つの部屋からなっている。せまい前庭は、低い囲壁で囲まれ、東側に小さな門がある。小さいながらまとまった感じのするモスクである。第Ⅲ期。

東研. K-44; ASI. III-91

**M. 45** モスク ハウス・ハース・エンクレーヴ住宅地の内部、メヘローリー・ロードの東側にある。 附図. G-11、図版 49e

それぞれ入口をもつ三つの部屋からなり、屋根の平坦な建物で、入口を飾る小さな龕列が特徴的である。ASI は、

東方に、二部屋からなる門があったと記しているが、現在、この建物は、自動車工場の敷地内であって、工場のために使用されているので、内部の状況や周辺の様子はほとんどわからない。第Ⅲ期。 東研Ⅷ-85; ASIⅡ-278



附図 14 M.45 西側面

**M.46** ユースフ・カッタール(Yusuf Qattal)のモスクとよぶ。キルキー部落の北方約200メートルにある。 附図 H-12 図版 50

このモスクは、12.3メートルと5.3メートルの長方形の建物で、それぞれ入口をもつ三つの部屋からなっており、屋根は平坦である。中央の間の天井が花飾形をなしているのが特徴である。このモスクの東側に、ユースフ・カッタールの墓と伝えられる建物〔T.104, 図版 110c〕があり、両者は、たがいに関連をもって建てられたものと推定される。様式および文様からみて、上の墓と同じく、このモスクも、また、ムガル時代に属する可能性もないとはいえない。第Ⅲ期。 東研Ⅷ-31; cf. ASIⅡ-217

**M.47** シェイフブルのモスクとよぶ。シェイフブル部落の西端に近く、チラーグ・デリー・ロードにそって、その北側にある。 附図 H-12 図版 51a

外辺約16.5メートルと6メートルの長方形の建物で、それぞれ東に入口を開く三つの部屋からなっており、中央の部屋はドームをのせている。この建物の東には、低い囲壁に囲まれた前庭がある。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-20; ASIⅡ-250

**M.48** ムハンマドブルのモスクとよぶ。ムハンマドブル部落の西端にある。 附図 F-10 図版 51b

このモスクは、五つの部屋からなる建物で、ドームをいだけ中央の部屋とその左右の部屋とは、いずれも東側に入口を開いている。また、南北両端の部屋は、それぞれドームをいだけ小さな部屋をその東側に張り出している。この建物は、現在では、農家の家畜小屋や納屋として利用されており、改変が著しい。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-3; ASIⅡ-307

**M.49** モスク メヘローリー部落の南端に近く、こ

の部落より南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 52a

このモスクは、屋上に通じる階段をはさんで、両側に、それぞれ三つの部屋をもっており、屋根は平坦である。前庭の北寄りのところには、ピラミッド型の屋根をもった墓建築〔T.129, 図版 118d〕がある。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-72-1; ASIⅡ-83

**M.50** モスク メヘローリー部落の南端に近く、この部落より南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 52b

このモスクは、四つの部屋からなり、北端の部屋をのぞいて、東に入口をもち、屋根は平坦である。東に張り出す前庭の下は、地下室になっている。現在では、この建物の南の部分は、大部分崩壊してしまっている。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-71; cf. ASIⅡ-81

**M.51** モスク メヘローリー部落の南端に近く、この部落より南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 52c

このモスクは、四つの部屋からなり、北端の部屋をのぞいて、東に入口をもち、屋根は平坦である。北端の部屋は、東に窓を開いている。東に張り出す前庭の下は、地下室になっている。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-70; ASIⅡ-81

**M.52** モスク クトッブ・シーナールの南南西約900メートル、クトッブ・サーヒブのダルガーの境内のほぼ中央にある。 附図 F-13 図版 53a

このモスクは、三つのアーチの入口をもち、奥行は一間で、屋根は平坦な建物である。東側にせまい前庭がある。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-78; ASIⅡ-26

**M.53** モスク ムニールカ部落の西北西約550メートルにある。 附図 E-11 図版 53b

この建物は、東に三つの入口を開く長方形の、平坦な屋根をもつ小型のモスクである。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-34; ASIⅡ-123

**M.54** モスク メヘローリー部落の南端より南へ約100メートル、南下する道路にそって西側にある。 附図 F-13 図版 53c

このモスクは、現在では、三つのアーチをもつ東側正面の壁をのこして、部屋の部分はまったく崩壊してしまっている。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-81

**M.55** アードチーニーのモスクとよぶ。アードチーニー部落の西のはずれ、メヘローリー・ロードの西側にあ

る。 附図 G-12 図版 54

このモスクは、一般に、墓地にみられるような礼拝壁をもっており、七つのミヒラーブと袖壁とをそなえている。中央のミヒラーブの部分は、小さな龕列によって飾られ、一段と高くつくられている。礼拝壁の背後の両端には、ドームをいただくパステイオン風の塔があって、その内部は、せまい部屋になっている。この礼拝壁の前方は、地面よりやや高い漆喰の床になっていて、今日なお、礼拝の場所となっている。前庭は低い冊壁によってとり囲まれ、東には、帯状の歴史碑文をもつ正門がのこっている。前庭のほぼ中央には、井戸が掘られているが、同時代のものかどうかはわからない。東門の東面の上部に、コーディー朝の سلطانであるシカンダルの名と、915 A.H. (1509 A. D.) の年次とを記した碑文が掲げられている。

このモスクの北東に接して、671 A.H. (1272-73 A. D.) に死んだと伝えられる聖者、シェイフ・ナジブッディーン・ムタワッキルと、その関係者のものと伝えられる墓がある。このモスクは、この聖者の墓や、モスクの南方にある、ビービー・ズライハーのダルガー (cf. O. 38, 附図 70) にちなんで建てられたものであろう。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-37; ASIⅢ-340

**M. 56** イクバル・ハーン (Iqbal Khan) のイードガーとよぶ。ハウズ・ハース・エンクレーヴ住宅地の内部にある。 附図 G-11 図版 55

全長60メートルにおよぶ、十一のミヒラーブからなる礼拝壁で、南北両端に、パステイオン風の二層の塔をそなえているが、現在では、北側のものは、すでに崩壊しており、痕跡をのこすにすぎない。中央ミヒラーブの北側には、十三の階段からなる高いミシバルがおかれ、その下の南側に入口があって、礼拝壁の真側に通じている。このイードガーの南端の塔の東面に、807 A.H. (1405 A. D.) の年次と、当時のデリーの権力者であったマッルー・イクバル・ハーンの名を記した碑文が掲げられている。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-6; ASIⅢ-287

**M. 57** モスク (?) ジャーブル・ジャート部落の西



附図 16 M. 57 北西隅の残存部分 南より

南西約350メートルにある。 附図 G-11

この建物は、現在では、北西隅の一部をのこして(挿図 15)、まったく崩壊してしまっているため、その規模も形式もわからない。残存の部分から判断すると、モスクであった可能性もある。第Ⅱ期~第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-11

**M. 58** モスク フマーユーンの墓の西方約800メートル、コーディー=コードの南側にある。 附図 I-9

現在では、中央の間をのこして崩壊しているが、ASI



挿図 16 M. 58 中央の残存部分 東側より

によれば、三つの部屋からなるモスクで、平坦な屋根をもつものであったという。ASIは、このモスクの時代区分をムガルとしているが、様式からみて、第Ⅲ期に属するものと考え

ここに掲げる写真(挿

図 16) は、1955年に荒が撮影したものである。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-49; ASIⅢ-91

**M. 59** モスク ジェイブル部落の西北西約300メートルにある。 附図 H-12

現在では、主室の北西の部分のみをのこして、ほとんど崩壊してしまっているため、本来の規模を知ることはできない。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-72



挿図 17 M. 59 北西隅の残存部分 東より

**M. 60** チラーグ・デリーのモスクとよぶ。チラーグ・デリーのダルガーの西北西、ババホール=コーディーの墓と伝えられる建物 (T. 133, 図版 120) のすぐ西北にある。

附図 H-12

三つの部屋からなる長方形の建物で、ドームはないが、ASIは、未完成に終わったものであろうと推定している。現在では、住居として用いられており、婦人の姿が多く認められたので、あえて立ち入ることを遠慮し、詳しい調査を行なわなかった。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-92; ASIⅢ-240



附図 12 M.60 南側面

**M.61** メヘローリーのイードガーとよぶ。メヘローリー部落の北方、クトゥブ・ミーナールの西方約900メートルにある。附図 F-12

このイードガーは、現在では15のミヒラーブをそなえ、両端にバステイオン風の塔をもつ長大な構築物で、全面に白く塗装がほどこされている。しかし、この建造物は、実

は、これまで、時期を異にして、いくたびか補修を受け、さらに、今世紀になってから行なわれた補修工事の結果、現在みるようなかたちになったものである。したがって、このイードガーの歴史が、いつの時代までさかのぼり得るかは、遺跡の現状からは、まったくわからない。しかし、14世紀末のティームールのデリー侵攻について記した史書に、デリーのイードガーについての記載があることから、この附近に、当時すでに、そうした建造物があったことが推定される。  
東研 K-57; ASI. II - 133



附図 12 M.61 東面

## 墓地

**G.1 墓地** メヘローリー部落の南端から西へ約300メートルにある。 附図 F-13 図版 56 a

この墓地は、現在では、五つのミヒラーブをもつ礼拝壁と、東門の痕跡とをのこすのみである。第Ⅱ期。

東研 K-113; cf. ASI III-111

**G.2 墓地** メヘローリー部落の南端の西側にある。 附図 F-13 図版 56 b, c

この墓地は、基壇の上であり、三つのミヒラーブをそなえる礼拝壁と、東南隅の正門と、それらをつなぐ囲壁とをもっている。正門は、ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開いており、東側に、この門に通じる階段がある。第Ⅱ期。

東研 K-114; ASI III-106

**G.3 墓地** トッグルカーバードの外城壁の西南隅の西方約100メートルにある。 附図 I-13 図版 57 a, b

この墓地は、現在では、礼拝壁の、三つのミヒラーブからなる部分と、1基の墓をのこすのみである。周辺には、いくつかの墓地の痕跡が認められる。第Ⅱ期。

東研 X-32

**G.4 墓地** ハウズ・ハースの貯水池の南堤の外側の、西寄りのところにある。 附図 F-11 図版 57 c, d

この墓地は、五つのミヒラーブをもつ礼拝壁と、東に門をそなえる囲壁とによってとり囲まれている。第Ⅱ期。

東研 V-19

**G.5 墓地** ハウズ・ハースの東南隅の遺跡群の南方約100メートルにある。 附図 G-11 図版 57 e, f

この墓地は、基壇の上であり、七つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえており、東側に、門があったらしいが、現在では、失われている。礼拝壁の両端には、小さなドームをいただくバステイオン風の塔がついているが、南側のものは、礼拝壁の一部とともに、すでに崩壊してしまっている。第Ⅱ期。

東研 V-21; ASI III-319

**G.6 墓地** メヘローリー部落の西方、部落を南下する道路から西へ約300メートルにある。 附図 F-13 図版 58 a

この墓地は、三つのミヒラーブをそなえた、長さ9メートルの礼拝壁をのこしているのみである。この礼拝壁は、

その西側にある墓建築〔T. 82 図版 103c〕をとり囲む囲壁を切断するかたちで建てられている。第Ⅱ期。

**G.7 墓地 (γ)** メヘローリー部落の南端から南へ約300メートル、南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 58 b

この墓地と思われる区域は、高い基壇の上であり、西側に、三つのミヒラーブをもつ小さな礼拝壁が立っている。



附図 20 G.7 礼拝壁の南側の門 断面

この礼拝壁の南側には、ドームをいただき、四方に入口と西側に階段をもつ四角平面の門が設けられている〔挿図 20〕。ASI は、この門を、ムガル時代のものとしているが、様式からみて、第Ⅱ期に属するものと考えたい。なお、墓地の東側には、西面する長方形の建物〔O. 31 図版 159a〕があるが、ほぼ同時代に、この墓地と関連して建てられたものかもしれない。第Ⅱ期。

東研 K-33; cf. ASI III-187

**G.8 墓地** ラードー・サラーイー部落の北東約500メートルにある。 附図 G-12 図版 58 c

この墓地は、七つのミヒラーブをもつ礼拝壁と、東南に門をひらく囲壁とによってとり囲まれているが、礼拝壁の中央部をのぞいて、崩壊が著しい。ASI は、北の囲壁に、752 A. H. (1351-52 A. D.) の年次と、シェイフ・ファリード・フッディーン (Shaikh Fa'id al-Din) の名を記した近代の碑文があったことを述べているが、現在では、失われてしまっている。南囲壁の外側には、井戸〔W. 8 挿図 52〕がのこっている。第Ⅱ期。

東研 X-22; ASI III-204

**G.9 墓地** チラーグ・デリー部落の西端にあり、ダルガーの西側囲壁のすぐ外にある。 附図 H-12 図版 58 d

この墓地は、低い基壇の上であり、三つのミヒラーブと、

両端に小塔をそなえる礼拝壁をもっている。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-89

**G.10 墓地(7)** ハウズ・ハースの東南約1キロメートル、メヘローリー・ロードの西側にある。附図.G-11 図版.58e

この墓地は、西南隅にあるバステイオン風の塔の附近をのこしているにすぎなかったが、1961年末の調査の際には、その塔も、写真(挿図.21)のように、なかば倒壊してしまっていた。周辺の状態から推すと、この墓地は、圓柱をめぐらし、東に門をそなえた、かなり大きな規模をもっていたものであるらしい。ASIによれば、プーター・グンバッド(Phutā Gumbad; こわれたドーム)とよばれていたという。

第Ⅱ期。 東研.Ⅷ-12; ASI.Ⅲ-336



挿図.21 G.10 西南隅の塔のなかば倒壊した状態

**G.11 墓地** メヘローリー部落の西方、部落を南下する道路から西へ約200メートルにある。附図.F-13 図版.58f

この墓地は、現在では、礼拝壁の一部と、西南隅のバステイオン風の塔の附近とをのこすのみで、ほとんど廃墟となっている。ASIは、この墓地の内部に、モーラーナー・ムクタディール(Maulana Muqta'dir)なるものの墓があり、また、西南隅には、三つのアーチをもつ附属建物が、崩壊した状態でのこっていることを記している。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-68; ASI.Ⅲ-114

**G.12 墓地** グリーン・パーク住宅地の西方、メヘローリー・ロードからハウズ・ハースにむかう道路の北側にある。附図.G-11 図版.59a

この墓地は、18.4メートルと17.7メートルのほぼ方形の平面をもち、多数の墓がのこっている。礼拝壁は、五つのミヒラーブと袖壁とをもち、両端に、花瓣形のドームをのせる、バステイオン風の小塔をそなえている。この墓地は、シハーブッディーン・タージ・ハーンの墓(T.55, 図版.92a, b)のほぼ真西の、約5メートル離れたところにある。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-10; ASI.Ⅲ-328

**G.13 墓地** チラーグ・デリー部落の北西隅の北方約

600メートル、シーリー城壁の東南部の外側にある。附図.H-11 図版.59b

この墓地は、七つのミヒラーブをもつ礼拝壁と、同じ高さの圓壁とによってとり囲まれており、中央ミヒラーブの上方をはしる帯状の文様が印象的である。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-67

**G.14 墓地** チラーグ・デリー部落の北西隅の北方約600メートル、シーリー城壁の東南部の外側にある。附図.H-11 図版.59c

この墓地は、七つのミヒラーブと袖壁をもつ礼拝壁と、東に門を開く圓壁とによってとり囲まれている。その内部には、ほぼ中央にある十二本柱の墓建築(T.109, 図版.112b)をはじめ、多くの墓石が散在している。礼拝壁の中央ミヒラーブの文様と、上部をはしる帯状の文様とは、礼拝壁の背後の両端に立つ小塔とともに、この建物を印象深いものにしてている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-43-2; ASI.Ⅲ-245

**G.15 墓地** ムニールカ部落の北西約800メートルにある。附図.E-10 図版.60a

この墓地は、基壇の上であり、ミヒラーブと袖壁、および両端にバステイオン風の小塔をもつ礼拝壁をそなえている。中央ミヒラーブの左右は、背後に貫ぬかれている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-22; ASI.Ⅲ-325

**G.16 墓地** ムニールカ部落の西北西約1.5キロメートルにある。附図.G-10 図版.60b

この墓地は、基壇の上であり、西の部分に、五つのミヒラーブと袖壁、および両端に小塔をもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-44; ASI.Ⅳ-133

**G.17 墓地** ムニールカ部落の西北西約1.2キロメートルにある。附図.E-10 図版.60c

この墓地は、基壇の上であり、その西の部分に、七つのミヒラーブと袖壁、および両端の小塔とをもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-38; ASI.Ⅳ-124

**G.18 墓地** ムニールカ部落の北西約1.5キロメートルにある。附図.E-10 図版.60d

この墓地は、基壇の上であり、西の部分に、五つのミヒラーブと袖壁、および両端の小塔をもつ礼拝壁をそなえているが、北側の小塔は、すでに失われている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-40; ASI.Ⅳ-132

**G.19 墓地** ムニールカ部落の北北西約700メートルにある。附図.E-10 図版.60e

この墓地は、基壇の上であり、ミヒラーブと袖壁、およ

び両端にミナール風の小塔をもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-21; ASI、Ⅱ-323

**G.20 墓地** ムニールカ部落の北西約1.2キロメートルにある。 附図 E-10. 図版 60f

この墓地は、基壇の上であり、西の部分に、五つのミヒラーブと袖壁、および両端の小塔をもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-41; ASI、Ⅱ-129

**G.21 墓地** ムニールカ部落の北西約1.1キロメートルにある。 附図 E-10. 図版 60g

この墓地は、基壇の上であり、西の部分に、五つのミヒラーブと袖壁、および両端の小塔をもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-48; ASI、Ⅱ-130

**G.22 墓地** ムニールカ部落の東方約1キロメートル、新設団地の南端近くにある。 附図 F-11. 図版 61a

この墓地は、七つのミヒラーブと袖壁、および両端にミナール風の小塔をそなえた礼拝壁をもっている。墓地全体は、竈をめぐらす低い基壇の上におかれている。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-35; ASI、Ⅱ-326

**G.23 墓地** ベーガンブルのモスクの北方約500メートル、チラグ・デリー・ロードの西側にある。 附図 G-11. 図版 61b

この墓地は、基壇の上であり、七つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえているが、北の部分は、すでに崩壊している。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-90

**G.24 墓地** ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。 附図 F-10. 図版 61c

五つのミヒラーブと袖壁とをもつ比較的小さな礼拝壁をそなえており、その両端と中央ミヒラーブの左右、および袖壁の末端には小塔が立っている。現在では、南側の袖壁は消失してしまっている。第Ⅲ期。

東研、Ⅷ-20; ASI、Ⅱ-319

**G.25 墓地** ムニールカ部落の西北西約1.4キロメートルにある。 附図 E-10. 図版 61d

この墓地は、四隅に小塔をもち、低い囲壁に囲まれた基壇の上であり、西の部分に、五つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。

東研、Ⅷ-43; ASI、Ⅱ-128

**G.26 墓地** ムニールカ部落の西北西約1.5キロメートルにある。 附図 E-10. 図版 61e

この墓地は、基壇の上であり、西の部分の礼拝壁は、すでに、崩壊し、袖壁をのこすのみである。第Ⅲ期。

東研、Ⅷ-45

**G.27 墓地** ムニールカ部落の北西約1.2キロメートルにある。 附図 E-10. 図版 61f

この墓地は、基壇の上であり、西の部分に、一つのミヒラーブをもつ小さな礼拝壁をそなえているのみである。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-37

**G.28 墓地** ムニールカ部落の西北西約1.4キロメートルにある。 附図 E-10. 図版 61g

この墓地は、基壇の上であり、西の礼拝壁は、わずかに、北側の袖壁をのこすのみで、すでに崩壊してしまっている。第Ⅲ期。 東研、Ⅷ-47

**G.29 墓地** ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。 附図 F-10. 図版 62a

この墓地は、九つのミヒラーブと南北両端に袖壁とをそなえた長い礼拝壁をもっており、中央ミヒラーブのある部分は、一段と高くなっている。この礼拝壁の東には、墓建築〔T. 65, 図版 95c〕があるが、この両者は、なんらかの関連をもっているのかもしれない。第Ⅲ期。

東研、Ⅷ-18; ASI、Ⅱ-314

**G.30 墓地** バサントナガル部落の南方約450メートルにある。 附図 E-10. 図版 62b

この墓地は、七つのミヒラーブと袖壁、および両端に小塔をもつ礼拝壁をそなえている。ミヒラーブは、現在では、いずれも背後に貫かれてしまっている。第Ⅲ期。

東研、Ⅷ-33; ASI、Ⅱ-115

**G.31 墓地** ジャーブル=ジャート部落の北北西約700メートル、シーリー城砦の西北隅の外側にある。 附図 G-11. 図版 62c

この墓地は、竈をめぐらす高い基壇の上であり、七つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえているが、その南の部分は、崩壊してしまっている。西をのぞく他の三方には、低い囲壁がめぐらされていて、東北隅には門がある。ASIは、この墓地の俗称を、ダルヴェーシェ=シャー(Darwish Shah) のモスクと記している。第Ⅲ期。

東研、Ⅷ-3; ASI、Ⅱ-304

**G.32 墓地** シェイフブル部落の西方約500メートル、チラグ・デリー・ロードのすぐ東側にある。 附図 H-12. 図版 63a

この墓地には、三つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁がよくのこっているが、墓は荒れはてて、跡かたもなくなっている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-69; cf. ASI.Ⅱ-262

**G.33 墓地** チラーグ・デリー部落の西のはずれにあるダルガーの西端に位置する。 附図. H-12 図版. 63h

この墓地は、三つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえており、こじんまりした印象を与える。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-27; ASI.Ⅱ-224

**G.34 墓地** ヘルキー部落の北方約200メートルにある。 附図. H-12 図版. 63c

五つのミヒラーブをもつ礼拝壁をのこしているが、南の部分はすでに崩壊している。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-100

**G.35 墓地** チラーグ・デリー部落の北西隅の北方約600メートル、シーリー城壁の東南部の外側にある。 附図. H-11 図版. 63d

この墓地は、三つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-65

**G.36 墓地** クトゥブ・ミーナールの東南約800メートルにある。 附図. F-13 図版. 63e

この墓地は、五つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-141

**G.37 墓地** クトゥブ・ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図. F-13 図版. 63f

この墓地は、基壇の上であり、その礼拝壁は、三つのミヒラーブと袖壁とをもっている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-93; ASI.Ⅱ-171

**G.38 墓地** ラードー・サラーイー部落の北東約250メートルにある。 附図. G-12 図版. 63g

この墓地は、倉をめぐらす高い基壇の上であり、三つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえている。礼拝壁の両端には、ドームをいただくバステイオン風の塔があって、この墓地の目立った特色をなしている。東側には、小さな門があるが、階段は見あたらない。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-15; ASI.Ⅱ-203

**G.39 墓地** ベーガンブルのモスクの北方約500メートル、チラーグ・デリー・ロードの西側にある。 附図. G-11 図版. 63h

この墓地は、崩壊が著しく、現在では、礼拝壁の北端と、袖壁、およびバステイオン風の塔をのこしているにすぎない。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-91

**G.40 墓地** ラードー・サラーイー部落の内部にあり、クトゥブ・バーダルブル・ロードの北側にある。 附図. G-12 図版. 64a

この墓地は、礼拝壁と東門、およびそれらを結ぶ回壁によってとり囲まれている。礼拝壁は、七つのミヒラーブをもち、その両端には、バステイオン風の塔をそなえている。この墓地には、かつては、多数の墓があったらしいが、現在では、小学校が建てられ、運動場として整地されており、東門もまた、学校門として利用されている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-14,35; ASI.Ⅱ-192

**G.41 墓地** クトゥブ・ミーナールの南方約900メートルにある。 附図. F-13 図版. 64b

この墓地は、五つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえており、その中央の部分は、一段と高くなっていて、文様と碑文とによって装飾されている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-134; ASI.Ⅱ-152

**G.42 墓地** メヘローリー部落の南端の西側方、シャムジャーターラブ (Shamsi Talab) とよばれる池の西北岸の近くにある。 附図. F-13 図版. 64c

この墓地は、低い基壇の上であり、七つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-117

**G.43 墓地** ラードー・サラーイー部落の西方約300メートル、メヘローリーのバイバスの西側にそってある。 附図. F-12 図版. 64d

この墓地は、基壇の上であり、五つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえており、その中央部分が、一段と高くなっている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-10; ASI.Ⅱ-196

**G.44 墓地** ラードー・サラーイー部落の西方約300メートル、クトゥブ・バーダルブル・ロードの南側にある。 附図. F-13 図版. 64e

この墓地は、基壇の上であり、礼拝壁と低い回壁に囲まれている。礼拝壁は、七つのミヒラーブと袖壁とをもち、中央の部分が、一段と高くなっている。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-36; ASI.Ⅱ-197

**G.45 墓地** クトゥブ・ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図. F-13 図版. 64f

この墓地には、三つのミヒラーブと袖壁をもつ礼拝壁があるが、現状からみて、この礼拝壁は、おそらくは、未完成のままにおわったもののように思われる。第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-96



**G.46** 墓地 クトゥブ・ミーナールの東南約800メートルにある。 附図 F-13 図版 64g

この墓地は、ミヒラーブと袖壁、および両端の小塔をもつ小さな礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研 K-140

**G.47** 墓地 メヘローリー部落の南端から南西約300メートル、南下する道路から西へ約150メートルにある。

附図 F-13 図版 65a

この墓地は、五つのミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁をそなえ、その中央の部分は、一段と高くなっている。様式からみて、あるいはムガル初期に属するものかもしれない。第Ⅲ期(?)。 東研 K-88, ASI III-95

**G.48** 墓地 サイドゥル・アジャーイブ部落の西北約550メートル、クトゥブ・バーダルブル・ロードの南側にある。 附図 G-13 図版 65h

この墓地は、崩壊著しく、五つのミヒラーブをもつ礼拝壁の、南の部分は失われてしまっている。第Ⅲ期。

東研 X-25

**G.49** 墓地 むニールカ部落の西北西約1.5キロメートルにある。 附図 E-10 図版 65c

この墓地は、五つのミヒラーブをもつ礼拝壁を西にそなえており、その前方に、1基の大きな墓石がのこっている。第Ⅲ期。 東研 VII-46

**G.50** 墓地 メヘローリー部落の南端から南南西約3.7キロメートル、スルターンブル部落の南方約800メートルのところにある。 附図 E-14 図版 65d

この墓地は、三つのミヒラーブからなる礼拝壁をもっており、スルターンブルのパーオリー [W. 25, 図版 131] の東南隅に接してある。第Ⅲ期。 東研 K-76, cf. ASI III-143

**G.51** 墓地 ライー・ビトラーの城壁の北東隅と、ジャバーンバナー南城壁との接点より西北西約200メートルにある。 附図 G-12 図版 65e

この墓地は、基壇の上であり、西の部分に、ミヒラーブをもつ礼拝壁をそなえているが、現在では、その両端はくずれおちてしまっている。第Ⅲ期。 東研 VIII-89

**G.52** 墓地 メヘローリー部落の南端から南西約300メートル、南下する道路から西へ約150メートルにある。

附図 F-13 図版 65f

この墓地は、東西に長い長方形の平面をもち、三つのミヒラーブをそなえる礼拝壁と、囲壁とによってとり囲まれている。あるいは、ムガル時代に属するかもしれない。第Ⅲ期(?)。 東研 K-138

**G.53** 墓地 クトゥブ・ミーナールの南南西約750メートルにある。 附図 F-13 図版 65g

この墓地は、基壇をもたず、東門をそなえた囲壁と礼拝壁とによってとり囲まれている。礼拝壁は、五つのミヒラーブをもっているが、そのうち、南寄りの二つのミヒラーブの位置はいささかずれている。第Ⅲ期。 東研 K-102

**G.54** 墓地 クトゥブ・ミーナールの南南西約750メートルにある。 附図 F-13 図版 66a

この墓地の礼拝壁は、三つのミヒラーブをもち、袖壁はない。なお、1961年の補足調査時には、礼拝壁の南の部分が、写真〔邦図22〕のようにすでに倒壊していた。第Ⅲ期。

東研 K-101



邦図 22 G.54 礼拝壁南部分の崩壊後の状態 東研画

**G.55** 墓地 クトゥブ・ミーナールの南南西約750メートルにある。 附図 F-13 図版 66b

この墓地は、三つのミヒラーブをもつ礼拝壁をそなえている。第Ⅲ期。 東研 K-104

**G.56** 墓地 クトゥブ・ミーナールの南南西約750メートルにある。 附図 F-13 図版 66c

この墓地には、三つのミヒラーブをもつ礼拝壁がある。第Ⅲ期。 東研 K-99

**G.57** 墓地 クトゥブ・ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図 F-13 図版 67a

この墓地は、竈をめぐらす高い基壇の上であり、東側に階段のある門をもっている。礼拝壁は、三つのミヒラーブと袖壁とをそなえている。第Ⅲ期。

東研 K-92; ASI III-172

**G.58** 墓地 クトゥブ・ミーナールの南方約1.5キロメートルにある。 附図 F-13 図版 67b

この墓地は、現在では、廃墟となっており、わずかに礼拝壁の一部と、その両端のバステーション風の塔とがのこっているにすぎない。礼拝壁は、七つのミヒラーブをもっていたらしく、中央部分は、一段と高くなっており、ミヒラーブの周囲に、小さな竈がめぐっている。第Ⅲ期。

東研 K-21; cf. ASI III-161

**G.59** 墓地 クトップ・ミーナールの南南西約700メートルにある。附図 F-13 図版 67c

この墓地は、低い基壇の上であり、東と南に門をそなえる。低い開壁によってとり囲まれている。礼拝壁は、五つのミヒラーブと袖壁とをもっている。第Ⅲ期。

東研 K-95; ASI III-173

**G.60** 墓地 メヘローリー部落の南西隅にある。附図 F-13 図版 68

この墓地は、現在では、敷地の大部分に邸宅が立っていて、わずかに礼拝壁をのこすのみである。この礼拝壁は、11のミヒラーブをもち、中央ミヒラーブの部分と、左右へ三つ目のミヒラーブの部分とが、一段と高くなっていて、小さな龕によって飾られている。中央のミヒラーブは、一面に、文様と碑文とによっておおわれている。礼拝壁の両端には、ドームをいただくバステイオン風の塔があるが、現在では、北のもののみがのこっており、礼拝壁の表側と裏側とを結ぶ通路となっている。礼拝壁の中央ミヒラーブの下の部分に現存する碑文に、917 A. H. (1511 A. D.) の年次が記されている。これは、ローディー朝のシカンダル・ジャーの治世にあたる。第Ⅲ期。

東研 K-65; ASI III-121

**G.61** 墓地 メヘローリー部落の南端から約300メートル、南下する道路にそってその西側にある。附図 F-13 図版 69

この墓地は、袖壁をそなえた礼拝壁と、南北の門とをもっている。礼拝壁は、七つのミヒラーブからなり、その中央の部分は、4本の小塔をかかけ、一段と高くつくられている。礼拝壁の両端には、花楸形のドームをいただくバステイオン風の塔が立っている。第Ⅲ期。

東研 K-43; ASI III-89

**G.62** 墓地 クトップ・ミーナールの南方約1.5キロメートルにある。附図 F-13 図版 70a

この墓地は、四周に龕をめぐる、ほぼ方形の基壇の上におかれている。礼拝壁は、七つのミヒラーブをもち、その中央と、左右へ二つ目の部分は、一段と高くなっている。南北の袖壁は、それぞれ三つの龕をそなえており、中央の部分が、同じように一段と高くなっているのはめずらしい。基壇の東には門があり、また、四隅には、ドームをいただくバステイオン風の塔が設けられている。この建造物は、ムガル時代に属する可能性も大いにあるが、一応採録しておく。第Ⅲ期(?) 東研 K-29; ASI III-161

**G.63** 墓地 メヘローリー部落の南端から約300メートル、南下する道路にそってその西側にある。附図 F-13 図版 70b

この墓地は、西側にある礼拝壁と、南側の、四つの部屋からなる、屋根の平坦な建物とをもっている。礼拝壁は、五つのミヒラーブからなり、その両端と中央部分の左右に、小塔をそなえている。南側の建物は、密室となっている東端の部屋をのぞいて、他の3室は、北に入口をひらいている。第Ⅲ期。

東研 K-44; ASI III-88

**G.64** 墓地(?) メヘローリー部落の南端の東南方、シホムグー・ターサーブとよばれる池の西北岸の近くにある。附図 F-13 図版 70c

この遺跡をやっとさがしあてたときに、調査中の軍隊のすかたに気がついたので、わずかに1枚の写真を撮影したのみで退散した。ASIは、西側の礼拝壁と、南側の3室からなる建物とをもつモスクとしているが、一見したところでは、礼拝壁は破壊され、南側の建物もまったく改変されてしまっている。建物の配置を、他の同種のものと比較して、ここでは、一応、墓地としておくが、年代については、あるいは、ムガル時代に属する可能性もなくはない。第Ⅲ期(?)。

東研 K-115; ASI III-109

**G.65** ソーハジ・ブルジ(Sohan Burj)として知られており、メヘローリー部落の南端から約300メートル、南下する道路にそってその東側にある。附図 F-13 図版 71

この墓地は、高い基壇の上であり、ミヒラーブのある礼拝壁と、四つの部屋からなる北側の建物と、重および北東の門とをもっている。礼拝壁の中央の部分は、一段と高くなっていて、その両端に小塔をかかけ、ミヒラーブの周囲を小さな龕で飾っている。北側の建物は、平坦な屋根をもち、東の3室と西の1室とにわかれ、西の部屋には地下室がある。この建物の様式からみて、この墓地は、あるいはムガル初期に属する可能性もまったくないとはいえない。なお、ソーハジ・ブルジというのは、美しい塔を意味する言葉である。第Ⅲ期(?)。

東研 K-34; ASI III-86

**G.66** 墓地 クトップ・ミーナールの南方約1.5キロメートルにある。附図 F-13 図版 72

この墓地は、四周に龕をめぐる、ほぼ方形の基壇の上におかれ、中央とその北寄りのところに、それぞれ、基壇をもつ墓がある。西側は、中央に三つのミヒラーブをもつ礼拝壁と、その左右にある、それぞれ間口3間・奥行1間の、平坦な屋根をもつ建物とからなっている。東側には、ドームをいただく四角平面の門があり、その東面の入口の左右には、張り出し窓がついている。ASIは、ムガル時代のものとしているが、その可能性もないとはいえない。第

Ⅲ期(イ) 東研 K-28; ASI.Ⅲ-160

**G.67 墓地** ハクズ・ハースの遺跡群の東方600メートル、メヘローリー・ロードからハクズ・ハースに向かう道路の南側にある。 附図 G-11

この墓地は、七つのミヒラーブをもっていたと思われる礼拝堂をそなえているが、現在では崩壊が著しい(挿図 23)。

第Ⅲ期 東研 M-15



挿図 23 G.67 東北より

**G.68 墓地** クトッブ・ミーナールの南南西約750メートルにある。 附図 F-13

この小さな墓地は、低い基壇の上であり、現在では、三つのミヒラーブをもつ礼拝堂をのこすのみである(挿図 24)。

第Ⅲ期 東研 K-98



挿図 24 G.68 東正面

**G.69 墓地** クトッブ・ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図 F-13

この墓地は、基壇の上であり、西側の中央に、一つのミヒラーブをもつ小さな礼拝堂をもつのみである(挿図 25)。

第Ⅲ期 東研 K-94



挿図 25 G.69 東正面

**G.70 墓地** メヘローリー部落の北にあたり、クトッブ・ミーナールの西方約950メートルにある。 附図 F-12

この墓地は、一つのミヒラーブからなる小型の礼拝堂をもっているにすぎない(挿図 26)。

第Ⅲ期 東研 K-59



挿図 26 G.70 東正面

**G.71 墓地** ベーガンブル部落の北のはずれにあり、ビジョイ・マンザールのマウンドの北の部分にある。 附図 G-12

この墓地は、現在、礼拝堂中央の重厚な石造のミヒラーブをのこしている(挿図 27)。ASIは、この墓地には、ローディー朝の聖者、シエイフ・ハサン・タヒール (Shaykh Hasan Tahir) とその一族とが葬られたという伝説を紹介している。第Ⅲ期。



挿図 27 G.71 中央ミヒラーブ 東正面

東研 M-101; cf. ASI.Ⅲ-274

**G.72 墓地** クトッブ・ミーナールの南南西約700メートル、ラージュン・キパーイーグとよばれるバーオリー(W. 26, 図版 132)のすぐ東南にある。 附図 F-13

この墓地は、現在では、まったくの廃墟となっており、わずかに、囲壁の一部と、くずれおちた南門の花崗形ドームの断片とがのこっている。ASIによれば、この門の東面には、ローディー朝のシカンダル・シャーの名をもつ碑文があったという。第Ⅲ期。

東研 K-90; ASI.Ⅲ-167



挿図 28 G.72 崩壊した門のドームと囲壁の一部 南より

## 墓 建 築

**T.1** スルターン・シ・ガーリー (Sultān Ghārī) としてひろく知られており、クドゥブ・ミーナールの四方約19キロメートル、マヒバールブル部落の東南約1.4キロメートル、メヘローリー・ロードの南側にある。附図 D-12 図版 73~74

この建造物は、高い基礎の上に立ち、四隅にバステーション風の塔をそなえた囲壁によってとり囲まれている。この囲壁の西側の部分は、奥行1間の列柱の間をなしており、その中央部分は、前方が東へ張り出していて、白大理石の柱が、八角形のピラミッド型のドームを支えている。この奥壁にあるミヒラーブは、奴隷王朝初期の特徴を示す、豊富な文様と碑文によって装飾されている。内庭をへだてて囲壁の東側にある部分もまた、列柱の間をなしており、その中央の間から東の方へ、ドームをいただく正門が張り出している。内庭の中央には、周囲に白大理石の石積みをもつ、八角形のプラットフォームがあり、その東側に、頂部に達する階段が設けられている。このプラットフォームは、八角形の地下室の壁根をなしており、南側にある小さな入口から、階段によって、この地下の墓室に下りることができる。墓室には、4基の墓がのこっているが、そのうちの中央のもの、あるいは西寄りの、もっとも大きいものが、ナーシルッディーン・マブムードの墓であろう。

東門入口の周囲に、奴隷王朝のスルターンである、シャムスッディーン・イレトクミシュと、その子マブムードの名、および 629 A. H. (1231-32 A. D.) の年次を記した碑文がある。碑文によれば、この建造物は、イレトクミシュによって創建されたものであるが、トゥグルク朝後期の文献は、フィーローズ・シャー・トゥグルクによる補修について記しており、たしかに、その時代の特徴を示す部分があり、この建物の随処に認められる。第1期。

東研・K-1: ASLN-105

**T.2** イレトクミシュ (Iltutmish) の墓として知られており、メヘローリー部落の東北隅、クドゥブ・モスクの西翼側にある。附図 F-12 図版 75

この墓は、西にミヒラーブ、他の三方に入口をもつ、外辺12.8メートルの四角平面の建物で、現在、屋根はない。もともと屋根がつくられなかったのか、あるいは後代に崩壊したものかは、論議をよんだところであるが、断言はできないにせよ、後者の可能性が大きい。外部は、入口の周

辺に文様がほどこされているが、これに対して、内部は、一部をのぞいて、檜面全体が碑文と文様におおわれていて、著しい特色をなしている。室内の中央には、白大理石の堂々たる墓石がおかれており、また、床下には地下室が設けられている。現在、北側に、地下に通じる階段があるが、隙壁があって、室内に入ることはできない。この建物が、伝えられるように、奴隷王朝のスルターン・シャムスッディーン・イレトクミシュの墓であるかどうかについては、いささか疑問の余地がのこされている。第1期

東研・K-6: ASLN-9

**T.3** バルバン (Ballban) の墓と伝えられており、クドゥブ・ミーナールの南南東約700メートルにある。附図下-13 図版 76a

この墓は、本来、三つの部屋からなっており、中央の、四角平面をもつ主室は、四方に入口を開いている。東西の側室は、南北に長い長方形であるが、現在では焼燼と化し、西の側室は、まったくくずれおちてしまっている。主室のドームはいまはないが、内部の一隅にはスライファアーチがのこっていて、その特徴は、デリーのイスラーム建築史



図版 20 T.3 主室内部のスライファアーチ

のうえで、問題とされてきたものである(附図 20)。建物の表面を漆喰で仕上げた痕跡が、ところどころにうかがわれ、とくに、南正面入口の付近には、漆喰文様の断片がのこっている。これらのものが、本来のものかどうかは、なお疑問が残るが、注目される場所である。これまでの研究者のほとんどすべてが、この建物を、奴隷王朝後期のスルター

ン・ガヤースッディーン・バルバンの墓と信じて疑わないが、実は、それを裏づける確証はないのである。

このバルバンの墓とされる建物の約50メートル南方に、四角平面で、ピラミッド型の屋根をもち、東を除く三方に入口を開く建物がのこっている〔挿図.30〕。この建物の東につづいて、壁やその他の構築物の痕跡がみとめられる。ASIは、この建物を、墓としているが、現在、墓石はなく、おそらく、囲壁をもった門であったかもしれない。この建物は、その北方にある、バルバンの墓といわれている建物と、構造・様式上、類似点をもっており、おそらくは、同時代に、関連をもって建てられたものかもしれない。第Ⅰ期。 東研.Ⅱ-26,135; ASI.Ⅱ-147,148



挿図.30 T.2 南方にある建物 北東より

**T.4** アラーウッディーン・ハルジー (Ala'ud-Din Khalji) の墓として知られており、メヘーリー部落の西北隅、クトップ・モスタの西南方にある。 附図.F-12 図版.76b  
この墓は、クトップ・モスタ〔M.1, 図版.1~10〕の西南にあるアラーウッディーンのマドラッサ〔O.23, 図版.155a〕とよばれる建物群の、南の一角をなしている。西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開く四角平面の建物であるが、現在、ドームはなく、また、壁面も、割り石と漆喰とが露出したままになっており、近代の補修のあとが著しい。内部の中央に、一基の墓の痕跡が認められる。この建物の北の前方には、小さな部屋が附属していたらしく、基部と壁面の一部とがのこっている。この墓の東と西には、通路をへだてて、南北に細長い建物がのこっているが、同じように、天井もなく、壁面の仕上げもみられない。この墓が、本来未完成のままに放置されたものか、あるいは、後代に破壊されたものかは、明らかではないが、おそらくは、前者であろう。また、この墓を、ハルジー朝のアラーウッディーン・ムハンマドの墓とする伝承についても、歴史的には、確かな証拠はほとんどないのである。第Ⅰ期。

東研.Ⅱ-9; ASI.Ⅱ-10

**T.5** 墓建築 クトップ・ミーナールの南南西約1.7キロメートル、メヘーリーのバイパスの南側にある。 附図.F-13, 図版.76c

ドームをいただく、外辺約5メートルの四角平面の建物で、四方に入口を開いている。この入口の周曲には、漆喰の碑文と文様の装飾がほどこされていて、この建物の特徴をなしている。この装飾といい、ドームやスフィンチ、その他の部分の様子といい、デリーの建造物のなかでは特異な存在であり、時代区分の上でもむずかしい問題をふくんでいるが、ここでは、一応、デリー諸王朝時代初期の後半に属するものと考えたい。第Ⅰ期。

東研.Ⅱ-31; ASI.Ⅱ-189

**T.6** ガヤースッディーン・トッグルク (Ghayath al-Din Tughluq) の墓として、ひろく知られており、トッグルカーバード城砦の南方、クトップ・バーダルブルーロードの南側にある。 附図.J-13 図版.77

この建物は、自然の岩盤を利用して、その上に構築された、不等辺五角形の小さな城砦の内部の、北西寄りのところに立っている。外辺18.9メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをそなえ、他の三方に入口を開いている。つよい傾斜をもつ壁面は、赤い砂岩でおおわれ、中央入口のアーチとその周辺や、四つの小窓風の飾りに用いられた白い大理石が、ドームをおおう一面の白大理石とともに、この建物の外観に、効果的な美しさをそえている。内部もまた、壁面の下の部分には赤を、上の部分からドームにつづく面には白をとるように、配色への考慮が払われている。赤い砂岩を敷きつめた床面には、3基の墓石が並んでいるが、中央のものが、スルターン・ガヤースッディーン の墓とされ、他の二つは、その妃マブドゥーム・ジャハーンと、その子のスルターン・ムハンマド・ビン・トッグルクの墓と伝えられている。ガヤースッディーンが、ここに葬られたことは、ほとんど疑いないところであろうが、その後継者であるムハンマド・ジャーの墓とされるものについては、なお、議論の余地がほどこされている。

この建物をとり囲む囲壁は、四つのバステイオンをもち、壁面に狭間の列が並んでいる。囲壁の内部は、多くの小部屋を運んでいる。北側のバステイオンの内部には、八角平面の、ザファル・ハーンを葬ったとされる墓建築〔T.7, 図版.78a, b〕があり、また、西側のバステイオンの内部にも、同じく、八角平面の建物の痕跡が認められる。さらに、東南のバステイオンは、地下が貯蔵庫となっていたらしい。囲壁の南側には、外側にある井戸から水を汲みあげる施設をもつ部屋がある。この城砦の入口は、北のバステイオンの東側にあり、その前庭とトッグルカーバードの城砦〔O.2, 図版.142~143〕とは、おそらくは同時代の、橋を思わせる通路によって結ばれている。第Ⅱ期。

東研.Ⅱ-4-1; ASI.Ⅱ-2

**T.7** ザファル・ハーン (Zafar Khan) の墓とされている

もので、トッブルカーバード城砦の南方の、ガヤースッディーン=トッブルクの墓として知られている建物 (T. 6, 図版 77) をとり囲む小城砦の一角にある。 附図 J-13, 図版 78 a, b

この墓は、小城砦の北のバステイオンのなかにあり、ドームをいただく、外辺 3.3 メートルの八角平面の建物で、基台の上に立っている。壁面とドームの内部は、赤い砂岩を全面に用いているが、ドームの外部は、白大理石でおおわれ、いわゆるガヤースッディーン=トッブルクの墓と照応している。内部には、2 基の小さな墓石がある。南の入口のリンテルには、三個所にわたって、ガヤースッディーン=トッブルク=シャーの名と、ゼファル=ハーンの名を記した碑文がのこっている。この碑文が夭折したと伝えているゼファル=ハーンなる人物の生涯については、よくわからないが、この建物が、その人物の墓として、スルターン=ガヤースッディーンの名によって建てられたことは、上述の碑文のあり方と、その内容からみて、信じていいかもしれない。第 II 期。 東研 X-4-4; ASI III-3

**T. 8** ラール=グンバッド (Lal Gumbad) として知られ、シェイブ=カビールッディーン=オーリヤー (Shahī Kabīr al-Dīn Auliya) の墓と伝えられている。シェイブ部族の西方約 500 メートル、チラーグ=デリー=ロードのすぐ北側にある。 附図 H-12, 図版 78 c, d

外辺 13.5 メートルの、ドームをいただく四角平面の建物で、西側にミヒラブをもち、他の三方に入口を開いているが、南と北の入口は、赤い砂岩のスクリーンによって閉ざされている。内外の壁面とドーム天井とは、赤い砂岩の切り石でおおわれており、また、東・南・北の中央アーチは、白大理石の帯によって縁どられている。内部には、8 基の墓石がのこっている。この建物は、シェイブ=カビールッディーン=オーリヤーの墓と伝えられているが、それを裏づける確かな証拠はない。第 II 期。

東研 VII-15; ASI III-262

**T. 9** フィーローズ=シャー=トッブルク (Firuz Shah Tughluq) の墓で、ハウズ=ハースの東南隅に立っている。 附図 G-II, 図版 79

この墓は、ハウズ=ハースの貯水池の東南隅に立ち並ぶ建物群の中央に位置しており、ドームをいただく、四角平面の建物である。南と東には、入口を開いているが、北と西とに、この建物の北側および西側につづくコドラッサ (O. 24, 図版 155 b~157) に通じる鐘型の通路をもっている。内部には 4 基の墓石があるが、ほぼ中央の最大のものが、おそらく、フィーローズ=シャーのものであろう。入口の内部と、スクリーンアーチの部分、およびドームの基部は、碑文と文様とで飾られており、単調な墓室内部の雰囲気

気を、にぎやかなものとしている。

南面入口のアーチに、スルターン=フィーローズ=シャーの名と、さらに、913 A. H. (1508 A. D.) の年次とともに、ローディー朝のスルターン=シカンデルの名をも記した碑文がかかげられている。この碑文は、ローディー朝のシカンデル=シャーの時代に、この墓に補修が加えられたことを示すものと推定されるが、ドーム内部をうずめる交叉アーチや多数の円形文様は、おそらく、このときの補修に際してほどこされたものであろう。なお、この墓の南側にあるせまい前庭は、基台の上に立つ欄干によってとり囲まれているが、この欄干は、近年になって復元されたものである。第 II 期。 東研 II-11-1; ASI III-308

**T. 10** 墓建築 グリーン=パーク住宅地の西方、メヘーリー=ロードからハウズ=ハースにおかう道路の北側にある。 附図 G-11, 図版 80 a

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開いている。第 II 期。 東研 VI-7; ASI III-331

**T. 11** シェイブ=オスマーン (Shahī Uthmān) の墓と伝えられているもので、キルキ=部落の西北約 300 メートルにある。 附図 H-12, 図版 80 b

ドームをいただく、外辺 7.3 メートルの四角平面の建物で、南に入口をもっている。内部には、墓の痕跡が認められる。この建物は、14 世紀後半の、シェイブ=オスマーンの墓と伝えられているが、真偽のほどは明らかではない。第 II 期。 東研 VII-32; ASI III-218

**T. 12** 墓建築 (†) フマーニーンの墓の西方約 800 メートル、ローディー=ロードにそってすぐ南側にある。 附図 I-9, 図版 80 c

ドームをいただく四角平面の建物で、南北に入口をもっている。ASI は、これを門かもしれないと推定しているが、確証はない。現在、墓石は認められないが、ここでは、一応、墓と考えておきたい。この建物の年代については、ASI はムガルとしているが、その様式から第 II 期に分類しておく。第 II 期。 東研 III-12; ASI III-92

**T. 13** 墓建築 ムニールカ部落の東方約 800 メートル、ハウズ=ハースの貯水池の西南隅から西南西約 700 メートルにある。 附図 E-11, 図版 80 d

ドームをいただき、西にミヒラブをもち、三方に入口を開く四角平面の建物である。この墓は、その西方にあるモスク (M. 28, 図版 36 b, c) の前庭に立っており、ほぼ同時代に属すると思われるが、細部の様式に若干の違いが認められる。この墓は、ハッジー=ランガ (Hajjī Langa) のグンバッドとよばれていたという。第 II 期。

東研.Ⅷ-9; ASI.Ⅲ-322

- T.14** 墓建築(?) エザームッディーン=オーリヤ  
ーの墓の東南約40メートルにある。 附図. I-9. 図版.  
80e

ドームをいただく四角平面の建物で、南と北とに入口を  
開いている。ASIは、すでに崩壊したなんらかの建造物の  
門ではないかと記しているが、あるいはそうであったかもし  
れない。しかし、現在では、北の入口は閉ざされ、サイ  
イド=アフマド(Saiyid Ahmad)なる聖者の墓とされており、  
塗装やその他の改変の手が加えられている。第Ⅱ期。

東研.Ⅲ-28; ASI.Ⅰ-234

- T.15** 墓建築(?) キルキー部落の東北東約600メー  
トル、チラーグ=デリー部落の囲壁の西南隅から南へ300  
メートルにある。 附図. H-12. 図版. 80f

ドームをいただく四角平面の部屋の南に、平坦な屋根を  
もつ部屋が附設されかたちになっている。変わった平面を  
もつ建物で、四方に入口を開いている。現在では、内部に  
墓石の痕跡は認められないが、墓である可能性が大きい。  
第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-63

- T.16** 墓建築 グリーン=パーク住宅地の西方、メヘ  
ローリー=ロードからハウズ=ハウスにむかう道路の北側  
にある。 附図. G-11. 図版. 81a

この墓は、ドームをいただく四角平面の建物で、西にミ  
ヒラーブをそなえ、他の三方に入口を開いている。この建  
物の西側には、三つのミヒラーブと袖壁とをもち、背後に  
4本の小塔をそなえた礼拝壁が立っている。この建物は、  
カーリー=グムティー(Kali Gumbi, 黒い小ドーム)とよば  
れていたという。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-8; ASI.Ⅲ-329

- T.17** 墓建築(?) メヘローリー部落の南端から南  
へ約200メートル、南下する道路の東側にある。 附図. F-  
13. 図版. 81b

ドームをいただく、外辺約6.5メートルの四角平面の建  
物で、東と西とに入口を開いている。現在では、墓石の痕  
跡はないので、門である可能性もないではないが、ここ  
では、一応、墓建築としておく。ASIは、時代区分をムガル  
としているが、様式からみて第Ⅱ期に属するものと考えた  
い。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-35; ASI.Ⅲ-186

- T.18** カラー=グンバッド(Kala Gumbad)とよばれて  
いたもので、トゥグルカーバードの城壁の西南隅の西北約  
800メートル、クトゥブ=バーダブル=ロードの北側約  
900メートルにある。 附図. I-13. 図版. 81c

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口をひら

いている。ドームのなかほどに、くりがたがみえているの  
がめづらしい。内部には、墓の痕跡らしいものが認められ  
る。石積みの様子と、ドーム、およびスライズチヤ入口の  
アーチなどからみて、おそらくは、デリー諸王朝時代中期  
に属するものと思われる。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-2; ASI.Ⅲ-144

- T.19** 墓建築(?) サイドール=アジャーイブ部  
落の西のはずれにある。 附図. G-13. 図版. 81d

ドームをいただく四角平面の建物であるが、現在では、  
部落民によって、住居の一部として使用されているので、  
内部の様子はまったく不明である。おそらくは、墓建築で  
あったと思われる。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-20; ASI.Ⅲ-209

- T.20** 墓建築(?) シェイフブル部落の東北約300メ  
ートル、チラーグ=デリー=ロードの南側にある。 附図.  
H-12. 図版. 81e

ドームをいただく、外辺5.6メートルの四角平面の建物  
で、東と北とに入口をもっている。この建物は、北東に接  
する、宗教施設と思われる別の建造物(O.32, 図版. 159b)  
と、なんらかの関連をもっていたものであろう。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-42-1; ASI.Ⅲ-253

- T.21** 墓建築(?) メヘローリー部落の北にあたり、  
クトゥブ=ミナールの西方約900メートルにある。 附  
図. F-12. 図版. 81f

ドームをいただく四角平面の建物で、東をのぞく三方に  
入口を開いている。東側は、メヘローリーのイードガー  
[M.61, 挿図. 19]の背面に接しており、現在、墓の痕跡がみ  
とめられるが、もともと墓建築であったのか、あるいは、  
その他の用途をもつものであったかは、明らかでない。第  
Ⅱ期。

東研.Ⅷ-58; ASI.Ⅲ-134

- T.22** 墓建築 フマーユンブル部落の西側のはず  
れにある。 附図. G-10. 図版. 82a

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口をもっ  
ているが、現在では、部落民によって使用されているので、  
内部の様子は明らかでない。第Ⅱ期~第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-16; ASI.Ⅲ-335

- T.23** 墓建築(?) チラーグ=デリー部落の内部の  
ほぼ西寄りのところにある。 附図. H-12. 図版. 82b

ドームをいただく、外辺約6.5メートルの四角平面の建  
物であるが、現在では、住居にとり囲まれているので、状  
況がよくわからない。第Ⅱ期~第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-54; ASI.Ⅲ-242

**T.24** 墓建築(?) チラーグ・デリー部落の内部のほぼ西寄りのところにある。附図 H-12 図版 82c

ドームをいただく、外辺約6メートルの四角平面の建物で、四方に入口を開いているらしいが、現在では、住居に使用されているので状況はよくわからない。第Ⅱ期～第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-33; ASI.Ⅱ-241

**T.25** 墓建築 フマーニンプル部落内のほぼ中央にある。附図 G-10 図版 82d

ドームをいただく四角平面の建物であるが、現在、部落民によって使用されているので、詳細は明らかではない。この建物は、マラーグ・チャンド・カ・グンバッド(Malak Chand ka Gumbad)とよばれていたという。第Ⅱ期～第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-17; ASI.Ⅱ-334

**T.26** 墓建築 チラーグ・デリー部落の内部のほぼ西寄りにある。附図 H-12 図版 82e

ドームをいただく四角平面の建物であるが、現在では、

住居として使用され、内部の様子はわからない。また、この建物の北には、整然とした敷石の前庭をもつ門がのこっているが(挿図 31)、この付近には、住宅がたてこんでいるために、それにつづく壁は



挿図 31 T.26 北側の門 北側

みられない。ASIは、この墓建築が、西に礼拝堂をもつ囲壁によってとり囲まれていたことを記している。第Ⅱ期～第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-31; ASI.Ⅱ-237

**T.27** 墓建築 チラーグ・デリー部落の西のほぼずれにあるダルガーの東南隅の、すぐ外側にある。附図 H-12 図版 82f

ドームをいただく四角平面の建物であるが、現在では、住民によって使用されているので、内部の様子はわからない。西側には、別の建物(T.28, 図版 82g)が密接して立っている。第Ⅱ期～第Ⅲ期。 東研.Ⅷ-96; ASI.Ⅱ-234

**T.28** 墓建築(?) チラーグ・デリー部落の西のほぼずれにあるダルガーの東南隅の、すぐ外側にある。附図 H-12 図版 82g

南北にわずかに長い矩形の平面をもつ建物で、ドームを

もたないが、おそらくは、未完成におわったものであろう。現在では、住民によって使用されているので、内部の様子はまったくわからない。西壁には、南北にはしる囲壁がくぐりこんだかたちになっており、東には、密接して墓建築(T.29, 図版 82h)が立っている。第Ⅱ期～第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-26; ASI.Ⅱ-235

**T.29** 墓建築 グリーン・パーク住宅地にあり、メーローリー・ロードからハウズ・ハウスにむかう道路のすぐ北側に位置する。附図 G-11 図版 83a

ドームをいただく、外辺は7メートルの四角平面の建物で、ミヒラーブをもつ西側をのぞく三方に、それぞれ、入口を開いている。内部には、三基の墓が認められる。ドームの頂上に、小さな六本柱のチャブトリがのせられているのがめずらしい。この建物は、西側にある、より大きな墓建築(T.33, 図版 90)に対して、附近の住民によって、バンディー(Bandi, 女使)あるいはポーチー(Pol, 孫威)のグンバッドとよばれていたらしい。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-1; ASI.Ⅱ-280

**T.30** 墓建築 セーワナガル鉄道駅の東北東約600メートル、線路の北側にある。附図 I-9 図版 83b

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。プーター・グンバッド(Phata Gumbad, 荒れたドーム)とよばれていたらしいが、現状も、まさに、崩壊寸前である。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-2; ASI.Ⅱ-55

**T.31** 墓建築 ゼマツルドル部落の東方約700メートル、リンク・ロードの北側にある。附図 I-11 図版 83c

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いているが、現在では、北側は閉ざされている。内部には、墓石があったらしい。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-8; ASI.Ⅱ-34

**T.32** 墓建築 ムハンマドブル部落の南方約200メートルにある。附図 F-10 図版 83d

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-5; ASI.Ⅱ-309

**T.33** 墓建築 ムコールカ部落の西北西約1.4キロメートルにある。附図 E-10 図版 84a,b

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。ミヒラーブとその周辺の壁面は、一面の碑文と文様とによっておおわれており、



ドーム内部もまた、交叉アーチと碑文とによって装飾されている。この建物は、その西側に、九つのミヒラーブと袖壁、および両端に小塔をそなえた礼拝壁をもっている。この墓は、附近の住民により、バージュレー・カ・グンバッド (Bajre ka Gumbad, とりもろこしの墓) とよばれていたという。この建物のすぐ北北西には、同じく礼拝壁をもった六角形の墓建築 [T. 128, 図版 118c] が立っている。第Ⅲ期。  
東研.Ⅵ-26; ASI.Ⅵ-125

**T. 34 墓建築** ラードー・サラーイー部落の南端に近く、クアトプ・バーダブル・ロードの南側にある。附図 G-13, 図版 84c, d

ドームをいただく四角平面の建物で、内部の西側にミヒラーブをもち、他の三方には入口を開いている。ミヒラーブの附近にのこる塗喰の文様と、ドーム内部の基部をめぐる32の竈列とが、目立った特色となっている。しかし、様式および文様などからみて、この建物が、ムガル時代に属する可能性も大いにある。第Ⅲ期(?)。

東研.Ⅷ-48; ASI.Ⅷ-200

**T. 35** ラードー・サラーイーの岩の上の墓とよぶ。クアトプ・ミーナールの東南約 550 メートル、メヘローリーのバイパス東側の岩丘上にある。附図 F-13, 図版 85a

ドームをいただく四角平面の建物で、西側にミヒラーブを、他の三方に入口をもっている。内部には、多くの墓の痕跡が認められる。なお、ASI は、この建物の年代を、17 世紀初期と記しているが、その時代までひき下げることはむづかしいであろう。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-27; ASI.Ⅷ-201

**T. 36 墓建築** ザマッルドブル部落の南南西約 300 メートルにある。附図 I-11, 図版 85b

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブを、他の三方に入口をもち、その左右に、それぞれ窓を開いている。すべての面の中央部上方に、かつて、庇があったらしく、ブラケットがのこっているのがめずらしい。ドーム内部は、頂部の円形文様を囲む、交叉アーチとおたまじゃくし型の文様とによって装飾されている。この建物は、現在では、住宅地造成の事務所として利用されているので、内部はまったく改変されてしまっている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-7; ASI.Ⅷ-32

**T. 37 墓建築** ムハンマドブル部落の内部にある。附図 F-10, 図版 85c

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。ミヒラーブ上方の文様と、墓室内部のアーチの両肩にみられる多くの円形文様

とが、目立った特徴をなしている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-4; ASI.Ⅷ-308

**T. 38 墓建築(?)** テラーグ・デリー部落の西のはずれにあるグルガーの東南隅から、ややはなれたところにある。附図 H-12, 図版 85d

ドームをいただく四角平面の建物であるが、現在では、住居のなかにとり囲まれていて、まったく近寄ることができなかった。第Ⅲ期。  
東研.Ⅷ-99; ASI.Ⅷ-236

**T. 39 墓建築** シュエイフブル部落の西北西約 350 メートルにある。附図 H-12, 図版 85e

ドームをいただく、外辺 8.8 メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。内部には、2 基の墓石が認められる。この建物は、低い四壁に囲まれているが、その一部はすでに失われてしまっている。第Ⅲ期。  
東研.Ⅷ-17; ASI.Ⅷ-259

**T. 40 墓建築** フマーニーンの墓の西方約 650 メートル、マトッラ・ロードとコーディー・ロードの交叉点の北方約 100 メートルにある。附図 I-9, 図版 85f

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開く形式であったと推定される。第Ⅲ期。  
東研.Ⅷ-18; ASI.Ⅷ-142

**T. 41 墓建築(?)** ムジャーヒドブル部落の西方約 300 メートルにある。附図 H-10, 図版 86a

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開いている。東側が正面であったらしく、その入口の両側には、それぞれ張り出し窓をもっている。各面の入口の左右にそって、ミーナールを模した小塔が立っているが、東面と南面の、そのかたわらにある奇妙なマークが注目される。内部には、現在、墓は認められず、また、西側も開いている形式からみて、門である可能性もないではないが、周囲の状況からみて、一応、墓建築としておく。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-10; ASI.Ⅷ-302

**T. 42** ドー・シーリーヤー・グンバッド (Dā Sīhīyā Gumbad) とよばれていたもので、フマーニーンの墓の西方約 800 メートル、コーディー・ロードの南側約 50 メートルにある。附図 I-9, 図版 86b

ドームをいただく四角平面の建物で、内部の西側にはミヒラーブをもち、他の三方には入口を開いている。外部の東面には、左右に張り出し窓の痕跡がのこっており、東入口の内側に、それらに到る二つの階段が設けられている。ドー・シーリーヤー・グンバッド (二つの階段をもつドームの建物) という俗称はこのことに由来するものであろう。

この建物は、現在では、住居として利用されているが、いまなお、一つの墓の痕跡が認められる。第Ⅲ期。

東研Ⅱ-11; ASIⅡ-90

**T.43** 墓建築 グトッブ・イーナールの南方約900メートルにある。附図 F-13。図版 86c,d。

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。南の入口の内側には、張り出し窓がついている。内部のミヒラーブの周辺は、碑文・文様によって飾られている。現在では、この建物の下部は、土中にうずもれており、また、住居に使用されている。第Ⅲ期。

東研 K-24; ASIⅢ-154

**T.44** 墓建築 グアーンズ・パーク住宅地の内部にある。附図 G-11。図版 87a

ドームをいただく、外辺約13メートルの四角平面の建物で、ミヒラーブをもつ西側をのぞく三方に、それぞれ入口を開いている。内部には、1基の墓が現存する。第Ⅲ期。

東研 V-6; ASIⅢ-282

**T.45** カーレー・ハーン・カ・グンバッド (Kāle Khān kī Gumbad) とよばれているもので、ムバーラクブル・コートラ部落の西側に新設された住宅地の内部にあり、リング・ロードの北側に位置する。附図 H-10。図版 87b。

ドームをいただく、外辺約12メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブを、他の三方に入口をもっている。すべての面には、それぞれ二つの窓が開かれている。屋上の四隅には、かつて、チャハトリがあっただけで、現在、なお、その痕跡が認められる。内部には、2基の墓がのこっている。ミヒラーブの上方に、ローディー朝のバハサール・シャーの名と、886 A. H. (1481 A. H.) の年次を記した碑文がある。第Ⅲ期。

東研 V-11; ASIⅣ-48

**T.46** 墓建築 ハウズ・ハースの貯水池の西堤の外側、その西南隅の北西約300メートルにある。附図 F-11。図版 87c。

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、三方に入口を開いているが、現在では、東入口は閉ざされている。東面をのぞく三方は、それぞれ、二つずつの窓をもっている。内部には、6基の墓の痕跡が認められる。建物の内外ともに、下部の損壊が著しい。附近の住民によって、ビルジー・ハーン (Brijī Khān) のグンバッドとよばれていたという。第Ⅲ期。

東研Ⅱ-7-1; ASIⅡ-324

**T.47** 墓建築 ナラーダ・デリー部落の西のはずれにあるダルガーの東方、すぐその外側にある。附図 H-

12。図版 87d。

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開いている。現在では、下の部分は深く土中に埋もれ、また、附近の住民に使用されているので、内部の様子はわからない。第Ⅲ期。

東研Ⅱ-97; ASIⅡ-233

**T.48** ヲジールブル・カ・グンバッド (Wājirpur kī Gumbad) とよばれており、ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハシマドブル部落とのほぼ中間にある。附図 F-10。図版 88a,b。

この場所に立ち建ふ五つの建物 [T. 48, 57, 58, 65, 68; 図版 88a,b, 93a,b, 95a, 96b] のなかの最大のもので、ひときお偉容を誇っている。ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。外部の四面は、縦列によって二層の外観を呈しており、それぞれ二つの窓をもっている。ドーム内部の基部に、32の小さな縦列があるのが特徴的である。第Ⅲ期。

東研Ⅱ-13; ASIⅡ-312

**T.49** 墓建築 ムニールカ部落の東北東約1キロメートル、新設団地のほぼ中央にある。附図 F-11。図版 88c。

四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。南をのぞく三面には、それぞれ二つずつの窓がある。ドームは十六角をなして、その各面は、深い縦列によって飾られている。現在、この建物は、ドームをもっていないが、ドームの上部の様子からみて、後代に崩壊したものではなくて、おそらくは、建設途中で未完成のままに放置されたものと推測される。内部には、墓石の痕跡が認められる。第Ⅲ期。

東研Ⅱ-6; ASIⅡ-320

**T.50** チューデー・ハーン・カ・グンバッド (Chhute Khān kī Gumbad) とよばれており、ムバーラクブル・コートラ部落の西側に新設された住宅地の内部にある。附図 H-10。図版 89a,b。

ドームをいただく、外辺約13メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いているが、北の入口には、赤い砂岩のスクリーンの一部がのこっている。屋上の四隅には、小さなドームをいただく六本柱のチャハトリがあるが、現在では、西南隅のものは消失してしまっている。内部には、1基の墓がのこっている。この建物の特徴は、各面の入口上方のアーチとその周辺、および内部の隅々に豊富に見られる塗壁の碑文と文様とにある。ドーム天井もまた、頂部の円形文様を中心に、交叉アーチを、大小のディスクおよび帯状文様によって、華やかに飾られている。この墓建築は、附近にある二つの墓建築 [T. 54, 59; 図版 91, 93c,d] とともに、ティーン・ブルジー

(Tim Burji, 三つのドーム)として親しまれてきた。第Ⅲ期。

東研.Ⅱ-8; ASIⅡ-46

**T.51** シーシュ・グンバッド (Shish Gumbad) として知られており、マフダル・ジャングの墓の東北東約1キロメートル、ローディー・ロードの北約100メートル、ローディー公園の内部にある。 附図.Ⅱ-9 図版.89 c, d

ドームをいただく、外辺17.6メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。各面の中央の部分は、わずかに張り出しており、その左右の壁面は、龕列によって二層の外観をなしている。外壁の下層の部分の石積みは、とくに整然としており、また、中央部分の上方にある小さな龕列と、くりがたの下方の帯状部分とに、色彩タイルが使用されているのが、この建物の特徴の一つである。ドーム内部は、中央の円形文様とそれを取り囲む交叉アーチ、および基部をめぐる帯状の碑文・文様などによって装飾されている。床面には、8基の墓石が現存している。第Ⅲ期。 東研.Ⅲ-3; ASIⅡ-47

**T.52** 墓建築 ムニールカ部落の西北西約500メートルにある。 附図.Ⅱ-11 図版.90 a, b

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。現在では、農民によって納屋として使われているので、墓石については確認できないが、ASIは、4基の墓の存在を記している。内部のミヒラーブとその周辺の壁面は、文様と碑文とによって一面におおわれており、また、ドームの外壁が、交叉アーチによって装飾されているのが、この建物の特徴である。この建物は、周囲に龕と地下室とをめぐらす高い基壇の上に立っている。この基壇の西の部分には、15のミヒラーブと袖壁とをもつ礼拝壁があって、その両端と中央ミヒラーブの左右には、小塔が立っている。この墓は、バラエ・ラーオ・カ・グンバッド (Barā Lao kā Gumbad) とよばれていたらしい。この基壇の南に接して、ドームをいただく墓建築 [T.106, 図版.111 b] をのせた、別の基壇がある。第Ⅲ期。 東研.Ⅳ-23; ASIⅡ-120

**T.53** 墓建築 グリーン・パーク住宅地にあり、メヘローリー・ロードからハウズ・ハースにむかう道路のすぐ北側に位置する。 附図.G-11 図版.90 e

ドームをいただく、外辺約16メートルの四角平面の建物で、ミヒラーブをもつ西側をのぞく三方に、それぞれ入口を開いており、また、入口の左右に、一つずつの窓をもっている。内部には、6基の墓がのこっている。各面の中央突出部分の両端に、ミーナールをかたどった装飾がほどこされており、また、ドラムの16の面に、龕がめぐっているのが特徴的である。この建物は、東側にある、より小さな

墓建築 [T.29, 図版.89 a] に対して、附近の住民によって、ビービー (Bibi, 奥さん)、あるいはダーディー (Dadi, お婆さん) のグンバッドとよばれていたらしい。第Ⅲ期。

東研.Ⅳ-2; ASIⅢ-281

**T.54** バレー・ハーン・カ・グンバッド (Barā Khān kā Gumbad) とよばれており、ムバーラクプル・コートラ部落の西側に新設された住宅地の内部にある。 附図.Ⅱ-10 図版.91

デリーに現存する、デリー諸王朝時代に属する遺跡のうちで、おそらく最大の直径をもつドームをいただく建物であろう。外辺約22メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いているが、北のものには、スクリーンがはめられている。入口の部分やミヒラーブは、いずれも、赤い砂岩を用いて、丹念に仕上げられている。各面の中央アーチの左右は、それぞれ外観が三層をなしており、各層には、おのおの、三つずつの龕が設けられていて、その数においても、他に例を見ない。さらに、建物の四隅には、八角形の塔を模した装飾が、これらの三層を貫ぬいており、これまた、この建物に特徴をそえてい。屋上の四隅には、小さなドームをいただく八本柱からなるチャハトリがあるが、現在では、東南隅のものは消失してしまっている。内部には、5基の墓が認められるが、床面とともに、近代の補修を受けている。なお、この墓建築は、附近の二つの墓建築 [T.50, 59, 図版.89 a, b, 93 c, d] とともに、ティーン・ブルジー (Tim Burji, 三つのドーム) として知られてきたが、そのうちの最大のものであるところから、バラエ・ハーン (大きなハーン) のグンバッドという俗称がつけられたものであろう。第Ⅲ期。

東研.Ⅳ-9; ASIⅡ-45

**T.55** ジェイス・シハブッディーン・タージ・ハーン (Shāikh Shihāb al-Dīn Taj Khān) の墓とよぶ。一般には、バゲ・アラム・カ・グンバッド (Bagh-i 'Ālam kā Gumbad) として知られていたもので、グリーン・パーク住宅地の西方、メヘローリー・ロードからハウズ・ハースにむかう道路の北側にある。 附図.G-11 図版.92 a, b

ドームをいただく、外辺17メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。この建物の四面は、龕列によって三層の外観を呈しており、各面には、それぞれ、二つの窓がある。また、南面の入口の上方は、赤い砂岩と白大理石とからなる小窓風の装飾で飾られている。屋上の四隅には、八角平面のチャハトリが立っていたが、現在では、崩壊してしまっていて、その基台をのこすのみである。内部には、4基の墓石の痕跡が認められる。ドームの内部は、円形文様と交叉アーチ、および碑文によって装飾されている。このドームを、デリー諸

王朝時代における最初の二重ドームとする説が有力であるが、調査の結果は、それが明らかに誤りであることを示している。外部西面中央の上部に、ホーディー朝のシカンデル・シャーの名と、906 A. H. (1501 A. D.) の年次を記した碑文がある。第Ⅲ期。  
東研Ⅳ-9; ASIⅡ-327

**T. 56** 墓建築 ムニールカ部落の西北端にある。

附図 F-11. 図版 92 c, d

この建物は、高い基壇の上に立っていて、遠方からも見ることができる。ドームをいただく四角平面の建築物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いているが、現在では、北の入口は閉ざされている。ミヒラーブをふくむ西壁の中央部分やドームの基部には、豊富な碑文と文様とが認められ、ドームの内部もまた、8本の交叉アーチによって装飾されている。この墓建築は、現在では、農家の納屋として使用されている。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-11; ASIⅡ-311

**T. 57** 墓建築 ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。

附図 F-10. 図版 93 a

ドームをいただく四角平面の建物で、ミヒラーブをもつ西側をのぞく三方には、入口が開かれている。内部には、墓石の痕跡はないが、建物の形式と碑文とからみて、墓であることはほぼ疑いない。この建物は、マジールブル・カ・グンパッドとよばれる墓建築〔T. 48, 図版 88 a, b〕のすぐ東に接して立っている。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-15; ASIⅡ-316

**T. 58** 墓建築 ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。

附図 F-10. 図版 93 b

ドームをいただく四角平面の建物で、ミヒラーブをもつ西側をのぞく三方には、入口が開かれている。内部には、ほぼ中央に、1基の墓の痕跡が認められる。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-16; ASIⅡ-317

**T. 59** ブレーン・バーン・カ・グンパッド (Blūre Khān kā Gumbad) とよばれており、ムバーラグブル・コートラ部落の西側に新設された住宅地の内部にある。附図 H-10. 図版 93 c, d

ドームをいただく、外辺約8メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。内部には、1基の墓がのこっている。ドーム内部をはじめとして、室内には随處に装飾が認められる。なお、この墓は、附近の二つの墓建築〔T. 50, 54, 図版 89 a, b, 91〕とともに、ティーン・ブルジー (Tin Burji, 三つのドーム) とよば

れてきた。第Ⅲ期。  
東研Ⅳ-10; ASIⅡ-47

**T. 60** 墓建築 ムードー・サライー部落の北北西約150メートルにある。附図 F-12. 図版 94 a

ドームをいただく四角平面の建物で、西側にミヒラーブを、他の三方に入口をもっている。現在では、納屋に使用されている。形式および文様からみて、あるいはムガル時代に属する可能性もないとはいえない。第Ⅲ期〔?〕。

東研Ⅳ-17; ASIⅡ-202

**T. 61** 墓建築 カトローリー・サライー部落の内部にある。附図 F-11. 図版 94 b

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開いている。現在では、住居として使用されているので、内部の状況はわからない。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-22; ASIⅡ-338

**T. 62** 墓建築 アードチーニー部落の内部、メヘローリー・ロードにそって、その東側にある。附図 G-12. 図版 94 c

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。現在、部落民によって使用されているので、内部の状況はわからない。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-46; ASIⅡ-343

**T. 63** 墓建築 ムハンマドブル部落の西端に近いところにある。附図 F-10. 図版 94 d

四角平面の建物で、花瓣形のドームをのせている。ミヒラーブをもつ西側をのぞく三方には入口が開かれている。現在では、農家の納屋として使用され、随處に改築・補修の手が加えられている。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-2; ASIⅡ-306

**T. 64** 墓建築 グリーン・パーク住宅地にあり、メヘローリー・ロードからハウズ・ハウスに向かう道路にそって、その北側に位置する。附図 G-11. 図版 95 a, b

この墓は、基壇の上に立ち、ドームをいただく、外辺7.2メートルの四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。内部には3基の墓の痕跡がある。附近の住民から、サクリ・グムティー (Sakri Gumbi, 小さいドーム) とよばれていたらしい。第Ⅲ期。

東研Ⅳ-3; ASIⅡ-284

**T. 65** 墓建築 ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。附図 F-10. 図版 95 c

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開い

ている。墓室内部の、アーチの両肩にみられる文様が目立っている。この建物の西側には、礼拝壁をもつ墓地(G.29 図版.62a)があるが、おそらくは、この建物と関係があるのかもしれない。第Ⅲ期。 東研.Ⅵ-17; ASI.Ⅱ-313

**T.66** 墓建築(?) グリーン=パーク住宅地にあり、メヘローリー=ロードからハウズ=ハースにむかう道路にそって、その北側に位置する。 附図.G-11 図版.95d

ドームをいただく、外辺わずかに4.8メートルの四角平面の建物で、四方に入口を開いているが、東の入口は、この建物を取り囲んでいたらしい西壁の一部によって、閉ざされていたものと思われる。ASIは、この建物を墓ではないと断言しているが、現在、内部には、墓の痕跡らしいものがのこされており、墓建築である可能性も否定できない。この建物は、附近の住民によって、チューティー=グムタイー (Chhuj Gumti, 小さなドーム) とよばれていたらしい。第Ⅲ期。 東研.Ⅵ-4; ASI.Ⅲ-283

**T.67** 墓建築 ハウズ=ハースの貯水池の西堤の外側、その西南隅の北西約300メートルにある。 附図.F-11 図版.96a

ドームをいただく四角平面の建物で、北をのぞく三方に入口が開いているのはめずらしい。しかし、のちに、西もまた閉ざされて、ミヒラーブが設けられたらしい。ASIは、1基の墓石の存在についてふれているが、現存はしない。この建物の北東のすぐそばに、墓建築(T.46, 図版.87c)が立っている。第Ⅲ期。 東研.Ⅵ-7-2; ASI.Ⅲ-325

**T.68** 墓建築(?) ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。 附図.F-10 図版.96b

四方に入口を開き、ドームをいただく四角平面の小さな建物で、その内部には、現在、墓石の痕跡はみあたらない。おそらくは、墓建築であろうが断定はできない。この建物は、ワジールブル=カ=グンパッドとよばれる墓建築(T.48, 図版.88a, b)のすぐ南東に、ほとんど寄りそうように立っている。第Ⅲ期。 東研.Ⅵ-14; ASI.Ⅱ-315

**T.69** イードガーワラー=グンパッド (Idgāhwāli Gumbad) とよばれていたもので、ハウズ=ハース=ニンクレーグ住宅地の内部にある。 附図.G-11 図版.96c

高い基台の上に立つ、外辺約6.5メートルの、ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。内部には、1基の墓の痕跡が認められる。この建物の俗称は、その東方約150メートルに、イードガー(M.56, 図版.55)があるところから、つけられたものであろう。第Ⅲ期。 東研.Ⅵ-7; ASI.Ⅲ-288

**T.70** 墓建築 メヘローリー部落の西北端より西へ約1キロメートルにある。 附図.E-13 図版.96d

ドームをいただく四角平面の小さな建物で、基壇の上に立ち、西にミヒラーブをもち、他の三方に入口を開いている。現在では、内部に墓の痕跡は認められない。第Ⅲ期。

東研.Ⅵ-53

**T.71** ムハンマドブルのティーン=ブルジー (Tīm Burjī) とよばれており、ムハンマドブル部落の東北端にある。 附図.F-10 図版.97a

四角平面の三つの建造物を南北に連ねたかたちをした、南北48.5メートル、東西18.5メートルの長方形の大きな建造物である。中央の部屋はもっとも大きく、東側には入口とそれをはさむ二つの窓とがあり、西側はミヒラーブによって閉ざされている。南と北との側室は、同じように東側に入口をもっているが、西側もまた大きなアーチによって閉ざされている。これらの部屋の内部の様式は、中央の部屋とかなり趣きを異にしている。中央と北側の部屋には、いくつかの墓石の痕跡が認められる。中央の間は、高いドームをいただいているが、左右の側室は、いずれも平坦な花形ドームをのせている。この長方形の建造物のさらに南北に接して、さしわたし8.5メートルの八角平面をもつ建物の基部がのこっている。おそらくは、未完成におわったものと推定されるが、なんであったかは明らかでない。この建物は、三つのドームをもっているところから、ティーン=ブルジーとよばれている。第Ⅲ期。

東研.Ⅵ-1; ASI.Ⅱ-304

**T.72** 墓建築 ムニールカ部落の西北西約700メートルにある。 附図.E-11 図版.97b

この建物は、高さ約5メートル、外辺約34メートルの基台の上に立つ、一辺31.5メートルの四角平面の、大きな建造物であるが、建設途中で、未完成におわったものと推定される。内部は、一辺約7.5メートルの八角形の部屋となっており、東・南・北の三面に入口を開き、その他の五つの面は、西のミヒラーブをふくめて、倉形をなしている。中央には、深さ約1メートルの凹みがある。南面の西の部分に、螺旋形の回路がある。この建物が、もし、完成していたならば、デリーに現存するデリー諸王朝時代の方形の墓建築のなかでは、最大の規模をもつものとなっていたであろう。ただし、構造・様式からみると、あるいは、ムガル時代に属する可能性もないとはいえない。第Ⅲ期(?)。

東研.Ⅵ-25; ASI.Ⅳ-123

**T.73** グリーン=パークのバーラ=カンバー (Barāh Khambā) とよぶ。グリーン=パーク住宅地にあり、メヘローリー=ロードからハウズ=ハースにむかう道路にそって、

その南側に位置する。 附図 G-II. 図版 98a

ドームをいただく、外辺10.5メートルの四角平面の建物で、各面は、それぞれ、大きなアーチに囲まれた三つの小さなアーチ型の入口をひらいている。内部には、現在、なにも認められないが、ASIは、かつて、数基の墓石があったという伝えを紹介している。北面の西寄りの外側に接して、半円形の井戸があり、さらに、その北には、円筒形あるいは角形の、小さな建造物がのこっているが、なんであるかはわからない。また、周辺には、多数の墓石の痕跡が認められる。 第Ⅲ期。 東研.Ⅳ-3; ASIⅡ-285

**T.74 墓建築** ザマッルドブル部落の内部にある。 附図 I-11. 図版 98b

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方は、それぞれ、大きなアーチに囲まれた三つの入口を開いている。この三面の大きなアーチの両側と、西面の両端にならぶ小さな龕列は、この建物の特徴となっている。現在では、部落民によって使用されているので、内部の状況はわからないが、ASIは、6基の墓石があったことを記している。 第Ⅲ期。 東研.Ⅴ-6; ASIⅣ-27

**T.75 墓建築** ザマッルドブル部落の北のはずれにある。 附図 I-11. 図版 98c,d

ドームをいただく四角平面の建物で、西にミヒラーブをもち、他の三方は、それぞれ、大きなアーチに囲まれた三つの入口を開いている。この三面の大きなアーチの両側と、西面の左右の部分にならぶ小さな龕列が、この建物の特徴となっている。現在では、部落民によって使用されているので、内部の状況はわからないが、ASIは、3基の墓石があったことを記している。 第Ⅲ期。

東研.Ⅴ-2; ASIⅣ-26

**T.76** ハーネ・ジャハーン・ティランガニー(Khan-i-Jahan Tilangani)の墓といわれており、ニザームッディーン・オーリヤーの墓の南方約150メートル、ニザームッディーン南部の聚落囲壁(0.9.図版149c)の内部北寄りのところにある。 附図 I-9. 図版 99

ドームをいただく八角形の平面をもつ建物で、八角の墓室と、それをとり囲む廻廊とからなっている。各面は三つのアーチをもっており、その両端はパッドレスによって補強されている。八角のドラムの上に立つ中央ドームの周辺には、8個の小さなドームが配置されている。庇の上からドラムにいたる部分には、大理石をあしらいつつ、赤い砂岩を豊富に用いている。墓室の内部には、4基の墓が現存し、そのうち中央の大理石の墓石がもっとも大きい。この墓は、トグルク朝後期の貴族であった、ハーネ・ジャハーン・ティランガニーの墓といわれており、その可能性

もあるが、確証はない。現在では、この墓の廻廊の部分に、幾世帯かの家族が住みついており、建物の多くの箇所に変更がほどこされている。ヴェランダやドームにも雑草が生い茂り、自然の荒廃にまかされている。わたしたちは、1962年の2月に住民の許しを得て暗きみの墓室内に入ることができたが、墓石はよく保存され、香煙すらただよっていた。しかし、このような建築史上に重要な建造物は、将来十分に保存の措置が講じられる必要がある。 第Ⅲ期。

東研.Ⅲ-14; ASIⅡ-242

**T.77** ムバーラク・シャー・サイイド(Mubarak Shah Sayid)の墓としてひろく知られており、ムバーラクブル・コートラ部落の内部にある。 附図 H-10. 図版 100

この墓建築は、ドームをいただく八角平面の建物で、八角形の墓室と、それをとり囲む廻廊とからなっている。廻廊の各面の外側は、それぞれ、三つのアーチをもっており、その両端にあるパッドレスが、この建物に安定感を与えている。廻廊の壁は、ヴェランダになっていて、小ドームをいただく八本柱からなるチャハトリが、各面の一つずつ、あわせて8個立っている。また、中央ドームの頂部には、小さなチャハトリをのせている。墓室は、西にミヒラーブをもち、他の7面は、同じようにアーチ型をなしているが、南面は入口となっており、他の面には、赤い砂岩のステラコーンがはめられている。赤い砂岩の敷石をしきつめた床面には、7基の大理石の墓石が並んでおり、中央のものがもっとも大きい。ドーム内部は、交叉アーチの文様と、基部の三重の帯状文様や碑文によって飾られている。この建物の周囲には、石敷きがめぐらされている。



附図 11 T.77 廻廊の西門、西面

この建物の南と西との方向に、現在、二つの門がのこっているが、おそらくは、かつて、かなりの規模をもつ四壁が、この墓建築をとり囲んでいたものであろう(図版100c. 挿図32)。この建物を、サイイド朝の第二代のスルターンであるムバーラク・シャーの墓とすることについては、決定

的な資料はないが、種々の理由から、その可能性も大いにある。第Ⅲ期。 東研Ⅳ-3, 6; ASIⅣ-41

**T.78** ムハンマド・シャー・サイイド (Muhammad Shah Saiyid) の墓としてひろく知られており、サフダル・ジャングの墓の東北東約750メートル、ローディー・ロードの北約100メートル、ローディー公園の内部にある。 附図 H-9。 図版 101

ドームをいただく外辺9.6メートルの八角平面の建物で、八角形の墓室と、それをとり囲む廻廊とからなっている。廻廊のそれぞれの面は、三つのアーチをもっており、隅の部分は、バットレスによって補強されている。廻廊の屋上はヴェランダになっていて、小さなドームをのせる八本柱からなるチャハトリが、それぞれの面に一つずつ配置されている。一辺4メートルの墓室の各面は、西をのぞいて開かれているが、本来は、扉や石のスクリーンがはめられていたものらしい。西側は、かつてはミヒラブをそなえていたと思われるが、その後破壊されたらしく、現在では、後代の乱雑な積み石によってふさがれている。大ドームの内部は、中央の円形文様と周囲の交叉アーチや、基部をめぐる碑文・文様などによって飾られている。8基の墓石が現存しているが、中央のものももっとも大きい。

この建物は、これまで、サイイド朝のスルターンであるムハンマド・シャーの墓とされてきたが、それを裏づける確かな証拠はない。第Ⅲ期。 東研Ⅲ-1; ASIⅡ-43

**T.79** シカンダル・シャー・ローディー (Sikandar Shah Ladhi) の墓として知られており、サフダル・ジャングの墓の東北約1.3キロメートル、ローディー・ロードの北方約600メートル、ローディー公園の北端にある。 附図 H-8。 図版 102

ドームをいただく八角の平面をもつ建物で、墓室とその周囲の廻廊とからなっている。この建物は、四周を一辺約80メートルの壁で囲まれた庭の中央に位置しており、その西壁の中央の部分は、一段と高くなっていて、三つのミヒラブをもっている。庭全体は、高い基壇をなして、周囲に籠をめぐるし、四隅には八角のバステイオンをそなえている。南壁の中央には正門があって、その外側に、四本柱からなる二つのチャハトリをもつ、東西18.5メートル、南北16メートルの突出部がある。

この八角形の墓建築は、一辺9.8メートルの大きさもち、各面は三つのアーチからなっており、その両端はバットレスによって補強されている。廻廊の屋上には、かつては八角平面をもつ8個のチャハトリが立っていたと推定されるが、現在では、すべて倒壊してしまっていて、わずかにその基台をのこしているにすぎない。墓室は、西面をのぞいてすべて開かれているが、西の部分は、現在では、明

らかに後代のものと思われる乱雑な石積みによって閉ざされている。おそらく、本来はミヒラブがあったものと思われる。室内の各面のアーチの周辺やその上にある16個の龕列は、いずれも青・緑・黄などの彩色タイルを用いた文様によって、派手に彩られており、また、ドームの内部も、中央の円形文様や、基部をめぐる帯状の碑文・文様によって装飾されている。床面には、1基の墓の痕跡が認められる。この墓は、ローディー朝の第二代のスルターンであったシカンダル・シャーの墓とされてきたが、それを証明する歴史的な資料はなに一つないのである。第Ⅲ期。

東研Ⅲ-4; ASIⅡ-49

**T.80** 墓建築 チラーグ・デリー部落の西のはずれにあるダルガーの、内部に位置する。 附図 H-12。 図版 103a

ドームをいただく十二本柱からなる、外辺5.8メートルの四角平面の建物で、内部に、1基の墓石がのこっている。第Ⅱ期。 東研Ⅳ-25; ASIⅢ-228

**T.81** 墓建築 ジェイフブル部落の東北約300メートル、チラーグ・デリー・ロードの南側にある。 附図 H-12。 図版 103b

ドームをいただく十二本柱からなる、外辺5.2メートルの四角平面の建物で、内部に、2基の墓石がのこっている。第Ⅱ期。 東研Ⅳ-41; ASIⅢ-252

**T.82** メヘローリー西方の十二本柱の墓とよぶ。メヘローリー部落の西方、部落を南下する道路から西へ約300メートルにある。 附図 F-13。 図版 103c

この墓建築は、東をのぞく三方を回壁によって囲まれた墓域のなかにあり、ドームをいただく十二本柱からなる、外辺5.1メートルの四角平面の建物である。内部には、現在、1個の墓石が無造作に置かれている。ドームの内側基部の十六角の部分に、北とその西隣りの二つの石におたって、トゥグルク朝のフォーローズ・シャーの名と、777 A. H. (1376 A. D.) の年次とを刻する碑文が現存している。ASIは、このほかに、936 A. H. (1529-30 A. D.) の年次のある碑文をもつ後代の燈明台が立っていたことを記しているが、



挿図 32 T.82 墓域の礼拝堂 東正面

現存しない。この墓建築をとり囲む上述の囲壁は、西側が南と北とに袖壁をもつ、長さ約35メートルの礼拝壁をなしており〔挿図33〕、三つのミヒラーブをそなえている。この囲壁と、その南西の外側に接するモスク〔M.24, 図版35a〕とは、この墓建築と同じ時代に、なんらかの関連をもって建てられたものと推定される。第Ⅱ期。

東研-N-51; ASI.Ⅱ-112

**T.83** モラーダーバード・バハリーの十二本柱の墓とよぶ。ムニールカ部落の西北西約2.4キロメートル、パサントナガル部落の南西約1.2キロメートルにある。 附図D-10, 図版103d

ドームをいただき、本来は十二本柱からなる、四角平面の建物であるが、四隅の柱がとり去られたため、現在では、8本の柱をのこすのみである。内部には、1基の墓石の痕跡が認められる。なお、この墓の南には、ほぼ同時代と思われる囲壁〔挿図7参照〕に囲まれた建物群が存在する。第Ⅱ期。

東研-VII-30; ASI.Ⅱ-137

**T.84** 墓建築。メヘローリー部落の南端に近く、この部落より南下する道路の東側にある。 附図F-13, 図版104a

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、現在では、四方が、煉瓦と泥土によってふさがれ、住居として使用されている。この墓は、西側にある建物〔M.27, 図版36a〕と、なんらかの関係があったのかもしれない。第Ⅱ期。

東研-N-37-1; ASI.Ⅱ-80

**T.85** ラーナール・サーヒブ(Rana Sahib)の墓として知られており、ナジャーフガルの町の東方約5.1キロメートル、ナジャーフガル・ロードの南側にある。 附図の範囲外, 図版104b

ドームをいただき、十二本柱からなる、外辺5.4メートルの四角平面の建物で、内部には、2基の墓石の痕跡がある。この建物は、現在、東門をもつ囲壁によってとり囲まれている。ラーナール・サーヒブとは、この附近に住んでいたと伝えられる聖者の俗称で、現在もなお、この墓は、白く塗装され、崇拜の対象となっている。第Ⅱ期。

東研-I-5; ASI.Ⅱ-90

**T.86** シェイフ・サラーフッディーン・ダルヴェーシ(Shaykh Salah al-Din Darwish)の墓と伝えられており、シェイブール部落の東北約300メートル、チラーグ・デリー・ロードの南側にある。 附図H-12, 図版104c

ドームをいただき十二本柱からなる、外辺6.5メートルの四角平面の建物である。西にミヒラーブをもち、柱のあいだは、赤い砂岩のスクリーンで閉ざされていたが、現在

では、なかば失われてしまっている。内部には、二つの墓の痕跡がある。この建物は、740 A.H. (1339-40 A.D.)に築かれたとされる、シェイフ・サラーフッディーンの墓と伝えられているが、その確証はない。第Ⅱ期。

東研-III-40; ASI.Ⅱ-251

**T.87** 墓建築。ハウズ・ハースの貯水池の東南隅にある。 附図G-11, 図版104d

ハウズ・ハースの遺跡群の東側にある五つのチャハトリのうち、ほぼ中央に立っているもので、ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物である。ドーム内部の基部をかざる碑文と帯状文様が、この建物に特色をそなえている。ASIは、くずれた墓石があったことにふれているが、現在では存在していない。第Ⅱ期。

東研-M-11-8; ASI.Ⅱ-315

**T.88** シェイフ・ズィヤウッディーン・ジールミー(Shaykh Ziyā al-Dīn Rumi)の墓と伝えられており、カール・マラーイー部落の西方約100メートル、メヘローリー・ロードの東側にある。 附図G-11, 図版105a

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、内部に2基の墓の痕跡が認められる。ASIは、この墓の頂部に、ハルジー朝時代のこの聖者の名と、721 A.H. (1321-22 A.D.)の没年を記す近代の碑文があったことにふれているが、現在では、まったく失われている。この墓建築の附近には、柱などの建造物の残片や、くずれた多くの墓石が散在している。第Ⅱ期。

東研-III-36; ASI.Ⅱ-276

**T.89** シャーハ・アーラム(Shah-i'Alam)の墓とよばれているもので、ラジャーターバード貯水池の西北約100メートル、運河の南側にある。 附図H-2, 図版105b

12本の柱がドームを支える四角平面の建物で、西側の中央の柱間に、ミヒラーブが設けられている。ドームから上方にかけては、後代の補修が目立っている。この墓建築は、モスク〔M.18, 図版30〕の内庭にあって、東西中心線上に正しく位置している。この建物の床面には1基の墓の痕跡が認められるが、シャーハ・アーラムとよばれた人物については、なにもわかっていない。第Ⅱ期。

東研-I-1-2; ASI.Ⅱ-407

**T.90** シェイフ・ハイダル(Shaykh Haidar)の墓と伝えられており、サイイドゥル・アジャイーブ部落の西北約600メートル、タトゥブ・バーデルブル・ロードにそってその北側にある。 附図G-13, 図版105c

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、内部に、墓石の基台のみがのこっている。柱間には、赤い砂岩のスクリーンがはめられていたらしいが、現在では、



まったく失われている。ASIは、シェイフ・ハイダルの名と759 A.H. (1357-58 A.D.)の年次とを記す近代の碑文の存在にふれているが、これもまた消失してしまっている。この建物には、随処に、近代の補修が著しく認められる。この墓建築の西に接して、小さな囲壁に囲まれて、墓石の痕跡があり、また、東側の附近にも、二、三の崩壊した墓地がある。第Ⅱ期。 東研 X-9; ASI III-206

**T.91** シェイフ・シハーブッディーン・アーンク (Shai-  
kh Shihab al-Din 'Ashiq) の墓と伝えられているもので、メ  
ヘローリー部落の北にあたり、クトップ=ミーナールの西  
方約1.3キロメートルにある。 附図 F-12 図版 105 d

この墓建築は、ピラミッド型の屋根をいただき、四本柱  
からなる四角平面の建物で、内部に、1基の墓がのこっ  
ている。この墓は、デリー藩王朝時代初期の聖者とされる。  
シェイフ・シハーブッディーン・アーンクのものとして伝えら  
れており、ASIは、717 A.H. (1317-18 A.D.)の年次をも  
つ近代の碑文が、墓の北側にあったことを記している。し  
かし、この碑文は、いまは失われており、かわって、漆  
喰壁に稚拙な文字でその名を記した説明台が建てられてい  
る。この建物自体は、様式からみて、おそらくは、第Ⅱ期  
に属するものであろう。第Ⅱ期。

東研 IX-60; ASI III-136

**T.92** ムイッズッディーン・バヘラーム (Muziz al-Din  
Bahram) の墓とよぶ。クトップ=ミーナールの西方約4.8  
キロメートル、マヒパールブル部落の東南約1.4キロメー  
トル、メヘローリー=ロードの南側にある。 附図 D-12  
図版 106 a

ドームをいただく、八本柱からなる八角平面の建物であ  
るが、現在では、近代の支柱によって補強され、墓石の痕  
跡は認められない。この建物は、奴隷王朝初期の墓建築で  
ある、いわゆるスルターン=ガリー (T.1, 図版 73~74)  
のすぐ南側に立っている。フィーローズ=シャー=トッ  
グルクによる改築・補修を記したトッグルク朝後期の文献や、  
その他の資料にもとづく考証から、この建物は、おそらく  
は、フィーローズ=シャー時代に、全面的に改築された。  
奴隷王朝中期の、スルターン=ムイッズッディーン=バ  
ヘラームの墓であると推定できよう。なお、同じくトッグル  
ク朝の文献がふれている。奴隷王朝中期の、スルターン=  
ルクスッディーン=フィーローズ (Rukn al-Din Firuz) の墓  
は、おそらくは、この墓建築のすぐ東に立っていたものと  
推定されるが、現在では、まったく消失してしまっている。  
第Ⅱ期。 東研 K-2; ASI IV-106

**T.93** 墓建築 チラーダ=デリー部落の西のはずれ  
にあるダルガーの内部にある。 附図 H-12 図版 106 b

ドームをいただく八本柱からなる、さしわたし6メー  
トルの八角平面の建物で、内部に、1基の墓石がある。シェ  
イフ=ザイヌッディーン (Shaiikh Zaim al-Din) なる聖者の  
墓と伝えられている。第Ⅱ期。 東研 VII-77; ASI III-229

**T.94** 墓建築 (?) ハウズ=ハースの貯水池の東南  
隅にある。 附図 G-11 図版 106 c

ハウズ=ハースの遺跡群の東側にある五つのチャハトリ  
のうちの、もっとも南寄りのもので、ドームをいただく八  
角平面の建物である。現在では、さしわたし1.9メー  
トルの八本柱がのこっているにすぎないが、本来は、さらにそ  
の外側に、八本柱をめくらしていたものと推定される。床  
面がやや狭すぎるが、やはり墓として用いられたものであ  
らう。第Ⅱ期。 東研 VI-11-4; ASI III-311

**T.95** 墓建築 (?) ハウズ=ハースの貯水池の東南  
隅にある。 附図 G-11 図版 106 d

ハウズ=ハースの遺跡群の東側にある五つのチャハトリ  
のうちの、もっとも北寄りにあるもので、ドームをいた  
だく八角平面の建物である。現在では、内側の八本柱をの  
こすにすぎないが、本来は、その外側に、さらに八本柱をめ  
くらしていたものであろう。第Ⅱ期。

東研 VI-11-5; ASI III-312

**T.96** 墓建築 ハウズ=ハースの貯水池の東南隅に  
ある。 附図 G-11 図版 107 a

ハウズ=ハースの遺跡群の東側にある五つのチャハトリ  
のうちの、もっとも東寄りに立っているものである。ド  
ームをいただく、八角平面の建物で、柱は、それぞれ、二本  
の柱身からなっている。ドーム内部の基部をめぐる碑文と  
文様とが、この建物に特色をそえている。ASIは、1基の  
赤い砂岩の墓があったことを記しているが、現在は無い。  
第Ⅱ期。 東研 VI-11-7; ASI III-314

**T.97** 墓建築 ハウズ=ハースの貯水池の東南隅に  
ある。 附図 G-11 図版 107 b

ハウズ=ハースの遺跡群の東側にある五つのチャハトリ  
のうちの、東南の隅に立っているものである。ドームをい  
ただく、柱のあいだのさしわたし4メー  
トルの、六角平面  
の建物で、その柱は、それぞれ二本の柱身からなっている。  
屋根の各隅に立つ小塔と、ドーム内部の基部をめぐる碑文  
と文様とが、この建物に特色をそえている。第Ⅱ期。

東研 VI-11-6; ASI III-313

**T.98** ゴルフ=コースのバーラ=カンバー (Barah Kham-  
bah) とよぶ。フマーユーンの墓の西方約1.4キロメートル、  
ローディー=ロードの北方約300メートル、ゴルフコース

内にある。 附図 1-9, 図版 107c

元来は、十字形の平面をもつ特異な建造物で、12本の柱が、中央のドームとそれをとり囲むやや小さな4個のドームを支えていたものであるが、現在では、その東の部分はまったく崩壊してしまっている。中央のドームの下には、1基の墓石がのこされている。第Ⅱ期。

東研・Ⅲ-15; ASI・Ⅱ-72

**T. 99** カダム・シャリーフ (Qadam Sharif) とよばれているもので、ニューデリー鉄道駅の北北西約600メートル、クトゥブ・ロードの西約200メートルにあるカダム・シャリーフの城壁 (O. 8, 図版 149a, b) の西端にある。 附図 H-6, 図版 108

この墓建築は、中央の主屋と、それをとり囲む建物群とからなっている。中央の主屋は、16本の柱に支えられた平坦な屋根をもつ長方形の建物で、四方に張り出しの部分をもち、西側をのぞく三方が入口となっている。張り出しの部分の屋上には、それぞれ四角のチャハトリがのっている。この主屋は、後代の改変が著しく、とくに、これをとり囲む楕円形の囲壁と、室内の大理石の床、および屋上の壁は、後代に追加された部分である。この主屋の南側と北側とにある建物は、ドームをいただく12本柱からなる部屋の部分と、それを結ぶ列柱の部分とからなり、北側の建物の東端に入口がある。主屋の東側には、ムガル時代に属する長方形の建物があり、さらに東には、フィーローズ・シャー・トゥグルク時代のものといわれる建造物があるが、現在では、管理者の女性親族の居室となっているので、近寄ることができなかった。

カダム・シャリーフとは、マホメットの聖なる足跡を指すのであるが、フィーローズ・シャーが、それをこの地に安置させたと伝えられているところから、この場所をもカダム・シャリーフとよんでいる。この建物の内部には、その遺物とこれにまつわる人びとのものと伝えられる墓がある。第Ⅱ期。

東研・Ⅱ-6; ASI・Ⅱ-349

**T. 100** ダリヤー・ハーン (Daryā Khan) の墓として知られており、キドワーイーナガル住宅地の東部にある広場を占めている。 附図 H-10, 図版 109a

この墓は、上下二層のひろい基壇をもつ大規模な構築物で、中央に、さしわたし約9メートルの、本来は十六角をなしていたと思われる基台の上に、なかば崩壊した1基の墓がある。この基台は、約29メートル平方の高い上層の基壇の中心に位置しており、それをめぐって、この基壇の四隅には、それぞれドームをいただく十二本柱からなる、四角平面のチャハトリが立っている。そのうち、西側にある二つは、ドームの部分がほとんどくずれ落ちてしまっている。これらのドーム内部の基部には、碑文と帯状文様とが、

なお、認められる。この上層の基壇には、西をのぞく三方に階段があって、下の基壇に通じている。この下層の基壇は、東西約61メートル、南北約50メートルの矩形をなしており、東側には、その中央部から張り出している門と、その左右に一列に並ぶ部屋との痕跡が、現在なお、認められる。この基壇の西側には、中央とその左右の、あわせて三個所に、わずかな突き出し部分ののこっており、また、四隅には、バステイオン風の小塔の痕跡も認められる。

ローディー朝時代には、ダリヤー・ハーンの称号をもつ著名な貴族は二人いたが、従来、この墓は、そのうちのダリヤー・ハーン・ローディーのものと考えられてきた。しかし、それを表づける積極的な資料がないばかりか、むしろ、この建物は、様式からみて、それに先行する第Ⅱ期に属するものように思われるので、従来の伝承や比定には、なお検討の余地がのこされている。第Ⅱ期。

東研・Ⅲ-12; ASI・Ⅲ-60

**T. 101** 墓建築 (?) ハクズ・ハースの貯水池の東南隅にある。 附図 G-11, 図版 109b

この建物は、南北両端に、ドームをいただく十二本柱からなる四角平面の部分をもっており、そのあいだを、長さ5間・幅3間の列柱の部分がつないでいる。さらに、その中央から、同じくドームをいただく四角平面の部屋が西側に張り出している。この変わったプランをもつ建物全体が、一つの基台の上に立っており、鼎立する三つのドームと、立ち並ぶ列柱とが、独特な雰囲気をかもしだしている。ASIは、かつてこの建物に墓があったという伝説を紹介しているが、現在では、その痕跡は認められない。第Ⅱ期。

東研・Ⅴ-11-9; ASI・Ⅲ-316

**T. 102** 墓建築 クトゥブ・ミーナールの西南約900メートル、ムガル末期のパハー・ドゥル・シャー二世の宮殿のすぐ南に接してある。 附図 F-13, 図版 110a

この墓建築は、奇妙な平面をもつ建造物で、無蓋の部分を中心とし、その南側には、ドームをいただく十二本柱の四角平面の建物がある。また、北側には、ピラミッド型の屋根をもつ、四本柱からなる二層の建物がある。中央無蓋の部分には、2基の墓石の痕跡があり、ASIは、この土地のいい伝説によって、奴隸王朝時代のスルターン・イレトクミジュの甥と、クトゥブ・シャーヒブの弟子との墓であると記しており、建立の時期をもイレトクミジュの治世としている。これらの墓の主人公については、まったくなんらの確証もなく、また、ASIの時代区分についても、現存の建物に関する限り納得できない。構造・様式からすれば、後代の特徴をもっている部分もあるが、全体としては、デリ・シャハーン朝時代中期に属するものと考えたい。なお、この建造物は、すぐ東にある建物 (O. 27, 図版 158d) となんらかの

関連があるのかもしれない。第Ⅱ期。

東研. K-69; ASI. III-71

**T. 103** ラージューン=キーパーイーン (Rajan ki Bai'am) の十二本柱の墓とよぶ。クトゥブ=ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図. F-13. 図版. 110b

この建物は、ラージューン=キーパーイーンのマスク [M. 39, 図版. 47] の前庭の北隅に立っており、ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の墓建築である。このドームは、花瓣文様をもっているのがめずらしく、また、十六角形のドラムの一部やその他の場所に、青いタイルの断片がのこっている。床面の中央には、1基の墓がおかれている。南面の庇の上方に、912 A. H. (1506 A. D.) の年次と、ローディー朝のスルターンであるシカンドル=シャーの名を記した碑文がある。この墓建築は、マスクおよびラージューン=キーパーイーンとよばれるバーオリー [W. 36, 図版. 132] について、ほぼ同時代になんらかの関連をもって、建てられたものと推定される。第Ⅲ期。

東研. K-12-3; ASI. III-165

**T. 104** ユースフ=カッタール (Yusuf Qattāl) の墓と伝えられているもので、キルキー部落の北方約200メートルにある。 附図. H-12. 図版. 110c

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、柱間には、南の入口と西のミヒラーブの部分とをのぞいて、スクリーンがはめられている。内部には、1基の墓石が横たわっている。この建物の礎石からドームの基部にいたる内外の部分は、すべて、赤い砂岩でつくられており、随処に豊富な文様がほどこされて、整った美しさを示している。この建物は、様式と文様とからみて、ムガル初期に属する公算が大きいので、伝えられるように、933 A. H. (1526-27 A. D.) に死んだとされる、ジェイフ=ユースフ=カッタールの墓である可能性も大いにあるといえよう。なお、この墓建築のすぐ西側にあるマスク [M. 46, 図版. 50] は、この墓建築となんらかの関連をもって建てられたものと推定される。第Ⅲ期 (?). 東研. VIII-30; ASI. III-217

**T. 105** マフドゥーム=サマーウッディーン (Makhdūm Samā' al-Dīn) の墓と伝えられており、メヘローリー部落の南端から南西約300メートル、南下する道路から西へ約150メートルにある。 附図. F-13. 図版. 111a

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、現在では、白く塗装がほどこされ、低い壁がめぐらされている。内部には、6基の墓があり、最大のものがこの聖者の墓と伝えられている。ドームの内部北側に、19世紀末葉の碑文がかかげられ、シャーヘ=サマーウッディーンの名と、901 A. H. (1495-98 A. D.) の年次とが見える。なお、

そのすぐ北に接するマスク [M. 41, 図版. 49a] が、この墓建築となんらかの関連をもっていることは、疑いないところであろう。第Ⅲ期。 東研. K-45-2; ASI. III-92

**T. 106** 墓建築 ムニールカ部落の西北西約600メートルにある。 附図. E-II. 図版. IIIb

ドームをいただき、本来は、12本の柱からなる四角平面の建物であったが、現在では、四隅の柱が抜き取られて、8本の柱をのこすのみである。この建物は、四面に龕をめぐらす、高い基壇の中央に立っているが、この基壇の西の部分には、ミヒラーブと、両端に小塔および袖壁とをそなえる礼拝壁をもっている。この建物は、附近の住民によって、バーラダリー (Barahdarī) とよばれていたという。この基壇の北に接して、ドームをいただく四角平面の墓建築 [T. 52, 図版. 90a, b] をのせた別の基壇が存在する。第Ⅲ期。 東研. VII-24; ASI. IV-121

**T. 107** 墓建築 メヘローリー部落の南端から南西約300メートル、南下する道路から西へ約200メートルにある。 附図. F-13. 図版. 111c

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、現在では、内部に6基の墓がある。この建物は、囲壁によって囲まれており、その西壁は、礼拝壁となっていて、ミヒラーブと4本の小塔をそなえている。南には、四角平面の門があり、現在では、そこにも1基の墓が横たわっている。第Ⅲ期。 東研. K-46; ASI. III-94

**T. 108** 墓建築 シャーブル=ジャート部落の西南西約600メートルにある。 附図. G-11. 図版. 112a

ドームをいただき、十二本柱からなる四角平面の建物で、内部に1基の墓がある。屋上の四隅に立つ小塔と、ドーム内部の豊富な装飾文様とが特徴的である。この建物は、囲壁に囲まれた墓地の内部に立っており、また、西側には、マフドゥーム=サーヒブのマスクとして知られている建物 [M. 33, 図版. 39] がある。第Ⅲ期。 東研. VIII-9-2; ASI. III-299

**T. 109** シーリー=東南のラル=グンバッド (Lal Gumbad) とよぶ。チラーグ=デリー部落の北西隅の北方約600メートル、シーリー=城壁の東南部の外側にある。 附図. H-11. 図版. 112b

この墓建築は、囲壁および礼拝壁に囲まれた墓地 [G. 14, 図版. 59c] のほぼ中央にあり、ドームをいただく十二本柱からなる四角平面の建物である。床面には、2基の墓石の痕跡が認められる。柱や軒の附近、およびドーム天井内部 [補図. 34] に豊富に用いられている赤い砂岩が、この建物に美しさをそえている。第Ⅲ期。

東研・Ⅷ-43-1; ASIⅢ-245



附図 34 T.109 ドーム天井

**T.110** 巴斯ティー(Basti)の墓として知られており、セーナガル鉄道駅の東方約600メートル、ディフェンス・コロニー住宅地の北端、線路にそって南側にある。附図 I-9; 図版113

部屋をめぐらす。外辺約13メートルの四角の高い基壇の上に立っており、ドームをいただく。十二本柱からなる四角平面の建物である。底の上方を飾る碑文・文様や、ドーム内部の、赤い砂岩に白と黒の石をあしらった石積み、めずらしく、また、美しい。内部中央には、1基の墓石の痕跡がある。基壇の東側には、東門と、それにつづく階段があり、また、四隅には、四本柱からなるチャハトリが立っていたが、現在では、東北隅のもののみが残っている。この墓建築は、北側のパーオリ(W.27, 図版133a)や、西北にあるモスク(M.40, 図版48)、および西側の門(O.44, 図版162a)と関連をもつものと思われる。第Ⅲ期。

東研・Ⅷ-1-4; ASIⅤ-37

**T.111** 墓建築 ゼマツルドブル部落の西のはずれにある。附図 I-11; 図版114a,b

この墓は、高い基壇の上に立っており、ドームをいただく。十二本柱からなる四角平面の建物である。この建物は、内外ともに、豊かな装飾をもっているのが特徴で、ドラム上方のタイルの痕跡や、柱頭上部のブラケットなどに、それがうかがえる。一方、ドーム内部は、頂部の円形文様と、そこから放射状にはしる16本の帯のあいだに配されたスプーン形文様、および、その下をめぐる32の小さな龕列などによって、一層の華やかさをかもしだしている。ASIは、この建物をとり囲む囲壁の東門についてふれているが、現在では失われている。第Ⅲ期。

東研・Ⅷ-4; ASIⅤ-28

**T.112** 墓建築 クトゥブ・ミーナールの南南西約

650メートルにある。附図 F-13; 図版114c

この建物は、墓を四隅にめぐらし、四隅に八角の張り出し部分をもつ。東西38.5メートル、南北16.9メートルの、高い基壇の西寄りのところに立っている。ドームをいただく。十二本柱からなる、外辺6.9メートルの四角平面の建物で、内部には3基の墓がある。ドームに花文様があるのがめずらしい。第Ⅲ期。東研・Ⅷ-13; ASIⅢ-168

**T.113** ナラーブ・デラーのバーラー・カンパー (Barah Khamla) とよばれており、ナラーブ・デラー部落をとり囲む囲壁の東門のすぐ外側にある。附図 H-12; 図版114d

ドームをいただく。十二本柱からなる四角平面の建物である。かつては、1基の墓石があったらしいが、現在では、なくなってしまっている。第Ⅲ期。

東研・Ⅷ-14; ASIⅢ-244

**T.114** 墓建築 シェイフブル部落の西北西約300メートルにある。附図 H-12; 図版115a

ドームをいただく。赤い砂岩の十二本柱からなる、外辺約6.5メートルの四角平面の建物で、内部には墓石が散乱している。ドーム天井の内部の石積み、中心から放射状に、八本の肋材をおたしたかなちになっているのがめずらしい(附図35)。第Ⅲ期。東研・Ⅷ-21; ASIⅢ-257



附図 35 T.114 ドーム天井

**T.115** 墓建築 ゼマツルドブル部落の西北約500メートル、リンターロードの西側にある。附図 I-10; 図版115b

ドームをいただく。十二本柱からなる四角平面の建物で、現在では、住民によって使用されており、墓の痕跡は認められない。ASIは、すでに崩壊したランガル・バーン(Langar Khan)の墓の内庭に立っていたと記しているが、現在でも、附近には、建物の一部や資材の断片が残っている。この十二本柱の墓建築は、様式や文様からみて、あるいは、ムガル期に属する可能性もある。第Ⅲ期(?)。

東研 V-1; ASLV-39

**T.116** 動物公園内の十二本柱の墓とよぶ。ブラナーキラーの城壁の南西隅から東南東へ約300メートル、動物公園の内部にある。附図 I-8, 図版 115c

ドームをいただく12本の柱からなる四角平面の墓建築で、ヒンドゥー的な様式をもつ柱が特徴的である。この建物の年代については、なお疑問があるが、一応第Ⅲ期に分類しておく。第Ⅲ期。 東研 II-11; ASI I-132

**T.117** 墓建築 シェイフブル部落の西のはずれ、チラーグ=デリー=ロードの南側にある。附図 H-12, 図版 115d

ドームをいただく、赤い砂岩の十二本柱からなる四角平面の建物で、西にミヒラーブをそなえ、南と東とに入口の痕跡をのこしている。かつては、柱のあいだは、赤い砂岩のスクリーンで閉ざされていたらしいが、現在ではまったく失われてしまっている。内部には3基の墓のあとが認められる。この墓建築のすぐ北東には、16世紀前半の壁石、シェイフ=アラー=ウッディーン=スール=タージのものと同えられる墓 (T.130, 図版 119a, b) がある。第Ⅲ期。

東研 VIII-22-3; ASI III-247

**T.118** サイド=ヤーシソ (Sayid Yasin) の墓と伝えられているもので、フマーニーンの墓の西南西約400メートル、マトッラ=ロードの東約100メートルのところにある。附図 I-9, 図版 116a

ドームをいただく12本柱からなる四角平面の建物で、内部には、現在、1基の墓の痕跡と、近代の墓碑が認められる。第Ⅲ期。 東研 III-17; ASI II-173

**T.119** 墓建築 ゼマッルダブル部落の内部にある。附図 I-11, 図版 116b

ドームをいただく、十二本柱からなる四角平面の建物であるが、現在では、部落民によって使用されているので、詳細はわからない。第Ⅲ期。 東研 V-5; ASLV-29

**T.120** 墓建築 (?) ムバーラタブル=コートラ部落の西端にある。附図 H-10, 図版 116c

ドームをいただく、八本柱からなる八角平面の建物で、八角形の基台の上に立っている。現在では、柱のあいだが、煉瓦によってふさがれている。ASIは、墓石がなかったと記しているが、おそらくは墓建築であったろう。第Ⅲ期。

東研 IV-14; ASLV-44

**T.121** 墓建築 (?) ムバーラタブル=コートラ部落の内部、その西南端近くにある。附図 H-10, 図版 116d

八角平面の建物で、八本柱がドームを支えている。現在では、住民によって利用され、内部の状況はわからない。おそらくは、墓建築であったであろう。第Ⅲ期。

東研 IV-7; ASLV-49

**T.122** 墓建築 マーラヴィーヤナガル住宅地の西北隅に近く、ペーガンブルのモスクの南東約500メートルにある。附図 G-12, 図版 117a

ドームをいただく、八本柱からなる八角平面の建物で、西側には、ミヒラーブと袖壁をそなえた礼拝壁を(附図 36)、東側には、小さな門をもっており、全体が、基壇の上におかれている。現在では、店舗と住居に利用されている。第Ⅲ期。

東研 VIII-57; ASI III-213



附図 36 T.122 礼拝壁 外壁面と階段

**T.123** 墓建築 (?) クトッブ=ミーナールの南南西約700メートルにある。附図 F-13, 図版 117b

小さな四角の基壇の上に立っており、ドームをいただく、八本柱からなる八角平面の建物である。現在、墓は見あたらないので、墓建築であるとはいききれない。第Ⅲ期。

東研 K-50; ASI III-169

**T.124** 墓建築 チラーグ=デリー部落の西のはずれにあるダルガーの内部に位置する。附図 H-12, 図版 117c

ドームをいただく、六本柱からなる、さしわたし3.7メートルの六角平面の建物で、内部に、一つの墓石がおかれている。この建物は、シェイフ=ファリード=シャカル=ガンジ (Shaiikh Farid Shakar Ganj) の孫娘の墓と伝えられている。第Ⅲ期。 東研 VIII-79; ASI III-225

**T.125** ブラナーキラー西北の八本柱の墓とよぶ。ブラナーキラーの城壁の西北隅から西北へ約250メートル、マトッラ=ロードの西側の小さな丘の上にある。附図 I-8, 図版 117d

ドームをいただく八本柱からなる八角平面の建物で、ドーム内部の基部をめぐる32個の小さな竈列と、その上をはしる碑文と文様とが目立っている。第Ⅲ期。 東研 II-10

**T. 126** 墓建築(?) ハウス＝ハースの貯水池の南端の中央附近の外側にある。 附図 F-11 図版 118a

この建物は、ドームをいただく六本柱からなり、四角の基壇の上に立っている。基壇の西側の中央にあるアーチ型の入口をくぐって、左右におかれる階段をのぼると、基壇の上に達する。ドーム内部の大柄な文様が、見るものをおどろかせる(補図 37)。小型の建物ではあるが、一応、墓建築と考えておきたい。第Ⅲ期。

東研.Ⅱ-18; ASI.Ⅲ-320



補図 37 T.126 ドーム内部

**T. 127** 墓建築 ザマールドブル部落の南の部分にある。 附図 I-II 図版 118b

基壇の上に立ち、ドームをいただく、六本柱からなる六角平面の建物で、現在では、墓石は見られない。第Ⅲ期。

東研.Ⅴ-3; ASI.Ⅳ-30

**T. 128** 墓建築 ムニールカ部落の西北西約 1.4 キロメートルにある。 附図 E-10 図版 118c

ドームをいただく、六本柱からなる六角平面の建物で、現在では、納屋に使用されている。この建物は、四隅に小塔をもち、低い囲壁に囲まれた基壇の上に立っており、西には、五つのミヒラーブと神壁のある礼拝壁を、東には門をそなえている。この建物のすぐ南南東には、同じく礼拝壁をもつ墓建築(T.33, 図版 84a, b)が立っている。第Ⅲ期。

東研.Ⅵ-27; ASI.Ⅳ-126

**T. 129** 墓建築 メベローリー部落の南端に近く、この部落より南下する道路の東側にある。 附図 F-13 図版 118d

この墓建築は、ピラミッド型の屋根をいただく六本柱からなる、ほぼ四角の平面をもつ建物で、モスク(M.49, 図版 52a)の前庭の北寄りのところに立っている。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-72-2; cf. ASI.Ⅲ-83

**T. 130** シェイブ＝アラーウッディーン＝ヌール＝タージ(Shaikh 'Ala' al-Din Nur Taj)の墓として知られており、シェイブブル部落の西のはずれ、チラーグ＝デリー＝ロードの南側にある。 附図 H-12 図版 119a, b

ドームをいただく四角平面の建物で、それぞれの面は、三つのアーチからなっている。西側の中央部分には、ミヒラーブが設けられ、南側の中央アーチには、入口が開かれており、他はすべて閉ざされている。内部には、6基の墓石が認められる。内外アーチの両肩をかざる円形文様と、ドーム内部の基部をはしる帯状の碑文が、この建物に特色をそなえている。南面入口の上方に、ローディー朝の سلطانであるシカンドル＝ジャーの名と、913 A. H. (1507 A. D.)の年次を記した碑文がある。この歴史碑文は、この建物が、シェイブ＝アラーウッディーン＝ヌール＝タージによって、1507 A. D. に建てられたことを伝えているが、948 A. H. (1541-42 A. D.)に死んだとされるこの聖者が、この建物に葬られたかどうかについては確証がない。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-22-1; ASI.Ⅲ-236

**T. 131** 墓建築(?) クトッブ＝ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図 F-13 図版 119c

ドームをいただく、四角平面の建物で、本来は、各面に、それぞれ、三つのアーチを開いていたものと思われる。しかし、後代に、西面の中央に、ミヒラーブが設けられ、北面をのぞいて、他の三面のアーチは、すべて、閉ざされてしまった。現在、内部には、墓の痕跡が認められるが、本来、墓として建てられたものかどうかは、明らかでない。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-14; ASI.Ⅲ-170

**T. 132** 墓建築 ディフェンス＝コロニー住宅地の内部、中央コートリーの中心にある。 附図 H-10 図版 119d

ドームをいただく八角平面の建物で、各面にアーチをひらいている。現在は、事務所として使用されており、改変が著しい。ASIは、内部に2基の墓石のあったことを記している。シェイブ＝アリー(Shaikh 'Ali)のグムディーとよばれていたらしい。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-13; ASI.Ⅳ-54

**T. 133** バハロール＝ローディー(Bahlul Lodi)の墓として知られているもので、チラーグ＝デリー部落の西端にあり、ダルガーの西側囲壁のすぐ外にある。 附図 H-12 図版 120

外辺13メートルの四角平面の建物で、西をのぞく三面には、それぞれ三つの入口を開き、内部は、九つの間からなっている。中央と四隅の間には、それぞれドームがのせられ、中央のものは、一段と高く、花菱型をなしている。内部の西壁の中央には、ミヒラーブが設けられている。中央の間には、基壇の上に立つ二つの墓石があり、さらに、その西の間には、漆喰の墓の痕跡がある。ミヒラーブの周辺や、入口のアーチにみられる文様・碑文、および軒上の多

数の小さな羅列は、この建物を趣きあるものとしている。この墓建築は、ローディー朝の初代のスルターンである、バハール・ゾーの墓とされてきたが、それを証拠だてる横断的な資料はない。第Ⅲ期。

東研Ⅷ-23; ASIⅢ-238

**T.134** ニザームッディーンのパラカソバー (Barah Khamba) とよばれており、フマーンゾの墓の西方約750メートル、ローディー朝の南側にある。附図 I-9、図版121

この墓建築は、外辺18.5メートルの四角平面の建物で、12本の柱をもつ主室と、それをとり囲む奥行1間の廻廊とからなっている。中央の主室は、大きなドームをもち、廻廊の四隅は、それぞれ小さなドームにおおわれている。この建物の四面は、同じ外観をもっており、中央の部分は三つの大きなアーチからなり、その両側は小さなアーチをもつ壁面となっている。ASIは、主室の中央に墓石のあとがあったことを記しているが、現在では、一部の住民が仮の住まいとして利用しているので、その痕跡は明らかでない。第Ⅲ期。 東研Ⅲ-8; ASIⅠ-182

**T.135** シェイク・ナシールッディーン・マフムード (Sheikh Nasir al-Din Mahmūd) の墓で、ロッシュネ・チラーグ・ディヤリー (Roshan-i Chiragh-i Dihli) の廟として知られており、チラーグ・ディヤリー部落の西のはずれにある。附図 H-12



図版 38 T.135: 東面と南面

この墓建築は、本来は、ドームをいただく、外辺5.7メートルの、十二本柱からなる四角平面の建物で、おそらくは、第Ⅱ期に属するものである。しかし、後代にしばしば補修と増築が行なわれ、現在では、近代の廻廊が周回をとり囲み、派手な色彩をほどこされて、外観は一変してしまっている(挿図.38)。墓石をはじめとする内部もまた、後代の改変の結果である。ASIが紹介している19世紀後半の、墓石と欄干の献納を伝える碑文も、現在では、すでに失われてしまっている。第Ⅲ期。 東研Ⅷ-78; ASIⅢ-221

**T.136** 墓建築 ニザームッディーン・オーリヤの墓の東南約80メートルにある。附図 I-9

ドームをいただく、十二本柱からなる四角平面の建物であるが、現在では、ドームと柱の上部をのこして土中に埋もれているので、内部の様子はまったくわからない(挿図.39)。第Ⅲ期。 東研Ⅲ-36; ASIⅠ-237



挿図 39 T.136: 地上にあらわれている部分

**T.137** 墓建築(?) ニザームッディーン・オーリヤの墓の北方約80メートル、バーオリ (W.39, 図版.127) の東北隅にある。附図 I-9



図版 40 T.137: 南側

本来は、ドームをいただく、十二本柱からなる四角平面の建物である。現在では、南側と西側は、後代の壁に蔽われて外観は一変し(挿図.40)、北側と東側は、土中に埋もれ、わずかに、北側の柱頭の部分がうかがわれるにすぎない。第Ⅱ期~第Ⅲ期。

東研Ⅲ-33; ASIⅡ-187

**T.138** 墓建築(?) クトッブ・ミーナールの西南約500メートル、メヘローリー部落を通る道路に沿って、その北側にある。附図 F-13

現在では、メヘローリー部落の病院と保健所とに利用されており、わずかに、ドームがかつてのおもかけをのこす



図版 41 T.138: 南面

のみで、その他の部分は、塗装と改変が加えられ、本来のすがたをとどめていない〔挿図41〕。第Ⅲ期。

東研Ⅱ-110; ASIⅡ-124

**T.139** 墓建築(?) ニザームッディーン・オーリヤーの墓の北方約50メートルのところにある。

附図 I-9

現在では、白塗りのドーム〔挿図42〕をのこすのみで、建物の大部分は、近代の住居の壁におおわれて、本来のすがたをうかがうことはできない。しかし、ASIによれば、8本の柱に支えられた八角平面の建物であったらしい。第Ⅲ期。



挿図42 T.139 白塗りのドーム 東上り

東研Ⅲ-45; ASIⅡ-193

**T.140** 墓建築(?) ニザームッディーン・オーリヤーの墓の東側にある。



挿図43 T.140 北西

附図 I-9

ドームをいまだく四角平面の建物であるが、その周辺に、後代の構造物が建てこんでおり、そのうえ、この建物自体も住居として利用されて、著しく改変が加えられているので、本来のすがたはほとんどわからない〔挿図43〕。

ムガル時代に属する可

能性も大いに考えられる。第Ⅲ期。

東研Ⅲ-29; ASIⅡ-209

**T.141** 墓建築: フマーユーンブル部落の東方約400メートルにある。附図 G-10

この建物は、四角の平面をもっているが、未完成のまま放置されたらしく、また、その後の崩壊も著しいので、詳細は明らかでない〔挿図44〕。第Ⅲ期(?)。

東研Ⅳ-20; ASIⅡ-333



挿図44 T.141 南西

**T.142** 墓建築 ムハマドブル部落の東北端、ティーン・ブルジャーとよばれる墓建築〔T.7〕の南側に造られている。附図 F-10

内辺4.8メートルの、四角平面の部屋をもつ建物で、四方に入口を開いている。北の入口は、ティーン・ブルジャーの南壁に接しており、また、東の入口は、ティーン・ブルジャーの南の側にある八角形の建造物の階段に通じている〔挿図



挿図45 T.142 内部西北隅

45〕。床面には、1墓の墓の痕跡が認められる。現在、この建物は天井をもっていないが、おそらくは、未完成に終わったものであろう。第Ⅲ期(?)。

東研Ⅳ-51; ASIⅡ-305



## 水利施設

**W.1** スルターンブルの円井戸とよぶ。メヘローリー部落の南端から南南西約3キロメートル、スルターンブル部落の南東約250メートルのところにある。 附図 E-14、図版 122a

この井戸は、外径6.8メートル、内径2.2メートルの円井戸で、現在もなお、5メートルほど下に水をたたえている。この井戸の内部西側には、661 A.H. (1262-63 A.D.) の年次をもつ碑文がはめこまれていたが(挿図 46)、現在では、レッドフォート内の博物館に保管されている。第Ⅰ期。

東研 X-4-54; ASLⅢ-142



挿図 47 W.1 内部西側

**W.2** トッグルカーバード城砦内の円井戸Ⅰとよぶ。同城砦の都市地域の南西部分にある。 附図 J-13、図版 122b

この井戸は、直径2.2メートルの円形をなし、現在では、水はまったくなく、深さは約9メートルである。地表に現われている割り石の、残存している状況からみて、本来は、この井戸の周囲に、幅約1.5メートルの環状の石敷きがあったことがわかる。第Ⅱ期。

東研 X-4-5

**W.3** トッグルカーバード城砦内の円井戸Ⅱとよぶ。同城砦の都市地域の中央部分のやや西寄りのところにある。 附図 J-13、図版 122c

この井戸は、現在では、著しく崩壊しているが、南から南東の部分にわたって、その内側に、わずかに割り石の構築のあとがのこっている。この部分には、高さを異にした、アーチ型の二つの龕が認められる(挿図 47)。この部分の曲線から復元してみると、この井戸は、本来、直径約9メートルに近いものであったと推定される。地表に散在する割り石の状況からみて、この井戸の周囲には、幅約1.5メ

ートルの石敷きがあり、その一部が、さらに、扇型に外側に突出するかたちとなっていたことが知られる。第Ⅱ期。

東研 X-4-6



挿図 47 W.3 内部南側

**W.4** トッグルカーバード城砦内の円井戸Ⅲとよぶ。同城砦の都市地域の中央部分の、やや東寄りのところにある。 附図 J-13

この井戸は、直径6メートルの円井戸で、西側の部分がまったく崩壊しており、底部もまた埋もれているが、現在では、深さ約6メートルである。北・東・南の三面には、地表から井戸の内側に通じる、階段をもった地下の通路が



挿図 48 W.4 内部南側

設けられており、この通路の末端は、長さ約2メートルのアーチ型の水汲み場となっている(挿図 48)。北側には、真直ぐに降りる地下の通路の途中に、幅約4メートルの小部屋が設けられているが、東側と南側の通路は曲折し

ている。崩壊した西側にも、おそらくは、東側・南側と同じ形式の通路が存在していたものと思われる。第Ⅱ期。

東研 X-4-7

**W.5** トッグルカーバード城砦内の円井戸Ⅳとよぶ。同城砦の都市地域の南の部分にあり、宮廷地域の北東の城門の外側、約100メートルのところにある。 附図 J-13

かなり大型の円井戸で、南側に、四角の張り出し部分をもっている。この部分は、おそらくは、本来、水汲み場を

東研 X-4-10

なしていたものであろう。現在、この井戸は、南と北の部分の一部の内部の石積みをのぞいて、ほとんど崩れ落ちてしまっている〔挿図49〕。第Ⅱ期。 東研 X-4-8



挿図 49 W.5 南より

**W.6** トッグルカーバード城壁内の円井戸Ⅴとよぶ。同城壁の都市地域の北の部分にある。〔挿図 J-13〕

この井戸は、現在では、くずれてしまっているが、おそらくは、トッグルカーバード城壁内の円井戸Ⅰ〔W.3、図版122b〕と同じ形式のものであつたらう〔挿図50〕。第Ⅱ期。

東研 X-4-9



挿図 50 W.6 全景

**W.7** トッグルカーバード城壁内の円井戸〔?〕Ⅵとよぶ。同城壁の都市地域の西北部分にある。〔挿図 J-13〕

この遺跡は、現在では、石積みの僅かな部分と、そのかたわらのアーチ形の構造物をのこしているにすぎない。この石積みが円弧をえがいているところから、あるいは、円井戸の一部であつたかもしれない〔挿図51〕。第Ⅱ期。



挿図 51 W.7 残存する部分

**W.8** 円井戸 ラードー・サラーイ部落の北東約500メートルにある。〔挿図 G-12〕

この井戸は、現在、置木におおわれて見つけにくい。形は比較的よくのこっており、外側は、直径約6メートルの円形をなし、内側は、さしわたし2.2メートルの八角形をなしている〔挿図52〕。この井戸は、デリー諸王朝時代中期に属すると思われる墓地〔G.8、図版58c〕の南側壁のすぐ外側にあり、両者は、なんらかの関連をもつものと思われるので、この井戸をも、一応、同期に属するものとしておく。第Ⅱ期〔?〕。

東研 X-23



挿図 52 W.8 全景

**W.9** 円井戸 ムニールカ部落の東方約800メートル、ハウズ・ハース貯水池の西南端から西南西約700メートルにある。〔挿図 F-11〕

この井戸は直径約3メートルの円井戸で、同地点にあるキスタ〔M.28、図版36b,c〕の東門の南の入口の近く、その直南にある。おそらく、このキスタと同時代に建造されたものかも知れない。第Ⅱ期〔?〕。

東研 X-42; cf. ASI, p. 323



挿図 53 W.9 南より

**W.10** 円井戸 ムニールカ部落の西北西約1.4キロメートルにある。〔挿図 E-10〕

この円形の井戸は、ローデュー朝のスルターンであつたシカンダル・シャーの名と、906 A.H. (1500-01 A.D.) の年次を記した歴史碑文をもつ建物〔O.47、図版162c〕の、北方約15メートルのところにある。その碑文に見えるチャ

ー(chah, 井戸)が、これにあたるかどうかはよくわからない(補図54)。第Ⅲ期(Ⅱ)。東研Ⅵ-39



補図54 W.10 井戸西側

**W.11** チャーヘーハース(Chah-i-Khas)とよばれていた円井戸で、グリーンパーク住宅地の西方、メヘローリー・ロードからハウズ・ハースにむかう道路の北側にある。附図G-14。図版123a

現在では、まったく埋没崩壊して、わずかにその北側の一部の石積みをはのこしているにすぎないが、その部分から推定すると、この円井戸の外側は、十二角形をなしていたらしい。この井戸には、もと、ローディー朝のシカソダル・シャーの名と、915 A. H. (1509 A. D.)の年次とを記した、大理石の碑文がのこっていたが、現在では、レッドフォートの博物館に保管されている。第Ⅲ期。

東研Ⅵ-13; ASIⅢ-332

**W.12** グリーンパークの円井戸とよぶ。グリーンパーク住宅地の西方、メヘローリー・ロードからハウズ・ハースにむかう道路の北側にある。附図G-11。図版123b

現在では、ほとんど崩壊して、わずかに、その北西部分の上部の石積みをはのこすのみである。この井戸は、その石積みの状況や、附近の遺跡の年代からみて、第Ⅲ期のものとして採録しておきたい。第Ⅲ期。東研Ⅵ-14

**W.13** ラール・クワン(Lal Kuwan, 赤い井戸)としてひろく知られており、ラール・クワン・バーザールに沿



補図55 W.13 現状

って、その東側にある。附図H-5。

この著名な井戸は、現在では、近代のコンクリートでまったく改修され、歩道上にあつて、附近の住民にひろく利用されている(補図55)。ASIは、ムガル時代より古いものと考えているが、現在では、その年代を決定する手掛りはない。しかし、一応、採録しておく。

東研Ⅵ-17; ASIⅠ-211

**W.14** ラードー・サラーイーの円井戸とよぶ。ラードー・サラーイー部落の西方約100メートル、クッブ・バーダルブル・ロードにそつて北側にある。附図F-12。図版123c

全体は、直径約15メートルの円形をなしており、その中央に、直径約5メートルの八角形の井戸の部分がある。井戸の部分の周囲には、グォールト天井をもつた通路がめぐ



補図56 W.14 東側通路の入口附近(北より)

っており、両側の入口から、左右にゆるい傾斜をなして北の方へはしっている(補図56)。井戸や通路の壁面は、切石によつて整然と積まれているのが目立つ。

現在では、この井戸は、通路の一部をはのこしてまったく崩壊し、周囲には灌木が

おおつているので、見出しにくい。ASIによれば、この円井戸には碑文があつて、その年次は、はっきりしないが、ローディー朝のシカソダル・シャーの名をはのこしている。この碑文は、現在では、レッドフォート内の博物館に保管されている。第Ⅲ期。

東研Ⅹ-13; ASIⅢ-199

**W.15** トッブルカーバードの貯水井戸とよぶ。同城壁の宮廷地域の南城壁に近いところにある。附図J-13。図版124a

この井戸は、現在では、北側の石積みの一部と揚水施設とをはのこして、ほとんどくずれ落ちているが、おそらくは、角型をなしていたもので、その規模は、かなり大きなものであつたと思われる。この井戸よりさらに大規模なものが、宮廷地域の東の部分にも、廃墟としてのはのこっているが、いずれも、湧水のほかに天水をも貯える目的で建設されたものであろう。第Ⅱ期。東研Ⅹ-4-11

**W.16** ビール・ガーイブ西南の井戸とよぶ。デリー大学正門の南方約1.3キロメートル、デリー・リッジ土にあ

る。附図 H-4。図版 124b

一辺約13メートルの、ほぼ正方形の井戸で、四つの竈が大体、東西南北を指している。この井戸の東北側の東寄りのところに、水を汲みあげる台が、北側に突き出して構築されており、この台の下はアーチの窓をもつ部屋となっている。全体として、北側が比較的良好のこっており、南側は崩壊している。東北側の残存部分をみると、現在、井戸の底部から地表まで三層をなしていたことがわかる。東北側の最下層のアーチの一つは、地下の通路の入口となっている。井戸の内部に降りる階段は、西北側にそってつくられている。この井戸は、その東北約50メートルほどのところにある、ビール・ガイブ (O. 13, 図版 151b) と関連して建設されたものと考えていいであろう。第Ⅱ期。

東研 I-3; ASI II-402

**W. 17** フィーローズ・シャー・コートラの円井戸とよぶ。デリー門の東南約700メートル、マトゥラ・ロードの東約300メートル、フィーローズ・シャー・コートラのなかの北の部分にある。附図 I-6。図版 125

中央に円い井戸をもつ円形の建造物で、外側からみると一層であるが、内部は、二層になっていて、各層は奥の壁に竈をつらねた列柱式の廻廊をなしていたものと思われる。東と西の対称的位置には、円形の部屋があって、外部に通じる出入口をもっている。水は、いったん、井戸から屋上に汲みあげられ、そのうち、溝とパイプとを通過して、その一部は外側の水槽に貯えられ、また、他の一部は内側に導かれて、奥の壁に設けられた竈をつぎつぎに流して、巧みに配分されるしくみになっている。この水は、それぞれの竈に設けられた小さな水受けにたたえられ、余った水は、ふたたび井戸にもどされる。なお、下の層の東側の部屋から、ジャムナー河の岸辺に向かって地下溝が通じているが、これは、必要に応じてジャムナー河から水をとり入れるためか、あるいは他のなんらかの目的のために設けられたものと考えられる。

フィーローズ・シャー・コートラの城壁は、同時代の史書の記述によって、ト・グルタ朝のフィーローズ・シャーの治世に建設されたことが知られるので、この井戸もまた、その時代に属するものと考えてよいであろう。

現在では、廻廊の列柱部分はほとんど崩壊し、また、井戸の水は汚濁をきわめていて、往時のおもかげをとどめていない。第Ⅱ期。東研 II-4-3; cf. ASI II-115

**W. 18** ガンダク・キー・バーオリー (Gandak ki Baoli) とよばれており、クトゥブ・ミーナールの南南西約700メートル、クトゥブ・サーヒブのダルガーの近くにある。附図 F-13。図版 126

このバーオリーは、南北に長い長方形で、南のはずれに

円い井戸をそなえている。南側の底にはタンクがあり、北側に、それに連する長い階段がある。南側の正面は四層からなっていて、各層は、井戸とのあいだに窓を開いており、階段の途中から東西両壁の内側にそって走る四層の通路によって、それらの窓に達することができる。最上層の窓の北側には、6本の柱をもつヴェランダがある。このバーオリーの西壁の頂部にのこる水溝と、バーオリーの西北隅にある小さなタンクとは、後代に追加されたものである。このバーオリーは、近くの、奴隸王朝時代の聖者、クトゥブ・サーヒブのダルガーと関連して、構築されたものかもしれない。バーオリーの石積みも、その時代の特徴をよく示している。現在では、タンクの水は汚濁をきわめ、悪臭を放っているが、なお、附近の住民やダルガーの参詣者によって利用されている。しかし、このバーオリーの俗称のおこりとなった猿黄 (ガンダク) のにおいは、もはや消えてしまっている。第Ⅰ期。東研 N-11; ASI II-17

**W. 19** ニザーム・ディーンのバーオリーとして知られており、ニザーム・ディーニ・オーリヤの墓の北方約40メートルにある。附図 I-9。図版 127

北側に階段をもつ長方形のバーオリーで、現在は、水面まで22段を数えるにすぎないが、ASIによれば、1914年6月には40段が水面上に現われていたという。水面の下がどうなっているかについてはわからないが、一般のバーオリーと異なって、外側に井戸が認められないところから、単に湧水と雨水を利用したタンクだけのものか、あるいはアー・ド・マニールのバーオリー (W. 31, 図版 134b) の例に見られるように、タンクの底に井戸をもつ形式のものであったかもしれない。このバーオリーの南側には、シェイブ・ニザーム・ディーニの墓に通じる通路があり、また、バーオリーの周辺には、時代を異にするさまざまな建造物が立ち並んでいる。このバーオリーの建設の事蹟については、シェイブ・ニザーム・ディーニ・オーリヤの宗教活動と関連するさまざまな伝承があるが、おそらくは、デリー諸王朝時代の初期の後半に建てられたものと考えてよいであろう。第Ⅰ期。東研 II-6; ASI II-189

**W. 20** モラーダーバード・ババリーのバーオリーとよぶ。ムニールカ部落の西北西約2.5キロメートル、バヤントナゼル部落の南西約1.1キロメートルにある。附図 D-10。図版 128

南北に長い長方形の、大型のバーオリーで、南側には、タンクにおよぶ階段があるが、現在では、まったく崩壊してしまっている。北側の部分は、三層をなしており、最上層と第二層とは、それぞれ、南にアーチを開く、三つの部屋からなっている。東西の壁面は、竈列をもつ壁が階段状をなしてタンクに達しており、現在では、上から五層目ま

を確認することができる。パーオリーの北の外側には、深い円井戸が附設されている。このパーオリーの南方には、ほぼ同時代に建設されたと思われる囲壁(挿図 7)に囲まれた建物群があるが、おそらくは、たがいに関連をもっていたものと推定される。第Ⅱ期。

東研Ⅴ-31; ASIⅤ-138

**W.21** ハウス・ラーニー東南のパーオリーとよぶ。ハウス・ラーニー部落の東南約250メートルにある。 附図 H-12 図版 129a

幅約12メートルの、南北に長いパーオリーで、現在では、南側の階段と、東西の壁のわずかの部分をのこしているにすぎない。全体的に崩壊理没が著しく、井戸の所在をはじめ、北側の部分の状況はまったくわからない。第Ⅱ期。

東研Ⅴ-58

**W.22** チョール・ミーナール南方のパーオリーとよぶ。ペーガンブルのモスクの北方約400メートルにある。 附図 G-11 図版 129b

このパーオリーは、幅約14メートルの、東西に長い長方形のもので、西側に、五つの間からなる部屋があり、さらに西の外側には、井戸の痕跡が認められる。その他の部分は、崩壊が著しい上に、密生する灌木におおわれて、その様子をうかがうことはむずかしい。おそらくは、東側に、タンクに通じる階段があったものと思われる。第Ⅱ期。

東研Ⅶ-45; cf. ASIⅢ-289

**W.23** トッグルカーバード西北のパーオリーとよぶ。トッグルカーバード大城市的都市区域の外城壁の西北端の西北約800メートルにある。 附図 J-12 図版 129c

このパーオリーは、幅約7メートル、井戸の部分を含む長さ約35メートルの、南北に長い長方形のプランをもっているが、北側の階段の部分はまったくくずれおち、南側の、アーチをもった壁面の大部分も倒壊している。東西の壁面の内側には、アーチ型の装飾が認められる。このパーオリーの南の部分に、円い井戸が設けられており、そこから走る水溝の痕跡が、パーオリーの東西の壁面の頂部に、なお認められる。第Ⅱ期。

東研Ⅹ-6

**W.24** トッグルカーバード西南のパーオリーとよぶ。トッグルカーバードの城壁の西南隅の西南約1.4キロメートルにある。 附図 I-13 図版 130

このパーオリーは、東西に長い長方形で、東側に、タンクに通じる階段があり、西側は、四層をなしており、最上層から、それぞれ、五つ・三つ・一つのアーチをもつ部屋となっており、最下層には、せまい穴を開いている。これらの各層と階段とを結ぶせまい通路が、南北両壁にそって

走っている。この部屋の部分のさらに西側には、円い井戸が設けられている。第Ⅱ期。

東研Ⅹ-7

**W.25** スルターンプルのパーオリーとよぶ。メヘローリー部落の南端から南南西約3.7キロメートル、スルターンプル部落の南方約800メートルのところにある。 附図 E-14 図版 131

このパーオリーは、東西に長い長方形で、東側に階段をもち、西側に部屋と思われる部分の屋根がのこっている。おそらくは、その中間に、タンクがあったと推定されるが、現在では、土中に埋もれてしまっている。部屋と思われる部分のさらに西側には、円い井戸がもうけられている。階



段の東には、石敷の広場があって、そのなかほどに、ドームをいただく八角平面のチャハトリ(挿図 57)が立っている。このチャハトリは、ドームをいただく、八本柱からなる八角平面の建物である。なお、この柱には、

ヒンドゥー様式がみられるが、とくに、西側の北寄りの柱は、豊富なヒンドゥー様式の彫刻文様をもっている。第Ⅱ期。

東研Ⅹ-55; ASIⅢ-143

**W.26** ラージューン・キーパーイーン (Rajun ki Ba'ain) とよばれており、タトッブ・ミーナールの南南西約700メートルにある。 附図 F-13 図版 132

このパーオリーは、南北約39メートル、東西約24メートルの長方形の平面で、北側に階段があり、それを下って南側のタンクに達するが、現在では、土中に埋もれてしまっている。南の外側には、上部が八角形の円い井戸があり、その南側を、列柱の廻廊がめぐっている。パーオリーの内側は、三層をなしており、最上層は、東西両側と南側の両端に、第二層は、南側とその両袖に、それぞれ、奥行1間の列柱式の廻廊をもっている。これに対して、最下層は、壁面に龕をもつのみである。このパーオリーの西側には、モスク(M.39; 図版 47)があって、その前庭は、パーオリーの最上層の平坦な屋根に、直接つらなっている。このパーオリーは、そのモスク、およびモスクの前庭にある、16世紀初頭の碑文をもつ十二本柱の墓建築(T.103; 図版 110b)と、ほぼ同時代に、なんらかの関連をもって、建てられたものと推定される。第Ⅱ期。

東研Ⅹ-12-1; ASIⅢ-163

**W.27** パスティール・バーオリー (Basi Bauli) として知られており、セーナガル鉄道駅の東方約600メートル、ディフェンス・コロニー住宅地の北端、線路にそって、南側にある。 附図 I-9。 図版 133a

このバーオリーは、東西に長い長方形の建造物であるが、現在では、土中に埋もれてしまっており、その全貌を知ることにはできない。わずかに、南と北とに、タンクの両側に位置していたと思われる扉扉の一部がうかがえるのみである。このバーオリーは、西側にあるモスタ (M. 44 図版 48) と、南側の遺建築 (T. 110 図版 113) および西南にある門 (O. 44 図版 162a) と、一連のものと思われる。パスティールとは、ローディー朝のシカンダル・シャー時代の高官であったと伝えられる人物であるが、その生涯についても、また、これらの建物との関連についても、よくわからない。 第Ⅲ期。 東研. V-1-1; ASI. V-35

**W.28** ムパーラダブル・コートラのバーオリーとよぶ。ムパーラダブル・コートラ部落の内部にある。 附図 H-10。 図版 133b

このバーオリーは、南北に長い長方形で、北側に、タンクに通じる階段がある。南側は三層をなしており、最上層には扉扉が連なっていて、おそらく、東西につづいていたものと思われるが、現在では、わずかにその西北隅がのこっているにすぎない。南の外側には、円い井戸が附設されている。 第Ⅲ期。 東研. V-5; ASI. V-43

**W.29** ウガル・サイン (Ugar Sain) のバーオリーとよばれてきたもので、ヨソノート・ブレースの東南約900メートル、カーズン・ロードの東約100メートルにある。 附図 H-7。 図版 133c

北側に円い井戸をもつ、南北に長い長方形のバーオリーで、東西の壁面の内側には、二層の倉列が認められる。南側の階段は、その南面にある。後代のものと思われるモスタの前庭につづいている。現在もなお水をたたえているが、使用されてはいない。 第Ⅲ期。 東研. II-5-1; ASI. II-38

**W.30** セジールブル・カ・ダンパッド南方のバーオリーとよぶ。ムニールカ部落の東北約1キロメートル、同部落とムハンマドブル部落とのほぼ中間にある。 附図 F-10。 図版 134a

南北に長い長方形のバーオリーで、北に階段を、南にタンクをそなえ、さらにその両側に円い井戸をもっている。全体の大きさは、南北約35メートル、東西約12メートルにおよんでいる。井戸の両側には、ドームをいただく小さな部屋があって、その入口から階段が下の方に通じている。現在では、荒廃が著しく、とくにタンクの部分が土中に埋

もれてしまっているため、このバーオリーがいくつの層からなっていたかは明らかでない。 第Ⅲ期。

東研. V-19; ASI. II-318

**W.31** フードチーユのバーオリーとよぶ。フードチーユ部落の西のはずれ、メヘローリー・ロードの西側にある。 附図 G-12。 図版 134b

このバーオリーは、東西に長い長方形の平面をもち、東側に階段を、西側にタンクをそなえている。タンクの底の中央には、円い井戸が掘られているが、現在では、まったく干上がってしまっている。このタンクのすぐ西側に、三つの部屋からなる、東面する建物があり、扉扉が著しいが、おそらく、このバーオリーに附属するものであろう。このさらに西北には、ニザームッディーン・オーリヤの母、ビービー・ズライハーとその一族の墓や、チャターガーとされる建物 (図版 70) があるので、このバーオリーは、それらとなんらかの関連をもって構築されたものであろう。 第Ⅲ期。 東研. VI-38; cf. ASI. III-339

**W.32** クトップ北方のL字型バーオリーとよぶ。クトップ・ミーナールの北北東約300メートルにある。 附図 F-12。 図版 134c

このバーオリーは、L字形の変った平面をもつ建造物で、西から東へおちる階段が、南北に長いタンクの部分に達していたものと推定される。現在では、階段もタンクも、ほとんど崩壊・埋没してしまっている。タンクの部分の東西の壁面は、切石積みが比較的よくのこっていて、二層の階段状の倉列が確認できる。井戸については、その有無も所在も今日ではよくわからない。 第Ⅲ期。 東研. VII-47

**W.33** モーイー・ビトラー南城壁北方のバーオリーとよぶ。クトップ・ミーナールの東南方約1キロメートル、ラーイー・ビトラーの城壁の南城壁の南端の北側にある。 附図 G-13

このバーオリーは、現在では、完全な廃墟となっているが、そのかたちは、ほぼ十字型をなしている。内部の各側面は、いずれも割り石が露出して、その表面が、本来、



図版 53 W.33 現状の一部

どのようなものであったかはわからない〔詳図 58〕。このパーオリーの十字型の一角が井戸であったことも考えられるが、現状からは判断することはむずかしい。このパーオリーは、大きな規模をもつものであるが、ムスリム支配のあとにつくられたものか、あるいは、それ以前のヒンドゥーの時代にすでに建設されていたものかは、今日では、知ることはできないが、後者の可能性もつよいといえよう。しかし、ここでは、一応、探査しておく。第Ⅰ期(?)。

東研 K-139

**W.34** カダム=ジャリーのパーオリーとよぶ。ニューデリー鉄道駅の北北西約 600 メートル、タトゥブ=ロードの西約 200 メートルのカダム=ジャリーの城壁内にある。 附図 卅-6

かつて、この場所に、井戸と二層の地下室とをもつパーオリーがあったことを、ASI は記しているが、現在、附近の家屋の入口に、円弧をなす数個の石が認められる〔詳図 59〕。おそらく、これが井戸の外縁の一部をなすものであったと思われる。他の部分は、土中に埋もれてしまったのであろう。第Ⅱ期(?)。 東研 Ⅱ-16; ASI Ⅱ-354



附図 59 W.34 井戸の外縁と思われる石

**W.35** メヘローリー西南のパーオリーとよぶ。メヘローリー部落の西南



附図 60 W.35 東北より

60; 第Ⅲ期(?)。

東研 K-73; cf. ASI Ⅲ-111

約 300 メートルにある。 附図 F-13  
メヘローリー部落の西南にある墓地〔G.1. 図版 56 a〕の東北隅に近く、ほとんど崩壊している。門井戸の北東に長方形のタンクのおとがうかがわれるほか、その全貌はよくわからない〔詳図

**W.36** トッグルカーバードの堰堤Ⅰとよぶ。アーディラーバード城砦の南にひろがる丘陵地帯の一角にあり、ガヤ=スッディーン=トッグルクの墓の南方約 600 メートルのところに位置する。 附図 J-14. 図版 135a

この堰堤は、丘陵のふところに深く入り込んだ谷間の出口をふさぐかたちに構築されたもので、ほぼ南北方向に走っている。現在では、中央部分は崩壊しているが、両端の部分の石積みはよくのこっており、元来は、全長が 200 メートル以上に達するものであったと思われる。この堰堤の石積みは、近くの、トッグルカーバードやアーディラーバードの城壁のそれに比較して粗雑である。崩壊した中央部分には、かつては、水門のような施設が設けられていたと推定されるが、現在では、まったく痕跡が認められない。

この堰堤の構築された時期と、その構築の目的および機能については、必ずしも確定的なことはいえないが、おそらくは、トッグルカーバード城砦の南にひろがる広大な平坦地に対する大水利計画の一環として、のちに述べるトッグルカーバードの堰堤Ⅱ〔W.37, 図版 135b〕やアーディラーバードの堰堤城壁〔W.38, 図版 144 a〕と関連して、ほぼ同時期に構築されたものと思われる。この大水利計画のなかで、この堰堤Ⅰに与えられた役割りとしては、この堰堤の東南につづく谷間に集められた雨水をせきとめることによって、雨期の間には、雨水が平坦地に一挙に流入するのを防ぎ、また、雨期明けには、貯水された水を農業用水として供給すること、などであったと推定される。 第Ⅱ期。

東研 X-21

**W.37** トッグルカーバードの堰堤Ⅱとよぶ。アーディラーバード城砦の外城壁の東南部分の南方約 200 メートルのところにある。 附図 J-14. 図版 135b

この堰堤もまた、上述の堰堤Ⅰの場合と同じような地形のところに構築されており、ほぼ同じく南北方向に走っている。しかし、規模は堰堤Ⅰに比べてずっと小さく、全長約 80 メートルほどである。現在では、中央の部分はまったく崩壊しており、その他の部分もまた、表面はくずれ落ちているが、きわめてわずかの部分に、表面の石積みがのこっていて、堰堤Ⅰの石積みとよく似た様相を示している。この堰堤にもまた、かつては水門のような施設が設けられていたと推定されるが、現在では、そのような痕跡は全く見いだせない。この堰堤の構築の時期や、構築の目的およびその機能は、すでに述べた堰堤Ⅰの場合と同様であったであろう。第Ⅱ期。

東研 X-8

**W.38** アーディラーバードの堰堤城壁とよぶ。アーディラーバード城砦の東の部分の北側、トッグルカーバード城砦の東南部分の南側に位置している。 附図 J-13. 図版 144 a

この堰堤城壁は、アーディラーバードとトゥグルカーバードとを南北に結ぶ、幅約120メートル、長さ約300メートルにおよぶ構築物であるが、その東南の石積みは、アーディラーバードの外城壁にそのままつづいており、いわば、アーディラーバード城壁の外城地区の延長部分ともいえるものである。この堰堤城壁は、上述の堰堤ⅠおよびⅡとは異なって、規模ははるかに大きく、また、東面の石積みの特徴についても、また、バステイオンやバットゥルメントをそなえた外観においても、両城壁の城壁といささかも異なるところがない。

この堰堤城壁は、トゥグルカーバード城壁と、アーディラーバード城壁南方の丘陵地帯とにはさまれた、広い平坦地に対する大水利計画の根幹となる構築物で、この平坦地に貯水することが第一の目的であったのであろう。この堰堤城壁の北の部分には、のちに記す水門〔W.47, 図版.137〕が附属していて、この平坦地に貯えられた水を東方へ放出し、また、適時、流水量の調節をも行なうことができるようになっている。この堰堤城壁とそれに附属する水門の構築目的や機能については、大水利計画の問題や、さらには、二つの城壁とその周辺地域の開発の問題などとの関連において、さまざまな角度から検討されることが必要であろう。第Ⅱ期。 東研.Ⅰ-5-1

**W.39** ステーション・ロードの堰堤とよぶ。バレード・ロードからカントンメントに向かうステーション・ロードを、約120メートル進んだ地点を、ほぼ南北に走っている。 附図.E-9、図版.135e

この堰堤は、現在、ステーション・ロードによって切断されているが、その南の部分には、やがて東に転じ、さらに南方へ曲折している。この部分は、調り石と塗喰とからなる構築物が、はっきりとのこっているが、水門は一つも認められない。道路の北側は、ジャングルにおおわれていて、この部分の堰堤は崩壊が著しく、道路から100メートルほどの地点にある水門もまた、ほとんどくずれてしまっている。この水門には、東西にはしる流水孔がそなわっているが、現在では、水門の南の部分に、レベルを貫する二つの小さな流水孔の出口が認められるにすぎない。この水門



附図.Ⅰ W.39 築堤に用いた建造物 北端の一部

の東側には、近代の、半円形の障壁があって、この水門を保護している。この水門のすぐ南側には、堰堤に接して、同時代と思われる建造物があるが〔附図.61〕、現在では入口と壁の一部をのこして、まったく崩壊してしまっており、その本来の状況はわからない。おそらくは、支配層が、狩猟やその他のリクリエーションのために用いた建物であったと思われる。第Ⅱ期。 東研.Ⅰ-7; ASI №-139

**W.40** デリー大学構内の堰堤とよぶ。デリー大学のチームジャス・カレッジの西南からカムラーナガルにかけて、断続的にのこっている。 附図.G-4、図版.135d

現在では、三ヶ所にわずかな断片を認めるにすぎないが、デリー大学にいたP.サレン教授によれば、デリー大学の建設以前には、かなりの長さにわたってつづいていたといわれている。写真の部分には、後代の補修もみられるが、もともとよくのこっている個所で、高さは約2メートル、幅約4メートルである。この堰堤は、石積みの状態からみて、おそらくは、トゥグルク朝後期に構築されたものと推定される。第Ⅱ期。 東研.Ⅰ-8

**W.41** ワジーラーバードの堰堤とよぶ。ワジーラーバード貯水池の北北西約300メートルの付近にある。 附図.H-2、図版.135e

ワジーラーバードの橋〔W.50, 図版.140a〕と水門〔W.49, 図版.139〕のさらに北方に、南北に走る自然岩盤を利用した、堰堤らしい構築物の痕跡が認められる。トゥグルク朝のフィーローズ・シャー時代の史書に記されたワジーラーバードの堰堤〔Band-i-Wazirabad〕というのが、おそらくは、これにあたるものかもしれない。第Ⅱ期。 東研.Ⅰ-11

**W.42** マールチャの堰堤とよぶ。ニューデリーのアンカー・ホテルの西北約2キロ、デリー・リッジのジャングル内にある。 附図.F-8、図版.135f

マールチャ・マハルとよばれる建造物〔O.12, 図版.157a〕の南方約50メートルの付近に、自然の岩盤を利用した堤防状の構築物の痕跡が認められる。この堰堤は、おそらくは、フィーローズ・シャー・トゥグルク時代の史書にみえるマールチャのバンド〔Band-i-Malchah〕にあたるものと推定される。この堰堤と上述のマハルとは、たがいに関連して構築されたものであろう。第Ⅱ期。 東研.Ⅰ-10; cf. ASI №-328

**W.43** ボーデー・バティヤ・リカー・マハルの堰堤とよぶ。アッパー・リッジ・ロードとブーサー・ロードとの交差点の南南東約250メートル、近代の貯水池の東にそってある。 附図.G-6、図版.135g,h



この堰堤は、ポーリー=パティヤーリー=カ=マハルとよばれる建造物〔O.15, 図版.152b,c〕の北側に、南北に断続してのこっている構築物で、現在では、著しく改変の手が加えられ、近代の貯水池の東堤防を兼ねる道路に転用されている。この堰堤の一部に、東西に走る近代の煉瓦づくりのトンネルがあって、その西の奥に、二段三列の石造の流水孔がみられ、その上に、さらに、一段が掘りこまれてのこっている。また、この流水孔の東側に、二段の階段が現存している。これらの構築物は、上に述べた堰堤に附設された水門の一部をなしていたものと推定される。第Ⅱ期。

東研.Ⅰ-6; cf. ASI.Ⅱ-337

**W.44** マヒパールブルの堰堤とよぶ。マヒパールブル部落の東側を、北から南へ走り、さらに曲折して、メヘローリー=ロードの北側にそって、東南東にのびている。

附図.D-11・12. 図版.136

この堰堤は、割り石からなる石積みをもっているが、この石積みは、現在も非常によくのこっており、その全長は1.4キロメートルに及ぶ。この堰堤には、壁面から突き出すかたちで二つの水門が設けられており、この水門に、それぞれ、レベルを異にするいくつかの流水孔が通じている。南側の水門の場合には、四つの流水孔が認められるが、その排水口はアーチ型をなし、取水口の側にコントロールのための施設がみられる。

この堰堤は、東側と北側とに丘陵地帯をひかえたほぼ平坦な地域の、西側と南側とをとり囲むように構築されており、おそらくは、丘陵地帯に降った雨水を平地に貯え、ここに人工氾濫を起こさせることによって、肥沃な耕地を得ることを目的とした農業用堰堤であったのであろう。トッグルク朝後期の文献に、フィローズ=シャー時代に建設されたとされるバンドの一つとして、マヒパールブルのバンド (Band-i Mahīpālpur) の名がみえているが、これが、おそらくは、この堰堤にあたるものと推定される。第Ⅱ期。

東研.Ⅸ-49; ASLM-108

**W.45** ネルー=ハウス屋内の堰堤とよぶ。ニョーデリーのディーヌ=ムルティー=マールグにそった、故ネルー元首相の旧官邸の庭内にある。 附図.G-8

ネルー=ハウスの門を入って右前方、すなわち西側に、南北に走る堰堤が、現在、100メートル足らずのこっている。この堰堤にはターシャク〔O.16, 附図.66〕が附設されている。 第Ⅱ期。 東研.Ⅰ-13; cf. ASI.Ⅱ-327

**W.46** ジャハーンパナー (Jahānpānah) 南城壁の堰堤とよぶ。ジャハーンパナーの城壁〔O.5, 図版.144c〕の南部の城壁に当たる部分で、ラーイー=ビトラーの城壁の城壁の東北隅から、東北東に約3.2キロメートルにわたって

現存している。附図.G・H-12

これについては、後述のジャハーンパナーの城壁〔O.5, 図版.144c〕の項にゆずるが、本来は城壁として建造されたものを、同時に堰堤としても利用することを企図したもので、ナート=ブラ〔W.48, 図版.138〕はその一部に設けられた水門である。第Ⅱ期。 東研.Ⅸ-48; ASI.Ⅱ-214



附図.G W.44 部分 北西

**W.47** トッグルカーバードの水門とよぶ。アーディラーバードとトッグルカーバードとを結ぶ堰堤城壁の北の部分にあり、この堰堤城壁が、トッグルカーバード城壁の南城壁と接するところに位置する。 附図.J-13. 図版.137

この水門は、南北に走る堰堤城壁の一部を切って設けられたもので、東西約6メートル、南北約8メートルの、長方形の平面をもつ構築物である。西に面する上流側も、東側の下流側も、ともに三つのアーチからなっており、これらのアーチは、下流側では、奥深いトンネルになっていて、そのなかに、流水をコントロールするための施設をおさめている。このアーチのなかに、それぞれ矩形の流水孔が設けられており、現在では、中央のものには三列三段の、南北両端のアーチには三列二段の流水孔が認められる。これらの流水孔には、それぞれ、流水をコントロールする施設が設けられていて、この水門が、さまざまな水位において、常に機能し得るように工夫されているのである。平坦な屋上の南北両端には、それぞれ、下流側の南と北とのトンネルに降りる階段がつけられており、また、トンネル相互をつなぐ通路も設けられているので、トンネルの内部に自由に出入りして、コントロールのための操作を行なうことができる。この水門の東には、排水のための地溝がつづいているのが認められる。

この水門の南方約30メートルのところには、堰堤城壁を東西に横切るかたちに、幅約3メートルほどの溝が走っている。この溝は、西から東へ向かってレベルが下がっており、おそらくは、水門と関連してつくられたもので、この溝の底のレベルを越えた分の水を、水門の操作とは関係なしに、西から東へ放出するための溝であったろう。

上述の水門は、トッグルカーバードとアーディラーバード

下の両城壁にはさまれ、堰堤城壁の西側にひろがる広大な地域に水を貯え、また、その水を東の方へ流し出す場合の水量調節の役割りをもつものである。このような貯水と流水調節とが、どのような目的のために行なわれたかは、極めて興味ある問題であり、さまざまな観点から、論議されなければならないであろう。第Ⅱ期。 東研Ⅹ-4-3

**W.48** サート・ブラ (Sarpulali) として知られており、キルキー部落の東方約400メートル、ジャハーンパナー南城壁の堰堤 [W.46, 図版.62] の一部にある。 附図 H-12, 図版.138

この建造物は、東西の全長80メートルにおよぶ巨大な水門で、目の流水トンネルが南北に通じている。このうち、中央の部分にある七つのトンネルは、もっとも低いレベルにあって、それぞれ、流水を仰倒し、あるいは調節する施設をそなえている。これらのトンネルの上方は、アサスになっていて、それぞれ対応する位置に、大きな扉をもっており、ここで流水調節の操作が行なわれるしくみとなっている。この水門が、サート・ブラ (七つの橋) とよばれてきたのも、この七つのトンネルに由来している。この水門の東西両端には、それぞれ、北に入口をもつ部屋があって、東・西・南の三方の壁に、いくつかの狭間をもっているが、おそらくは、この水門の防禦の役割りをになつたものであろう。現在では、トンネルの北の部分には、なかば崩壊し、また、南側には、近代の土手と堰堤が設けられている。この水門は、トグルク朝のスルターン・ムハンマド・ジャーが建設したとされる。ジャハーンパナーの南城壁の一部を切って構築されたもので、ジャハーンパナーと同時代のものであるか、あるいは、つぎのスルターンであったフィーローズ・シャーの治世に建造されたものかは、には決しがたい。第Ⅱ期。 東研Ⅸ-28; ASIⅢ-216

**W.49** ワジーラーバードの水門とよぶ。ワジーラーバード貯水池の西北約200メートル、運河の北側にある。 附図 H-2, 図版.139

外観は、一見するところ、三つのスパンをもつ小さな橋を思わせるが、実は、東と西との両側を、壁で仕切った部屋をもつ水門で、長さは約13メートル、幅は約7メートルである。両側の壁には五段の孔があり、下の二段は、室内で流水を制御する装置をもっている。この水門は、明らかに同時代のものと思われる南方の橋 [W.50, 図版.140c] や、北方につらなる堰堤 [W.41, 図版.135e] と、なんらかの関連をもつて構築されたことは確かであろう。第Ⅱ期。

東研Ⅰ-1-4; ASIⅡ-409

**W.50** ワジーラーバードの橋とよぶ。ワジーラーバード貯水池の西北約150メートル、運河の上にかかっている。 附図 H-2, 図版.140a

九つのスパンからなる、長さ約45メートル、幅約7メートルの堅固な橋で、橋脚は、上流側では三角形の、下流側では半円形のバットレスによって補強されている。この橋のすぐ北方にある水門 [W.49, 図版.139] は、同じ時代に、なんらかの関連をもつて構築されたものと考えられる。第Ⅱ期。 東研Ⅰ-1-3; ASIⅡ-409

**W.51** 橋 ハズラット・ニザームッディーン鉄道駅から東南約1.6キロメートルの、ヤーロクリー部落の東南約800メートルにある。 附図 J-10, 図版.140b

三つのスパンをもつ橋で、舗道の石敷きの一部がのこっているが、全体的に、表面はくずれおちている。したがって、年代を推定することはむずかしいが、一応、第Ⅲ期に属するものとして採録しておく。第Ⅲ期 (γ)。

東研Ⅲ-23; ASIⅣ-21

**W.52** 橋 ニザームッディーン・オーリヤーの墓の南方約150メートルにある。 附図 J-9, 図版.140c

三つのアーチをもつ橋で、その両端とアーチのあいだに、バットレスをそなえている。崩壊が著しく、まったく使用されていない。 第Ⅲ期 (γ)。 東研Ⅲ-20; ASIⅣ-243

## その他の建造物

**0.1** シーリー (Siri) の城砦として知られており、シャープル=ジャート部落の西側を西端として、その東方に約1.6キロメートルにわたってひろがっている。 附図 H-11 図版 141

この城砦は、現在では、ほとんど廃墟となっており、ところどころに、城門や城壁が崩壊したすがたをさらしている。その遺構や地形をたどると、東西約1.9キロメートル、南北約1.2キロメートルにおよぶ、ほぼ楕円形をした、大規模な都城であったことがわかる。シーリーは、ヘルジー朝のスルターン=アラウッディーン=ムハンマドが建設したとされる都城であるが、その場所の比定に関しては、二、三の異説が表明されたこともあった。しかし、現在では、この廃墟をシーリーの城址とするのが、ほとんど定説となっている。第Ⅰ期。 東研 X-5; ASI II-291

**0.2** トッグルカーバード (Tughluqabad) の城砦としてひろく知られている。クトゥブ=ミーナールの東方約8キロメートル、クトゥブ=バーダルブル=ロードの北側にある。 附図 J-13 図版 142~143

この城砦は、南側の城壁を底辺とする、ほぼ梯形をした大規模なもので、西南隅の宮廷地域と、その他の都市地域とからなっている。宮廷地域は、その東側の部分が、とくに高くなっていて、さまざまな建造物の廃墟が一面にのこっており、かつてこの部分が、宮廷の中心区域であったことを思わせる。都市地域は、現在では、その中央やや西南寄りところに、トッグルカーバード部落があるほかは、ほとんど荒野となっている。しかし、トッグルカーバード部落の北の部分には、かつてのジャーマ=マスジッド (M. 3, 図版 121) の廃墟がのこっており、また、その北西には、数条の交叉する部大路のあとをたどることができる。この城砦内の各所には、井戸や大貯水池などの痕跡が認められ、また、城門の近くには、城壁の内側にそって、多数の地下倉 (O. 52, 図版 164 a, b, c) がのこっている。この城砦をとり囲む城壁は、ベットゥルメントと狭間とをそなえた堅固な構築物で、圓窓に窓たるバステイオンをもっている。この城壁の各所には、十余の城門をひらいているが、その大部分のものは、すでに崩壊してしまっている。

城砦の南方には、ガヤースッディーン=トッグルクのものと思われる竊建築のある、小城砦風の建物 (T. 6, 図版 77) が立っており、この両者は、橋の形をした通路によって結

ばれている。また、この城砦の東南部分の南側には、アーディラーバードの城砦 (O. 3, 図版 144 a) があって、両者のあいだを、堰堤城壁 (W. 38, 図版 144 a) が走っている。このトッグルカーバードの城砦は、トッグルク朝の創始者である、スルターン=ガヤースッディーン=トッグルク=シャールが、建設を命じたもので、彼自身は、その完成を見ることなしに、725 A. H. (1325 A. D.) に死んだ。そのあと、その子ムハンマド=ビン=トッグルクによって、デリーの新しい首都として、しばらくのあいだ、使用されていたといわれる。第Ⅱ期。 東研 X-4-2; ASI IV-1

**0.3** アーディラーバード (Adilabad) の城砦としてひろく知られている。クトゥブ=ミーナールの東方約9キロメートル、クトゥブ=バーダルブル=ロードの南側にある。 附図 J-13・14 図版 144 a

この城砦は、トッグルカーバード城砦 (O. 2, 図版 142~143) の東南部分の南方にあり、東西に長い、ほぼ楕円形をした内城と、その南側を走る外城壁とからなっている。この外城壁の東の部分には、北方に伸びて、堰堤城壁 (W. 38) となっており、トッグルカーバードの南城壁に連している。内城は、東西に城門を、内部のほぼ中央に宮廷建造物をもっているが、いずれも、現在では、廃墟となってしまっている。なお、東城門の内側には、地下倉 (O. 53, 図版 164 d, e) が4個並んでのこっている。この城砦は、おそらくは、ムハンマド=ビン=トッグルクによって建設されたものと推定され、アーディラーバードの名称も、彼の称号のなかのアーディル (Adil) に由来すると考えられている。第Ⅱ期。 東研 X-5-1; ASI IV-4

**0.4** アーディラーバード東方の小城砦とよぶ。アーディラーバード城砦の東方約800メートル、クトゥブ=バーダルブル=ロードの南側にある。 附図 K-14 図版 144 b

この城砦は、自然の岩丘を利用して建設されたもので、アーディラーバードの城砦 (O. 3, 図版 144 a) よりかはるかに小規模ではあるが、ほぼ同時代に属するものと推定される。城砦の内部には、建造物の壁面やアーチの一部、およびベットゥルメントの笠石などがのこっている。この城砦については、同時代の史書はまったく沈黙しているが、のちには、ドービー (Dhobi, 洗濯屋) あるいはナーイー (Nai, 床屋) の城砦として知られるようになった。こうした俗称

の由来は、よくわからない。第Ⅱ期。

東研・Ⅴ-33; ASIⅤ-5

**0.5** ジャハーンパナー (Jahānpānāh) の城壁として知られている。ラーイー・ピトラーの城壁の城壁の東北隅から、東北東に約3.2キロメートル走り、そこから、北北西に約1.6キロメートルのびて、シーリーの城壁の南端につらなる。一方、ラーイー・ピトラーの城壁の北西隅から、東北に約1.2キロメートルのあいだ、その痕跡をたどることができる。附図・F・G・H-12 図版144c

現在では、ラーイー・ピトラーの城壁の東北隅から、ハウズラーニー、キルキーの両部落を経て、東北東に一直線に、約3.2キロメートル走る南城壁に、明瞭な石積みや、大きなバステイオンの痕跡を認めることができる。この南城壁の一部に、サート・ブラとよばれる大水門 [W.48, 図版138] がつくられており、この南城壁が、同時に、擁壁の役割りをもはたしたことを示している。現在では、この南城壁のところどころに、近代の水門や排水路が設けられている。ジャハーンパナーは、トゥグルク朝のスルターン・ムハンマド・シャーが、当時のデリーすなわちラーイー・ピトラーの城壁と、シーリーの城壁とを結んで、新しい都市の建設計画を推進しようとして構築したものであることが、同時代の文献に記されている。第Ⅱ期。

東研・Ⅴ-48; ASIⅤ-214

**0.6** ビジャイ・マンディル (Bijai Mandir) として知られており、ベーガンブル部落の北のはずれにある。附図・G-12 図版145~146

小さな城壁を思わせるマウンドの上に立つ建物群で、現在では、一部をのぞいて、ほとんど擁壁となっている。南の主要部分は、高さ約15メートルの広場となっており、その北側に、南に面する、多数の部屋をもつ大きな建造物の一部がのこっている。その屋上の西側には、望楼風の八角平面の建物がのこっているが、その外壁は、つよい傾斜をもっており、八角の稜に、切石を用いているのが印象的である。内部は、十字形の平面をもつ部屋になっており、四方に入口を開いている。その平坦な屋根の上には、直径約45センチメートルの、赤い砂岩の穴が四隅に穿たれているが、それがどのような目的に用いられたのかはよくわからない。ビジャイ・マンディルというのは、勝利の殿堂を意味するヒンディー語であるが、この望楼を中心とする建物に対して、後代に与えられた俗称である。

以上に述べてきた主要部分の北側は、一段と低い広場になっているが、そこには、ほぞ穴をもった、明らかに礎石と思われる方形の石が、列をなしてのこっている。おそらくはこの場所に、かつて、柱を連ねた大広間があったのかもしれない。さらに、上に述べた望楼風の建物の北西には、

ドームをいただく、外辺約16メートルの四角平面の建物があり、東をのぞく三方は、それぞれ二つのアーチを開いている。ASIは、この建物を、聖者の住居あるいはハンシカーとする推測について記しているが、それについては、なから積極的な証拠はない。なお、この建物の周辺には、さまざまな建造物の痕跡が認められる。これらの建物群は、トゥグルク朝のスルターン・ムハンマド・シャーが、デリーの宮廷として建造したものといわれている。おそらく、ジャハーンパナーの城壁 (O.5, 図版144c) の建設と関連して、建てられたものであろう。

なお、これらの建物群の立っているマウンドの北端に、墓地 (G.71, 附図27) をへだてて、東西に長い建造物がのこっている。この建物は、現在では、南と北とにアーチを開く五つの間と、東西両端の側室とからなる部分をもっている。しかし、本来は、これらの側室の東西にも、さらに、アーチが建っていたものと思われる。この建物の北面の柱や壁面が、つよい傾斜をもっているのが特徴的である。この建物に、トゥグルク朝時代の特徴がつかうかがわれることからみれば、本来は、ビジャイ・マンディルと同時代に、関連をもって建てられたものと推定される。しかし、この建物には、デリー諸王朝時代後期の特徴を示す補修・改築のあと認められる。ASIは、これを、ローディー朝の聖者のハンシカーであるとする推測について記しているが、あるいは、この時代になって、宗教活動に利用されるようになったのかもしれない。第Ⅱ期。

東研・Ⅴ-34; ASIⅤ-272, 273, 274

**0.7** フィーローズ・シャー・コートラ (Firūz Shāh Kōtla) としてひろく知られており、デリー門の南南東約600メートル、マトゥラ・ロードの東約150メートルにある。附図・I-6 図版147~148

この城壁は、ジャムナー河の西岸にそって建設され、西・南・北を高い城壁によって囲まれている。西の正門を入ると、その付近には軍営のための諸施設の残墟がのこっており、さらに東に進むと、かつてのジャムナー河の岸辺を背にして、さまざまな宮廷建造物がつらなっている。しかし、いずれも今日では崩壊の度が高い。この建物群の北側には、アッシャーカ王の石柱をいただく階段状の三層の建物があり、それをはさんで、ジャーマ・マシッド (M.5, 図版15~16) と円井戸 (W.17, 図版125) とがある。これらの城壁と宮廷建造物とは、同時代の史書の記述によって、トゥグルク朝のフィーローズ・シャーの治世に建設されたものであることが知られる。現在では、この城壁の内部は、美しい緑の公園として、デリーの人々の憩いの場所となっている。第Ⅱ期。

東研・Ⅱ-4-2; ASIⅡ-115

**0.8** カダム・ジャリーフの城壁とよぶ。ニューデリー

鉄道駅の北北西約600メートル、タトゥブ＝ロードの西約200メートルのところにある。 附図 H-6、図版 149a, b  
パトゥルメントをもち、ところどころにバステイオンをそなえた、堅固な城砦をおもわせる高い城壁で、バステイオンの上を飾る四角なチャハトリが印象的である。現在では、その内外に人家が密集しているの



附図 63 O.8 城砦の東門 ⅢⅢ

かにすることはきわめてむずかしい。ASIによれば、東と北とに表門があり、また、南と西とには裏門が設けられているという。現在もなお入口として使用されている東門を入ると、人家にまじって、多くの墓地が散在しており、その奥の門

〔附図 63〕に入ると、

カダム・シャリーフ〔T.99、図版 108〕とモスク〔M.21、図版 33〕とをふくむ聖域がある。 東研Ⅱ-14、ASIⅡ-348

**O.9** ニザームッディーン南部の聚落遺壁とよぶ。ニザームッディーン＝オーリヤーの墓の南方約150メートルにある。 附図 I-9、図版 149c

本来は、一辺約100メートルにおよぶ四角平面の遺壁で、パトゥルメントをそなえ、四隅にバステイオンをもつ城砦風の構築物であったと思われる。現在では、内外に住居が密集しており、その全貌をうかがうことはできないが、全体的に崩壊が著しく、後代の改築・補修が随所に見られる。東北隅の部分は、

本来のすがたを比較的によくとどめており、バステイオンの上に、ピラミッド型の屋根をいただく四角平面の小さな建物が立っている。また、北面の四隅の東寄りの部分には、門がのこっていて、現在もなお使用されているが、これもやはり補修が



附図 64 O.9 北西の四隅の門 ⅢⅢ

著しい〔附図 64〕。この遺壁が、いつの時代に構築されたかは、歴史的には明らかでないが、上に述べたもっとも古いと思われる部分は、デリー諸王朝時代中期の特徴をよく示している。この遺壁のすぐ東側には、カーリー＝マスジッ

ド〔M.6、図版 17~18〕とよばれる、トッグルク朝のフィロゾ＝シャーの時代に建てられたモスクがのこっている。第Ⅱ期。 東研Ⅲ-26、ASIⅡ-241

**O.10** キーロクリー東南の遺壁とよぶ。ヘズラト＝ニザームッディーン鉄道駅から東南約1.6キロメートルの、キーロクリー部落の東南約700メートルにある。

附図 J-10

ほぼ南北に走る土堤の一部に、断続的に、城壁らしい構築物の痕跡がのこっており、そのなかに、きわめてわずかの部分であるが、切石積みが認められる〔附図 65〕。また、この付近には、礎石や柱頭の断片が散在しているので、かつて、なんらかの建造物が存在したことは、疑いをいれないところである。この石積みは、デリー諸王朝時代初期の特徴を示しているようにも思われる。また、附近には、キーロクリー(Kilokhri)の名をのこす部落がある。したがって、これまでも二、三の異説はあるが、あえて推測を試みれば、この遺跡は、奴隷王朝末期に、宮廷の所在地として、一時、著名な場所となり、その後もつづいたキーロクリー(Kilokhri)の廃墟であるという推論も、あるいは可能であるかもしれない。 東研Ⅲ-21



附図 65 O.10 一部の石積みの状況 ⅢⅢ

**O.11** ニザームッディーンのラル＝マハル(Lal Mahal)として知られてきたもので、フマール＝ユーンの墓のほぼ西方750メートル、ローディー＝ロードの南約100メートルにある。 附図 I-9、図版 150

この遺物は、基壇の上に立っており、十字形の平面をもつ特異な形式のものである。中央には、ドームをいただく十二本柱からなる四角平面の部屋があり、その周りを、奥行1間の列柱の間がとり囲み、さらに、その外側の四面の中央に、開口3間・奥行1間の列柱部分を張り出したかたちになっている。その張り出し部分の屋上には、ピラミッド型の屋根をいただく四本柱からなる四角平面のチャハトリが、それぞれ一つずつ立っていたが、現在、東のものをのぞいて、まったく失われてしまっている。この建物の北面約7メートルのところは、四本柱からなる四角平面の二層の建物がのこっているが、おそらくは、上に述べた主建

物に附属するものであったと推定される。主建物の中央ドームの内部は、放射状にはしる16本の肋材をかたどった石積みが印象的である。建物全体は、赤い砂岩を豊富に用いており、ラール=マハル(赤い宮殿)という名称も、それに由来するものであろう。随処にほどこされている文様には、デリー諸王朝時代初期の特徴がよくうかがえる。この建物の建立の時期とその性格については、これまで、二、三の説が発表されているが、なお疑問の余地がほどこされている。しかし、この建物がなんらかの宮廷建造物であったことは、おそらく確かであろう。第Ⅱ期。

東研Ⅲ-5; ASIⅡ-184

**O.12** マールチャ=マハル (Mālchah Mahal) とよぶ。ニューデリーのアジョーカ=ホテルの西北約2キロメートル。デリー=リッジのジャングル内にある。附図 F-8 図版 151a

正方形に近い平面をもつ、一階のみの建物で、眺望のきく平坦な屋根をもっている。四隅の部屋は、それぞれ、二つの方向にアーチを開いている。同時代の史書にみえるマールチャの堰堤 (Band-i Mālchah) の痕跡と思われる構築物 (W.42, 図版 135 f) が、この建物の南方約50メートルにあるが、両者は、関連して建造されたものと推定される。第Ⅱ期。

東研Ⅰ-4; ASIⅡ-328

**O.13** ビール=ガーイブ (Pir Qhaib) とよばれている。デリー大学正門の南方約1.3キロメートル。デリー=リッジ上のラーニー=ジャーンシー=ロードの西側にある。附図 H-4 図版 151b

二層の建造物で、下層は教室にわかれているが、上層の部屋は、その西側にミヒラブをそなえているので、あるいは礼拝に用いられたものかも知れない。屋上から二階・一階の天井をつらぬいて、円形の穴が上下垂直の位置につくられており、このことからこの建物を天文台とする説も行なわれたが、断言はできない。南面の外側に屋上に達する階段が二本、平行して設けられているが、現在のものは、おそらく、後代の追加物であろう。この建物は、クーンヤケ=シカール (Kushak-i shikār), すなわち支配層による狩猟その他のための宮殿の一つであったと推定される。なお、ビール=ガーイブとは、「頂えた聖者」の意味で、かつて、この建物を修行の場としていたといわれるスーフィー聖者にまつわる伝説から、この建物も、その名でよばれるようになったものである。第Ⅱ期。

東研Ⅰ-2; ASIⅡ-401

**O.14** ハウス=ハースの湖上の亭とよぶ。ハウス=ハースの貯水池のはば中央にある。附図 F-11 図版 152a 外辺11.7メートルの四角平面の建物で、四方に小さな入

口を開き、中央に、4.1メートル平方の部屋をもっている。四方の入口からこの部屋に通じる通路の途中に、それぞれ、屋上にのぼる階段がある。屋上は平坦であるが、本来は、その上に、なんらかの構築物が、立っていたのかもしれない。この建物は、その位置からみて、湖上に浮かぶ亭のような性格のものであったと思われる。第Ⅱ期。

東研Ⅳ-11-12; ASIⅡ-326

**O.15** ボーリー=バティヤ=ラー=カ=マハル (Bah Bhatiyari ka Mahal) とよばれており、アッパーリッジ=ロードとブーサー=ロードとの交差点の南東約300メートル。近代の貯水池の南端にはば接してある。附図 G-6 図版 152b

南北に走る堰堤 (W.43, 図版 135 g, h) につづく小さな城野風の建造物で、東南隅をかなめとするほぼ圓形の平面をもっている。東面および南面の一部には、バステイオンをもつ高い壁がのこっており、東北隅にある二重の門を通過して内庭に入ることができる。内庭の東側には、小さな風車が並んでおり、西側と、一段と高くなっている西南隅には、建物の痕跡が認められる。なお、南側の一隅には、下水施設がのこっていて興味深い。第Ⅱ期。

東研Ⅰ-9; ASIⅡ-337

**O.16** ネルー=ハウス庭内のクーンヤケとよぶ。ニューデリーのティーン=ムルティ=マールグにそった故ネルー首相の旧官邸の庭内にある。附図 G-8

ネルー=ハウスの正門を歩いて右前方(西側)に南北に走る堰堤 (W.45) が100メートル足らずのこっており、それが道路によって切断されているが、この切断部の南側に接して、堰堤上にこのクーンヤケ(宮殿)がある(挿図 66)。二層の構築で、下層は東西に長い長方形の基壇様の形態をなし、その西端はやや崩壊しており、上層は一辺約13メートルの正方形をなす建築である。クーンヤケのみの高さは南側で11.2メートル、昇り段は北面にある。間は3間、奥行3間の建築で、東西両面は方角石柱によってアーチを支えている。上層の東部から平坦な屋上に昇る階段がある。第Ⅱ期。

東研Ⅰ-12; ASIⅡ-327



挿図 66 O.16 東面

**O.17** 宮廷建造物(?) シャーブル=ジャート部落の東北東約800メートル、シーリー城砦の内部にある。

附図.H-11. 図版.153a

かなりの規模をもつ、二層の建物であったと推定されるが、現在では、その一部をのこすにすぎないので、全貌はまったくわからない。あるいは、支配層のための建造物であったのかもしれない。第Ⅱ期。 東研.Ⅷ-64

**O.18** 宮廷建造物(?) シャーブル=ジャート部落の東北東約800メートル、シーリー城砦の内部にある。

附図.H-11. 図版.153b

二層の建物で、本来は、かなりの規模をもっていたと思われるが、現在では、大部分が崩壊してしまっている。おそらく、支配層のための建造物であったのかもしれない。第Ⅱ期。 東研.Ⅷ-102

**O.19** 宮廷建造物(?) シャーブル=ジャート部落の北方約300メートルにある。 附図.H-11. 図版.153c

三つの入口をもつ、南に面する方形の建物であるが、現在では、その南面の壁をのこして、ほとんど崩壊している。内部の状況はよくわからない。しかし、本来は、中央の部屋をとり囲んで、いくつかの小部屋が並んでいたらしい。この建物の用途については明らかではないが、あるいは、なんらかの宮廷建造物であったのかもしれない。第Ⅱ期。 東研.Ⅷ-86; ASI.Ⅲ-295

**O.20** チョーブルジー (Chauburji) とよばれており、デリー大学正門の南方約800メートル、デリー=リッジ上のチョーブルジー=マールグに沿って、その東側にある。

附図.H-4

この建物を、ASIは、トッグルク朝のフィーローズ=シ



附図.H-4. O.20. 南面

ャー時代の墓と推定し、このスルターンジのクワンジャク=シカール (狩猟宮) と関係をもつものとしている。おそらく、なんらかの宮廷建造物であったとおもわれるが、ムガル後期の補修改築が著しく、本来の建物のおもかげは、一部の壁面をのぞいて、ほとんど失われてしまっている。 東研.Ⅰ-14; ASI.Ⅱ-400

**O.21** ベーガンブル東方のマハル (Mahal) とよぶ。ベーガンブルのモスクの東方約300メートルにある。 附図.G-12. 図版.154a

内庭を囲んで、四方に部屋をめぐる大きな建造物で、西側の中央部分は、ピラミッド型の屋根をいただく三つの

部屋からなっているが、この部分は、あるいは、モスクの役割りを果たしていたものかもしれない。西北隅の部分は、屋根の上に、さらに二部屋からなる望楼風の建物をのせており、北の屋上に入口を開いている。この望楼の屋根は平坦で、南をのそく三方に、小さなヴェランダを張り出している。内庭のほぼ中央には、おそらくは後代のものと思われる墓が、囲壁に囲まれてのこっている。また、北側の部屋のさらに外側には、列柱の間が突き出していたが、近年、崩壊して、現在では、柱の散乱する廃墟となっている。なお、この建造物の性格については、ASIは、ハーンカーであったかもしれないという推定を記しており、また、貴族の邸宅であろうとする説もあるが、現状からは、にわかに断定的なことはいえない。また、この建物の年代については、あるいはムガル時代におよぶ可能性もないとはいえない。第Ⅲ期(?)。 東研.Ⅷ-14; ASI.Ⅲ-265

**O.22** ジャハーズ=マハル (Jahaz Mahal) として知られており、メヘローリー部落の南端に近く、南下する道路の西側、シャムシー=ターラブとよばれる貯水池のほりにある。 附図.F-13. 図版.154b

この建物は、基壇の上に立っており、内庭を囲んで、その四方を部屋がとりまくかたちをなしている。四隅の部屋の上には、四本柱からなる四角平面のチャハトリが立っており、また、東側と西側の中央の部屋の上には、それぞれ、四角十二本柱と八角八本柱のチャハトリがのっている。東側の中央の間は、わずかに張り出していて、正面入口となっており、その前方に階段がある。西側の部屋は、ミヒラーブをもち、ジャハーズ=マハル、すなわち「舟の宮殿」という俗称にもかかわらず、モスクの形態をととのえている。この建物は、あるいは、ムガル初期まで下る可能性もないとはいえない。第Ⅲ期(?)。 東研.K-39; ASI.Ⅲ-100

**O.23** アラーウッディーン (Ala' al-Din) のマドラッサとよばれており、メヘローリー部落の西北隅、クトップ=モスクの西南方にある。 附図.F-12. 図版.155a

このマドラッサは、クトップ=モスク [M. 1, 図版. 1~10] の西南に接して、内庭を囲んで立っている建物群で、アラーウッディーン=の墓として知られている建物 [T. 4, 図版. 76b] が、その南の一角を占めている。内庭の西側には、東に入口を開く七つの部屋が並んでのこっており、そのうちの2室はドームをいただき、他は平坦な屋根をもっている。さらに、これらの部屋の北方にも、いくつかの部屋がつづいていたらしく、また、内庭の北側にも、建物があったらしい痕跡が認められる。内庭の東側には、東西に並ぶ二つの部屋がのこっている。この建物群が、伝えられるように、バルギー朝のアラーウッディーン=ムハンマドによ

って建てられたマドラッサであるかどうかについては、歴史的には確かな証拠はない。第Ⅰ期。

東研・X-10; ASI III-10

**O.24** ハウズ=ハースのマドラッサとよばれており、ハウズ=ハースの東南隅にある。 附図・G-11. 図版・155b~157

フィーローズ=シャー=トッグルクの高(T. 9, 図版・79)をはさんで北と西とに立ち並ぶ、貯水池に面する二層の建物群からなっている。基に接する中核部は、北と西の部分とが同じプランをもっていて、ドームをいただく四角平面の部屋が、間口5間・奥行3間の列柱の間をはさむかたちとなっている。ドームの部屋は、各層とも、貯水池に面して、張り出し窓をそなえている。この中核部分から、さらに、北と西の延長線上に、同じく二層の別の建物がつづいている。北の建物は、現在では、ほとんど崩壊してしまっていて、そのプランは明らかではない。一方、西の建物は、ドームをいただき、張り出し窓をそなえる方形の部屋を中心として、その両翼に、多数の小部屋をもつ建物であったらしい。これらの建物群は、1910年代に、インド考古局によって発掘調査と保存のための補修工事が、全般にわたって実施された。これらの建物群は、これまで、トッグルク朝のフィーローズ=シャーが建設させた教育施設であるといわれてきたが、その環境と規模とからみて、あるいは、離宮としての役割をもっていたものかもしれない。なお、北方には、ほぼ時を同じくして建てられたと思われるモスグ(M. 11, 図版・24)があり、また、東側の広場には、いくつかのチャハトリ風の建物(T. 87, 94, 95, 96, 97; 図版・104 d, 106 e, d, 107 a, b) がのこっている。

なお、南側の広場にある建物は、ドームをいただき、東西に入口を開く四角平面の部分と、その東側の内庭をはさんで南北に相対

する。それぞれ間口3間・奥行1間の部屋の部分とからなっている。この建物の内庭の東側には囲壁があり、その南寄りに、小さな門が設けられている。ASIは、この建物を、住居と推定しているが、



附図 58 O.24 南西隅の門、東出

おそらく、その北に存在する、上述のマドラッサと関連をもって建てられたものであろう。さらにこの建物の西に

ある建造物は(埤図 68), ドームをいただき、四方に入口を開く四角平面をもっており、おそらくは、門であったと思われる。第Ⅱ期。

東研・V-II-2, 10, 11; ASI III-309, 317, 318

**O.25** サイイドゥル=フッジャーブ(Saiyid al-Hujjab)のハーンカーとして知られていたものでサイイドゥル=アジャーンイブ部落の南西のはずれにある。 附図・G-13. 図版・158 a, b

現在、この建造物は、崩壊の度が著しいばかりでなく、住民によって多くの改変がほどこされ、住居あるいは納屋・家畜小屋などに使用されているので、その全貌をうかがうことはきわめてむずかしい。二つの建物が、高い基壇の上に、東西に並んで建てられており、東のものは、ほとんど崩壊しているが、いずれも東西に長い間口3間・奥行1間の、平坦な屋根をもつ建物である。この基壇の北の部分には、いくつかの小部屋からなる建造物がのこっている。ASIは、これらの建物群を、この部落名の起原となった、トッグルク朝のフィーローズ=シャー時代の、サイイドゥル=フッジャーブのハーンカーとして紹介しているが、その真偽のほどは、なお検討を要するところである。しかし、これらが、デリー諸王朝時代中期に属するものであることは疑いない。第Ⅱ期。 東研・X-17; ASI III-207

**O.26** シーリーのバーラダリー (Barahdarī) とよぶ、シャープル=ジャート部落の内部にある。 附図・H-11. 図版・158 c

東面する間口3間の建物で、南北両側に側室をそなえているが、崩壊・改変が著しい上に、現在、部落民によって使用されているので、内部の状況や用途は明らかでない。あるいは、なんらかの宗教施設であったのかもしれない。第Ⅱ期。 東研・VII-62; ASI III-292

**O.27** 宗教施設(?) クトッブ=ミーナールの西南約900メートル、ムガル末期のバハードゥル=シャー2世の宮殿のすぐ南に接してある。 附図・F-13. 図版・158 d

西に面する建物であるが、現在では、ほとんど崩壊しており、わずかに、奥壁のアーチの一部がのこっているにすぎない。この建物は、あるいはハーンカーのごとき宗教施設であったかもしれないが、すぐ西側にある墓建築(T. 102, 図版・110 a) ともなんらかの関連をもつものであろう。第Ⅱ期。 東研・X-121

**O.28** 宗教施設(?) クトッブ=ミーナールの西南約500メートル、メヘローリー部落の北東部の一角にある。 附図・F-13

この遺跡は、現在、廢墟となっており、わずかに、建物



の壁面と、四壁の一部がくずれのこっているのみである〔挿図.69〕。ASIによれば、この建物は、二つの部屋をもっており、その一方の部屋には、トゥグルク朝のフォーローズ・シャーの名を記す碑文がのこっていたという。第Ⅱ期。  
東研.Ⅸ-111; ASI.Ⅲ-126



挿図 69 O.28 崩壊した建物の一部、南より

**O.29** ニザームッディーン・オーリヤー (Nizām al-Dīn Auliya) のチッラーとよばれたもので、フマーニーンの墓の四壁の東北隅に近く、北壁の外側にある。

附図.Ⅰ-9. 図版.158e

東に面する間口3間・奥行1間の建物で、交叉ヴォールトの天井と平坦な屋根とをもっている。中央の間の奥壁に入口があって、背後の部屋に通じている。この場所は、シェイフ・ニザームッディーン・オーリヤーが、彼の宗教生活の場として使用したと伝えられているところであるが、その真偽のほどは明らかではない。この建物と、フマーニーンの墓の四壁とのあいだには、廃墟がのこっているが、それがなんであったかは、現在ではよくわからない。第Ⅱ期。  
東研.Ⅱ-31; ASI.Ⅱ-162

**O.30** ランガル・ハーナ (Langar *Khānah*) とよばれており、ニザームッディーン・オーリヤーの墓の東南約40メートルにある。附図.Ⅰ-9. 図版.158f

北に面する間口4間・奥行3間の長方形の建物で、交叉ヴォールトの天井をもち、屋根は平坦である。この建物は、ランガル・ハーナ、すなわち慈善院であったと伝えられているが、その真偽は明らかではない。おそらくは、ニザームッディーン・オーリヤーのダルガーと関連して、なんらかの宗教上の目的のために設立されたものと考えられる。現在、この建物は、内部に塗装がほどこされて学校として使用されている。第Ⅱ期。  
東研.Ⅲ-30; ASI.Ⅱ-232

**O.31** 宗教施設(?) メヘボリー部族の南端から南へ約300メートル、南下する道路の東側にある。附図.F-13. 図版.159a

西に面する長方形の、平坦な屋根をもつ建物で、三つの入口を開いているが、南北両端の部屋は密室になっている。

建物の前方には、墓地と思われる区域〔G.7, 図版.58b, 挿図.20〕があって、その西側の門や小さな礼拝壁は、この建物と向かい合っている。これらは、ほぼ同時代のものと思われるので、相互になんらかの関連をもつものかもしれない。第Ⅱ期。  
東研.Ⅸ-86; cf. ASI.Ⅲ-187

**O.32** 宗教施設(?) シェイフブル部族の東北約300メートル、チラグ・デリー・ロードの南側にある。附図.H-12. 図版.159b

14メートルと4メートルの、南北に長い、西に面する建物で、現在では、崩壊の度が著しいが、本来は、入口をもつ三つの部屋と、その北側にある密室とからなっていたものと推定される。この建造物は、西南に接する別の建物〔T.20, 図版.81c〕とともに、西北方にあるシェイフ・サラーブッディーンのものといえられる墓建築〔T.86, 図版.104c〕と、なんらかの関連をもつ施設であったかもしれない。第Ⅱ期。  
東研.Ⅳ-42-2; ASI.Ⅲ-254

**O.33** 宗教施設(?) マヒバルブル部族のほぼ中央にある。附図.D-11. 図版.159c

この建物は、北面する間口3間・奥行2間の部屋と、その東西両端の側室とからなっている。屋根は平坦で、その周囲に、欄干の一部がのこっている。この建物は、なんらかの宗教施設であったと思われるが、あるいは、支配層のための離宮か、または、地方の権力者の住居のようなものであったかもしれない。現在では、部落の小学校として使用されている。  
東研.Ⅸ-62; ASI.Ⅳ-109

**O.34** ハルブーゼー・カ・グンパッド (*Kharbūze kā Gumbad*) とよばれており、シェイフブル部族の西方約600メートル、チラグ・デリー・ロードの北側にある。附図.G-12. 図版.160a

さしおとし2メートルの、八角平面の基台の上に、4本の柱が立ち、その頂点に、ハルブーゼ(メロン)のかたちをしたドーム形の石がのっているという、奇妙な遺跡である。基台をのぞいて上の部分は、あるいは後代に組み立てられたものかもしれない。基台には、幅0.4メートルのせまい入口をもった、小さなあなぐらがある。ASIは、この遺跡の東方にある、ラール・グンパッドとよばれる墓建築〔T.8, 図版.78c, d〕に葬られたと伝えられる、シェイフ・カビールッディーン・オーリヤーが、日夜ここで過したという伝説を紹介しているが、もちろん、その真偽のほどは明らかではない。第Ⅱ期~第Ⅲ期。  
東研.Ⅳ-49; ASI.Ⅲ-261

**O.35** 宗教施設(?) ニザームッディーン・オーリヤーの墓の北方約40メートルにある。附図.Ⅰ-9. 図版.

160b

ニザームディーンのパーオリー (W. 19, 図版 127) の南に接する、東西に長い建造物であるが、後代の改築と補修とが著しいので、全体の規模をうかがうことはほとんどできない。しかし、中央部分の南側にある入口の附近と、その西側につづくアーケードの一部は、わずかに本来のすがたをのこしており、この時代の建造物の特徴をよく示している。南側入口の上方に現存する碑文に、781 A. H. (1379-80 A. D.) の建立年次が記載されているので、トゥグルク朝のフィーローズ・シャーの時代に属するものと考えられる。第Ⅱ期。 東研Ⅱ-32; ASIⅡ-196

**O.36** ビービー・ズライハー (Bibi Zulakhā) のチャラーガーと伝えられており、アードチーニー部落の西のはずれ、メヘーリー・ロードの西側にある。 附図 G-12

この建物は、シェイフ・ニザームディーン・オーリヤーの母、ビービー・ズライハーとその一族の墓をおさめる、囲壁に囲まれたダルガーの、ほぼ中央に位置している。ドームをいただく、四角平面の小さな建物であるが、現在なお、宗教施設として用いられているので、全面が白くぬられており、改変も著しい (挿図 70)。この建物そのものは、どのような目的で、いつの時代に建てられたかはわからないが、13世紀のなかばごろに死んだとされるビービー・ズライハーその人のチャラーガーでないことは明らかである。第Ⅱ期(?)。 東研Ⅷ-68; cf. ASIⅢ-339



挿図 70 O.36 東面と南面

**O.37** 宗教施設 チラーグ・デリー部落の西のはずれにあるダルガーの、西南隅に位置する。 附図 H-12, 図版 160c

この建物は、18.4メートルと4.8メートルの、東西に長い建物で、北に面している。奥行は1間で、東の部分は、間口が3間からなっており、西の部分は、のちに述べる、四角平面の建物の南に、直接、つづいている。この建物の内部の壁面には、彫がつくりつけられている。ASIは、これを、マハフィル・ハーナ (集会堂)、またはマドラッサ (学校) として紹介しているが、現在では、ダルガーの入びとは、ムサーフィル・ハーナ (宿泊所) とよんでいる。いず

れにせよ、この建物は、シェイフ・ナシールッディーン・チラーグ・ディナリーの墓 (T. 135, 挿図 38) と関連する施設であろう。

この建物の西の部分の北側には、ドームをいただく、十二本柱からなる、外辺7.7メートルの四角平面の建物がつづいている。この建物は、四側を壁によって閉ざされてお



挿図 71 O.37 西側建物の内部 東北より

り、内部には2基の墓が認められる (挿図 71)。この建物は、上述の南側の建物と、おそらくは、同じ時期に建てられ、本来は、一連のものとして使用されていたものと思われる。しかし、やがて、後になつて、この部分のみ墓に転用されたのかもしれない。第Ⅱ-Ⅲ期。 東研Ⅷ-24; ASIⅢ-226, 227

**O.38** ローシャネ・チラーグ・ディナリー (Roghayeh Chiragh-i Dihli) のダルガーの東門とよぶ。チラーグ・デリー部落の西のはずれにある。 附図 H-12



挿図 72 O.38 東面 入口上部

ドームをいただく、四角平面の建物で、東西に入口を開いている。内部は、東西にはしる通路の両側が、一段と高くなっている。現在では、塗装がほどこされ、補修・改変が著しい。この門の東入口の上方に、トゥグルク朝のスルターンであるフィーローズ・シャーの名と、775 A. H. (1373-74 A. D.) の年次を記した碑文が掲げられているが、現在は、白く塗りつぶされている (挿図 72)。第Ⅱ期。 東研Ⅷ-52; ASIⅢ-229

**O.39** 門(?) シェイフブル部落の西方約500メートル、チラーグ・デリー・ロードのすぐ北側にある。 附図 H-12, 図版 161a

ドームをいただく、東西にやや長い矩形平面の建物で、東と西とに入口を開いている。ASIは、西方にある。シェ

イフ・カビールッディーン・オーリヤーの墓と伝えられる建物〔T. 8, 図版 78c, d〕をとり囲む囲壁の東門であると記しているが、現在では、そのような囲壁の痕跡は見あたらないし、また、両者は、様式の上からもかなりの違いが認められるので、それについては結論を出しにくい。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-16; cf. ASI.Ⅱ-262

**O.40 門** クトッブ・ミーナールの南南西約800メートル、クトッブ・サーヒブのダルガーの北入口の東側にある。 附図. F-13. 図版.161b

この門は、東西に入口をもち、花飾形のドームをいただく四角平面の建物で、その東南にひろがる囲壁の入口をなしている。ASIは、囲壁とともにこの門を、スール朝のシェール・シャーの時代に建てられたと推定しているが、様式、および入口アーチの周囲とドームの内部にのこる文様などから、デリー諸王朝時代の中期に属するものとしてよいであろう。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-74; ASI.Ⅱ-21

**O.41 門(?)** ラーイー・ビトラーの城壁の北東隅と、ジャハーンペナー南城壁との接点より西北西約400メートル、前者の北側にある。 附図. G-12. 図版.161c

ドームをいただく四角平面の建物で、東と西とに入口を開いており、東の部分は半壊している。おそらく、西方にその痕跡をとどめる別の建物の門であったかもしれない。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-59

**O.42 門** メヘローリー部落の西方、部落を南下する道路から西へ約300メートルにある。 附図. F-13



附図 73 O.42 東面

北に面するこの建物は、現在では、消滅したなんらかの建造物、おそらく、囲壁の北門であったのかもしれない〔附図.73〕。第Ⅱ期。

東研.Ⅷ-66

**O.43 門** クトッブ・ミーナールの南南西約1.6キロメートル、メヘローリーのバイパスの北側にある。 附図.

F-13. 図版.161d

ドームをいただく、外辺約5メートルの四角平面の建物で、四方に入口を開いている。その西南隅から西へ壁がつづいており、おそらくは、この門を出入口とする区域の囲壁の一部であったと推定される。第Ⅱ期～第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-30; cf. ASI.Ⅱ-189

**O.44 門** セーナガル鉄道駅の東方約600メートル、ディフェンス・コロニー住宅地の北端、線路にそって南側にある。 附図. I-9. 図版.162a

ドームをいただく四角平面の建物で、四方に入口を開いている。西面が正面らしく、入口の両側に張り出し窓をもっている。現在では、近隣の人びとによって、住居として利用されている。この建物は、北東にあるバステイー・バーオリー〔W. 27, 図版.133a〕や、北側のモスタ〔M. 40, 図版.48, 挿図.12〕および西側の基建業〔T. 110, 図版.113〕などに通じる門であったと思われる。第Ⅲ期。

東研.Ⅷ-1-3; ASI.Ⅷ-38

**O.45 門(?)** ハズラト・ニザームッディーン鉄道駅から東南約1.6キロメートルの、キークリー部落の内部にある。 附図. J-9. 図版.162b

ドームをいただく四角平面の建物で、現在では、北の入口のみが開いているが、本来は、四方に入口をもっていたらしい。この建物の北側に、778 A. H. (1376-77 A. D.) に死んだとされる、サイイド・マフムド・ビハーリー (Sayyid Mahmūd Bihārī) のものと伝えられる墓があって、現在も、信仰の対象となっている。この建物は、あるいは、そのダルガーの門であったかもしれない。第Ⅲ期(?)。

東研.Ⅷ-23; ASI.Ⅷ-20

**O.46** ニザームッディーン・オーリヤー (Nizam al-Din Auliya) のダルガーの北門とよぶ。ニザームッディーン・



附図 74 O.46 北面

オーリヤーの墓の北方約80メートルにある。 附図. I-9

現在では、全面に塗色がほどこされ、改修も著しく、わずかに、門の下の部分に本来のものと思われる箇所がうかがわれるのみである。入口上方のナスタリク書体の碑文は、もちろんだ後代のものである〔附図.74〕。

東研.Ⅷ-44; ASI.Ⅱ-186

**0.47** 不明の建造物 ムニールカ部落の西北西約1.4キロメートルにある。 附図 E-10。 図版 162c

南北約5メートル、東西約4メートルの矩形の小さな建物で、北と西とに入口を開き、西面の南寄りにある階段が、平坦な屋根に通じている。内部は、南と東とに竈があり、浅い円天井には、交叉アーチと柵状の碑文文様のわずかな痕跡が認められる。西入口の上方に、ローディー朝の سلطانであるシカンドル・シャーの名と、906 A. H. (1500-01 A. D.) の年次を記した碑文がある。この碑文には、シカンドル・シャーの治世の有力な貴族であった、ムバーラク・ハーン・ローハーニー (Mubarak Khan Lahani) の名もみえるが、この建物が、いかなる目的で建てられ、どのような用途をもつものであったかはわからない。なお、この建物の北方約15メートルのところは、円い井戸 (W. 10, 附図 54) がのこっている。第Ⅲ期。 東研 VII-28; ASI N-127

**0.48** チョール・ミナール (Chor Minar) とし、ひろく知られており、ハウズ・ハース・エンタレーヴ住宅地の内部にあり、ロータリーの中央に位置する。 附図 G-11。 図版 162d

この建造物は、外辺9.2メートルの四角平面の基部の上に立っており、直径約7メートルの円筒状の塔である。現在では、上部は崩壊してしまっているが、あるいは、もともと、未完成のものであったかもしれない。四角の基部の各面には、それぞれ、三つのアーチ形の大きな龕がならんでいるが、そのうち、東面中央のものが、入口となっており、塔にのぼる螺旋形の階段に通じている。基部には、後代の補修がみられるが、円筒の部分の石積みなどからみて、おそらく、第Ⅱ期に属する建造物と考えたい。なお、この塔がなんであるかについては、壁面に多数の小さな穴があることから、敵軍や盗賊の首をさらすためのものであったとする伝説がひろく行なわれ、そこから、チョール・ミナール (盗人の塔) という俗称が生まれてきたものと思われる。しかし、そうしたことを裏づける文献資料はまったくなく、確実なことはなにもわからない。第Ⅱ期(?)。

東研 VII-8;  
ASI III-289



附図 75 (1/4 全高)

**0.49** ローディー公園の円形の塔とよぶ。サブダル・ジャングの墓の東北東約1.1キロメートル、

ローディー・ロードの北約350メートル、ローディー公園の内部にある。 附図 H-9

花筒形のドームをいただき、張出し窓をもったバステイオン風の円形の塔である(附図 75)。現在では独立した建物であるが、かつては大きな建造物あるいは回廊の一部をかざっていたものかもしれない。第Ⅱ期。

東研 III-16; ASI II-46

**0.50** メヘーラーのビジョン・ハウスとよぶ。メヘーラー部落の北のはずれ、その西側に位置する。 附図 F-13。

この建物については、遠望したのみで詳細な調査を行な



附図 76 (1/50 東より)

わなかったため、ここに、荒が、1955年に撮影した写真(附図 76)を掲げるにとどめておく。ASIは、これを、バターン期のビジョン・ハウスとしているが、外見からみて、樹の家であることは、おそらく、当をえていると思われる。年代については、あるいは、ムガル期に属する可能性もあるかもしれない。第Ⅲ期(?)。

東研 X-145; ASI III-115

**0.51** シェイフブルのハンマームとよぶ。シェイフブル部落の西北約100メートルにある。 附図 H-11。 図版 163

14.5メートルと15.5メートルの、ほぼ四角の平面をもち、高さは現地表より約2.5メートルの低い建造物である。内部は九つの部屋からなっており、それぞれせまい通路によって結ばれている。中央および四隅の部屋は、八角平面でドームをいただき、その他の部屋は、長方形の平面をもち、寄棟式の屋根をのせている。屋根には、それぞれ、四つないし五つの孔が穿たれているが、これは、通風や採光のためのものであったであろう。このハンマームの東南約8メートルのところは、井戸の掘壁があるが、おそらく、関連してつくられたものである。第Ⅱ期。

東研 VII-19; ASI III-280

**0.52** トグルクカーバドの地下倉とよぶ。トグルクカーバドの城壁 [O. 2, 図版 142~143] の城門の近くに、城壁の内側にそって、随処に見られる。 附図 J-13。 図版 164a, b, c

これらの地下倉は、割り石を羊球状に積み上げて構築したもので、本来は、その頂部に穿たれた小円形の孔が地上に開かれていたものであるが、多くの場合、現在では、頂部が崩落して、大きな窪みとなっている。5個ずつ二列に

並ぶのが通例のようであるが、地下において相互に通じているものと、そうでないものとの二通りの場合がある。この地下倉が、どのような目的に使用されたものかは明らかではないが、それが、城門の近くにあるところから、あるいは、武器または食糧などの重要な物資を貯蔵するためにつくられたものと推定される。第Ⅱ期。 東研・X-4-12

**O.53** アーディラーバードの地下倉とよぶ。アーディラーバードの城砦〔O.3, 図版144a〕の内城の東門の内側にある。 附図 J-14。 図版164d,e

これらの地下倉は、すでに述べた、トゥグルカーバードの地下倉〔O.52, 図版164a,b,c〕と、ほぼ同じ構造と大きさをもつもので、この場合には、4個が2個ずつ二列に並んでのこっているが、頂部は崩落してしまっている。第Ⅱ期。 東研・X-5-2

**O.54** 不明の建造物 トゥグルカーバードの外城壁の西北隅の西北約800メートルにある。 附図 J-12。 図版165a

東西に並んで4個、南北に並んで3個、あわせて7個の建物が集まっており、その最大のものでも、外辺約2メートル、最小のものは、外辺約1メートルの、四角平面をもつ小さなものである。東側の3個は、北をのぞく三面に入口を開いているが、他のものには入口がなく、7個とも、北面または東面に、小さな燈明用の凹みをもっている。これらの建物の用途はよくわからないが、ヒンドゥー教徒の火葬や、あるいは聖者の埋葬を記念するいわゆるサマーディー (Samādhi) か、または婦女殉死、すなわちサディー (Sati) の記念碑のようなものであったかもしれない。

東研・X-3

**O.55** 不明の建造物 マヒパールブル部落の東南約

150メートルにある。 附図 D-11。 図版165b

ドームをいただく、外辺約3メートルの、四角平面の小さな建物で、南面のくずれたところが入口であったと思われる。この建物がなんであったかは、よくわからない。おそらくは、ムスリムの墓かあるいはヒンドゥーのサマーディーかも知れない。 東研・K-61; ASI,N-110

**O.56** 不明の建造物 トゥグルカーバードの外城壁の西南隅の北方約600メートルにある。 附図 J-13。 図版165c

ドームをいただく、四角平面の小さな建物で、現在では、なかば崩壊してしまっている。いつの時代に、どのような目的で建てられたものかわからないが、おそらくは、ムスリムの墓か、あるいは、ヒンドゥーのサマーディーであろう。 東研・X-31

**O.57** 不明の建造物 ムニールカ部落の北西約1.4キロメートルにある。 附図 E-10。 図版165d

ドームをいただく、外辺2.3メートルの、四角平面の小さな建物で、東に入口を開いているが、現在では、その西南部分は崩壊してしまっている。ASIは、サティー、すなわちヒンドゥーの婦女殉死を記念する建物ではないかとしている。おそらくは、ヒンドゥーのサマーディーかあるいは、ムスリムの墓であろう。 東研・Ⅵ-36; ASI,N-131

**O.58** 不明の建造物 ハウズラーニー部落の東南約300メートルにある。 附図 H-12。 図版165e

ドームをいただく四角平面の小さな建物で、現在では、南側がくずれてしまっている。いつの時代に、どのような目的で建てられたものかわからないが、ヒンドゥーのサマーディーあるいはムスリムの墓かも知れない。

東研・Ⅶ-88

# 附 錄



## 附 録 1

以下に列挙する各遺跡は、1916～22年に発行されたインド考古調査局の遺跡リストにおいて、その建設の時期を、Tughlaq, Pathan, Afghanとして採録されているが、われわれの調査の結果、その消滅が、確認あるいは推定されたものである。その消滅は、多くの場合、ニューデリー市の建設、およびその後の市街地の拡大、あるいは新しい建物の建設などによるものと思われる。以下に記載する各遺跡は、ASIの遺跡リストの配列の順序に従って列挙されており、その内容は、すべて、ASIの原文から採録したものである。それらは、報告書の巻数と遺跡の整理番号、遺跡の種類あるいは名称、それについて、1)地域名、2)建設の時期の区分、3)形態や構造に関する基本的な特徴、の順序に配列されている。なお、これらの、すでに消滅した遺跡に関して、とくに注記すべきことがある場合には、本項の末尾に註を附しておいた。

- I-372 Yak Burji Mosque III.  
1) Phatak Habsh Khan. 2) Tughlaq period. 3) ... consists of three compartments of which the central one being domed, ... (註1, 挿図 77参照)
- I-377 Yek Burji Mosque IV.  
1) Muhalla Parte Wala. 2) Tughlaq Period. 3) ... consists of three apartments, the central being roofed with a large dome ...
- II-22 Barah Khamba.  
1) Barah Khamba. 2) Afghan. 3) ...probably a tomb, ...the twelve pillars which support its roof. ...
- II-32 Mosque (nameless).  
1) Narhula. 2) Afghan. 3) ...a portion of the western wall, ...and the northern compartment are extant.
- II-51 Mosque (nameless).  
1) Khairpur. 2) Afghan. 3) ...consists of three domed compartments with arched entrances. ...
- II-55 Tomb (unknown).  
1) Khairpur. 2) Afghan. 3) ...roofed by a dome, ...square within and octagonal without. ...
- II-56 Mosque (nameless).  
1) Khairpur. 2) Afghan. 3) ...consists of three compartments, the central one of which is domed. ...
- II-58 Mosque (nameless).  
1) Babarpur. 2) Afghan. 3) ...a building of considerable pretension. The prayer chamber, ...is divided into three compartments, the central one of which domed, the others being vaulted. ...
- II-59 Hijre ka Gumbad. (Dome of a hermaphrodite.)  
1) Babarpur. 2) Afghan. 3) The dome covers an internal square of 25 feet, the outside of the building being cruciform in plan. The dome and arches are brick built. ...
- II-60 Mosque (nameless).  
1) Babarpur. 2) Afghan. 3) ...consists of three compartments covered with vaulted roofs. ...
- II-61 Mosque (nameless).  
1) Babarpur. 2) Afghan. 3) ...must have formerly been of considerable size, ...The southernmost compartment, entered by three arched openings, still stands.
- II-71 Mosque (nameless).  
1) Babarpur. 2) Afghan. 3) ...comprises a courtyard and a western wall ...
- II-79 Tomb (unknown).  
1) Babarpur. 2) Afghan period. 3) ...consists of a square chamber roofed by a dome ... To its west stands a walled mosque ...
- II-101 Mosque (nameless).  
1) Firozabad. 2) Afghan. 3) ...formerly consisted of three compartments of which only the central one is extant.
- II-104 Mosque (nameless).  
1) Firozabad. 2) Afghan period. 3) ...consists of three compartments, domed, and with arched entrances. ... (註2)
- II-107 Mosque (nameless).  
1) Firozabad. 2) Afghan. 3) ...seems to have originally consisted of three compartments. ...
- II-174 Tomb of Ahmad Shah.  
1) Nizampur. 2) Afghan. 3) ...square, ...covered with a dome and contains a doorway in each of its four sides. ...
- II-191 Tomb (unknown).  
1) Nizampur. 2) Afghan. 3) ...contains two chambers entered through arched openings. ... (註3)
- II-194 Tomb (unknown).  
1) Nizampur. 2) Afghan. 3) ...badly in ruin. The central room ... is a colonnaded structure built of red stone, the remainder being of rubble. ...
- II-324 Mosque (nameless).  
1) Munirka. 2) Afghan. 3) (...comprises a courtyard with a western wall ...)
- II-360 Tomb (unknown).  
1) Qadam Sharif. 2) Afghan. 3) ...square ... covered by a dome, and entered through an arched opening on the east. It had previously an opening in each of the remaining three sides ... (註4)
- III-129 Mosque (nameless).  
1) Mahrauli. 2) Pathan. 3) ...containing three-arched entrances ... At either end is a compartment ...
- III-195 Mosque (nameless).  
1) Lado Sarai. 2) Pathan. 3) ...of the wall type, ...contains 7 mihrabs. ... (註5)
- III-211 Tomb (unknown).  
1) Saidulajab. 2) Pathan. 3) ...consists of an octagonal chattri ... crowned with a dome supported on eight red sandstone pillars. ...
- III-269 Mosque (nameless).  
1) Begampur. 2) Tughlaq. 3) ...consists of three bays which are domed. ... (註6)



- III-271 Tomb (unknown).  
1) Begampur. 2) Pathan. 3) ...a domed structure ...has an archway in each of the four sides. ...
- III-286 Atte wala gumbad.  
1) Kharera. 2) Pathan. 3) ...a domed structure ...square ... Each of its four walls ... is pierced by an arched doorway ...
- III-290 Mosque (nameless).  
1) Kharera. 2) Pathan. 3) ...of the wall type ... with returning walls containing three arched recesses.
- III-297 A domed building probably a tomb.  
1) Shah Pur Jat. 2) Pathan. 3) ...a domed structure... contains an arched opening on each of the four sides. ...
- III-300 Tomb (unknown).  
1) Chak Masjid Moth. 2) Pathan. 3) ...domed structure...square... Each of the four sides of the building is broken by an arch ...
- III-330 Mosque (nameless).  
1) Humayunpur. 2) Pathan. 3) ...of the wall type containing five mihrab recesses ... (註7)
- III-337 Tomb (unknown).  
1) Jia Sarai. 2) Pathan. 3) ...a domed structure ...square ... On each of its four sides is an arched opening, ...
- III-345 Mosque (nameless).  
1) Adhchini. 2) Pathan. 3) ...of the wall type ...originally contained seven mihrabs, ... (註8)
- III-347 Tomb (unknown).  
1) Adhchini. 2) Pathan. 3) ...square ... covered by a dome externally plastered. ...
- IV-16 Sarai Julaina.  
1) Jogabai. 2) Pathan. 3) ... consisted of an enclosure which was surrounded by arched cells with its corners emphasized by octagonal bastions. ...
- IV-18 Baoli Sarai.  
1) Bhagola. 2) Pathan. 3) ...originally consisted of an enclosure surrounded by arched cells. ...
- IV-22 Tomb (nameless).  
1) Kilokhri. 2) Pathan. 3) ...square ... a doorway on each of its four sides and is covered by a pyramidal roof. ...
- IV-31 Tomb (unknown).  
1) Zamarrudpur. 2) Pathan. 3) ...covered by a dome and has an arched entrance on three sides, ... (註9, 挿図 78参照)
- IV-33 Tomb (unknown).  
1) Yaquitpur. 2) Pathan. 3) ...consists of two compartments; the northern one is covered by a dome, ... (註10, 挿図 79参照)
- IV-40 Mosque (nameless).  
1) Raipur Khurd. 2) Pathan. 3) ...of wall type consists of a west wall with three mihrab recesses in the centre and a flanking domed chamber on the north and south. ...
- IV-52 A domed pavilion locally known as Mirza's Gunti.  
1) Mubarakpur Kotla. 2) Lodi. 3) ...square...crowned by a rubble plastered dome supported on 12 dressed stone pillars. ...
- IV-134 Mosque locally known as Kali Masjid or Phuti Masjid.  
1) Muradabad Pahari. 2) Pathan. 3) ...of the wall type ... contains seven mihrab recesses, ...

註1) 現在, ASIの報告書に記されている場所には, 近代に建てられた建物が立っており, モスクとして使用されている。

本来のモスクの痕跡はまったく認められない。管理人は, ドームのフィニッシュの一部と称するもの(挿図 77)を提示したが, 本来のものかどうかは疑わしい。 東研 II-18



挿図 77. ドームのフィニッシュと思われるものの一部

註2) 都市建設のため崩壊したものであるが, 建築資材の一部らしいものが若干残存している。

註3) 現在, この場所には, ザマールドブールのマルカズ(センター)が建てられており, 真建築そのものは, 破壊されたか, あるいはまったく改築されたかのいずれかであろう。

註4) 現在見あたらないが, カダム=シェリーフのピールに会って直接聞いたところでは, 近年崩壊してしまったという。

註5) ほとんど崩壊してしまっているが, 本来のものと思われる壁の一部が, 今日なおのこっている。

註6) 附近の, ハクズ=クレー=部落のイスラーム教徒によれば, このモスクは, 1940年代にすでにとりこわれ, それに代わって, 現在の, まったく新しいモスクが建てられたという。現在の東門の基部にみえる石材は, おそらくは, 本来のモスクの建築資材の一部であったものと推定される。

註7) この遺跡は, ほとんど崩壊してしまっているが, 現在でも, 西壁の北側のごく一部がのこっている。

註8) まったく崩壊してしまっているが, 現在でも, 崩のなかに, 西壁の断片と推定されるものがわずかに認められる。

註9) 現在では, まったく崩壊してしまっているが, 1955年に, 荒が, その存在を確認

している。ザマールドブール部落の南南西約300メートルにあり, ドームをいただく四角平面の建物で, 西にミヒラブをもち, 他の三方に入口を開いている。



挿図 78 崩壊寸前の状態 (1955年) 南面

その際に, 荒が撮影した写真(挿図 78)を見てもわかるように, 当時すでに亀裂が著しく, 崩壊寸前の状態であった。

註10) 現在では, 住宅地造成のためまったく崩壊してしまっているが, 1955年に,

荒が現地を訪れて, 写真を撮影した(挿図 79)。ザマールドブール部落の南西約350メートルにあって, 二つの部屋からなる, 南北に長い長方形の建物で, 北の部屋はドームをのせているが, 南のドームは未完成におわったものらしい。内部には, いくつかの墓石の痕跡が認められた。



挿図 79 崩壊前の状態 (1955年) 東面

## 附 録 2

以下に列挙する各遺跡は、インド考古調査局の遺跡リストにおいて、その建設の時期を、Lodi, Pathan, Afghan として採録されているもので、そのなかには、当然、デリー藩王朝時代に属するものがふくまれている。しかし、これらの遺跡については、われわれが現地において、調査を行なわなかったために、遺跡総目録には採録することができなかった。調査を行なわなかったのは、これらの遺跡が、今日では、軍事地域内にふくまれていたり、あるいは住宅密集地域や工場その他の施設内にあるため、立入りを許されなかったか、または調査の実施を遠慮したためである。なお、以下に記載する内容と、記載の順序は、附録1の場合と同様である。

- I-31 Baoli (stepped well).  
1) Fort. 2) Late Afghan (?). 3) ...consists of an octagonal shaft ...and an adjoining tank ...
- II-104 Mosque known as Chipion ki masjid.  
1) Mahraulti. 2) Pathan. 3) ...of the wall type ... originally contained seven mihrabs. ... on the east side of the court is a three-arched dalan ...
- II-117 Hijron ki Khanqah (convent of hermaphrodites).  
1) Mahraulti. 2) Pathan. 3) ... consists of an enclosure having an arched compartment on the east and a wall-mosque with mihrab recesses on the west. ...
- II-212 Mosque (nameless).  
1) Saidulajaih. 2) Pathan. 3) ...of the wall type ...contains three mihrab recesses ...
- IV-24 Sarai of Kale Khan.  
1) Bahlolpur Bangar. 2) Pathan. 3) ...originally surrounded by arched cells with their outer walls crowned by battlements. ...
- IV-25 Tomb of Kale Khan also known as the Mahal or palace of Kale Khan.  
1) Bahlolpur Bangar. 2) Pathan. 3) ...a fairly big structure containing a large number of arched cells. ...
- IV-56 Tomb (unknown).  
1) Muharakpur Kotla. 2) Lodi. 3) ...sixteen-sided in plan with a deeply recessed arch in each of its sides. ...the roof, in the centre of which is an octagonal platform containing three plastered cenotaphs. ...
- IV-57 Tomb (unknown).  
1) Muharakpur Kotla. 3) Pathan. 3) ... square ... in each of its four sides contains an archway (flanked by arched openings. The central apartment ... is surrounded by a corridor, ...
- IV-58 Tomb (unknown).  
1) Muharakpur Kotla. 2) Lodi. 3) ...square ... crowned by a plastered dome, supported on 8 red sandstone pillars ...
- IV-74 Fort.  
1) Naraina. 3) Pathan. 3) ...can be traced by the fragments of its enclosing walls and bastions. To the north is a gateway; ...
- IV-94 Well locally known as Khunja wala.  
1) Palam. 2) Pathan. 3) ...built of rubble masonry
- IV-97 Baoli  
1) Palam. 2) Pathan. 3) ...constructed of dressed stone ... It is in three stages. ... To the north there is a flight of some 40 steps ...
- IV-140 Baoli.  
1) Teghanput. 2) Pathan. 3) ...there remain visible only 10 steps to the east. On the west is a circular well ...
- IV-141 Baoli.  
1) Loharehri. 2) Pathan. 3) ...To the north there is a flight of 22 steps... while on the south is a circular well ...

## 附 録 3

以下に列挙する各遺跡は、インド考古調査局の遺跡リストにおいて、その建設の時期を Khalji, Lodi, Pathan, Afghan などとして採録されているものである。しかし、われわれは、現地調査とその後の研究の結果、これらの建造物が、デリー諸王朝時代に建設されたものではなく、ムガル初初期、あるいはさらに後代に属するものと推定して、われわれの遺跡目録から除外した。しかし、これらの建造物の大部分に関するわれわれの調査資料は、整理保管されているので、各建造物の記載の末尾に、その整理番号をのせておいた。

- |   |  |
|---|--|
| <p>II-37 Mosque (nameless).<br/>1) Narhauia. 2) Afghan. 東研 II-5</p> <p>II-44 Mosque (nameless).<br/>1) Khairpur. 2) Afghan. 東研 III-46</p> <p>II-75 Nill Gumti.<br/>1) Babarpur. 2) Afghan. 東研 III-19</p> <p>II-78 Tomb (unknown).<br/>1) Babarpur. 2) Afghan period. 東研 III-39</p> <p>II-81 Mosque (nameless).<br/>1) Babarpur. 2) Afghan. 東研 III-37</p> <p>II-93 Gol Gumbad (round dome).<br/>1) Babarpur. 2) Afghan. 東研 III-10</p> <p>II-99 Mosque (nameless).<br/>1) Firozabad. 2) Afghan. 東研 II-19</p> <p>II-106 Building (unknown).<br/>1) Firozabad. 2) Afghan. 東研 II-20</p> <p>II-190 Mosque called Chini ka Burj (tiled tower).<br/>1) Nizampur. 2) Afghan. 東研 III-35</p> <p>II-231 Tomb (unknown).<br/>1) Nizampur. 2) Afghan. 東研 III-38</p> <p>II-321 Mosque (nameless). 1) Munirka. 2) Afghan.</p> <p>III-65 Tomb (unknown).<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-120</p> <p>III-67 Tomb (unknown).<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-143</p> <p>III-68 Mosque. 1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-119</p> <p>III-76 Tomb (unknown).<br/>1) Mahrauli. 2) Lodi. 東研 IX-32</p> <p>III-90 Tomb (unknown).<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-42</p> <p>III-96 Building (nameless).<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-118</p> <p>III-99 Pavilion. 1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-40</p> <p>III-102 Mosque known as Takya Dm Ali Shah.<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-38</p> <p>III-111 An enclosure called Kabuli wala.<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-142</p> <p>III-123 Mosque (nameless).<br/>1) Mahrauli. 2) Pathan. 東研 IX-112</p> <p>III-128 Mosque (nameless). 1) Mahrauli. 2) Pathan.</p> <p>III-137 Chillagah of Baba Shaikh Fariduddin Shakar Ganj. 1) Mahrauli. 2) Early part of the 13th century A. D. 東研 IX-89</p> <p>III-149 Tomb (unknown).<br/>1) Daud Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-144</p> | <p>III-150 Tomb locally known as that of Khan Shahid.<br/>1) Daud Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-15</p> <p>III-166 Mosque (nameless).<br/>1) Ladha Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-17</p> <p>III-174 Mosque (nameless).<br/>1) Ladha Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-103</p> <p>III-175 Mosque (nameless).<br/>1) Ladha Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-105</p> <p>III-177 Tomb (unknown).<br/>1) Ladha Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-18</p> <p>III-178 Mosque (nameless).<br/>1) Ladha Sarai. 2) Pathan. 東研 IX-22</p> <p>III-191 Enclosing wall of the village.<br/>1) Lado Sarai. 2) Pathan. 東研 X-26, 27</p> <p>III-193 Mosque (nameless).<br/>1) Lado Sarai. 2) Pathan. 東研 X-34</p> <p>III-194 Mosque (nameless).<br/>1) Lado Sarai. 2) Pathan. 東研 X-1</p> <p>III-198 Haveli (House) of Qutb Sahib.<br/>1) Lado Sarai. 2) Early 13th century. 東研 X-12</p> <p>III-239 Grave enclosure.<br/>1) Chiragh Delhi. 2) Pathan. 東研 VII-103</p> <p>III-248 Tomb (unknown).<br/>1) Shaikh Sarai. 2) Circa 913 A. H. 東研 VII-22-3</p> <p>III-263 An enclosure known as Gullakwala.<br/>1) Shaikh Sarai. 2) Pathan. 東研 VII-82</p> <p>III-268 An enclosure.<br/>1) Sarai Shahji. 2) Pathan. 東研 VII-75</p> <p>III-277 Enclosing walls of the village.<br/>1) Kharera. 2) Pathan.</p> <p>III-293 Thanewala gumbad also known as Moliya wala.<br/>1) Shah Pur Jat. 2) Khalji. 東研 VII-61</p> <p>IV-17 Mahal (palace).<br/>1) Bhagola. 2) Pathan. 東研 III-48</p> <p>IV-63 Tomb locally known as that of Paik.<br/>1) Badli. 2) Pathan. 東研 I-15</p> <p>IV-70 A domed building.<br/>1) Basai Darapur. 2) Pathan. 東研 I-16</p> <p>IV-71 A domed building.<br/>1) Basai Darapur. 2) Pathan. 東研 I-17</p> <p>IV-72 A domed building.<br/>1) Basai Darapur. 2) Pathan.</p> <p>IV-73 A domed building.<br/>1) Basai Darapur. 2) Pathan.</p> <p>IV-119 Band. 1) Basantpur. 2) Pathan.</p> |
|---|--|

## 建造物固有名詞索引

- アディラーバード (Ādilābād) の城砦  
O. 3 図版. 144 a
- アディラーバードの堀境城壁 W. 38 図版. 144 a
- アディラーバード東方の小城砦 O. 4 図版. 144 b
- アディラーバードの地下倉庫 O. 53 図版. 164 d, e
- アードチーニーのバーオリー W. 31 図版. 134 b
- アードチーニーのモスク M. 55 図版. 54
- アホーンドジ (Akhāndj) のモスク M. 26 図版. 35 c
- アライー・ダルワザ ('Alā'ī Darwāzah)  
cf. M. 1 図版. 7~9
- アライー・ミナール ('Alā'ī Minār)  
cf. M. 1 図版. 10
- アラウッディーン・ハルジー ('Alā' al-Dīn Khājī) の墓  
T. 4 図版. 76 b
- アラウッディーン ('Alā' al-Dīn) のマドラッサ  
O. 23 図版. 155 a
- イタバル・ハーン (Iqbal Khān) のイードガー  
M. 56 図版. 55
- イードガー・ワラー・グンバッド ('Idgārwāla Gumbād)  
T. 69 図版. 96 c
- イレトクイシュ (Ilemish) の墓 T. 2 図版. 75
- ウガル・セイン (Ugar Sain) のバーオリー  
W. 29 図版. 133 c
- カサーイー・ワラー・グンバッド (Qasārwāla Gumbād) →  
モラーダーバード・バハラーの南のモスク
- カダム・ジャリーフ (Qadam Sharīf) T. 99 図版. 108
- カダム・ジャリーフの城壁 O. 8 図版. 149 a, b 挿図. 63
- カダム・ジャリーフのバーオリー W. 34 挿図. 59
- カダム・ジャリーフのモスク M. 21 図版. 33
- ガヤースッディーン・トグルク (Ghayāth al-Dīn Tughluq)  
の墓 T. 6 図版. 77
- ガヤースッディーン・バルバン (Ghayāth al-Dīn Balbān) の  
墓 → バルバンの墓
- カーラー・グンバッド (Kālā Gumbād) T. 18 図版. 81 c
- カーラーン・マスジッド (Kālān Masjid)  
M. 8 図版. 21 挿図. 2
- カーリー・グムティー (Kālī Gumtī) T. 16 図版. 81 a
- カーリー・マスジッド (Kālī Masjid) M. 5 図版. 17~18
- カーリー・マスジッド → カーラーン・マスジッド
- カール・サライーのモスク M. 9 図版. 22
- カレ・ハルソ・カ・グンバッド (Kālē Khān kā Gumbād)  
T. 45 図版. 87 b
- ガンダク・キ・バーオリー (Gandak ki Bāh)  
W. 18 図版. 126
- キルキ・マスジッド (Kirkī Masjid)  
M. 7 図版. 19~20
- キークリ・東南の遺壁 O. 10 挿図. 65
- クトッブ北方のL字型バーオリー W. 32 図版. 134 c
- クトッブ・ミナール (Qutb Minār)  
cf. M. 1 図版. 1~2
- クトッブ・モスク・クワットゥル・イスラーム・マスジ  
ッド  
M. 13 図版. 27 挿図. 4
- グリーン・パークの円井戸 W. 12 図版. 123 b
- グリーン・パークのバーラ・カンバー (Barāh Khambā)  
T. 73 図版. 98 a
- クワットゥル・イスラーム・マスジッド (Qūwat al-Islām  
Masjid) M. 1 図版. 1~10
- ゴルア・コースのバーラ・カンバー (Barāh Khambā)  
T. 98 図版. 107 c
- サイイド・アフマド (Sayid Ahmad) の墓  
T. 14 図版. 89 e
- サイイド・ヤシン (Sayid Yasin) の墓  
T. 118 図版. 116 a
- サイイドゥル・フジャイーブ西方のモスク  
M. 22 図版. 34 a
- サイイドゥル・フジャイーブ (Sayid al-Hujjāb) のハーン  
カー O. 25 図版. 158 a, b
- サクリ・グムティー (Sakri Gumtī) T. 64 図版. 95 a, b
- サート・ブラ (Sārtulāh) W. 48 図版. 138
- ザファール・ハーン (Zafar Khān) の墓 T. 7 図版. 78 a, b
- シェイフ・アラウッディーン・ヌール・タージ (Shaykh  
'Alā' al-Dīn Nūr Taj) の墓 T. 130 図版. 119 a, b
- シェイフ・アリー (Shaykh 'Alī) のグムティー  
T. 132 図版. 119 d
- シェイフ・オスマーン (Shaykh Uthmān) の墓  
T. 11 図版. 80 b
- シェイフ・カビールッディーン・オネリヤー (Shaykh Kabir  
al-Dīn Anīyā) の墓 → ラール・グンバッド (シェイブ  
ル西方)
- シェイフ・ザイヌッディーン (Shaykh Zam al-Dīn) の墓  
T. 93 図版. 106 b

- シェイブ=サラーフッディーン=ダルヴェーシュ (Shaikh Salāh al-Dīn Darwish) の墓 T. 86 図版. 104 c
- シェイブ=シハーブッディーン=アーク (Shaikh Shihāb al-Dīn 'Ashiq) の墓 T. 91 図版. 105 d
- シェイブ=シハーブッディーン=タージ=カーン (Shaikh Shihāb al-Dīn Taj Khan) の墓 T. 55 図版. 92 a, b
- シェイブ=ズィヤールッディーン=ルーミー (Shaikh Ziya al-Dīn Rūmī) の墓 T. 88 図版. 105 a
- シェイブ=ナシールッディーン=マフムード (Shaikh Naṣīr al-Dīn Maḥmūd) の墓 T. 135 挿図. 38
- シェイブ=ハイダル (Shaikh Haidar) の墓 T. 90 図版. 105 c
- シェイブ=ファリド=シャカル=ガンジ (Shaikh Farid Shakar Ganj) の孫娘の墓 T. 124 図版. 117 c
- シェイブブルのハンマーム O. 51 図版. 163
- シェイブブルのモスク M. 47 図版. 51 a
- シカンダル=シャー=ローディーン (Sikandar Shah Ludhī) の墓 T. 79 図版. 102
- シーシュ=グンバッド (Shish Gumbad) T. 51 図版. 89 c, d
- ジャハーズ=マハル (Jahāz Mahal) O. 22 図版. 154 b
- ジャハーンパナー (Jahānpānah) の城壁 O. 5 図版. 144 c
- ジャハーンパナー南城壁の堰堤 W. 46 図版. 144 c 挿図. 62
- シャープル=ジャートのモスク M. 10 図版. 23
- シャール=アラム (Shāh-i 'Ālam) の墓 T. 89 図版. 105 b
- ジャマート=バーナ (Jamā'at Khānah) M. 2 図版. 11~12 a
- ジャムスッディーン=イレトクミジュの墓→イレトクミジュの墓
- シーリー (Sūrī) の城壁 O. 1 図版. 141
- シーリーのバーラダリー (Bārahdarī) O. 26 図版. 158 c
- シーリー=東南のラール=グンバッド (Lāl Gumbad) T. 109 図版. 112 b
- ステーション=ロードの堰堤 W. 39 図版. 135 c 挿図. 61
- スルターン=ガリー (Sultān Ghārī) T. 1 図版. 73~74
- スルターン=ガリー=東方のモスク M. 15 図版. 28 b 挿図. 6
- スルターンプルの円井戸 W. 1 図版. 122 a 挿図. 46
- スルターンプルのバーオリ W. 25 図版. 131 挿図. 57
- ソハジ=ブルジ (Sohan Burj) G. 65 図版. 71
- ダーディ (Dādī) のグンバッド T. 53 図版. 90 c
- ダリヤ=ハーン (Dariyā Khān) の墓 T. 100 図版. 109 a
- ダルヴェーシュ=シヤール (Darwish Shāhī) のモスク G. 31 図版. 62 c
- チャーヘ=ハース (Chāh-i Khās) W. 11 図版. 123 a
- チャーサト=カンバー (Chausath Khambā) M. 12 図版. 25~26
- チャーティ=グムティ (Chhātī Gumtī) T. 66 図版. 95 d
- チャーテ=ハーン=カ=グンバッド (Chhate Khān ka Gumbad) T. 50 図版. 89 a, b
- チャーブルジ (Chaurburj) O. 20 挿図. 67
- チャール=ミ=ナール (Chor Misār) O. 48 図版. 162 d
- チャール=ミ=ナール南方のバーオリ W. 22 図版. 129 b
- チャラ=グ=デリーのバーラ=カンバー (Bārah Khambā) T. 113 図版. 114 d
- チャラ=グ=デリーのモスク M. 60 挿図. 18
- チャラ=グ=ディブリー (Chiragh-i Dīhī) の廟→シェイブ=ナシールッディーン=マフムードの墓
- ティーン=ブルジ (Tin Burj) (ムバーラクブル=コートラ西方) T. 50 図版. 89 a, b; T. 54 図版. 91; T. 59 図版. 93 c, d
- ティーン=ブルジ, ムハンマドブルの→ムハンマドブルのティーン=ブルジ
- デリー=大学構内の堰堤 W. 40 図版. 135 d
- ドー=シ=リー=ヤ=グンバッド (Dū Shīhīyā Gumbad) T. 42 図版. 86 b
- トゥグルカーバード (Tughluqabad) の城壁 O. 2 図版. 142~143
- トゥグルカーバード城壁内の円井戸 I W. 2 図版. 122 b
- トゥグルカーバード城壁内の円井戸 II W. 3 図版. 122 c 挿図. 47
- トゥグルカーバード城壁内の円井戸 III W. 4 挿図. 48
- トゥグルカーバード城壁内の円井戸 IV W. 5 挿図. 49
- トゥグルカーバード城壁内の円井戸 V W. 6 挿図. 50
- トゥグルカーバード城壁内の円井戸 (?) VI W. 7 挿図. 51
- トゥグルカーバードの貯水井戸 W. 15 図版. 124 a
- トゥグルカーバードの堰堤 I W. 36 図版. 135 a
- トゥグルカーバードの堰堤 II W. 37 図版. 135 b
- トゥグルカーバードのジャーマ=マスジッド M. 3 図版. 12 b 挿図. 1
- トゥグルカーバードの水門 W. 47 図版. 137
- トゥグルカーバードの地下倉 O. 52 図版. 164 a, b, c
- トゥグルカーバード西北のバーオリ W. 23 図版. 129 c
- トゥグルカーバード西南のバーオリ W. 24 図版. 130
- ドービー (Dhobī) の城壁→アーディラーバード東方の小城壁

動物公園内の十二本柱の墓 T.116 図版.115 c

ナーイー (Nai) の被装→アーディラーバード東方の小城砦  
ナジールッディーン=マフムード (Nasir al-Din Mahmūd)  
の墓→シェイブ=ナシールッディーン=マフムードの墓  
ニザームッディーン南部の聚落曲壁  
O.9 図版.149 c 挿図.64

ニザームッディーンのパオリー W.19 図版.127

ニザームッディーンのパラ=カンバー (Barah Khamba)  
T.134 図版.121

ニザームッディーンのマール=マハル (Lal Mahal)  
O.11 図版.150

ニザームッディーン=オーリヤー (Nigām al-Din Auliya) の  
ダルガーの北門 O.46 挿図.74

ニザームッディーン=オーリヤーのチャラー  
O.29 図版.158 e

ニリー=マシッド (Nili Masjid) M.37 図版.45

ネル=ハウス庭内の堰堤 W.45 cf. 挿図.66

ネル=ハウス庭内のターシャク O.16 挿図.66

ハウス=ハースの湖上の亭 O.14 図版.152 a

ハウス=ハースのマドラッサ  
O.24 図版.155 b~157 挿図.68

ハウス=ハースのモスク M.11 図版.24 挿図.3

ハウス=ラーニー=東南のパオリー W.21 図版.129 a

バグ=アラム=カ=グンバッド (Bagh-i 'Ālam ka Gumbad)  
→シェイブ=シハブッディーン=タージ=ハーン  
の墓

ハッジ=ランガ (Haji Langa) のグンバッド  
T.13 図版.80 d

ハッジ=ランガのモスク M.28 図版.36 b, c

バジュレ=カ=グンバッド (Bajre ka Gumbad)  
T.33 図版.84 a, b

バステイー=パオリー (Basti Bauli) W.27 図版.133 a

バステイーの墓 T.110 図版.113

バステイーのモスク M.40 図版.48 挿図.12

バーネ=ジャバーン=ティランガニー (Khān-i Jahān Tilāngānī) の墓  
T.76 図版.99

バハール=ローディ (Bahāl Lādhī) の墓  
T.133 図版.120

バラ=カンバー (Barah Khamba), グリーン=パークの  
→グリーン=パークのパラ=カンバー

バラ=カンバー, ゴルフ=コースの→ゴルフ=コースの  
バラ=カンバー

バラ=カンバー, キラ=グ=デリーの→キラ=グ=デリ  
ーのパラ=カンバー

バラ=カンバー, ニザームッディーンの→ニザームッ  
ディーンのパラ=カンバー

バラ=グンバッド (Barā Gumbad) のモスク

M.35 図版.41~42

バラ=ラーオ=カ=グンバッド (Barā Lao ka Gumbad)  
T.52 図版.90 a, b

バラダリー (Barahdarī) (シェイブ=プル西北西)  
M.17 図版.29 b

バラダリー, シーリーの→シーリーのバラダリー

バラダリー (ムニールカ西北西) T.106 図版.111 b

バルバン (Balban) の墓 T.3 図版.76 a 挿図.29, 30

ハルブ=ゼ=カ=グンバッド (Kharbūze ka Gumbad)  
O.34 図版.160 a

バレー=バーン=カ=グンバッド (Barā Khān ka Gumbad)  
T.54 図版.91

バンディー (Bāndī) のグンバッド→ボーティのグンバ  
ッド

ビジャイ=マシッド (Bijai Masjid)  
O.6 図版.145~146

ビービー (Bibi) のグンバッド→ダーティのグンバッド

ビービー=ズライハー (Bibi Zulaikha) のチャラーガー  
O.36 挿図.70

ピール=ガーイブ (Pir Ghāib) O.13 図版.151 b

ピール=ガーイブ西南の井戸 W.16 図版.124 b

ビルジ=バーン (Birji Khān) のグンバッド  
T.46 図版.87 c

フィロ=ズ=シャー=コートラ (Firūz Shāh Kotla)  
O.7 図版.147~148

フィロ=ズ=シャー=コートラの門井戸  
W.17 図版.125

フィロ=ズ=シャー=コートラのジャマ=マシッド  
M.5 図版.15~16

フィロ=ズ=シャー=トクグルク (Firūz Shāh Tughluq)  
の墓 T.9 図版.79

プーター=グンバッド (Phūtā Gumbad) (セーナガル鉄道  
駅の東北東) T.30 図版.83 b

プーター=グンバッド (ハウス=ハース東南)  
G.10 図版.58 e 挿図.21

ブラーナ=キラー=西北の八本柱の墓  
T.125 図版.117 d

ブーレ=バーン=カ=グンバッド (Būre Khān ka Gum-  
bad) T.59 図版.93 c, d

ベガンブリー=マシッド (Bigampuri Masjid)  
M.4 図版.13~14

ベガンブル東方のマハル O.21 図版.154 a

ポティー (Poti) のグンバッド T.29 図版.83 a

ボリー=パティヤリー=カ=マハル (Bāli Bhatiyārī ka  
Mahal) O.15 図版.152 b, c

ボリー=パティヤリー=カ=マハルの堰堤  
W.43 図版.135 g, h

マッキ=マシッド (Makki Masjid) M.43 図版.49 c

- マヒールブルの堰堤 W. 44 図版. 136
- マフドゥーム・サーヒブ (Makhdūm Ṣāhib) のモスク M. 33 図版. 39 挿図. 10
- マフドゥーム・サマウッディーン (Makhdūm Samā' al-Dīn) の墓 T. 105 図版. 111 a
- マフドゥーム・サマウッディーンのモスク M. 41 図版. 49 a
- マルーク・チャンド・カ・グンバッド (Malāk Chand kā Gumbad) T. 25 図版. 82 d
- マールチャの堰堤 W. 42 図版. 135 f
- マールチャ・マハル (Mālchah Maḥal) O. 12 図版. 151 a
- ムイッズッディーン・バハラーム (Mu'izz al-Dīn Bahrām) の墓 T. 92 図版. 106 a
- ムニールカのモスク M. 20 図版. 32 b
- ムバーラク・シャー・サイイド (Mubārak Ṣhāh Saiyid) の墓 T. 77 図版. 100 挿図. 32
- ムバーラクブル・コートラのバーオリ W. 28 図版. 133 b
- ムバーラクブル・コートラのモスク M. 32 図版. 38
- ムハンマディーワリー・マスジッド (Muḥammadwālī Masjid) M. 38 図版. 46 挿図. 11
- ムハンマド・シャー・サイイド (Muḥammad Ṣhāh Saiyid) の墓 T. 78 図版. 101
- ムハンマドブルのティーン・ブルジー (Tin Barjī) T. 71 図版. 97 a
- ムハンマドブルのモスク M. 48 図版. 51 b
- メヘローリーのイーダガー M. 61 挿図. 19
- メヘローリー西南のバーオリ W. 35 挿図. 60
- メヘローリー西方の十二本柱の墓 T. 82 図版. 103 c 挿図. 33
- メヘローリーのビジョン・ハウス O. 59 挿図. 76
- モートゥ・キ・マスジッド (Moth ki Masjid) M. 36 図版. 43~44
- モラーダーバード・バハリーのバーオリ W. 20 図版. 128
- モラーダーバード・バハリーの十二本柱の墓 T. 83 図版. 103 d
- モラーダーバード・バハリーの北のモスク M. 34 図版. 40
- モラーダーバード・バハリーの南のモスク M. 19 図版. 31~32 a 挿図. 7, 8
- ニースフ・カッタール (Yusuf Qarrā) の墓 T. 104 図版. 110 c
- ニースフ・カッタールのモスク M. 46 図版. 50
- ラーイー・ピトラー・南城壁北方のバーオリ W. 33 挿図. 58
- ラージョン・キ・バーイーン (Rājūn ki Bā'in) W. 26 図版. 132
- ラージョン・キ・バーイーンの十二本柱の墓 T. 103 図版. 110 b
- ラージョン・キ・バーイーンのモスク M. 39 図版. 47
- ラードー・サライーの円井戸 W. 14 図版. 123 c 挿図. 56
- ラードー・サライーの岩の上の墓 T. 35 図版. 85 a
- ラーナー・サーヒブ (Rānā Ṣāhib) の墓 T. 85 図版. 104 b
- ラール・クワーン (Lāl Kuwān) W. 13 挿図. 55
- ラール・グンバッド (Lāl Gumbad) (シェイブル西方) T. 8 図版. 78 c, d
- ラール・グンバッド, シーリー東南の・シーリー東南のラール・グンバッド
- ラール・マハル (Lāl Maḥal), ニザームッディーンの・ニザームッディーンのラール・マハル
- ランガル・ハーナ (Langar Khānah) O. 30 図版. 158 f
- ランガル・ハーン (Langar Khān) の墓 cf T. 115
- ローシャネ・チラーゲ・ディッリー (Rāshān-i Chitāgh-i Dihli) の廟・シェイフ・ナシールッディーン・マフムードの墓
- ローシャネ・チラーゲ・ディッリーのダルガーの東門 O. 38 挿図. 72
- ローディー公園の円形の塔 O. 49 挿図. 75
- ワジーラーバードの堰堤 W. 41 図版. 135 e
- ワジーラーバードの本門 W. 49 図版. 139
- ワジーラーバードの橋 W. 50 図版. 140 a
- ワジーラーバードのモスク M. 18 図版. 30
- ワジールブル・カ・グンバッド (Wazīrpur kā Gumbad) T. 48 図版. 88 a, b
- ワジールブル・カ・グンバッド南方のバーオリ W. 30 図版. 134 a

# 圖 版





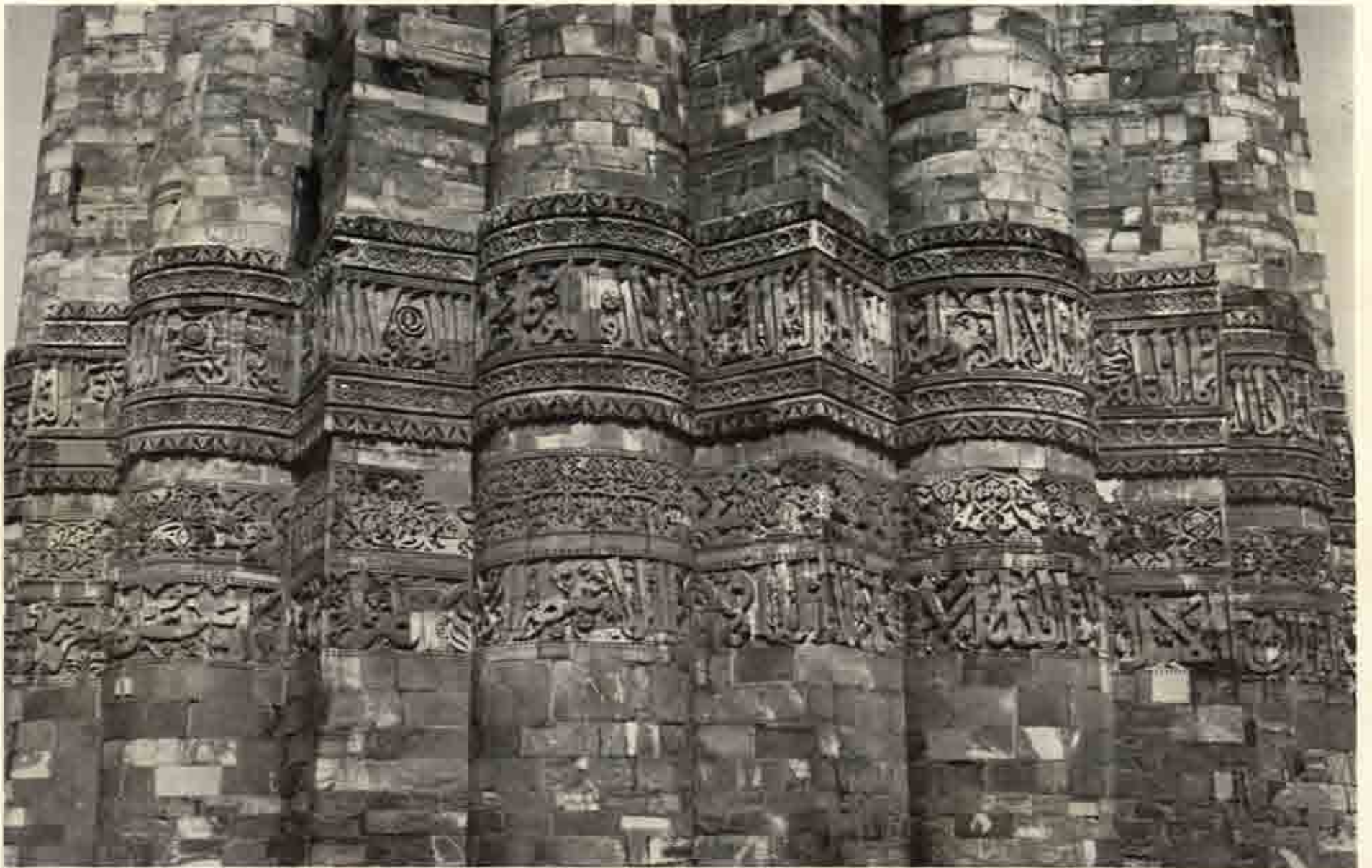
モ ス ク



M. 1 クーワッドゥル=イスラーム=マスジッド 礼拝室南端のアーチの背面とクトゥブ=ミーナールの周囲全景



a M.1 クロップヘーナル 最下層のグランダ附近 東面



b M.1 同上 最下層の碑文と文様



a M. 1 クーワットル・イスラーム・マシッド 最古の部分の礼拝室東正面と北側廂の一部



b M. 1 同上 礼拝室東正面の中央アーチの上部



a M. 1. 同左モミダ 最古の部分の東廻廊と南北廻廊の一部

9



b M. 1. 同左 東廻廊 内部 北より



c M. 1. 同左 北廻廊中央部のドーム天井 内部



a M.1 タワックウル・イスラーム・マシッド 最古の部分の東正面入口



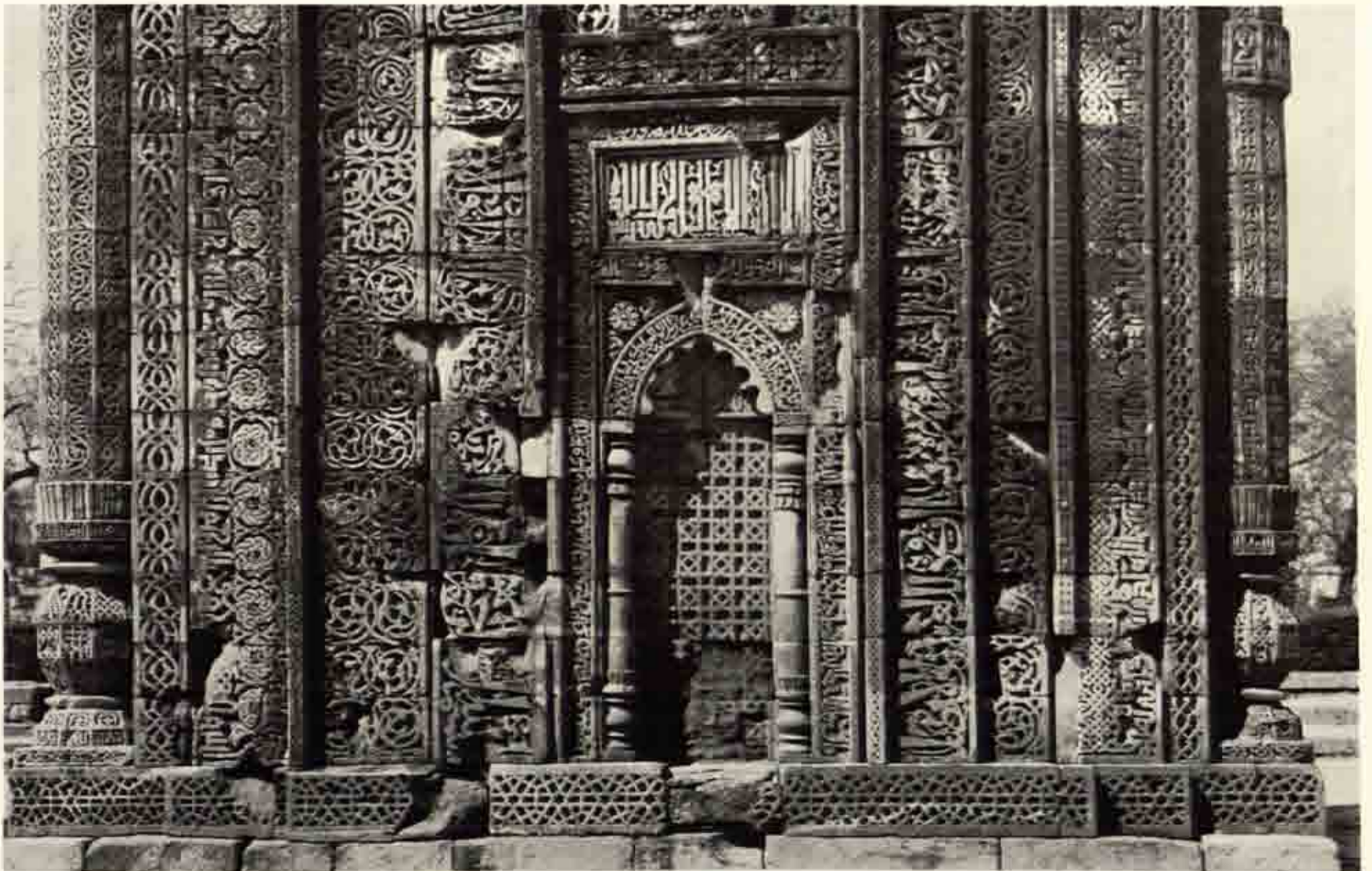
b M.1 同左 北側出入口



c M.1 同上 北側面 北面



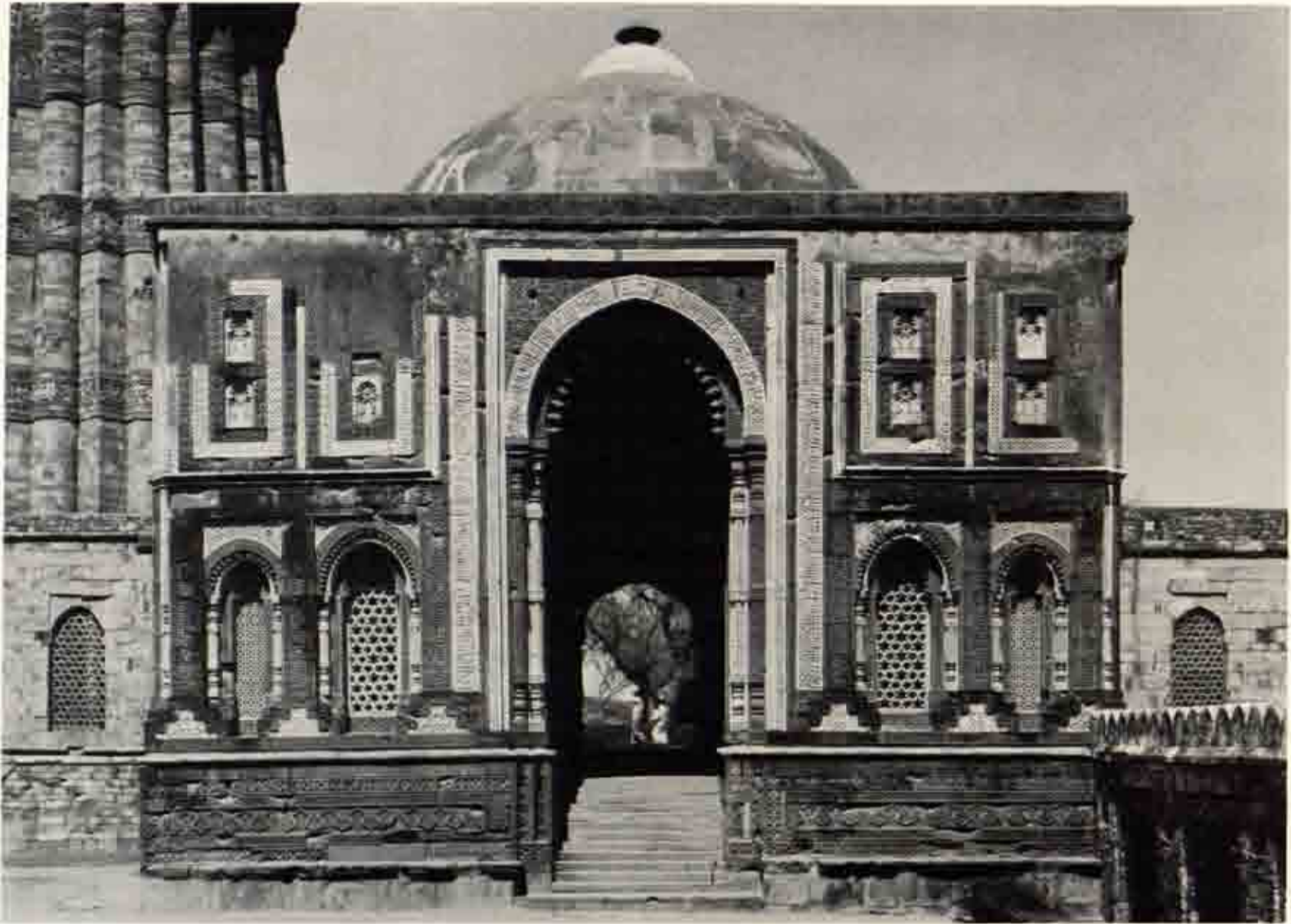
a M. 1 同左キヌア 最初の拡張部分の南側礼拝室東正面と南庭廊の一部



b M. 1 同上 礼拝室東正面の中央アーチ下部の文様と碑文



180



α M. 1. ターワズトホル=イスラーム=マスジド 二重目の拡張部分の南門アライー=ダルワザ 南面



β M. 1 同上 東面



γ M. 1 同上 内部東北隅



M.1: 同左 東面入口のアーチ



a M. 1 ターワットホル-イスラーーム-マスジッド、二度目の拡張部分の南庭園と南門 北より



b M. 1 同上 南門 北面



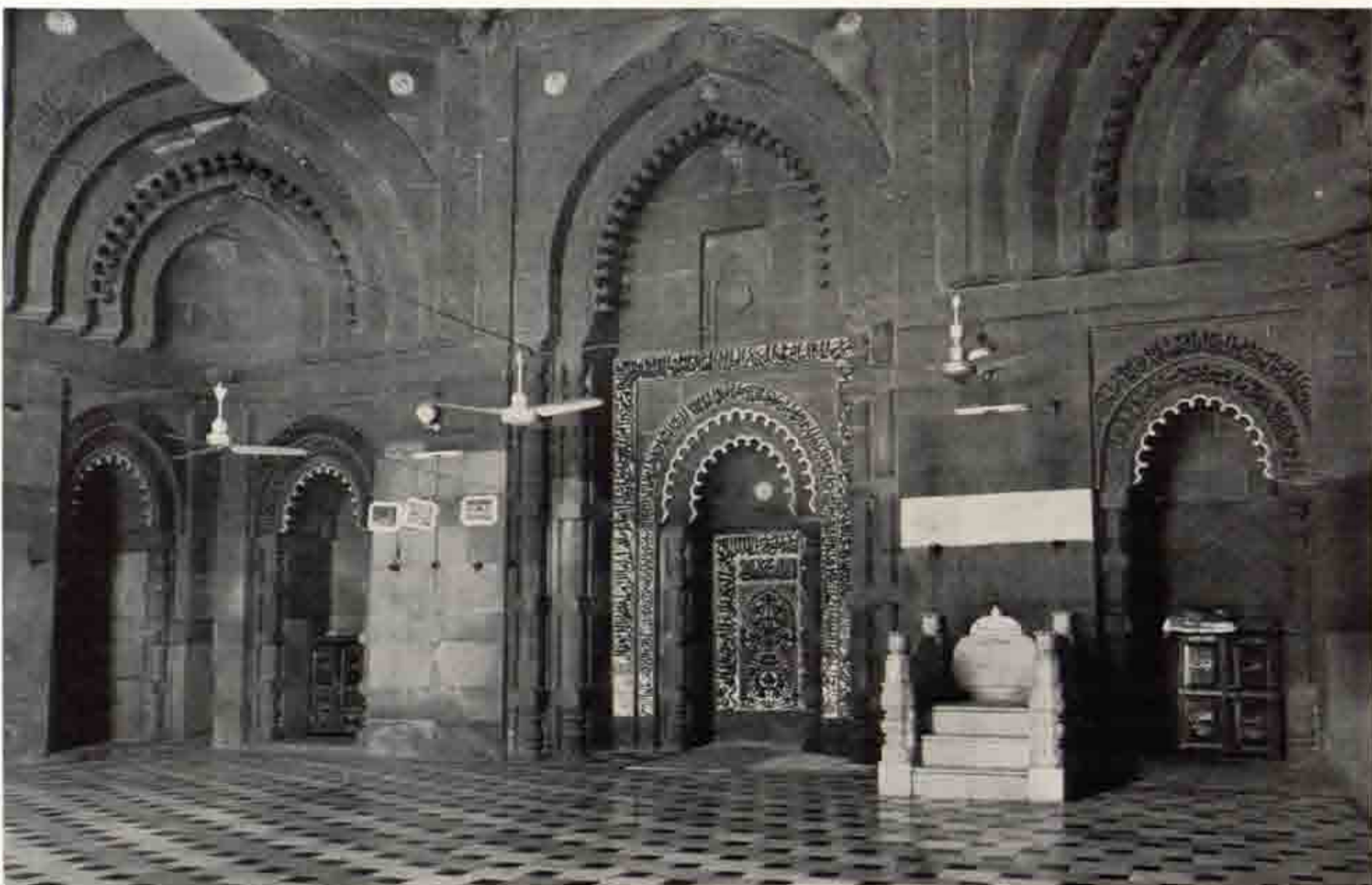
a. M. I 同左モスタ、マラーイー・ミネナル、南より



b. M. I 同上、同ミネナル、東面



※ M.2 芝ヤマトマヤール 東正面



※ M.2 同上 孔祥玉室 内部西側



α M. 2 同左モスク 西背面



β M. 3 トムダルカーベードのジャーマ・マスケッド 礼拝堂の境内・東より



a M.4. マーガンプールー・マシヤド 全景 北より



b M.4. 同上 東門と東遊廊の一部



a M. 4 科左モスタ 礼拝室 真正面



b M. 4 同上 南西礼拝側室 内部 北より





4 M.5 フォーローズ・デ・コート・ド'オリエンタル・デ・カイレウアン 北門を西側から見た様子



5 M.5 同上 北門 北面



a M. 5 同左モスク 内部、西側と北側



b M. 5 同上 崩壊した東側の部分と内部南側の一部



a. M. 6. カーリーマスコッド 東南より



b. M. 6. 同上 東門 正面



a M. 6 同左キヌタ 礼拝室 内部 崩壊部分 南より



b M. 6 同上 礼拝室 中央トセラーブ



c M. 6 同上 通路 内面 南より



● M. 7 キルキーマスジッド 南門と外部正所諸



6 M. 7 同上 殿上



a. M.7 同左モスク 内庭と柱廊の一部



b. M.7 同上 中央ミハラーブ

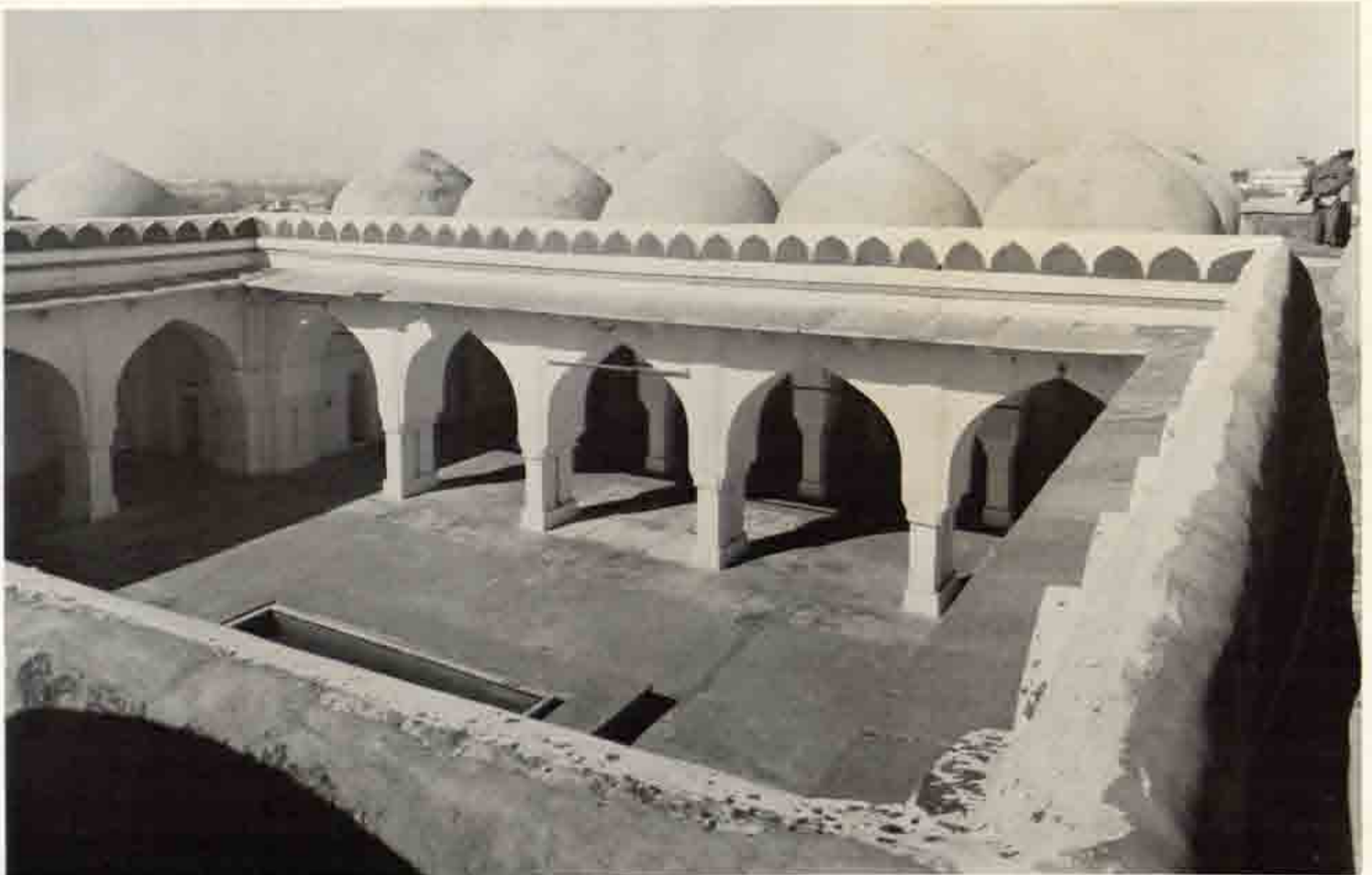


c. M.7 同上 柱廊 内面



0  
7

a M. 8 カーワン・マスジッド 東門 正面



b M. 8 同上 礼拝室正面と内庭



a M. 9 カールーサラーイーのモスク 礼拝堂 東正面



b M. 9 同上 西背面





a M.10 キャーブル・ジャートのモスク 中央礼拝堂 東面と南面



b M.10 同上 中央礼拝堂南面と崩壊した南無礼拝堂



c M.10 同上 中央礼拝堂 内部西側



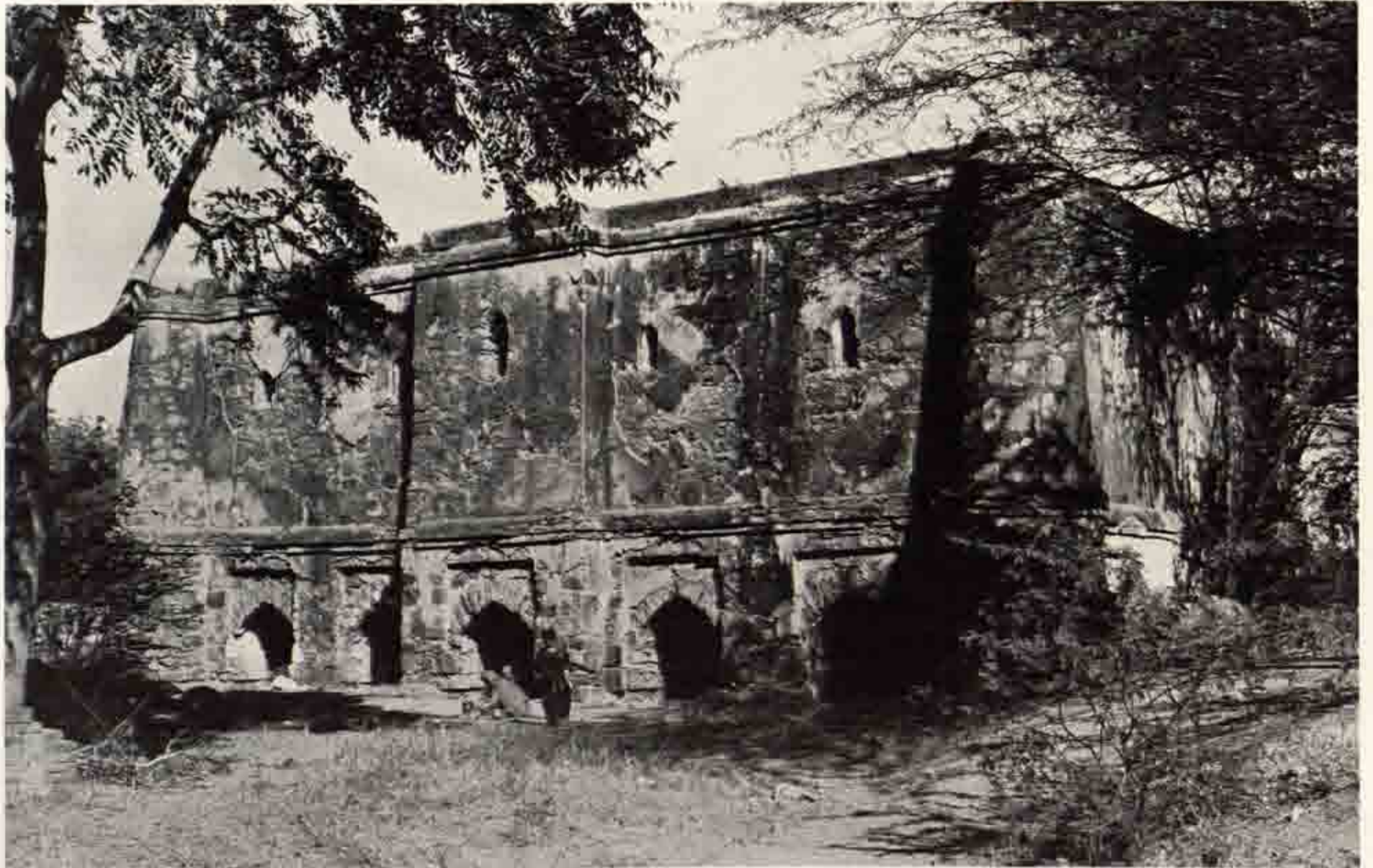
a M. II ハウズ・ハースのモスク 西背面



b M. II 同上 礼拝室 東正面



a M. 12 シュヘラト・カンパー 礼拝堂 東正面



b M. 12 同上 西背面



a M.12 同左モスク 東側の附属建物 東面



b M.12 同上 同建物 内庭に面する東北部分



a M.13 タトプ・ロードのモスク 礼拝室 東正面



b M.13 同上 礼拝室 内部 南より



a M.14 モスク 礼拝堂 東正面



b M.15 スルターン・ガリー東方のモスク 礼拝堂 東正面



a M.16 モスタ (? ) 残存する南の部分



b M.17 モスタ (? ) 東正面



a M.18 ラジャーラーバードのモスク 東南より



b M.18 同上 礼拝室 東正面



c M.18 同上 内照 南より





a. M.19 モラーダーバード・バローリーの南のモスク (向って左) 東正面



b. M.19 同上 (向って右) 西背面



a. M. 19 同左モスク 中央礼拝室 内部北側



b. M. 20 同左モスクのモスク 東正面



a. M.21 カダム・シャリフのモスク 東正面



b. M.21 同上 内部西側



a. M. 22 サイイドフル・アジューイブ西方のモスク 東正面



b. M. 23 モスク 崩壊の状態 東より



a M.24 モスク 東正面



b M.25 モスク 東正面



c M.26 ファーホンドジのモスク 東正面



a M.27 モスク(?) 前正面



b M.28 モスク 南より



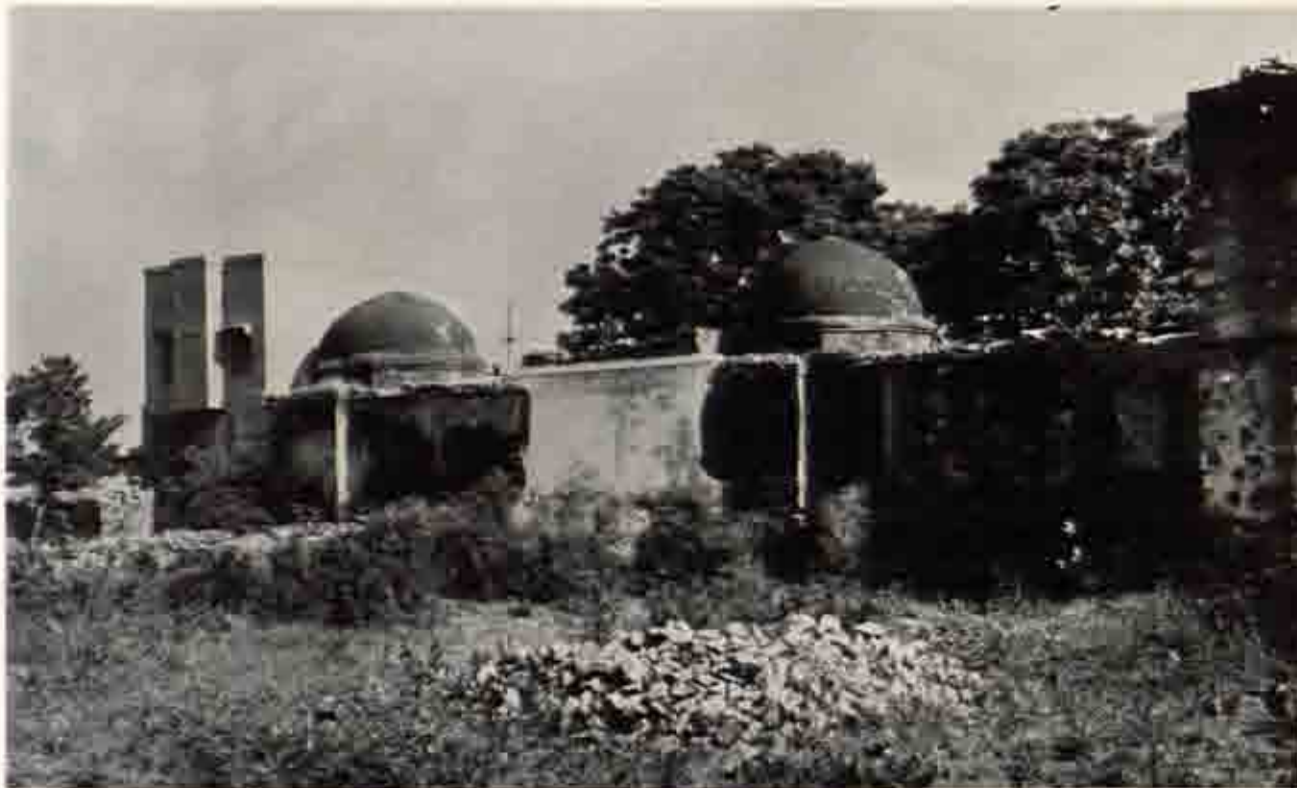
c M.28 同上 礼拝堂 前正面



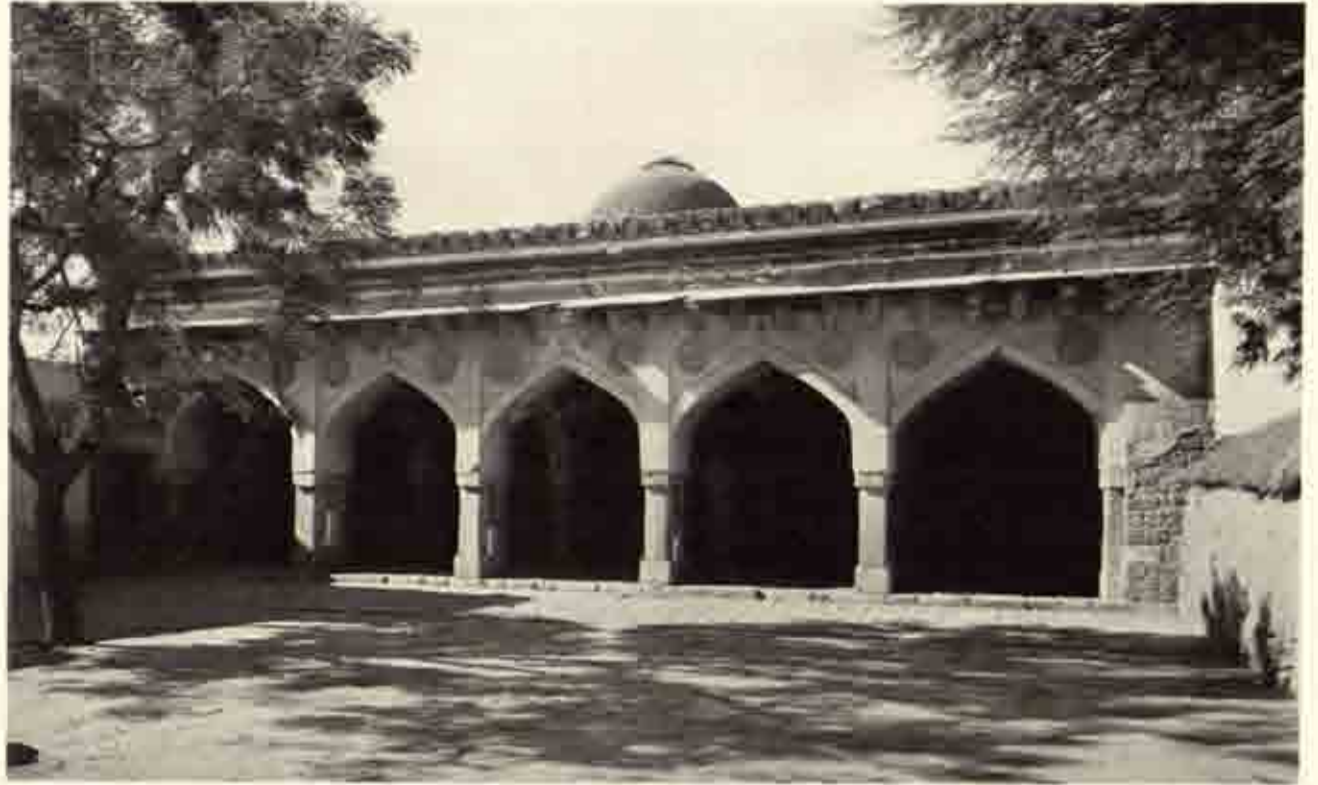
a M.29 モスク 西背面



b M.30 モスク 西背面



c M.31 モスク 西背面



a M.32 アムベール宮殿・コートでのモスク 東正面



b M.32 同上 西背面



c M.32 同上 内部 北より





a M.33 マブドゥーム・サーヒブのモスク 東南より



b M.33 同上 礼拝堂 西背面



c M.33 同上 東正面



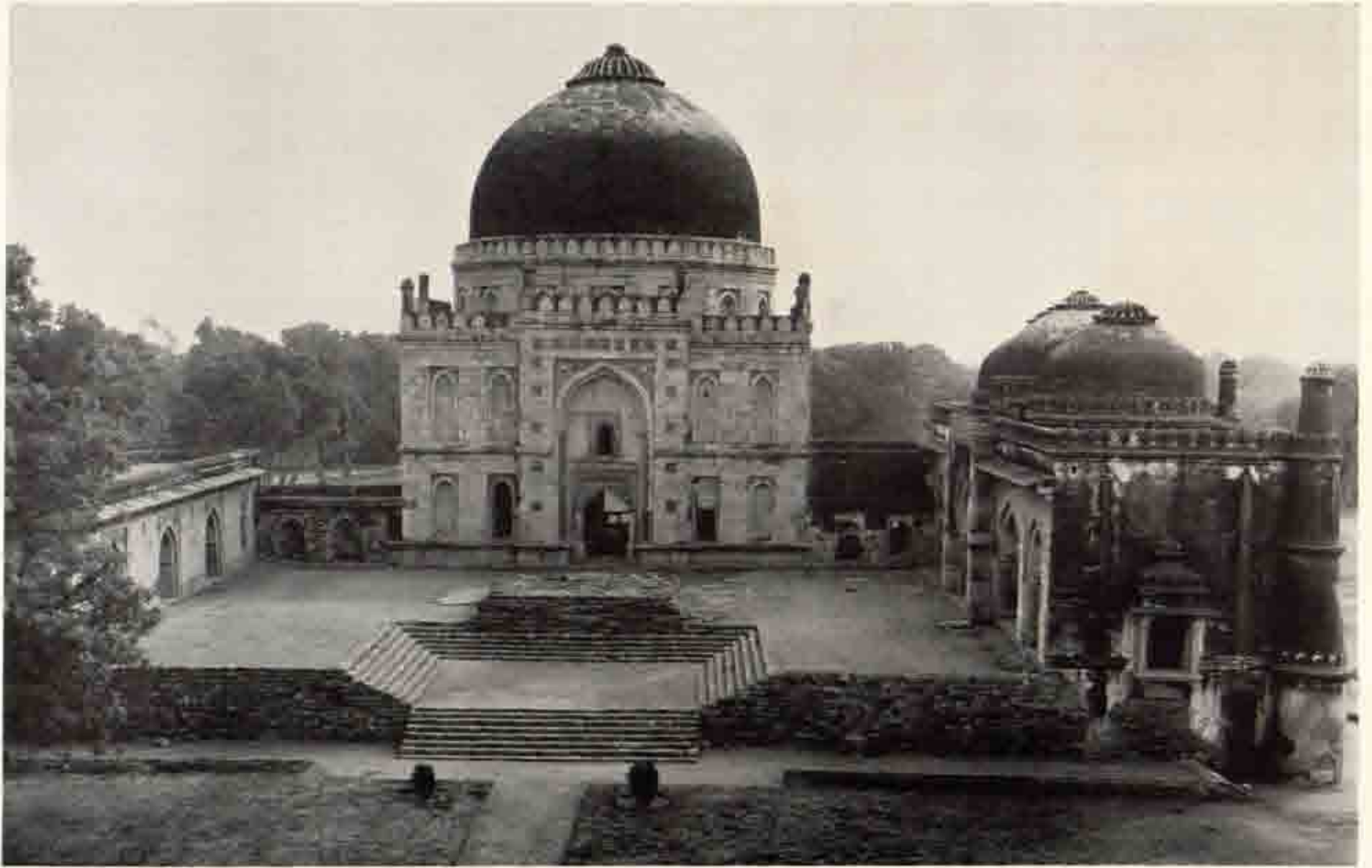
a M.34 モラーダーガード・パハーリーの北のモスク 中央礼拝室 東正面



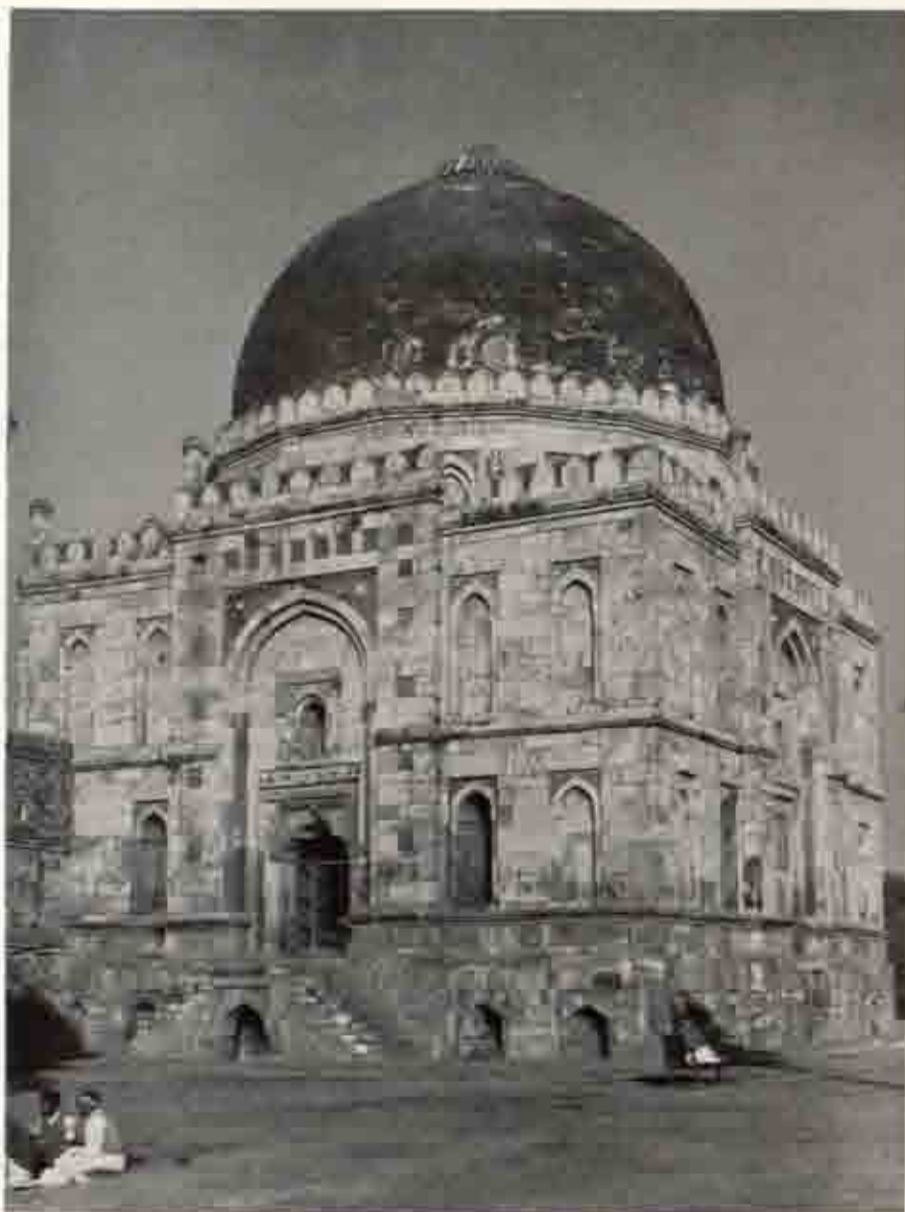
b M.34 同上 内部西北隅



c M.34 同上 南部側室 内部西南隅



a M. 35 バラー・グンバドのモスク 北より



b M. 35 バラー・グンバド 南面



c M. 35 同上 内部東北隅



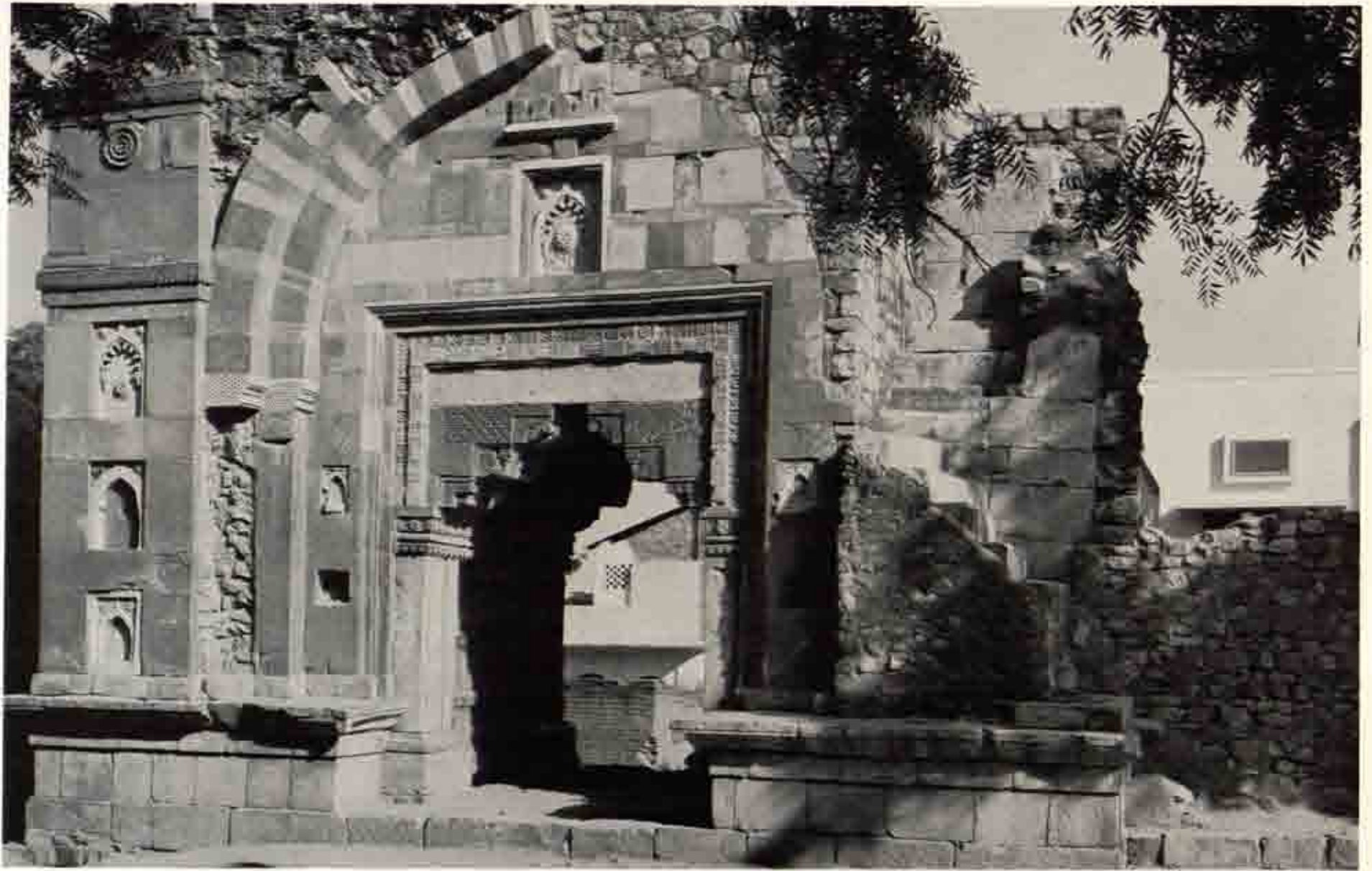
a M. 35 同左モスク 礼拝堂 東正面



b M. 35 同上 内部 北より



c M. 35 同上 東側の遺物 西面



a M.36 モートロキ・マスジッド 東門 西面



b M.36 同上 礼拝堂 東正面



a M.36 同左モスク 内部 北より



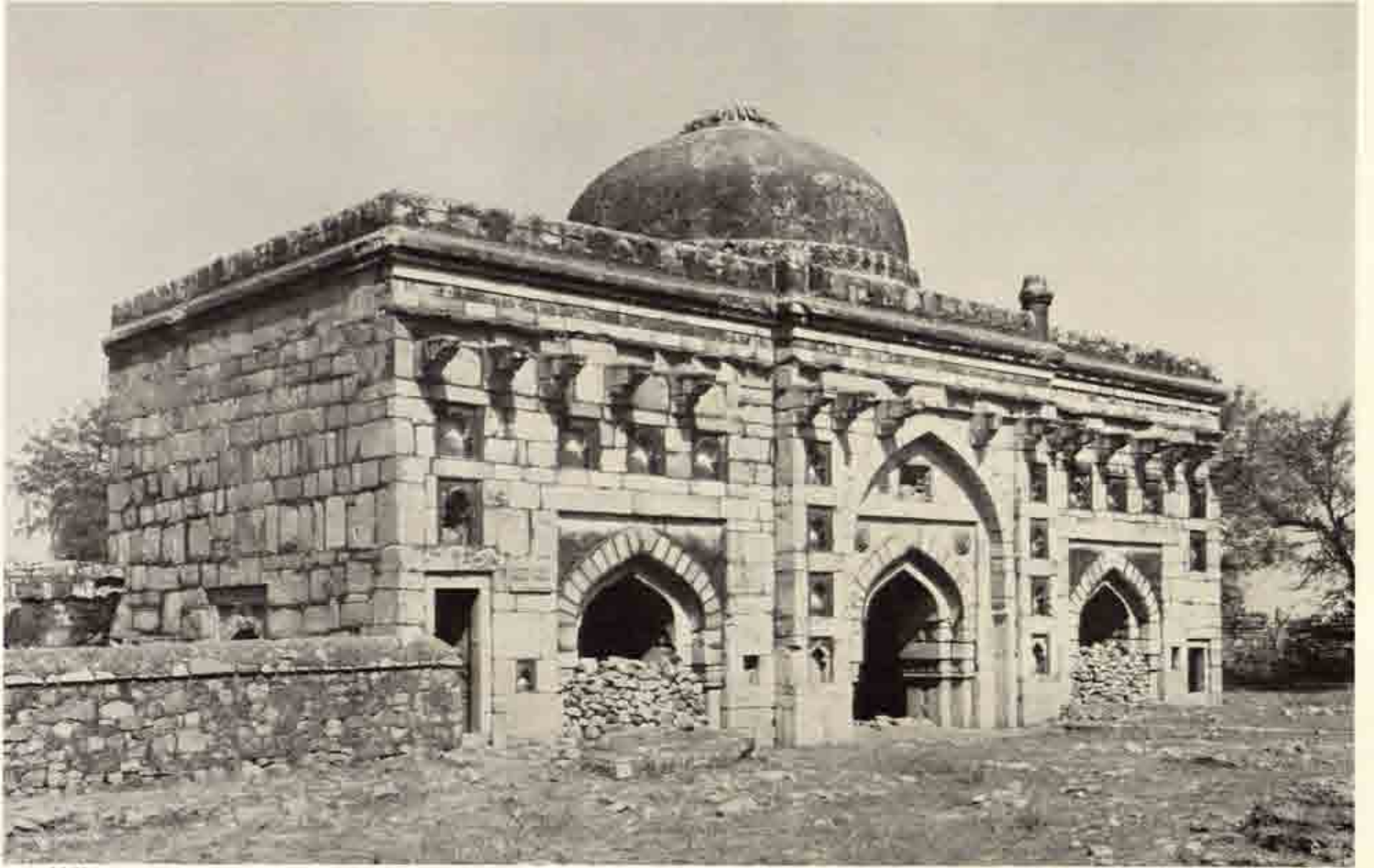
b M.36 同上 西背面



a M.37 ニーガー・ナスラジッド 東正面



b M.37 同上 内部 北より



a M.38 ムハンマディーヤ・マサジッド 東庄園



b M.38 同上 内部 北より





a M.39 ラージョーン・カーハバン・イーンのモスク 正面



b M.39 同上 内部 北より



a M. 40 バスターのモスタ 東正面



b M. 40 同上 礼拝室 (ミハラブ)



c M. 40 同上 西北隅と天井



a. M. 41 マスジド・ムハンマド・サイード・カディロンのモスク 東正面



b. M. 42 モスク 崩壊の状態 近より



c. M. 43 マスジド・マッキヤのモスク 東正面



d. M. 44 モスク 東正面



e. M. 45 モスク 東正面 南の部分



a. M.46. ニーサブ・カッターの墓所 東正面



b. M.46. 同上 内部 西側之南側



a M.47 シェイアザハのモスク 東正面



b M.48 ムハンマダブルのモスク 東正面



a M. 39 モスク 東正面



b M. 50 モスク 崩壊の状況 東南より



c M. 51 モスク 東正面



a M.52 モスタ 東正面



b M.53 モスタ 東正面と南面



c M.54 モスタ 東正面



a M.55 マドチャーニーのモスク 東より



b M.55 同上 西背面





a M. 56 イタナガールのイーダガー 東正面



b M. 56 同上 西背面

墓 地



a G.1 墓地 東正面



b G.2 墓地 西南より



c G.2 同上 東正面



a. G. 3 墓地 东正面



b. G. 3 同左 西背面



c. G. 4 墓地 东正面



d. G. 4 同左 西背面



e. G. 5 墓地 东正面



f. G. 5 同左 西背面



a G. 6 墓地 東正面



b G. 7 墓地 (?) 東正面



c G. 8 墓地 西背面



d G. 9 墓地 東正面



e G. 10 墓地 (?) 西南隅の部分



f G. 11 墓地 西南隅の部分



a. G.12 墓地 东正面



b. G.13 墓地 东正面



c. G.14 墓地 东正面



a G.15 墓地 東南より



b G.16 墓地 東より



c G.17 墓地 東より



d G.18 墓地 東南より



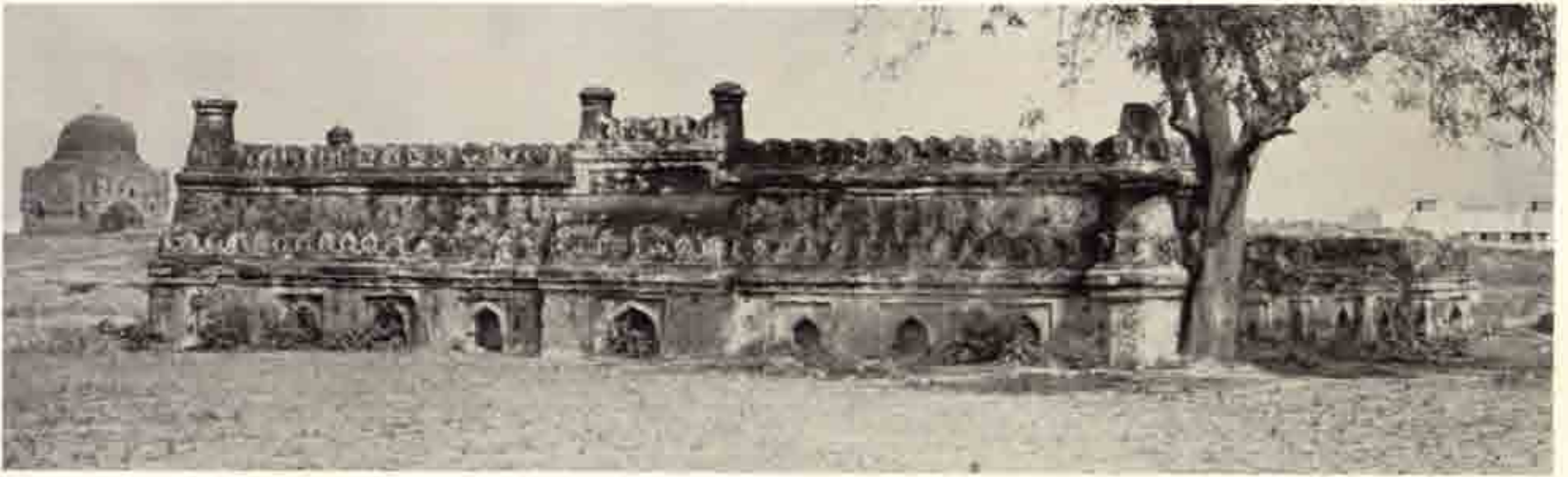
e G.19 墓地 東南より



f G.20 墓地 東南より



g G.21 墓地 東南より



a. G.22 墓地 西背面



b. G.23 墓地 東正面



c. G.24 墓地 東正面



d. G.25 墓地 西面より



e. G.26 墓地 西北より



f. G.27 墓地 東南より



g. G.28 墓地 西北より





a G.29 墓地 东正南



b G.30 墓地 东正南



c G.31 墓地 东正南



a G.32 墓地 东正面



b G.33 墓地 东正面



c G.34 墓地 东正面



d G.35 墓地 东正面



e G.36 墓地 东正面



f G.37 墓地 东南角



g G.38 墓地 西背面



h G.39 墓地 西北部分



a G.40 墓地 东正面



b G.41 墓地 东正面



c G.42 墓地 东正面



d G.43 墓地 东正面



e G.44 墓地 东正面



f G.45 墓地 东正面



g G.46 墓地 西正面



a G.47 墓地 东正面



b G.48 墓地 东正面



c G.49 墓地 东正面



d G.50 墓地 东正面



e G.51 墓地 西背面



f G.52 墓地 东正面



g G.53 墓地 东北方



a. G. 54 藏地 南正面



b. G. 55 藏地 东正面



c. G. 56 藏地 南正面



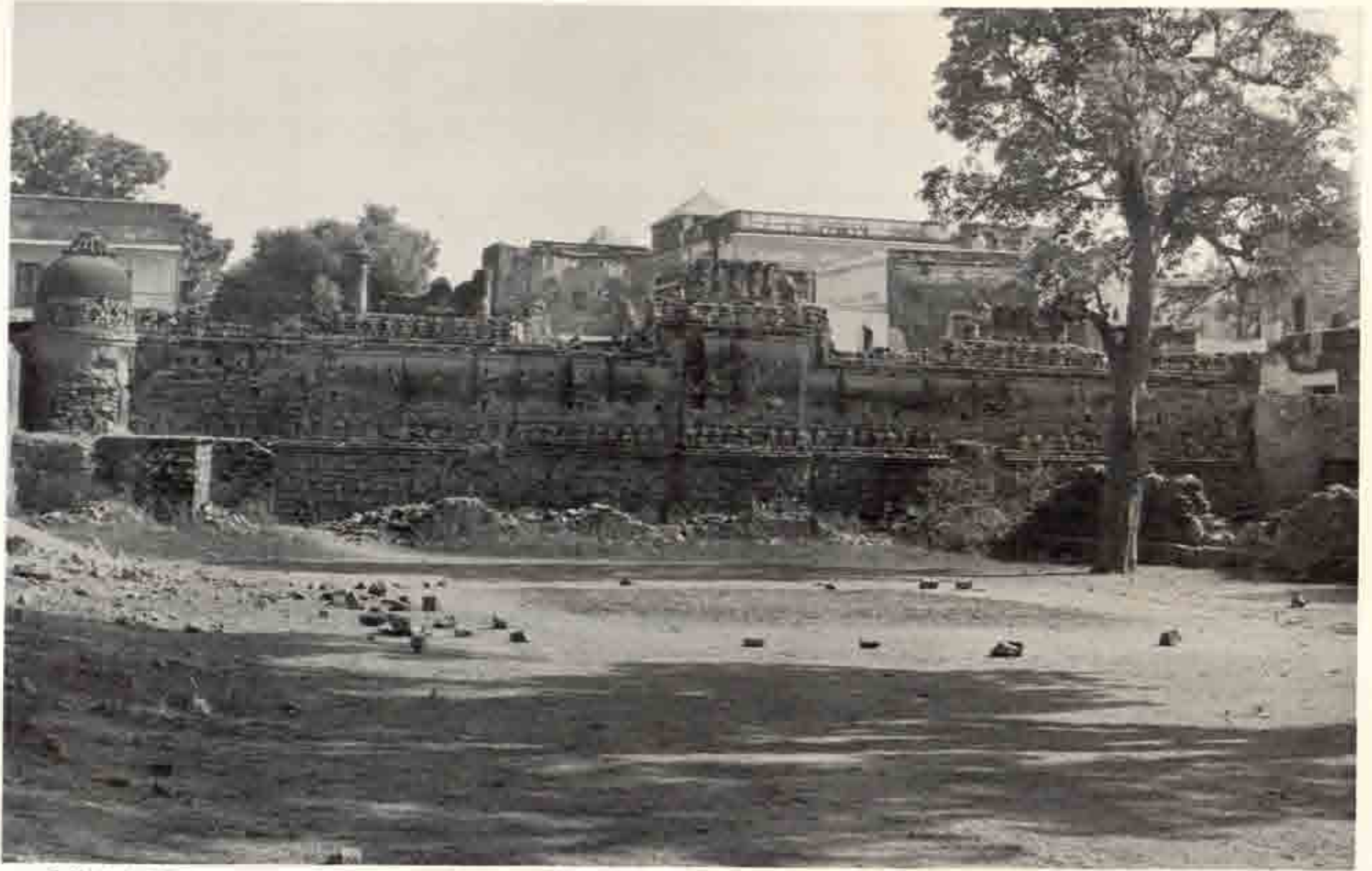
a G.57 墓地 東南より



b G.58 墓地 東正面



c G.59 墓地 東南より



a G.60 墓地 西背面



b G.60 同上 中央のアーチ

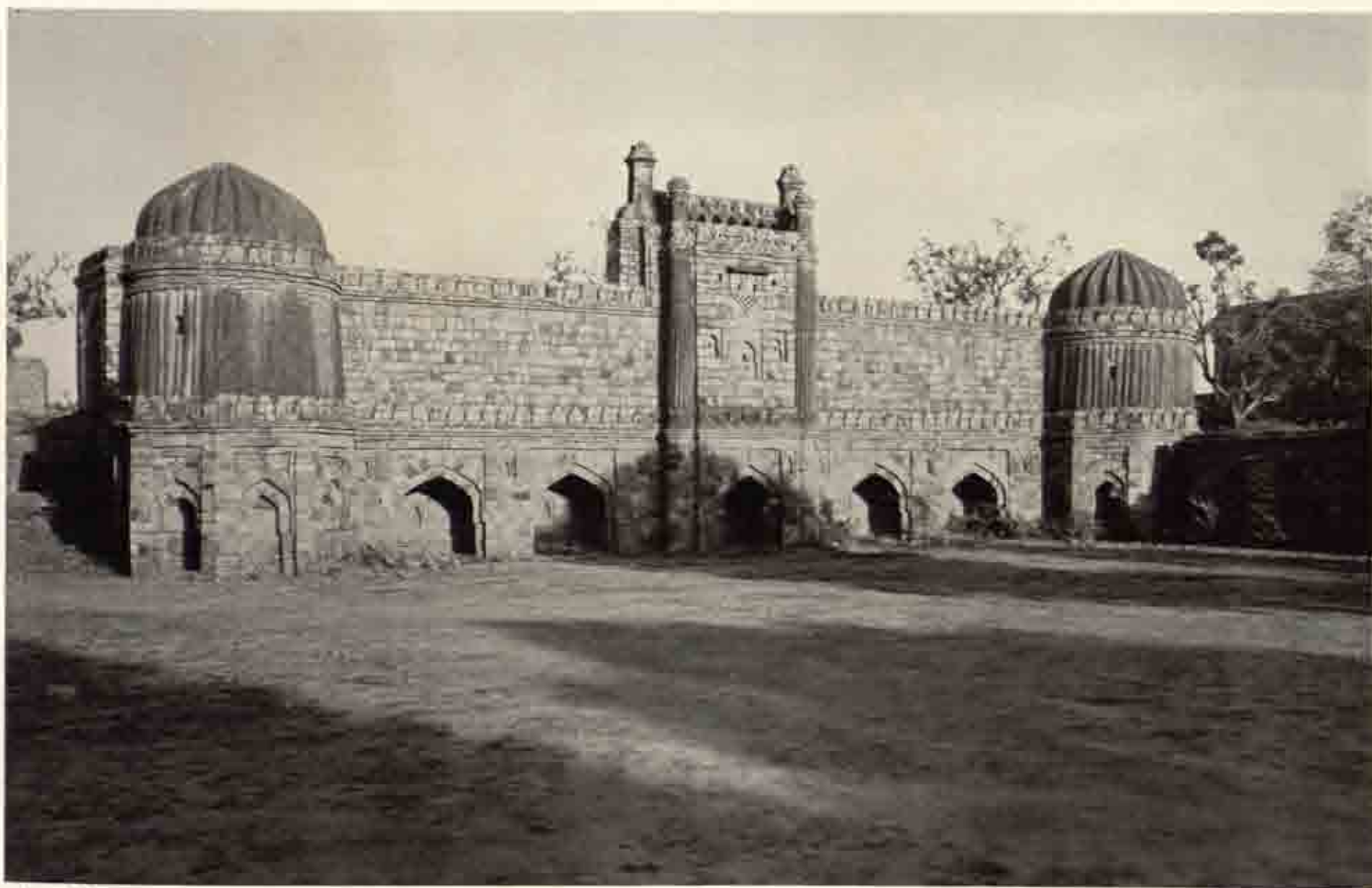


c G.60 同上 東正面

9



a G.61 墓地 東より



9

b G.61 同上 西壁面





a G. 62 墓地 东正面



b G. 63 墓地 礼拜堂东正面及附属建物



c G. 64 墓地 (?) 附属建物 北面



a. G. 65. シャーハン・ブルジ 北より



b. G. 65 同上 礼拝堂正面と附属建物



c. G. 65 同上 礼拝堂西背面



a. G. 66 墓地 东之9



b. G. 66 同上 礼拜堂之附属建物 东南

墓 建 築

29/



a T.1 スルターン・ガリー 東面

29/



b T.1 同上 西背面と南面



a. T. 1 同左建築物 内庭 東南より



b. T. 1 同上 西側列柱部分のミヒターフ



c. T. 1 同上 地下墓室 内部四隅



a. T. 2 イシトクシツの墓 北面と東面



b. T. 2 同上 南面 中央部分



c. T. 2 同上 内部西北隅



a T. 3 ジャルバシの墓 南面



b T. 4 アラーウッディーン・ハカジの墓 北面



c T. 5 蘇丹墓 西面





a T. 6 ガーソード・ノー・ト・グルクの塔 東より



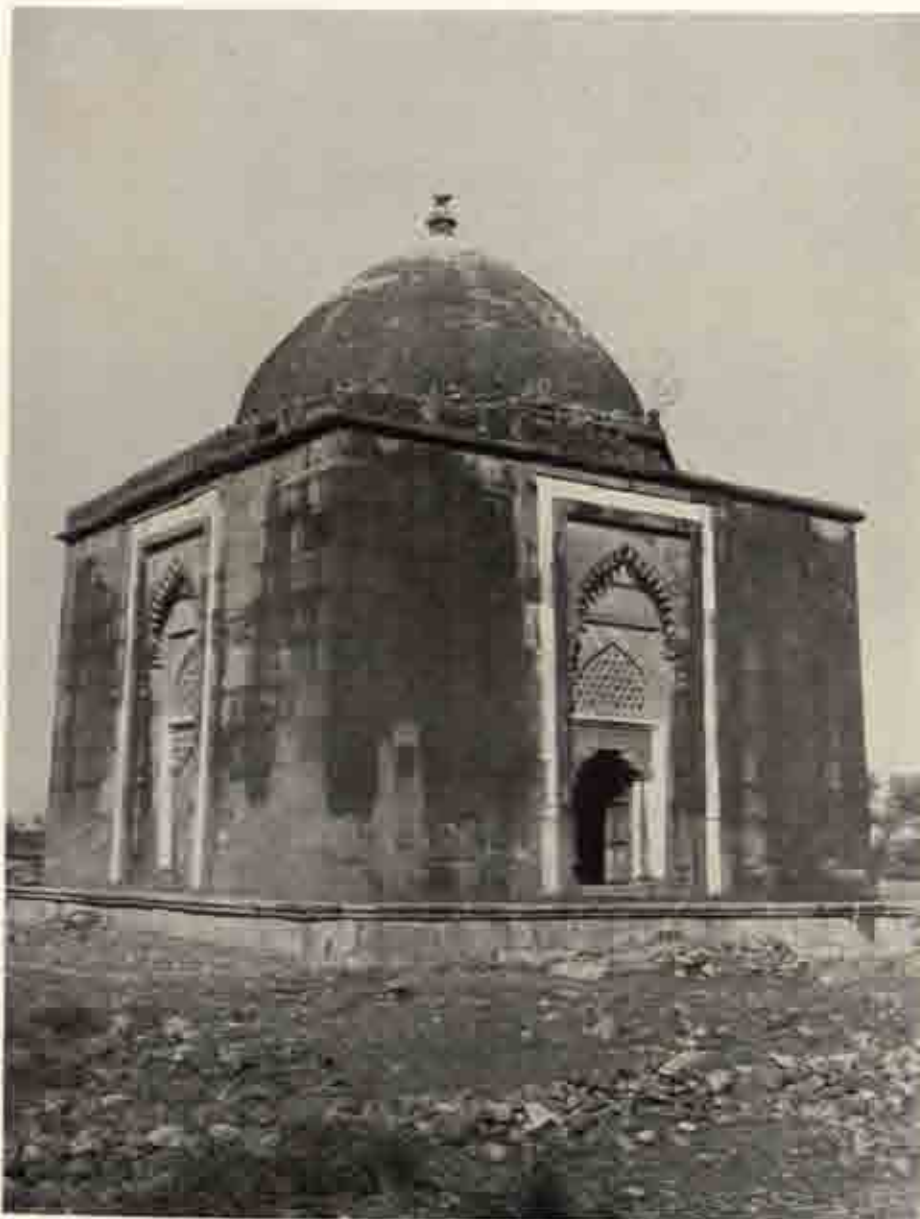
b T. 6 同上 南西と東側



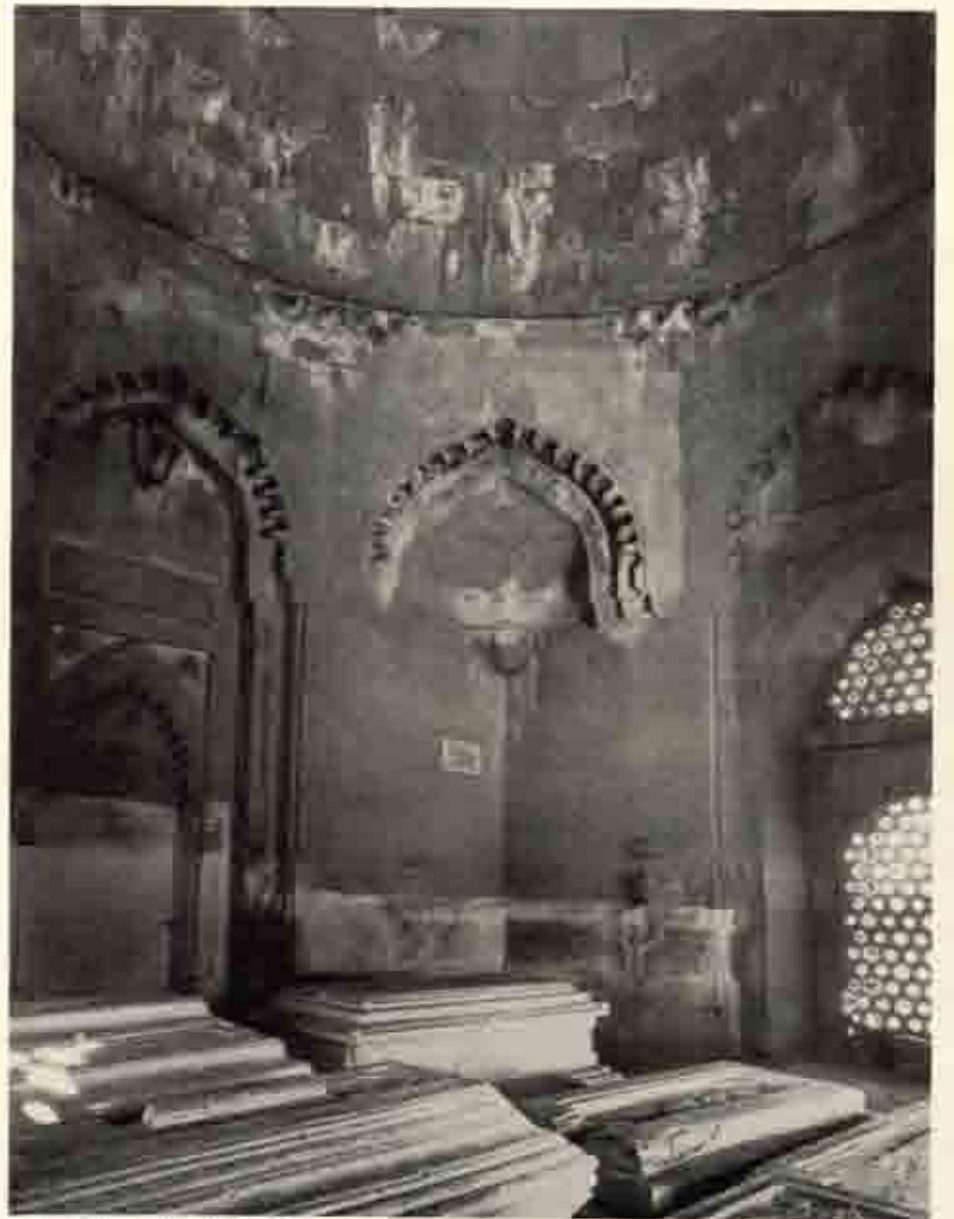
a. T. 7. ギファール・カーンの墓 西南より



b. T. 7. 同左 内面 西南より



c. T. 8. マフムド・アッラッディ 東面と南面



d. T. 8. 同左 内面 西北隅



a T.9 ファーホー・ズ・ジャード・トルクの墓 南西と東面



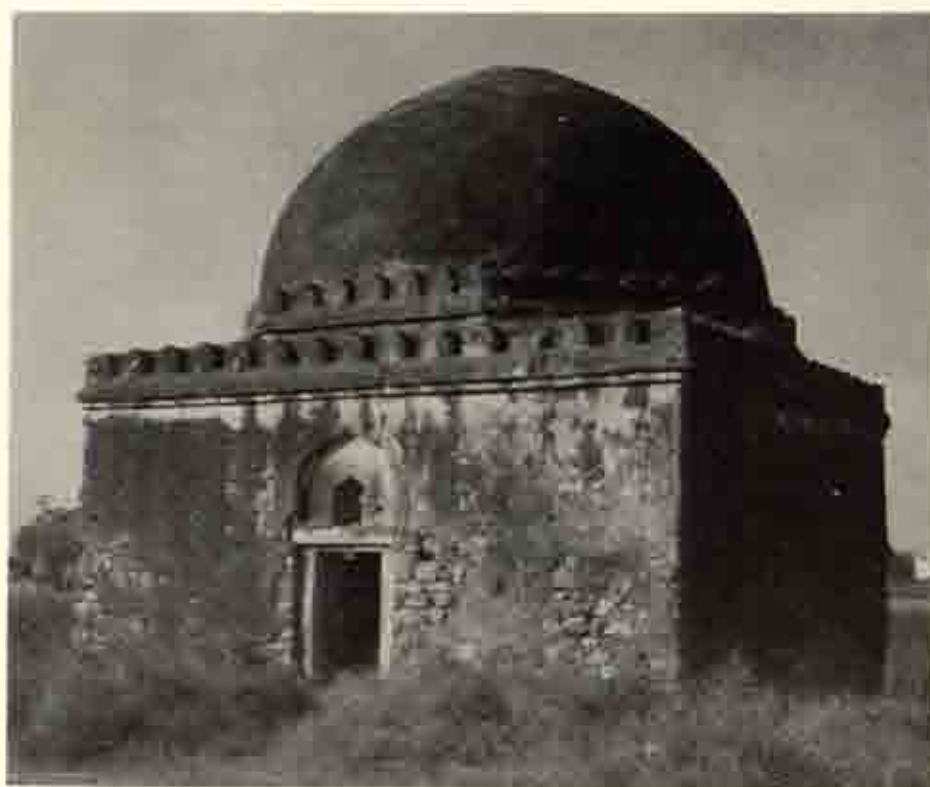
b T.9 同上 内部 北西隅



c T.9 同上 内部 大天井



a T.10 墓建築 南面と西面



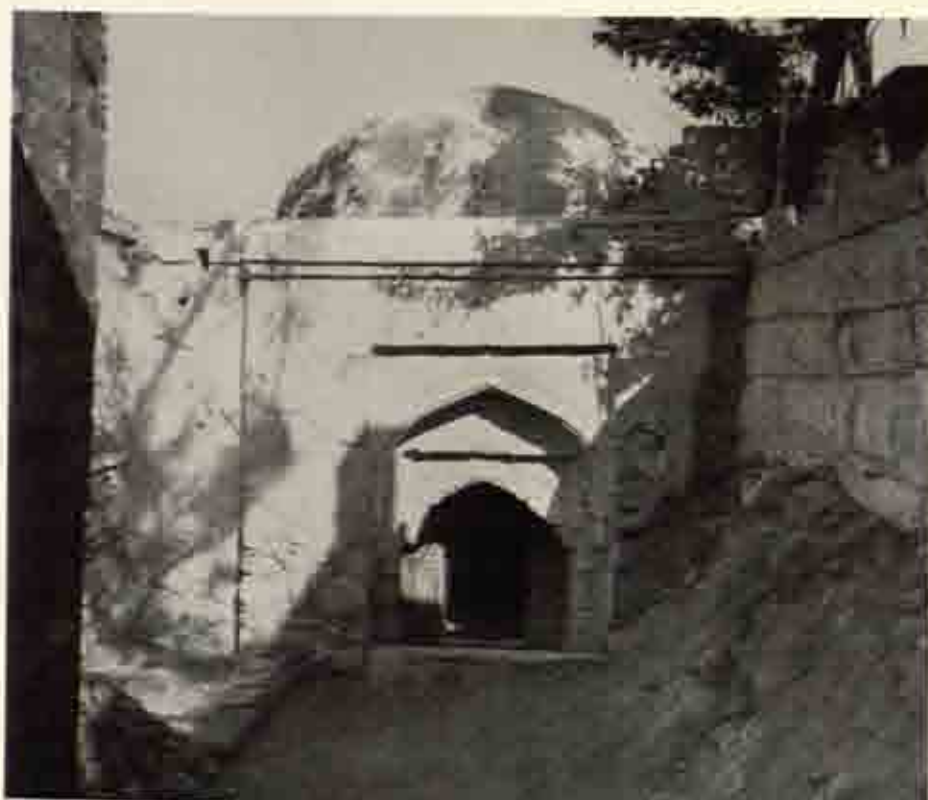
b T.11 シュイブ・オスマーンの墓 南面



c T.12 墓建築(?) 南面と西面



d T.13 墓建築 南面と東面



e T.14 墓建築(?) 南面



f T.15 墓建築(?) 西面と南面



a T.16 墓建築 南面



b T.17 墓建築(?) 西面と北面



c T.18 カーラー・グンバッド 西面



d T.19 墓建築(?) 南面



e T.20 墓建築(?) 東面



f T.21 墓建築(?) 西面と南面



a T.22 墓建筑



b T.23 墓建筑(?)



c T.24 墓建筑(?)



d T.25 双建筑



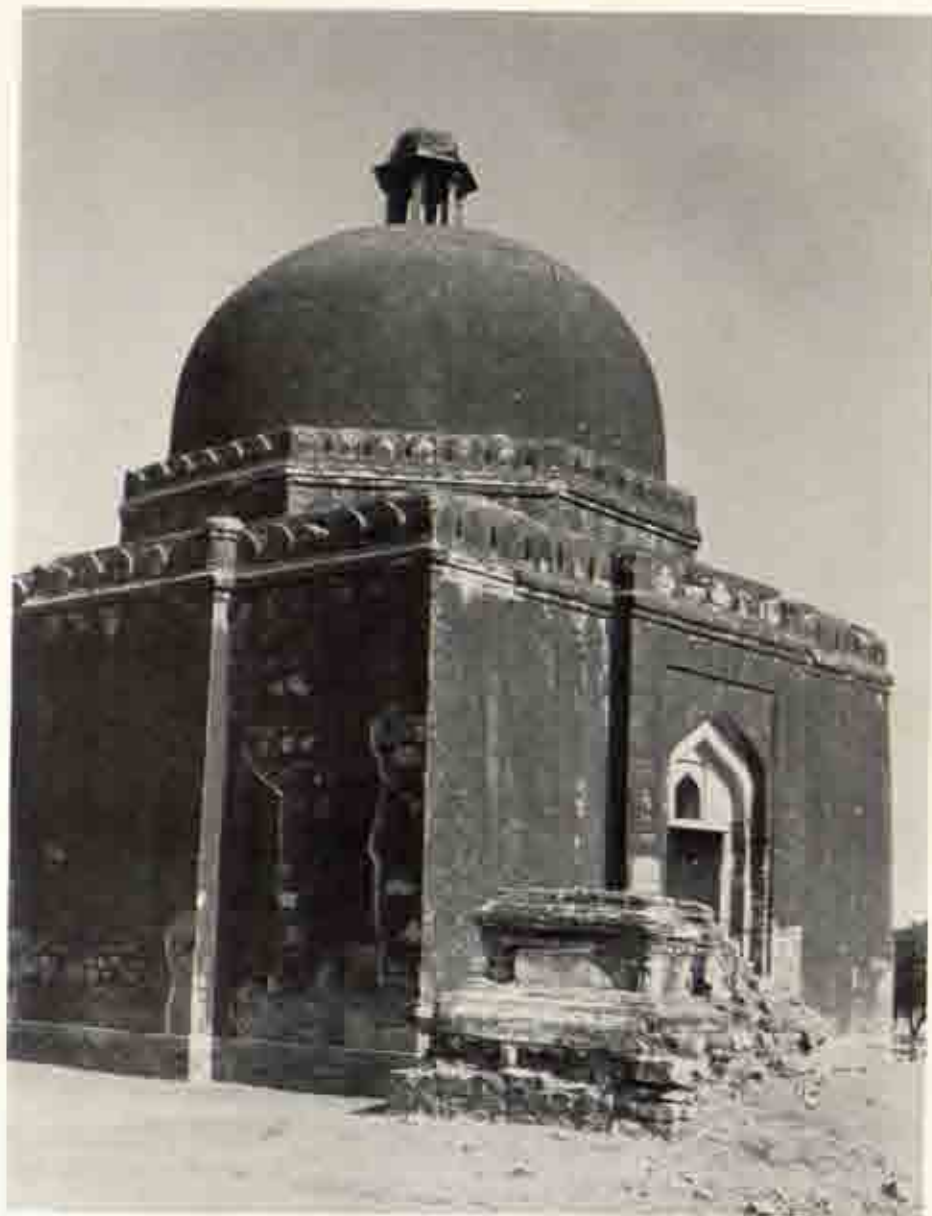
e T.26 墓建筑



f T.27 墓建筑：北面



g T.28 墓建筑(?) 北面



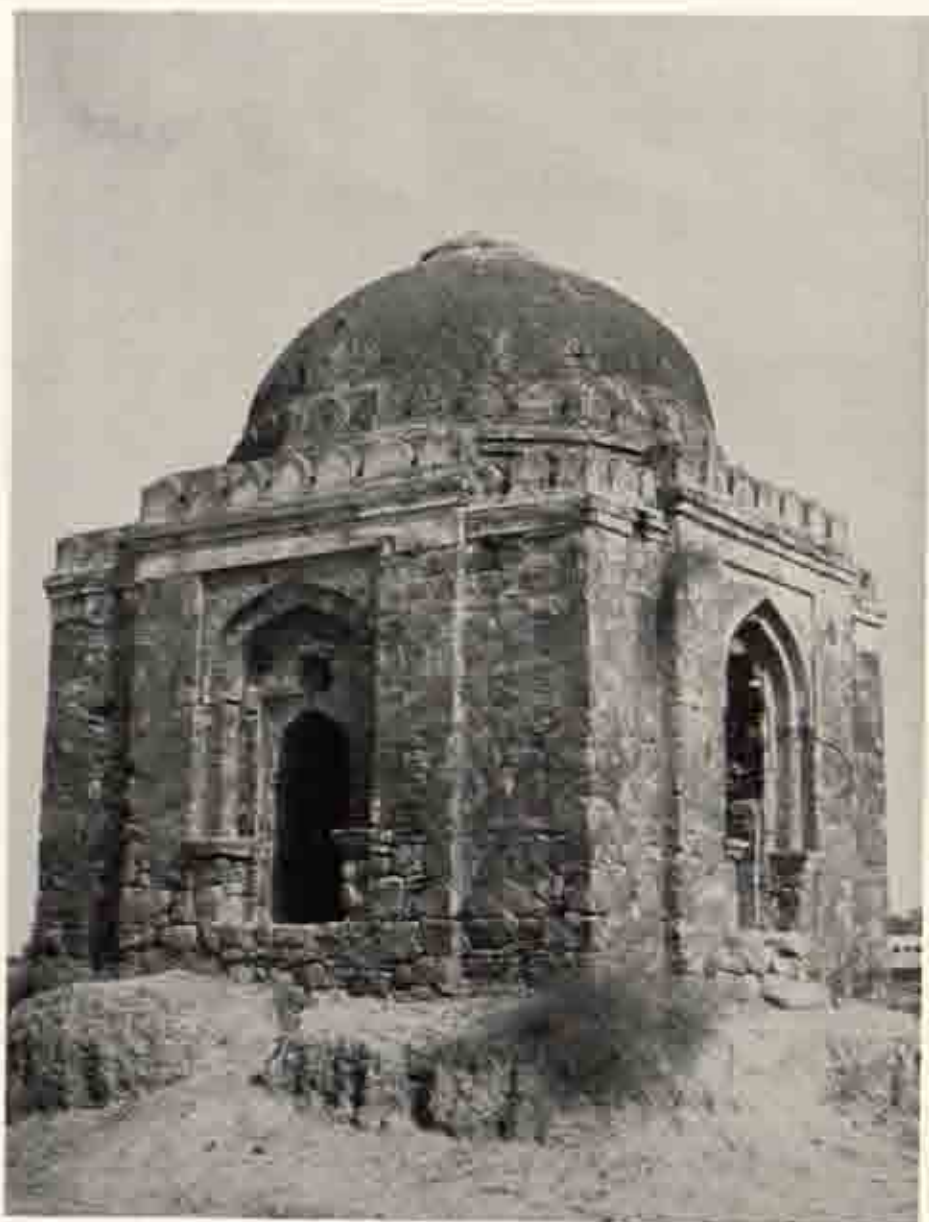
a T.29 墓建筑 南面と西面



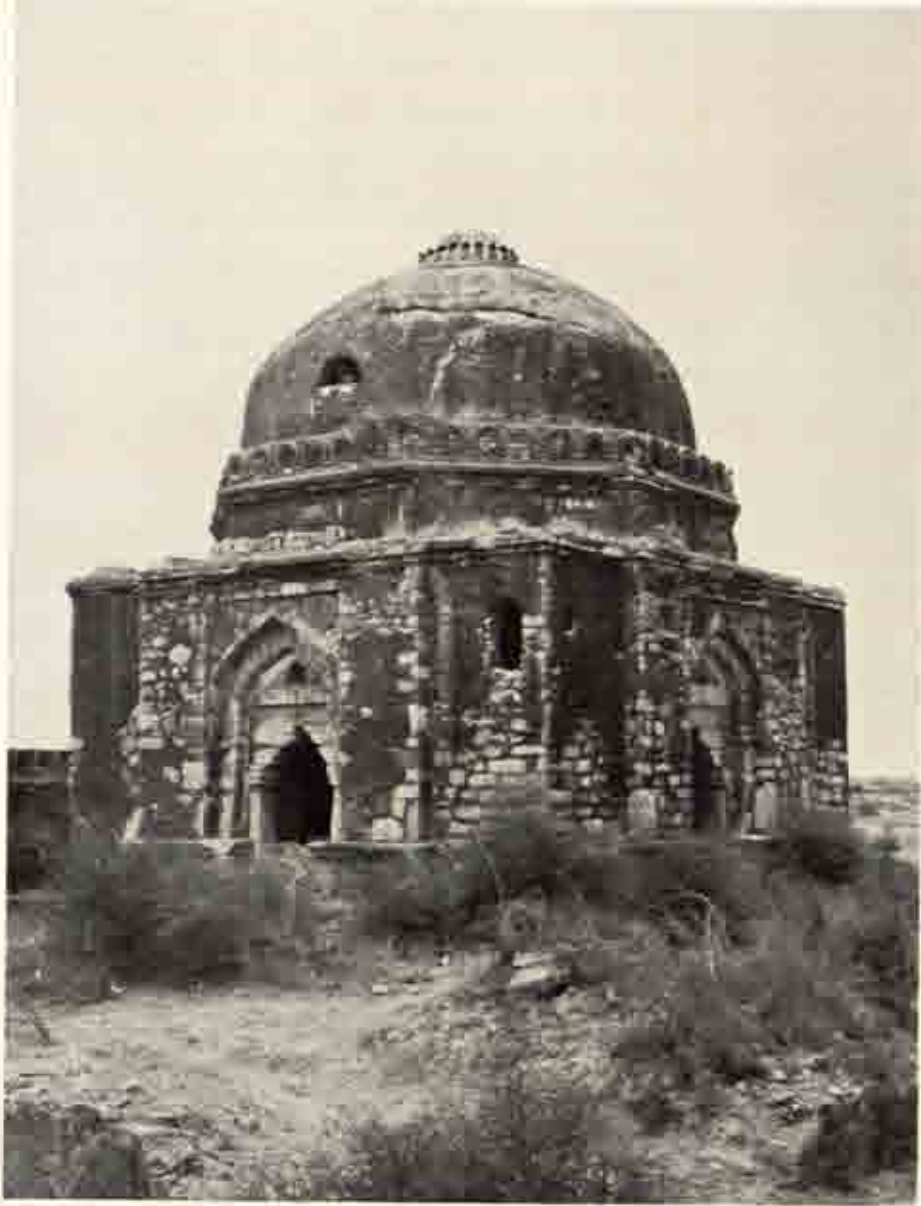
b T.30 墓建筑 南面と東面



c T.31 墓建筑 南面と西面



d T.32 墓建筑 南面と東面



a T.33 高建築 南面と東面



b T.33 南左 内部西北隅

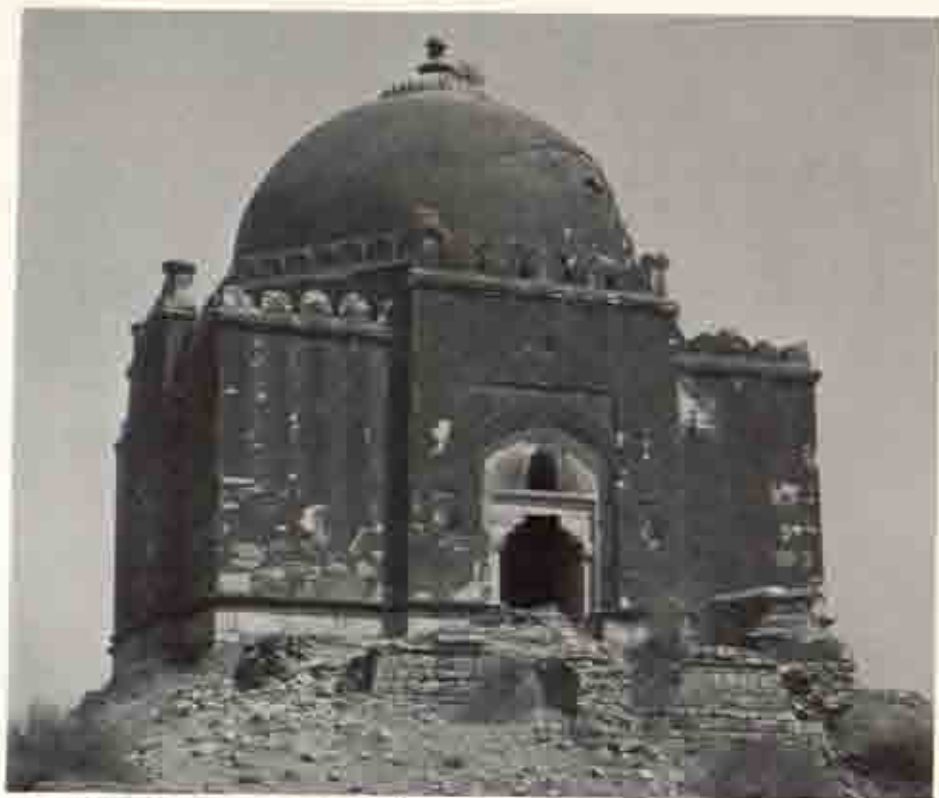


c T.34 高建築 南面と東面



d T.31 同左 内部西側





a T.35 マーデー・マラーイーの岩の上の墓 南面



b T.36 墓建築 南面と東面



c T.37 墓建築



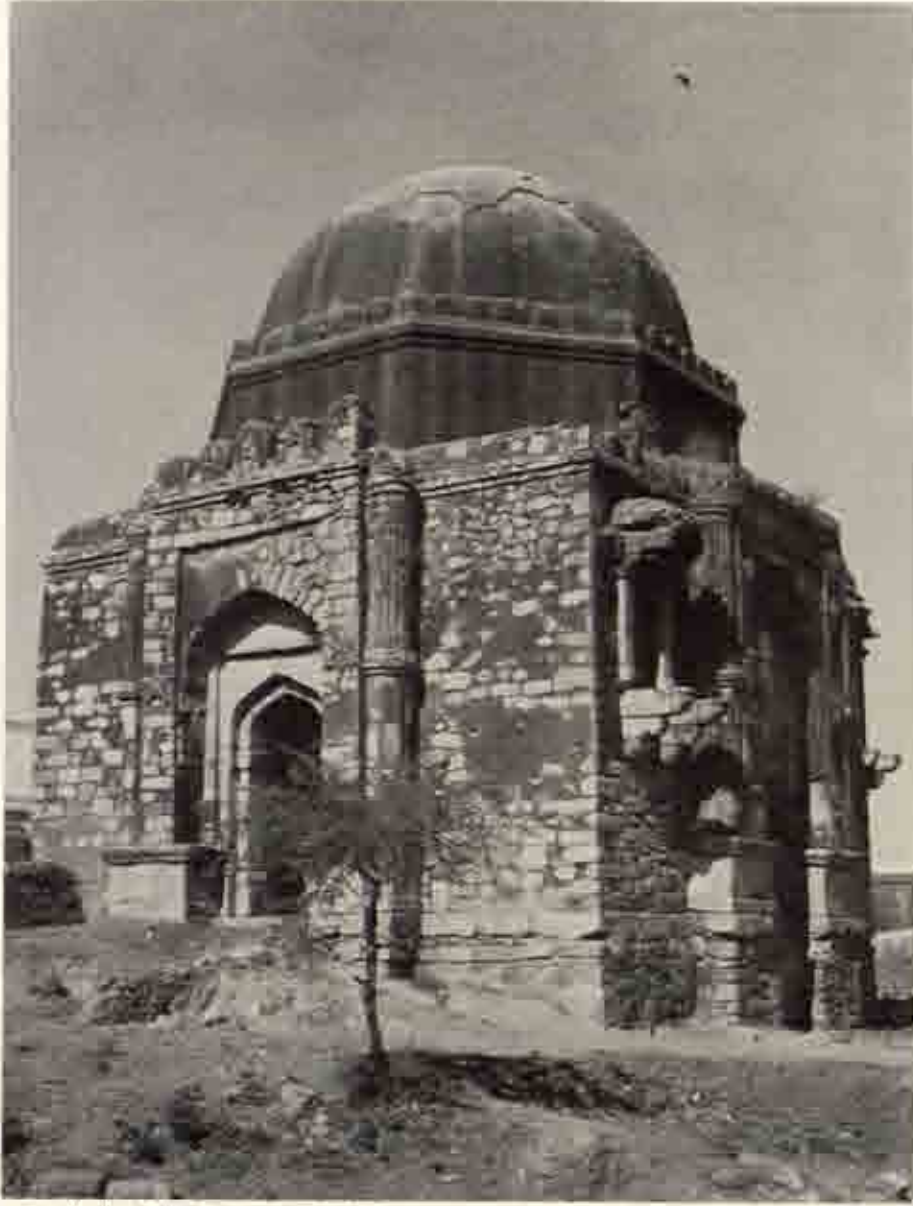
d T.38 墓建築(?) 北面と西面



e T.39 墓建築 南面と東面



f T.40 墓建築 南面と西面



a T.41 蘇美業(2) 南面と東面



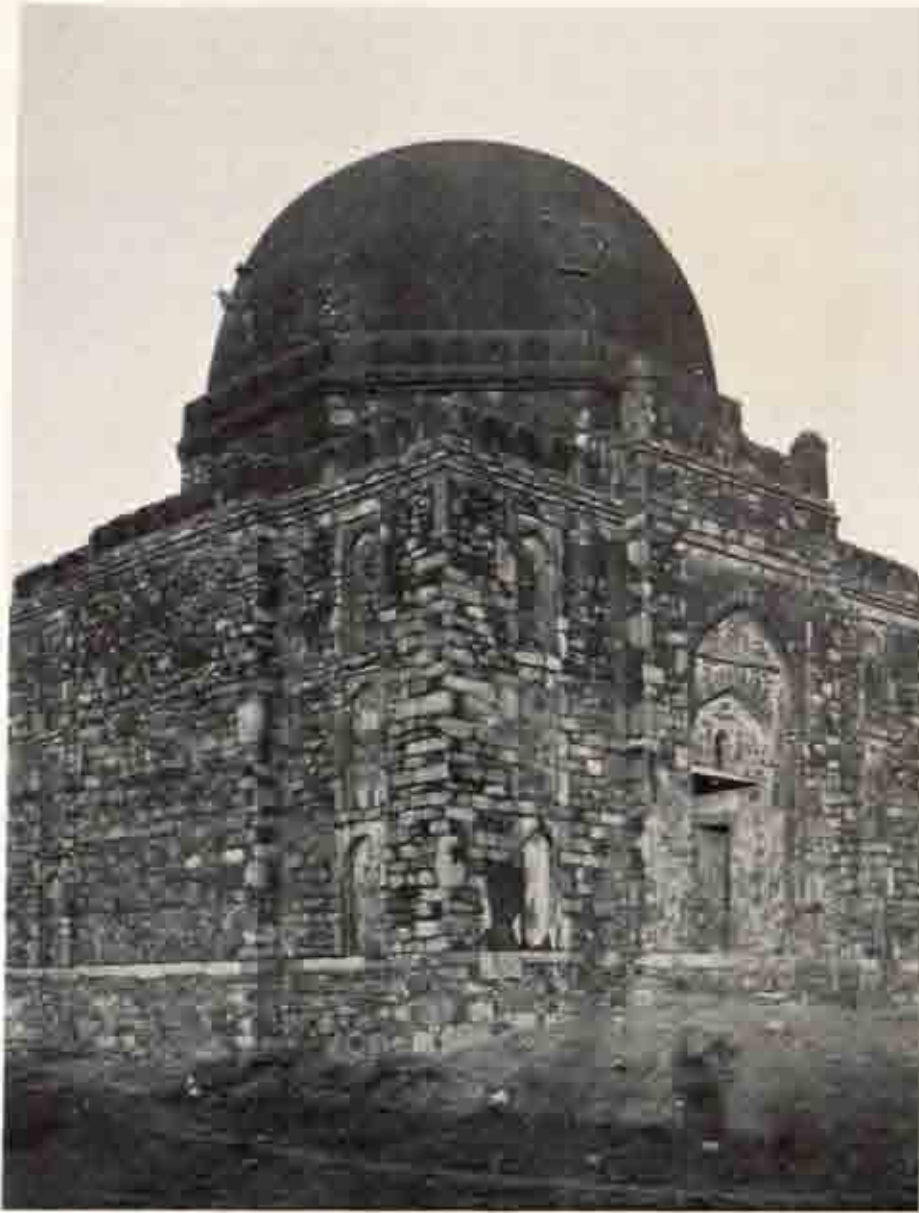
b T.42 フォンテーナ・カマラ・ダ・バシロ 東面



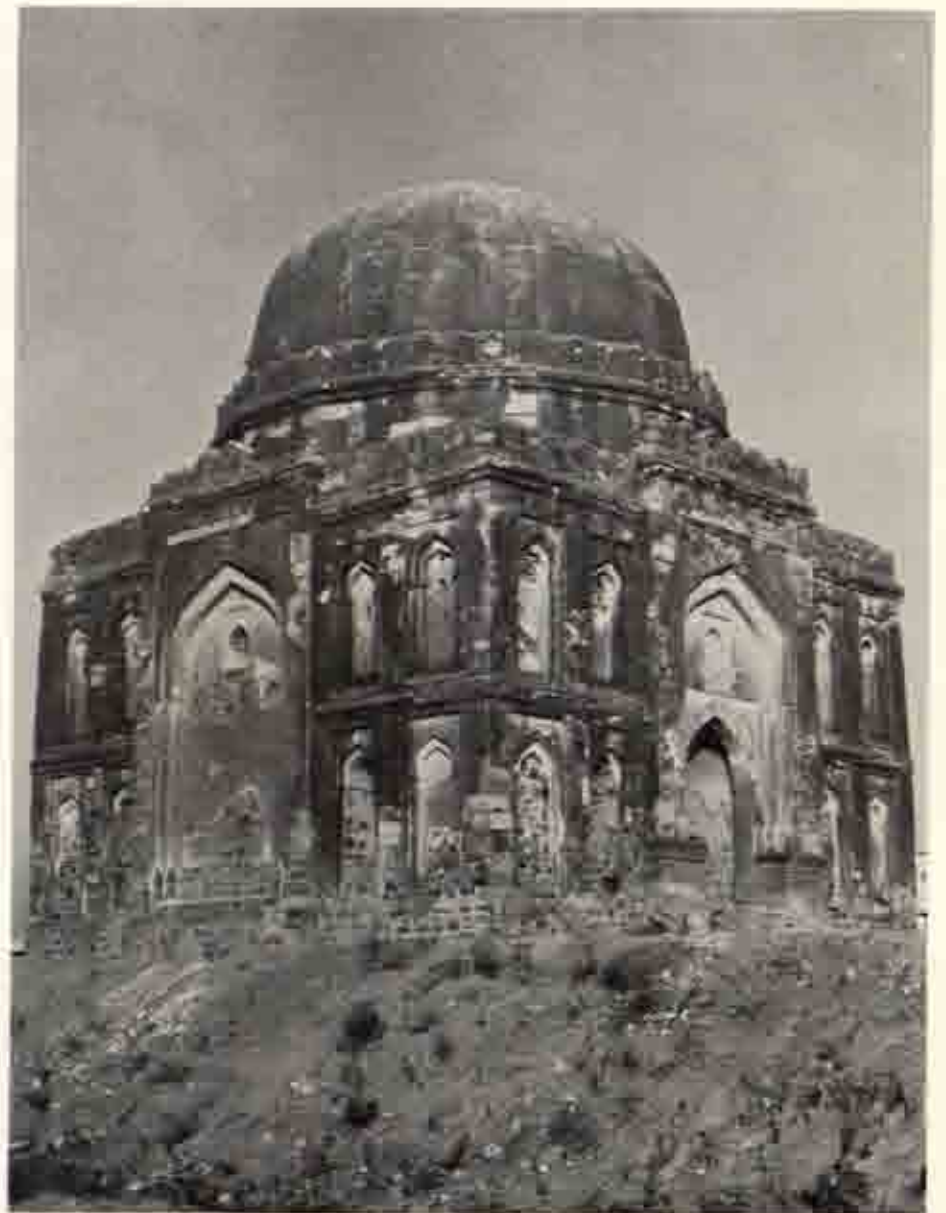
c T.43 蘇美業 南面と東面



d T.44 同左 内部自南隅



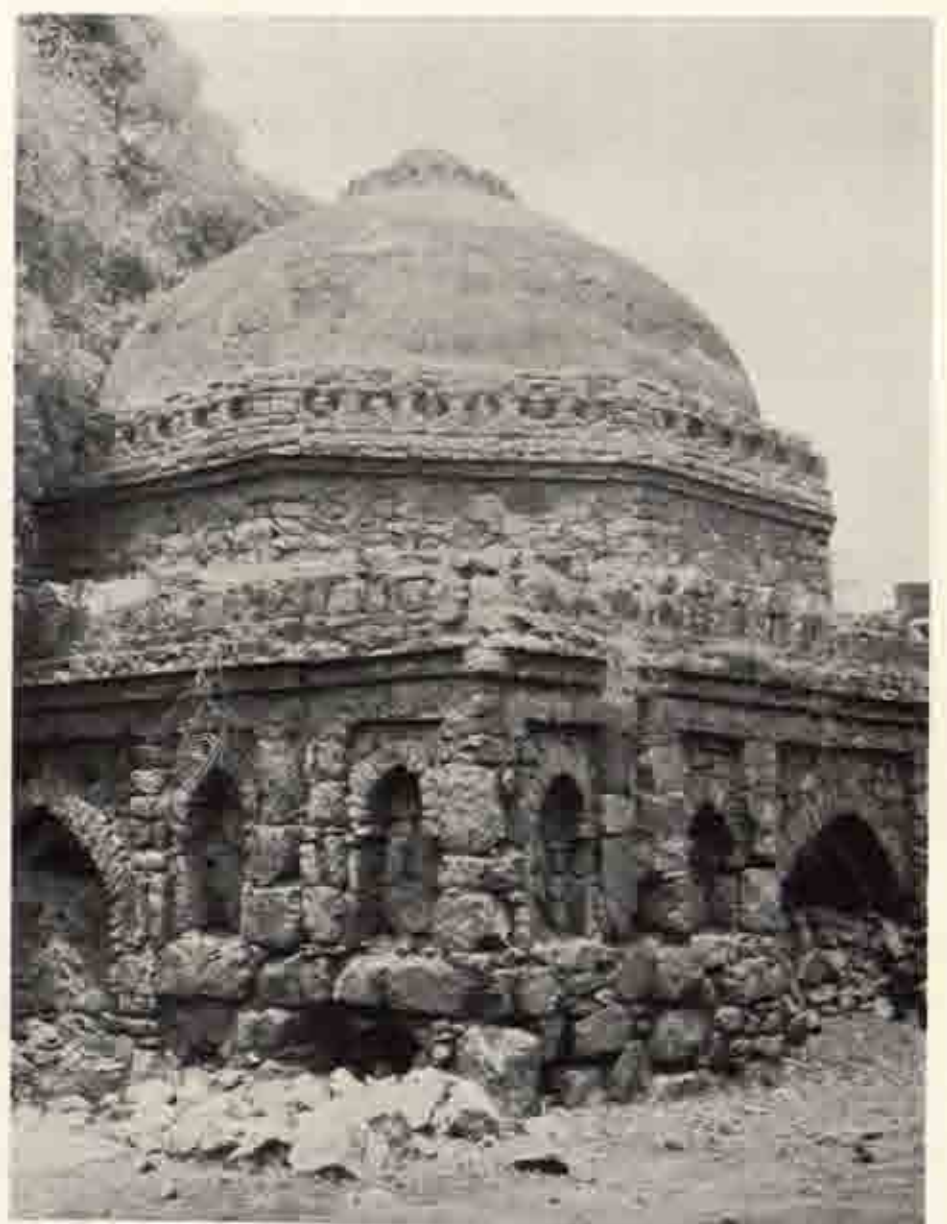
a. T. 44 墓建築 南面と西面



b. T. 45 ガーレン・カーク・カ・ダシベツド 南面と西面



c. T. 46 墓建築 南面と東面



d. T. 47 墓建築 南面と西面



a. T.48 マジールブル・カ・アンバッド、同建築とその周辺の遺跡群



b. T.48 同上 南面と西面



c. T.49 家建築 南面と東面



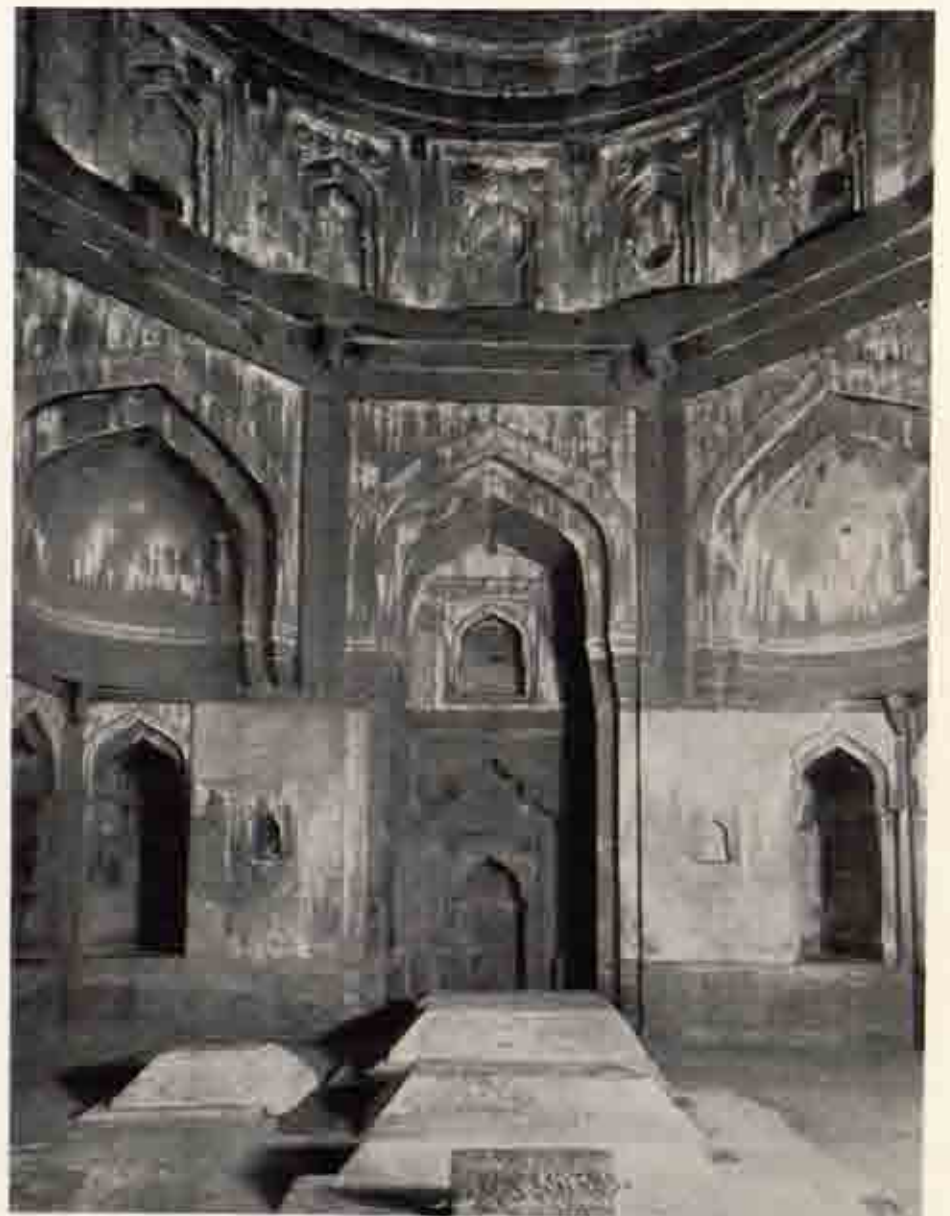
a T.50 モーナー・バーズ・カ・ブンパ'd 南面と西面



b T.50 同左 内部西側とドーム天井



c T.51 アンシュ・アシュパ'd 南面と西面



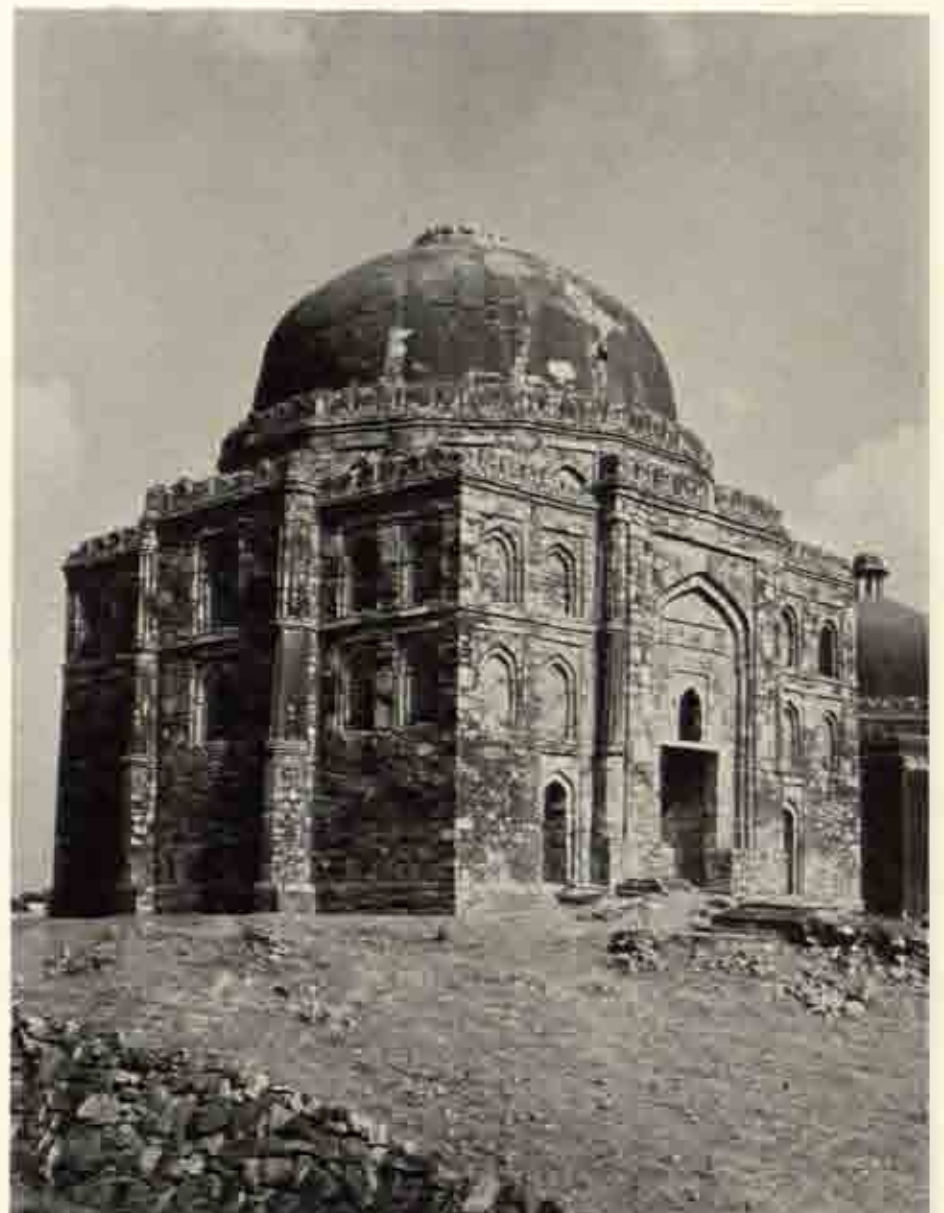
d T.51 同左 内部西側



a T.52 高建築 同建物と附属礼拝堂 西南より



b T.52 同上 南面と西面



c T.53 高建築 南面と西面



a T.54 バラークハーン・カマクマッド 南面と西面



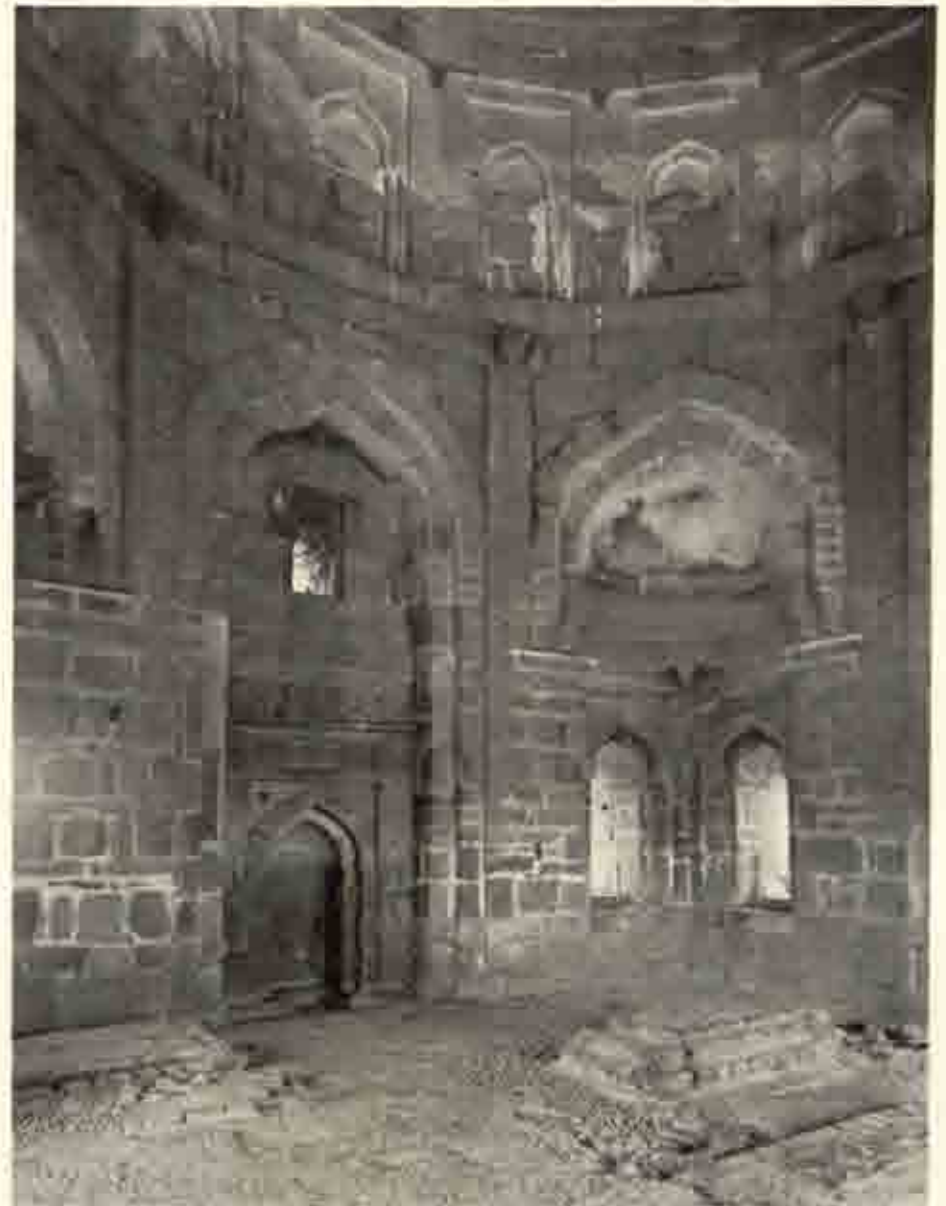
b T.54 同上 内部西北隅



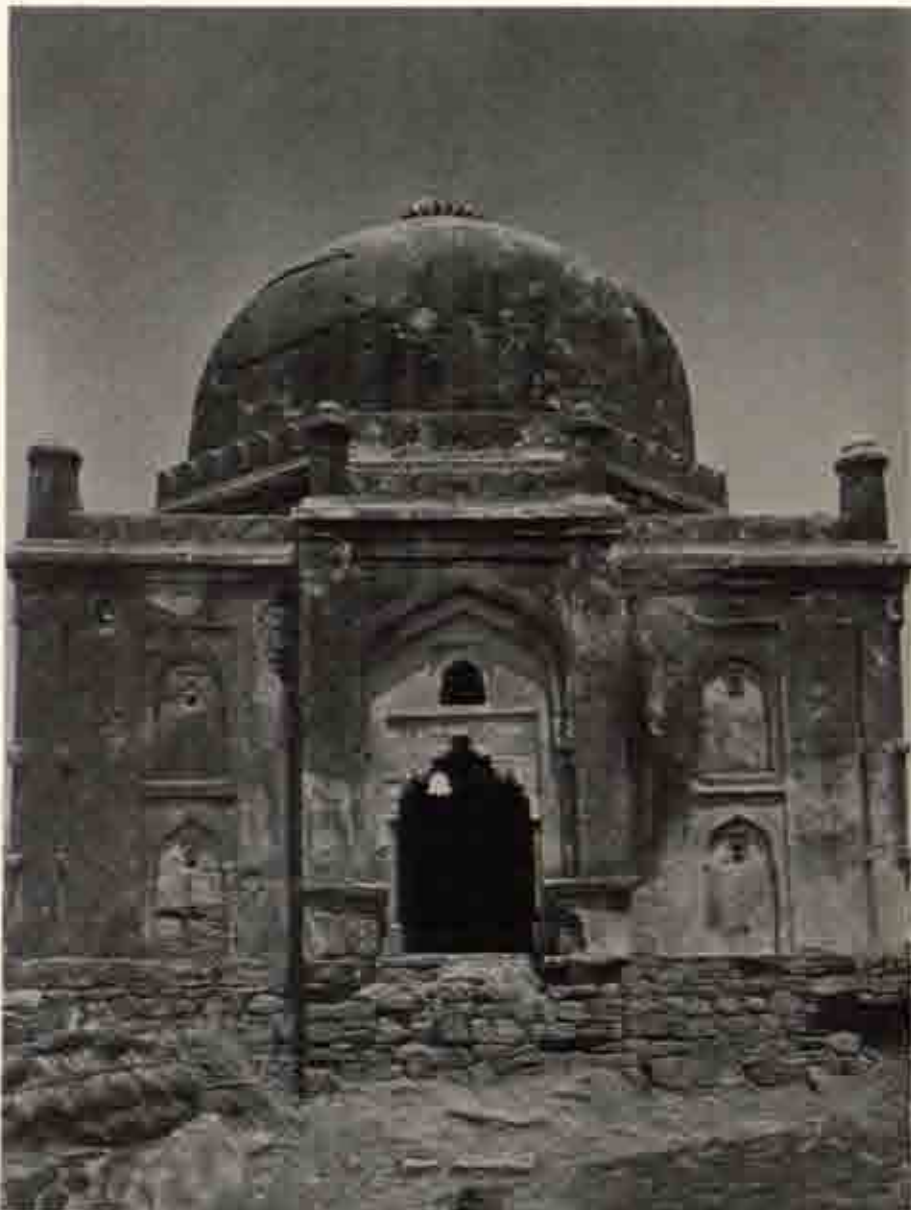
c T.54 同上 ミヘラーブ



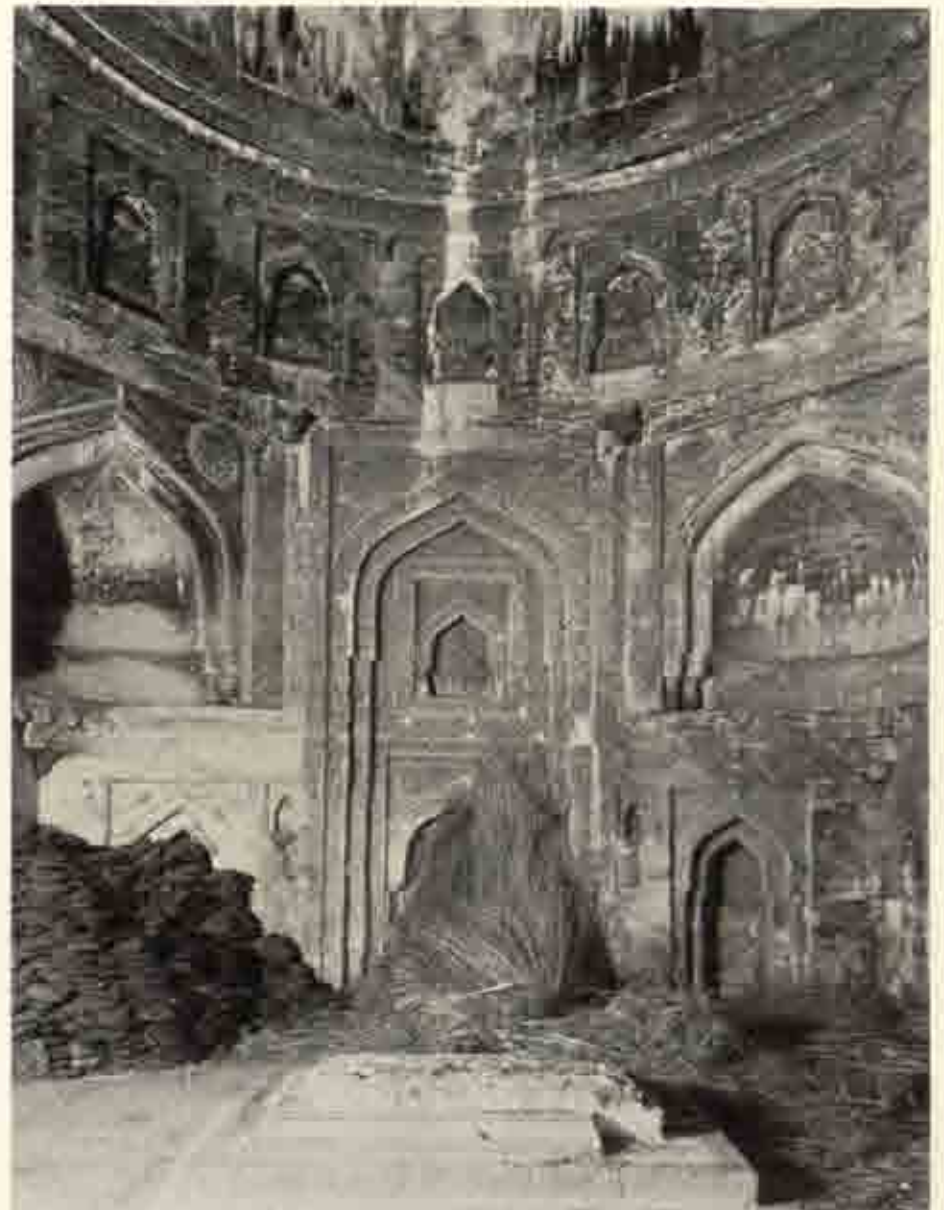
a T.55 シュイフ・シハ・ブッディーン・ターシ・ハーンの墓 南面と西面



b T.55 同左 内部西側

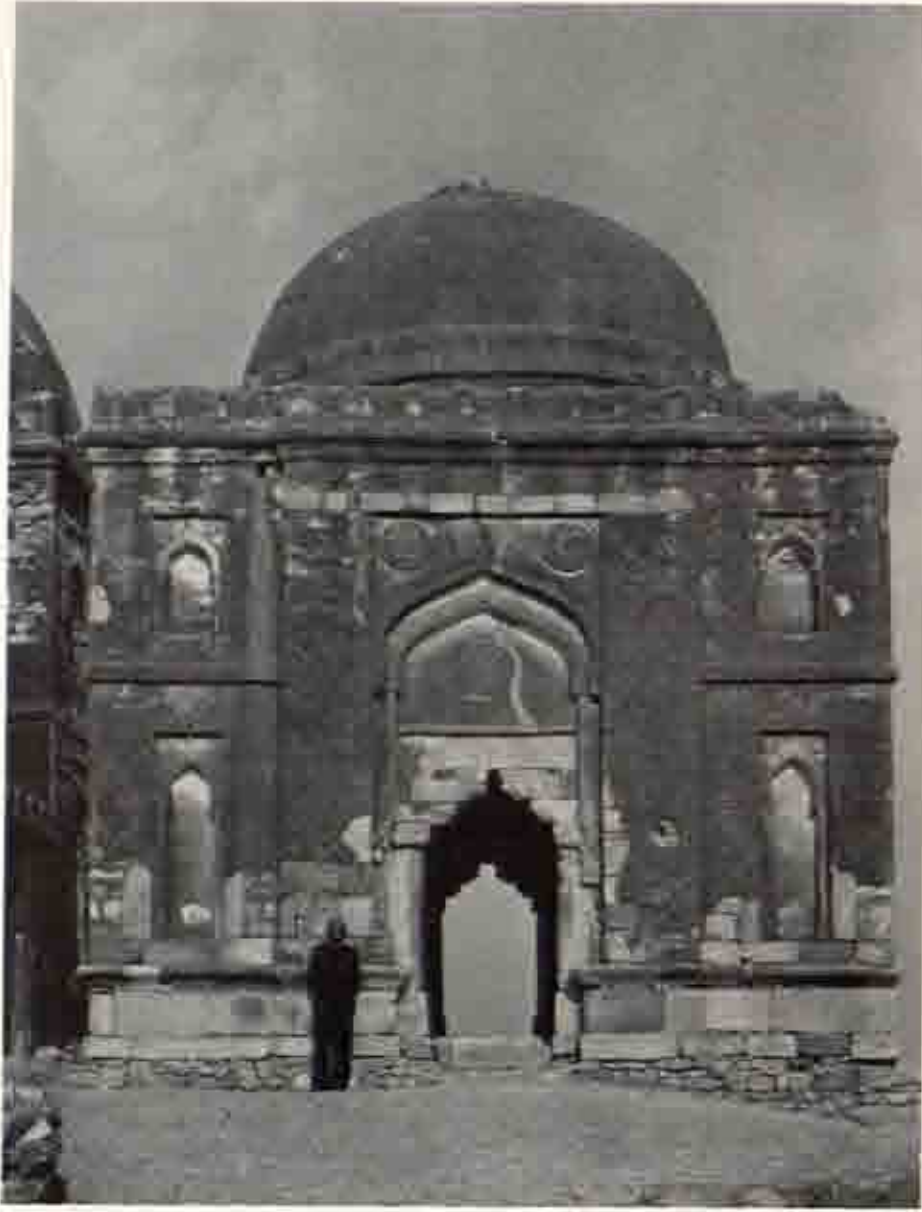


c T.56 墓建築 南面

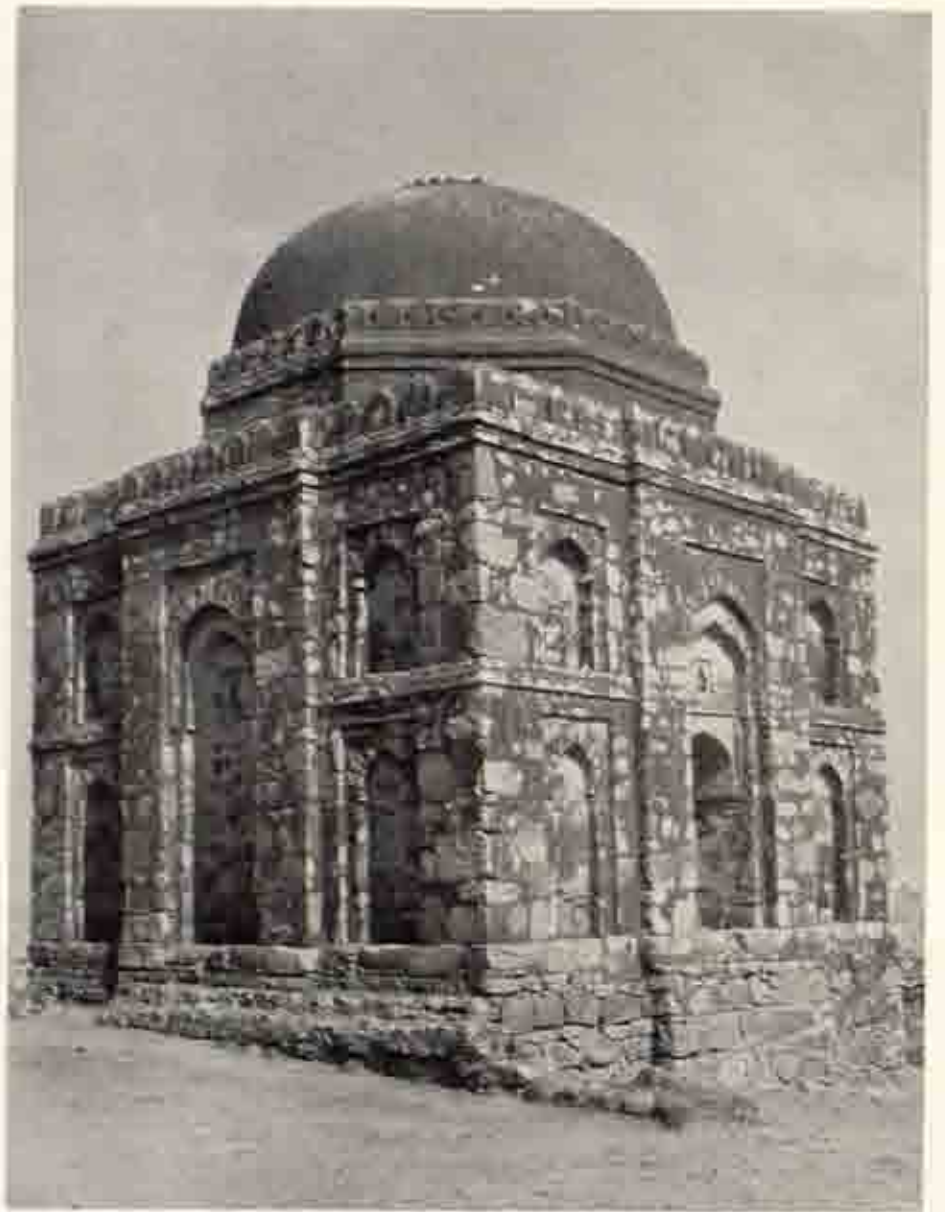


d T.56 同左 内部西側





a T.57 墓建築 南面



b T.58 墓建築 南面と西面



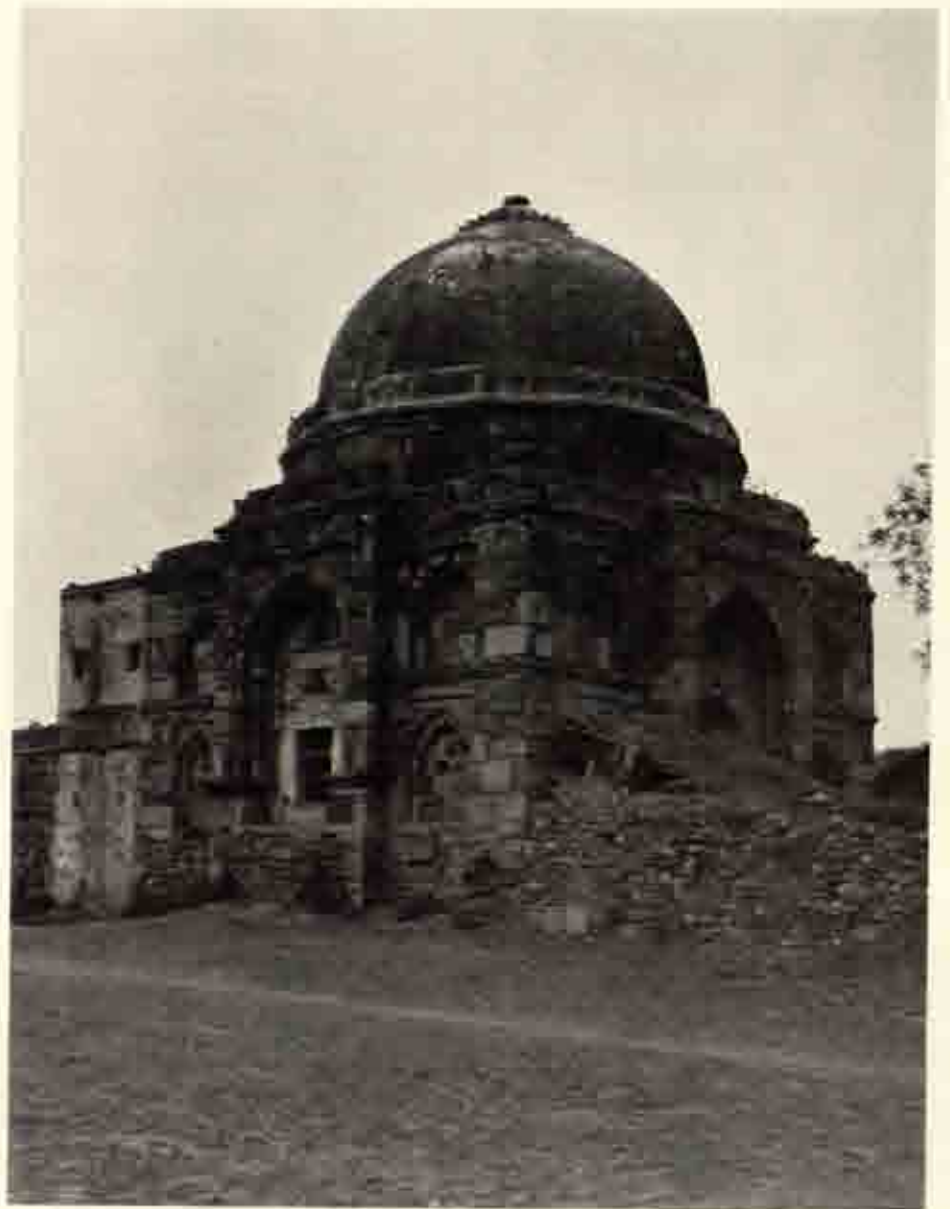
c T.59 ブーゼー・カブ・カ・ブ・パッド 南面と西面



d T.59 同左 内部西側



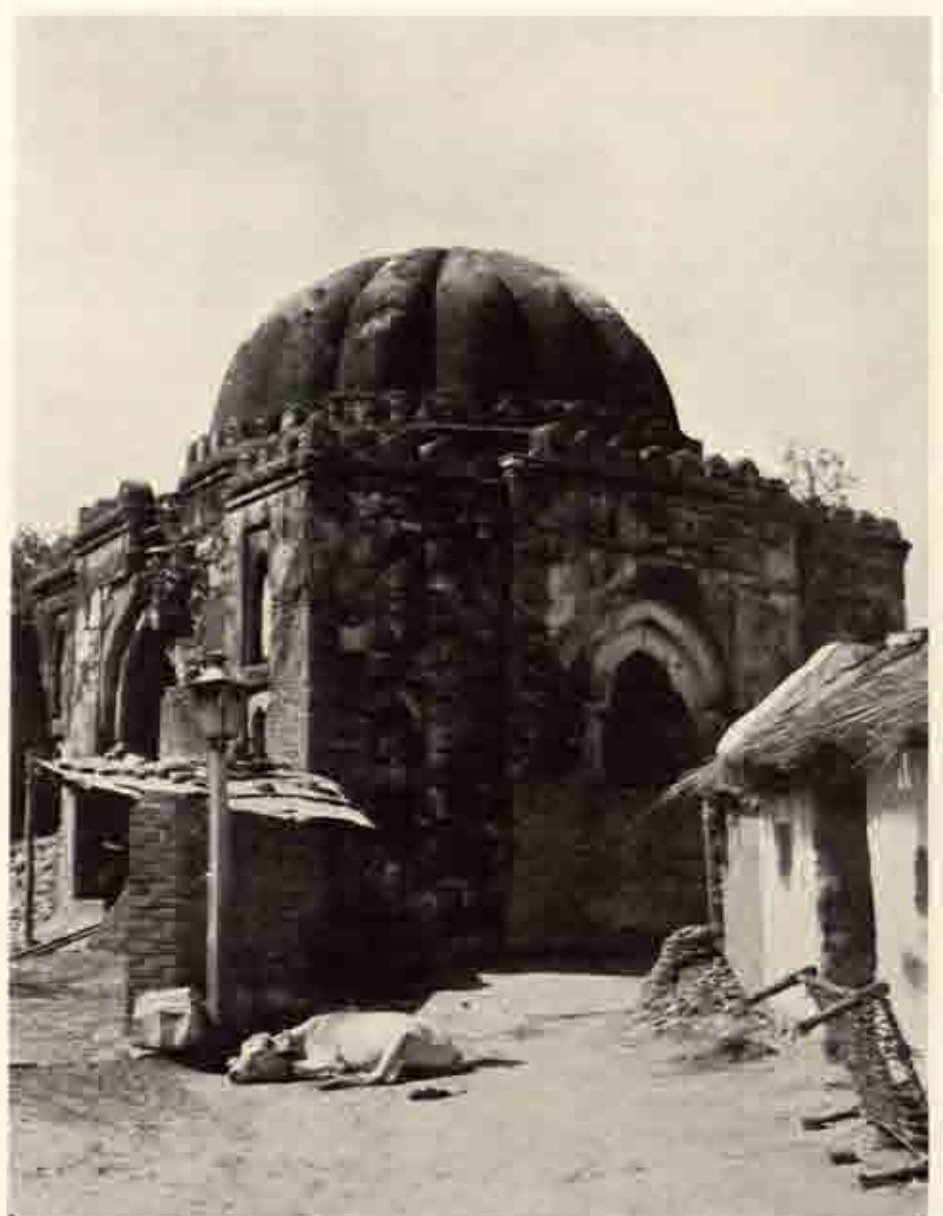
a T. 60 墓建筑 南面之西面



b T. 61 墓建筑 西面之南面



c T. 62 墓建筑 南面之东面



d T. 63 墓建筑 东面之北面



a T. 64 墓建筑 南面之西面



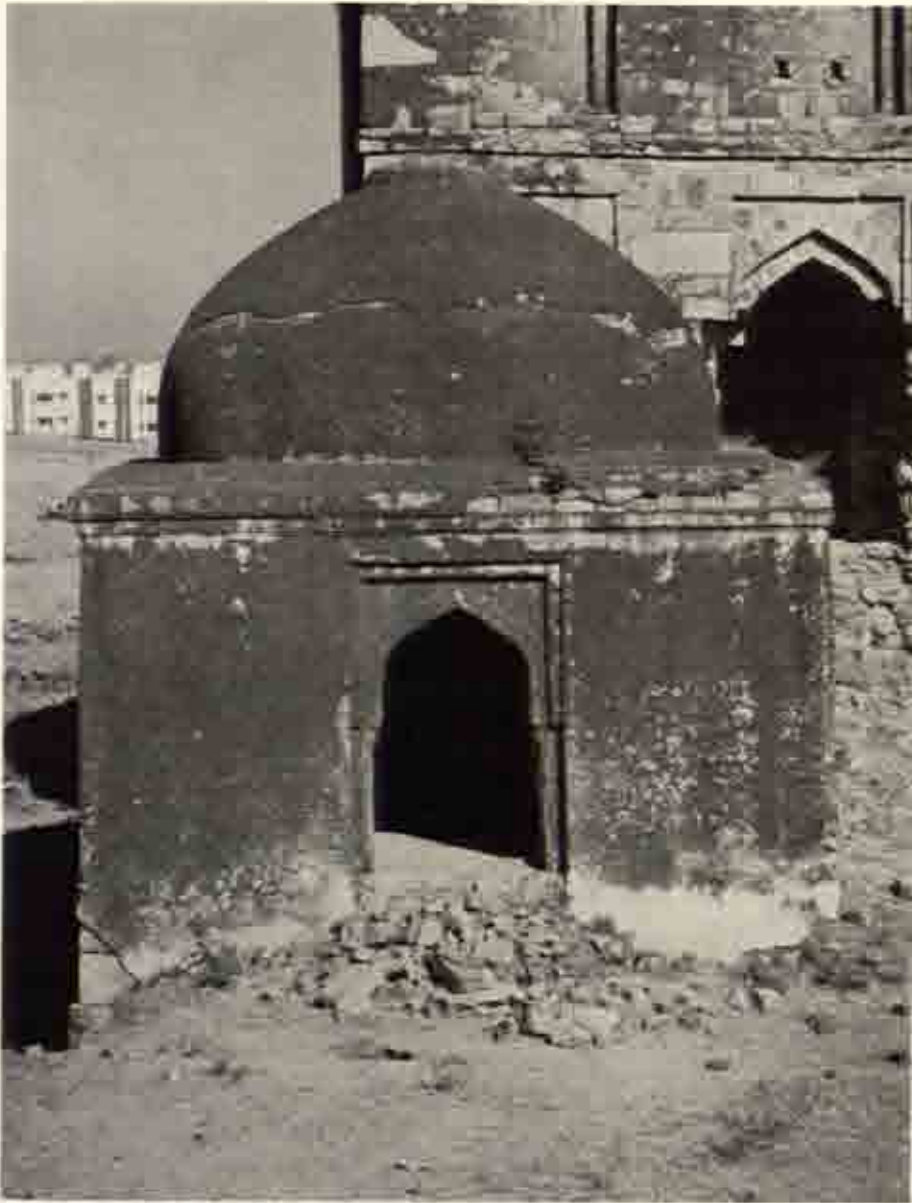
b T. 64 同左 内部西北隅



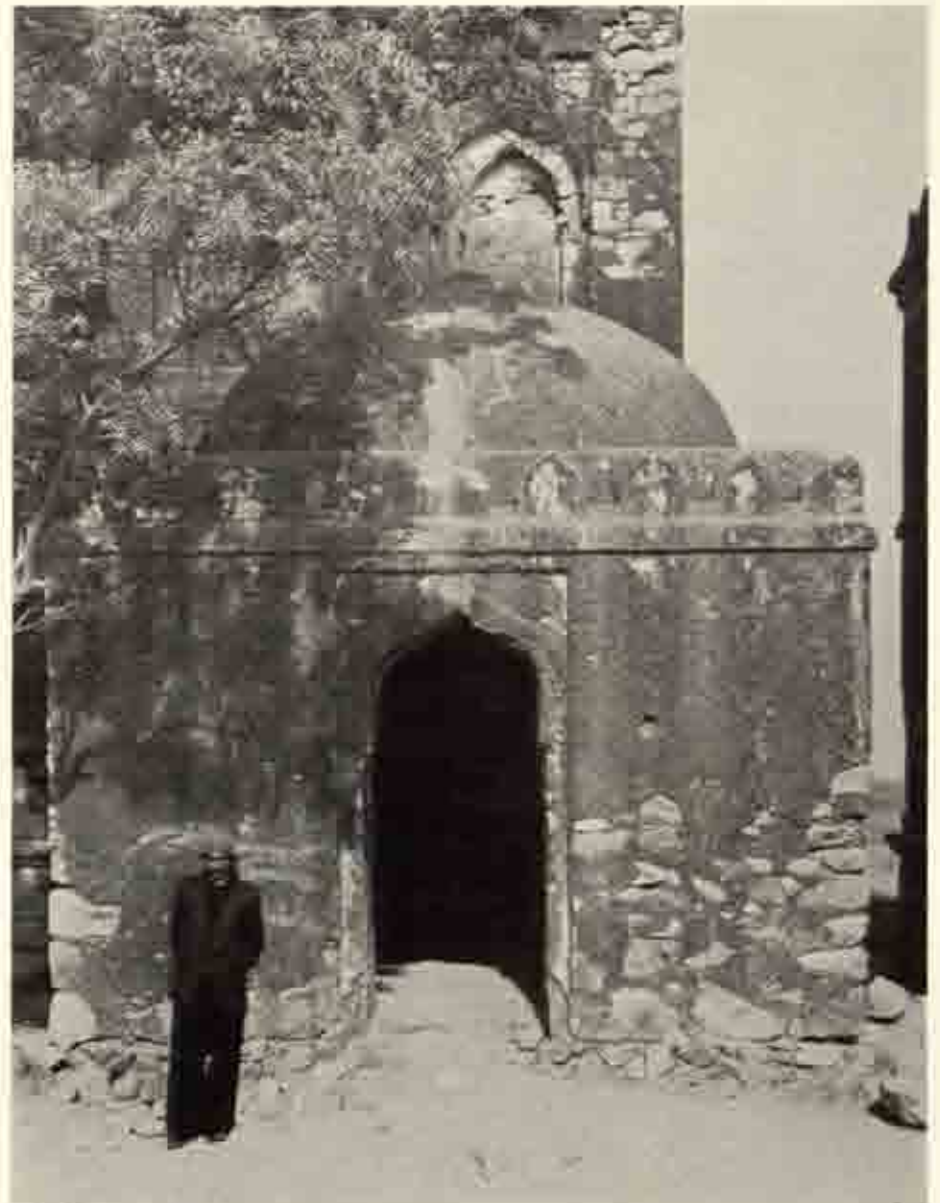
c T. 65 墓建筑 南面



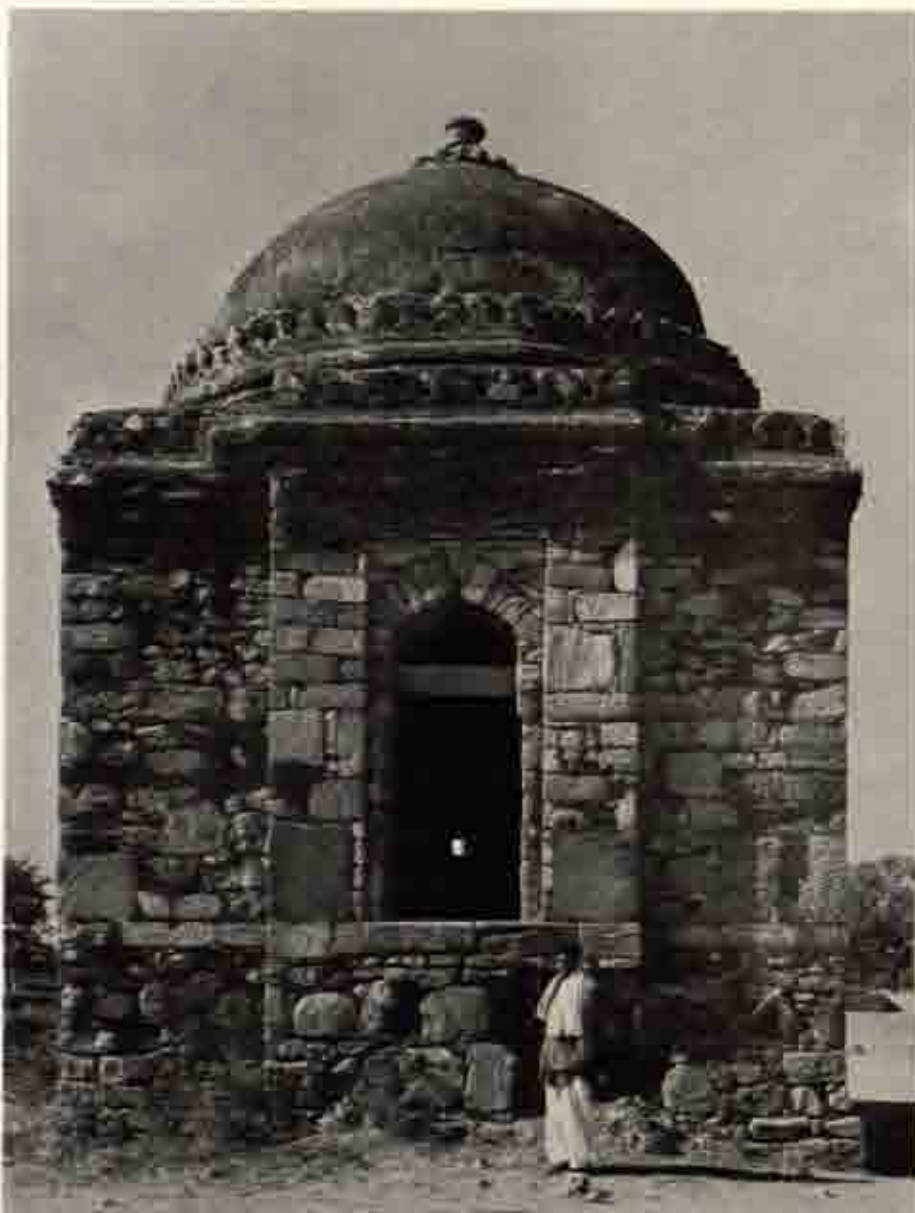
d T. 66 墓建筑(?) 南面



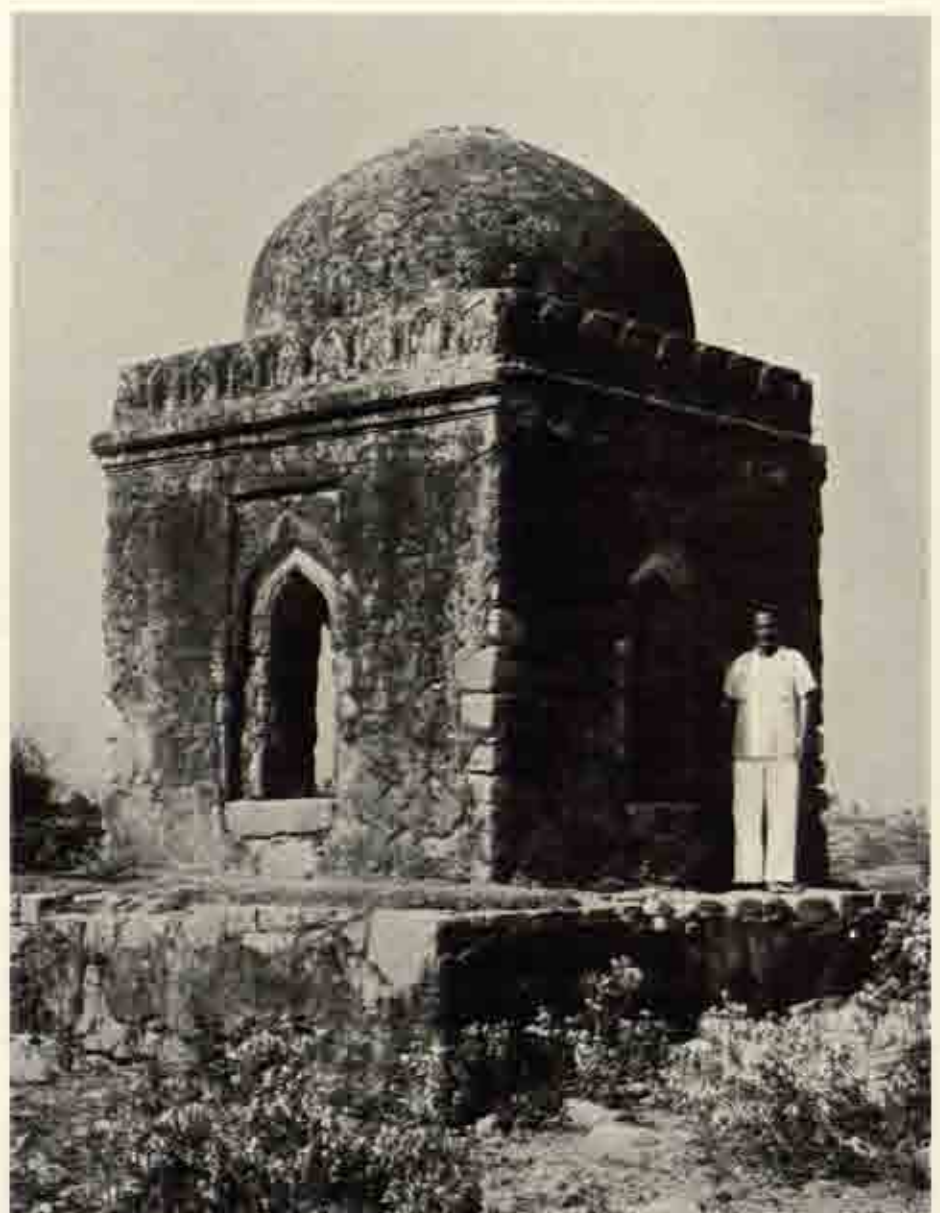
a T.67 墓建築 南面



b T.68 墓建築 (?) 南面



c T.69 イードガ-ワ-ラ-グンバ-ド 東面



d T.70 墓建築 東面と北面



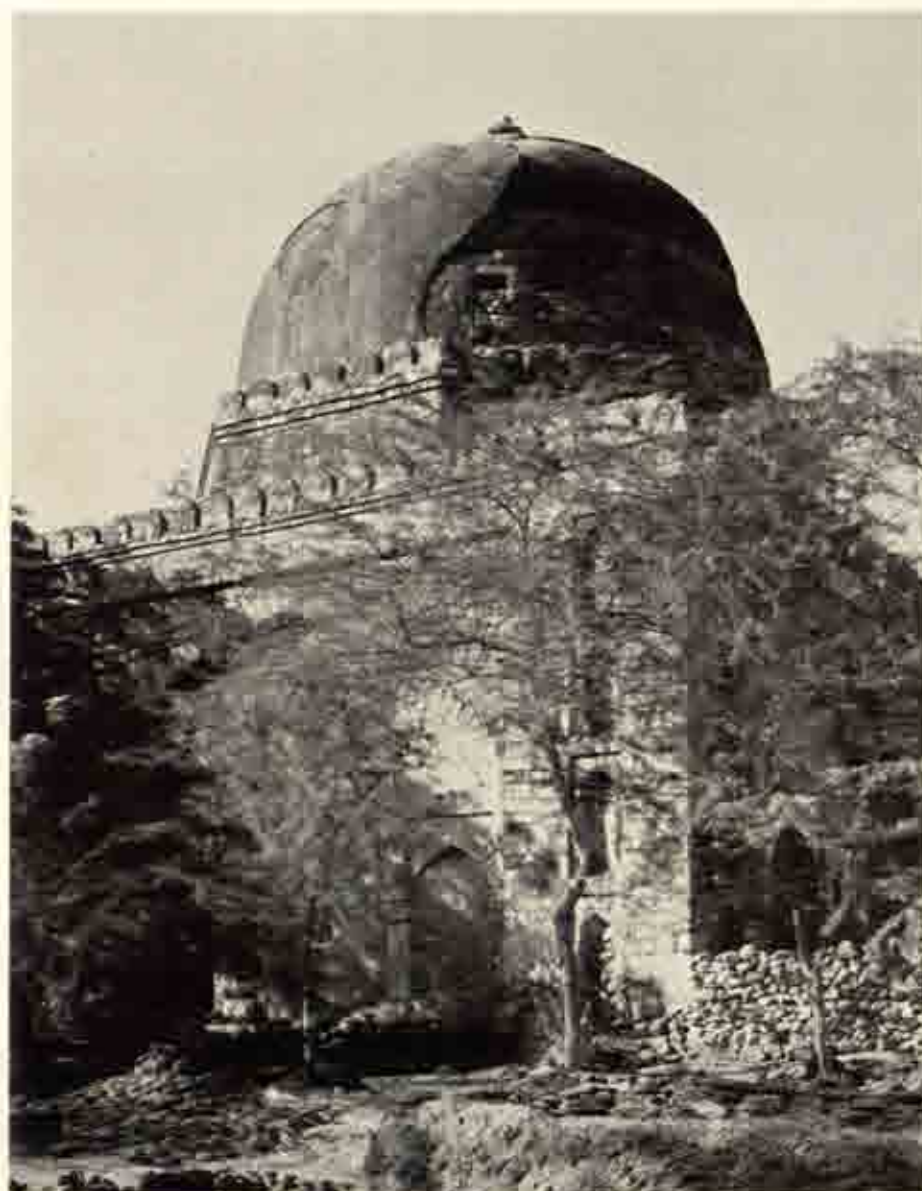
a T.71 エヘズマドブルのティーツーブルジー 東面と北面



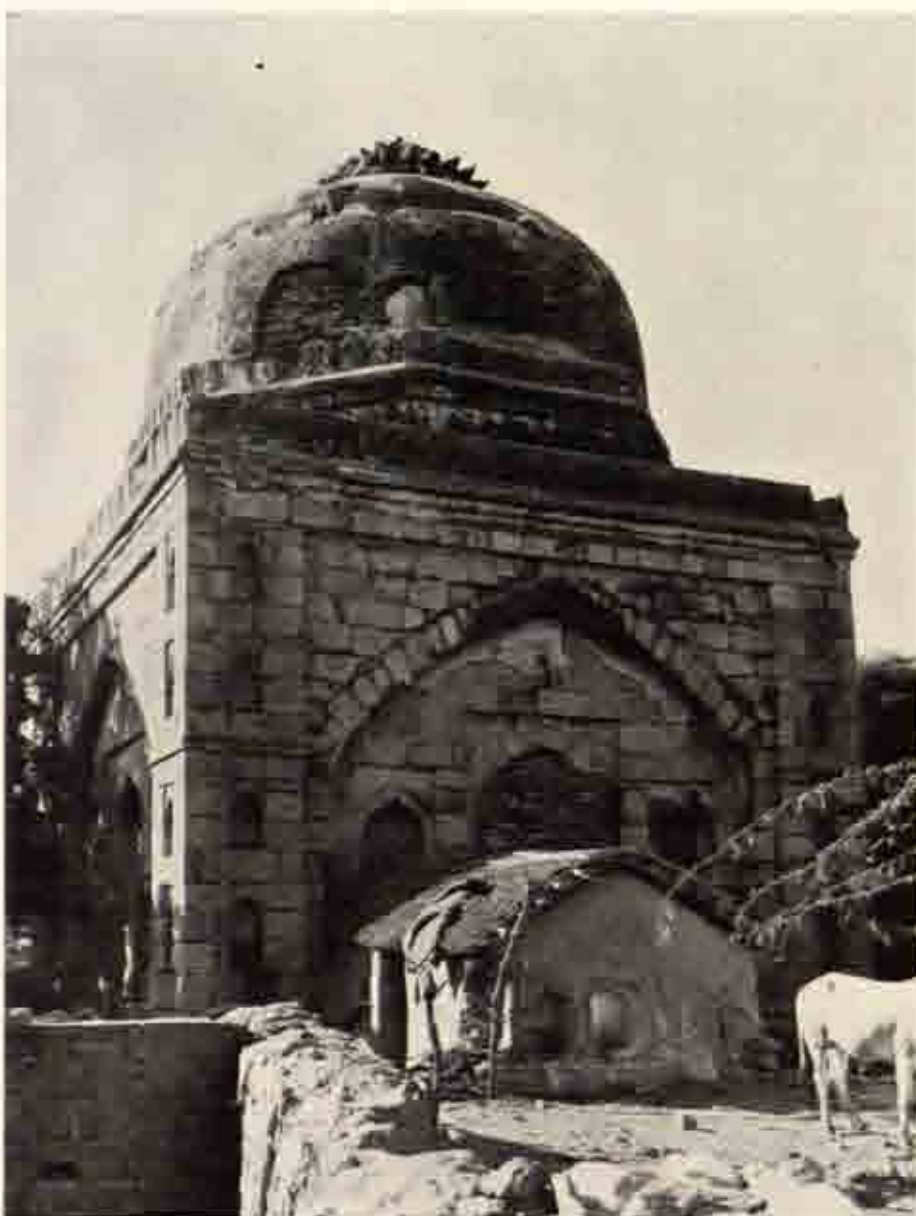
b T.72 城壁築 南面



a T.73 グリーンポールのバーカ・カンパー 東面



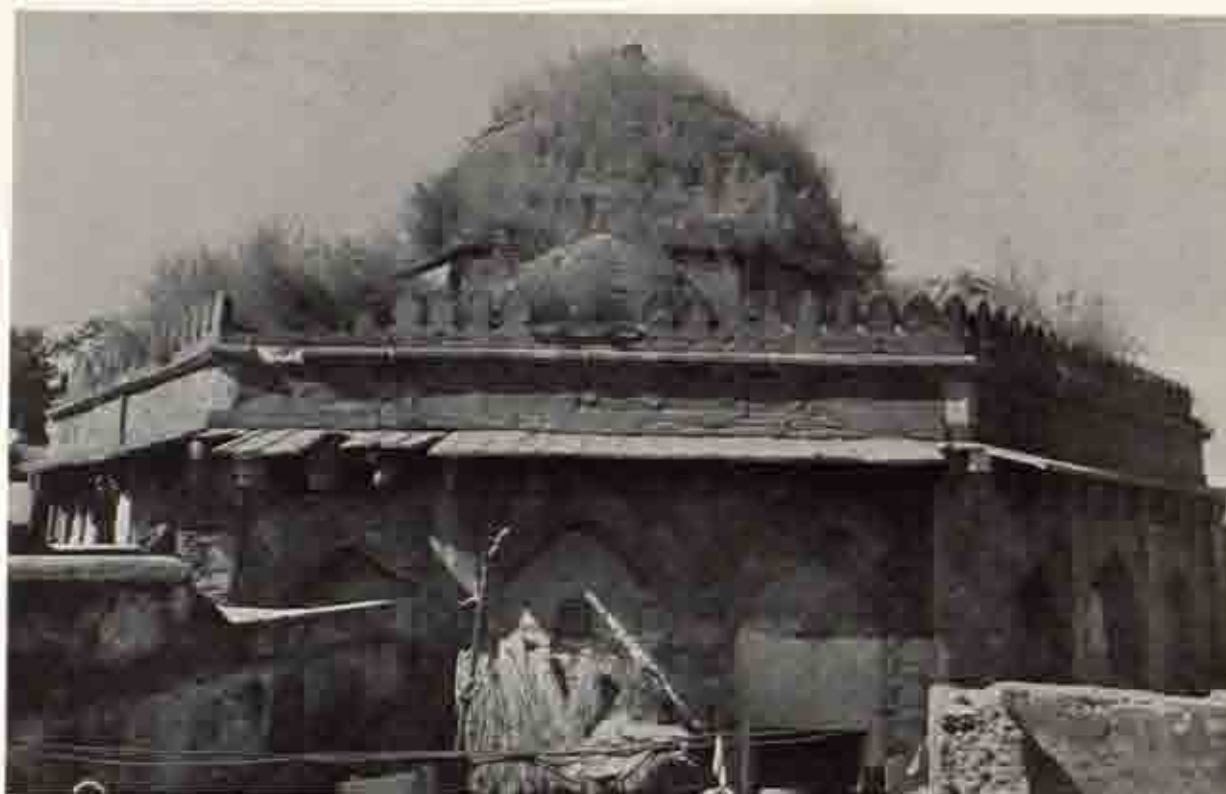
b T.74 墓建築 南面と東面



c T.75 墓建築 南面



d T.76 祠堂 西面



a T.76 ハーネ・ジャハーン・タイランガネーの墓 東面



b T.76 同上 東北面 部分



c T.76 同上 内部南側



a. T.77 ムバーラク・シャー・サイイドの墓 西面



b. T.77 同上 内部 東北の角



c. T.77 同上 門の南面 南面

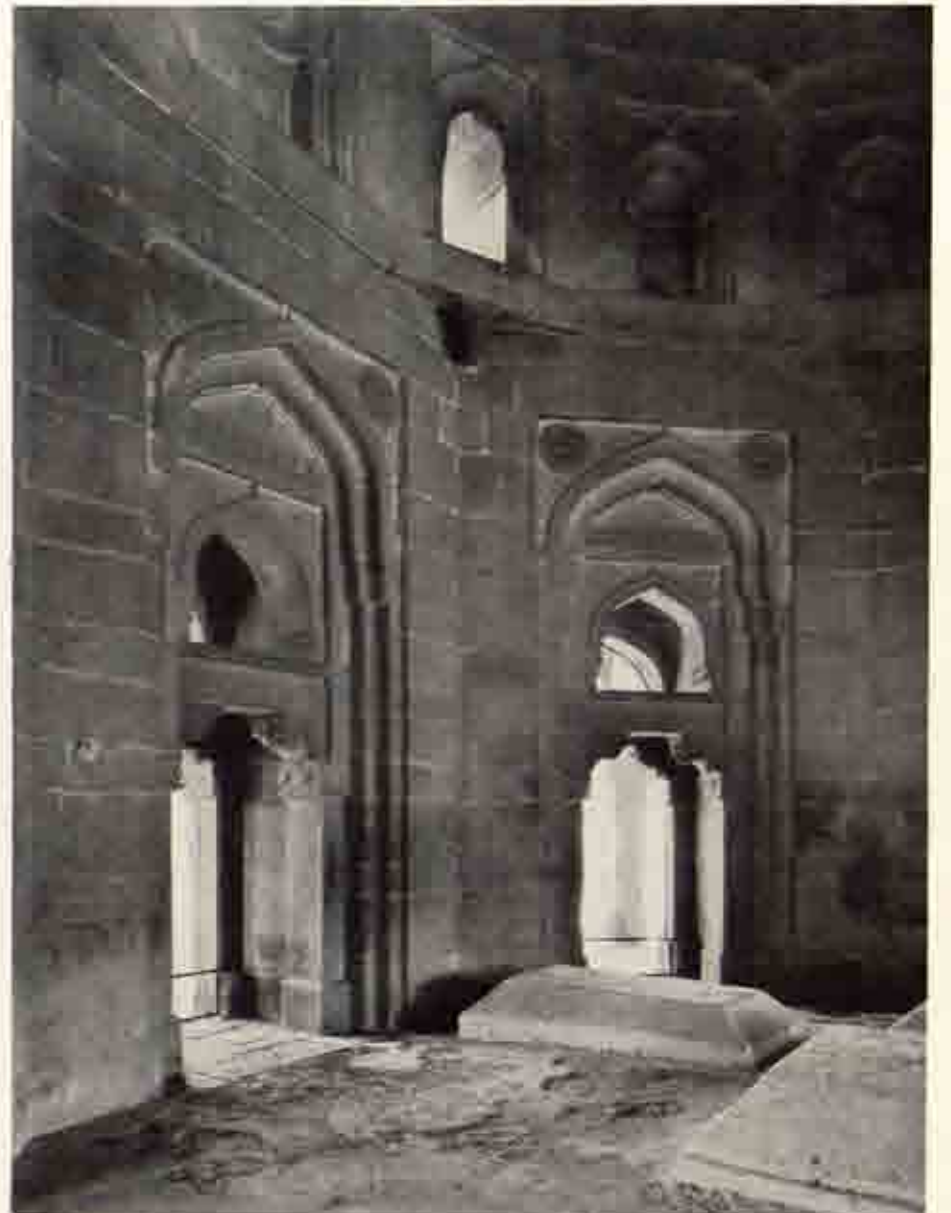




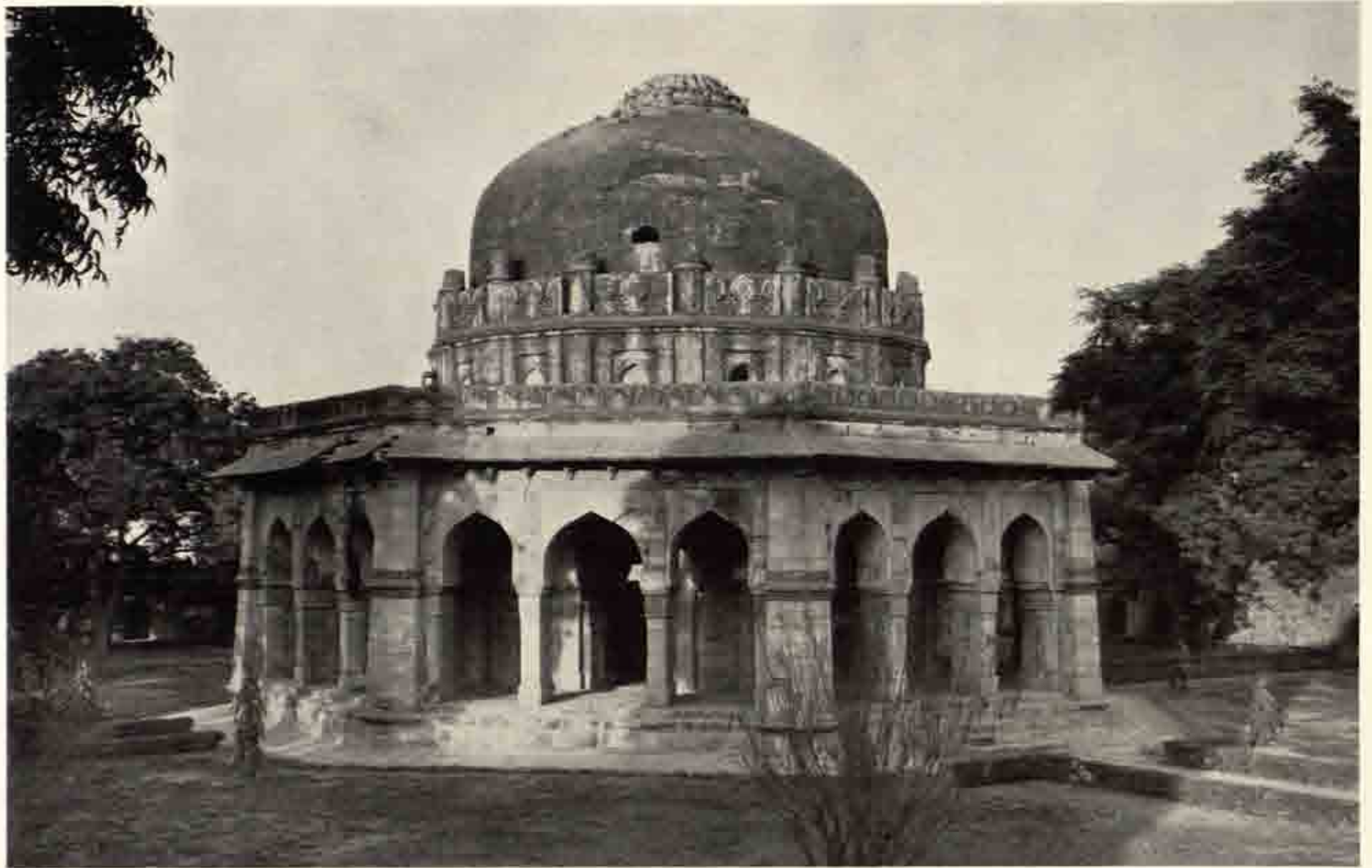
a. T.78 ムハンマド・シャー・サイイドの墓 外面



b. T.78 同上 廻廊の一部



c. T.78 同上 内部 北側と北北の龕



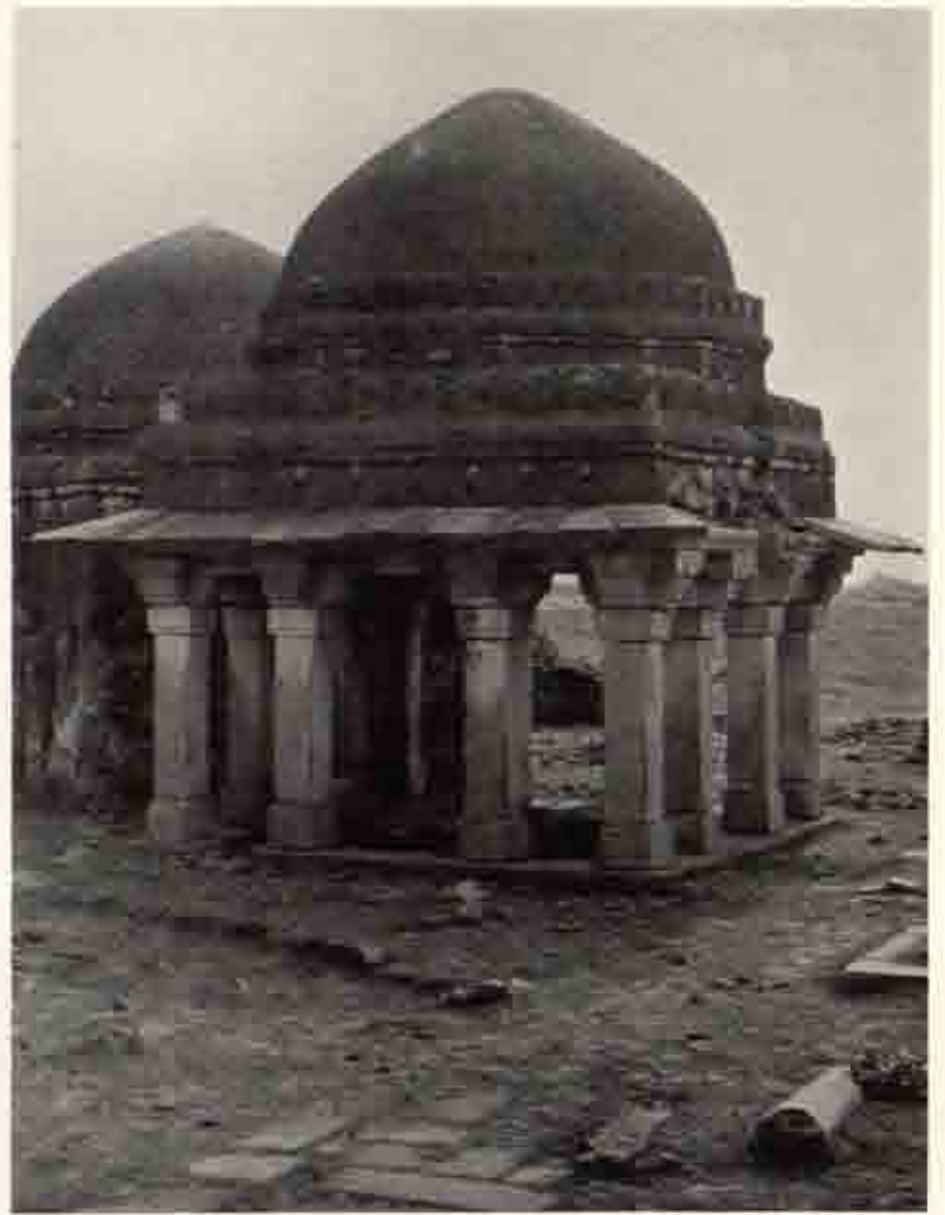
a. T.79 シカンドル・シャー・ロドディーの墓 南西面



b. T.79 同上 砦壁 南面



a T.80 蘇建築 北面



b T.81 蘇建築 北面と西面



c T.82 モヘンダロの十二本柱の墓 南面



d T.83 モヘンダロの十二本柱の墓 東面



a. T.84 墓建築 東面と南面



b. T.85 ターナー・サーヒブの墓 東面



c. T.86 シェイフ・サラフ・フッディーン・ダウラ・ウーシユの墓 南面と東面



d. T.87 墓建築 南面と西面



a T.88 ジェイサーズイヤーウッヂイーンルーミーの墓 南面と東面



b T.89 シャーヘアーラムの墓 東面と南面



c T.90 ジェイコバィベグムの墓 南面



d T.91 ジェイフ・タハルブッヂィーン・アーンタの墓 南面



a T.92 ムイフズッティ-ソ-パヘラ-ムの墓 東南より



b T.93 墓建築 西北より



c T.94 墓建築(?) 東北より



d T.95 墓建築(?) 東北より



a T.96 墓建築 南より



b T.97 墓建築 東南より



c T.98. ゴルフ・コースのバーラ・カンパー 東面



a T.99 カダムン・ン・サーフ 中央建物 前面



b T.99 同上 内部 重より

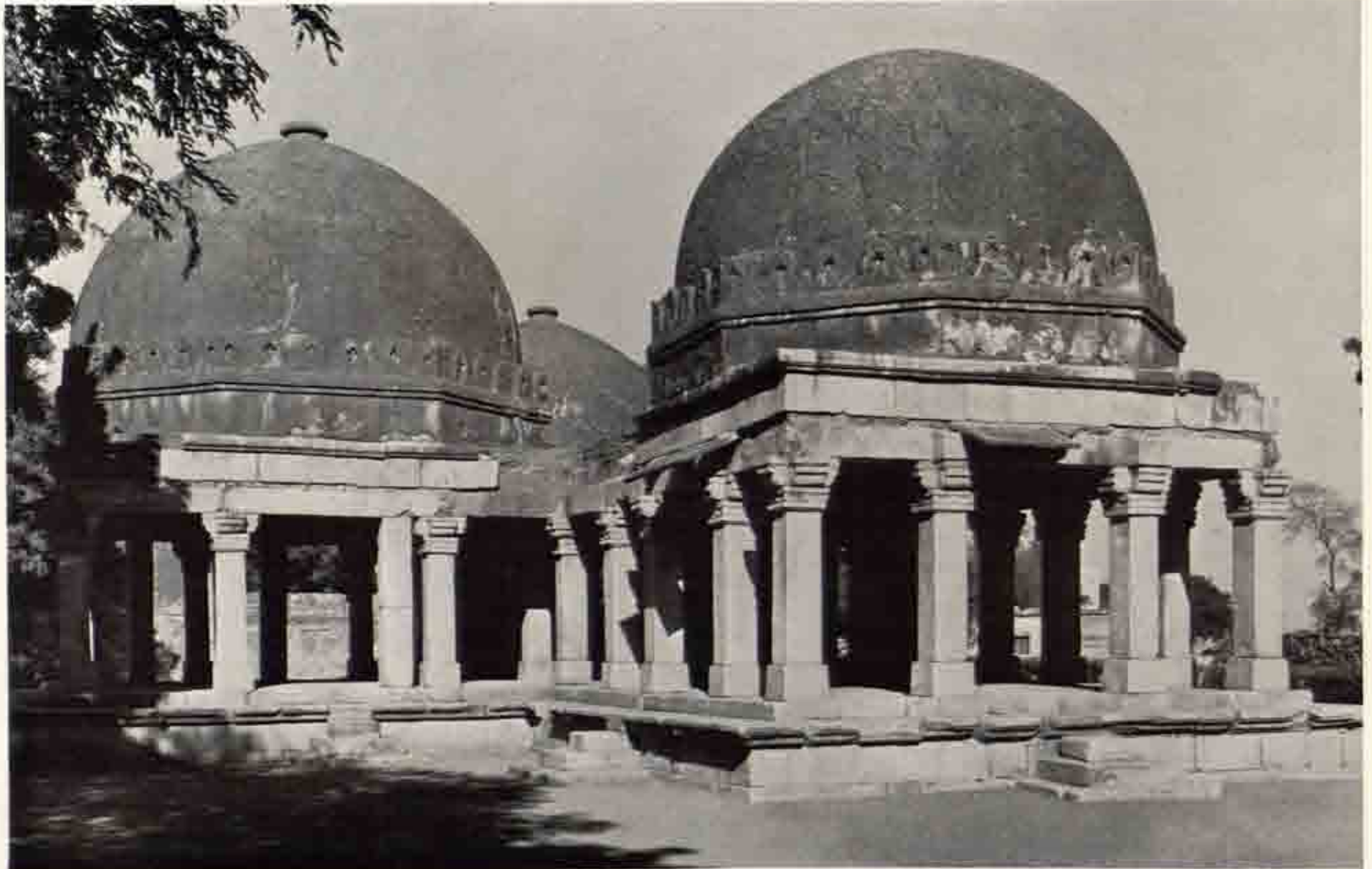


c T.99 同上 東北の十二本柱の部分 南側

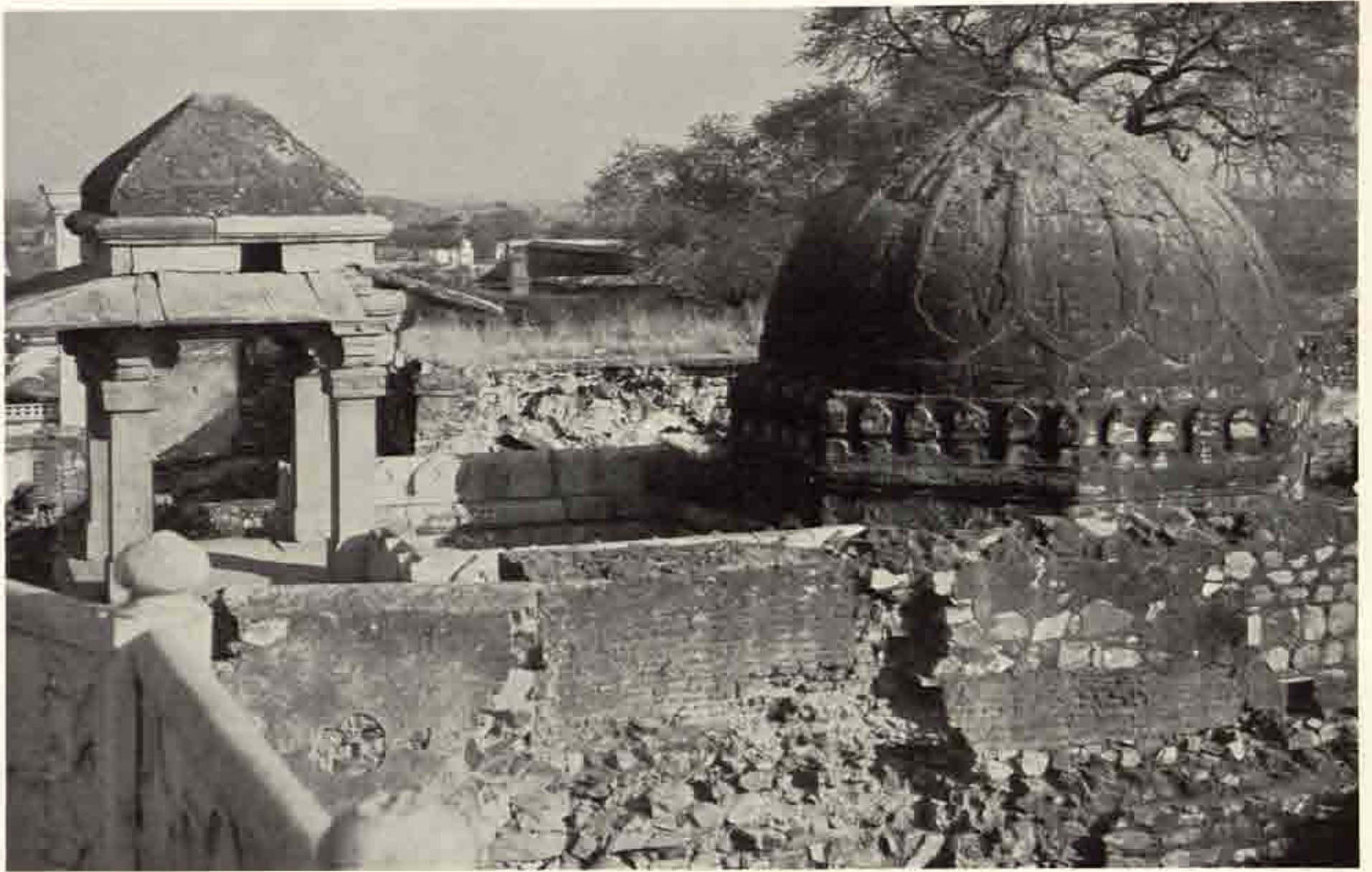




a T.100 ムリナー・マハールの宮 東より



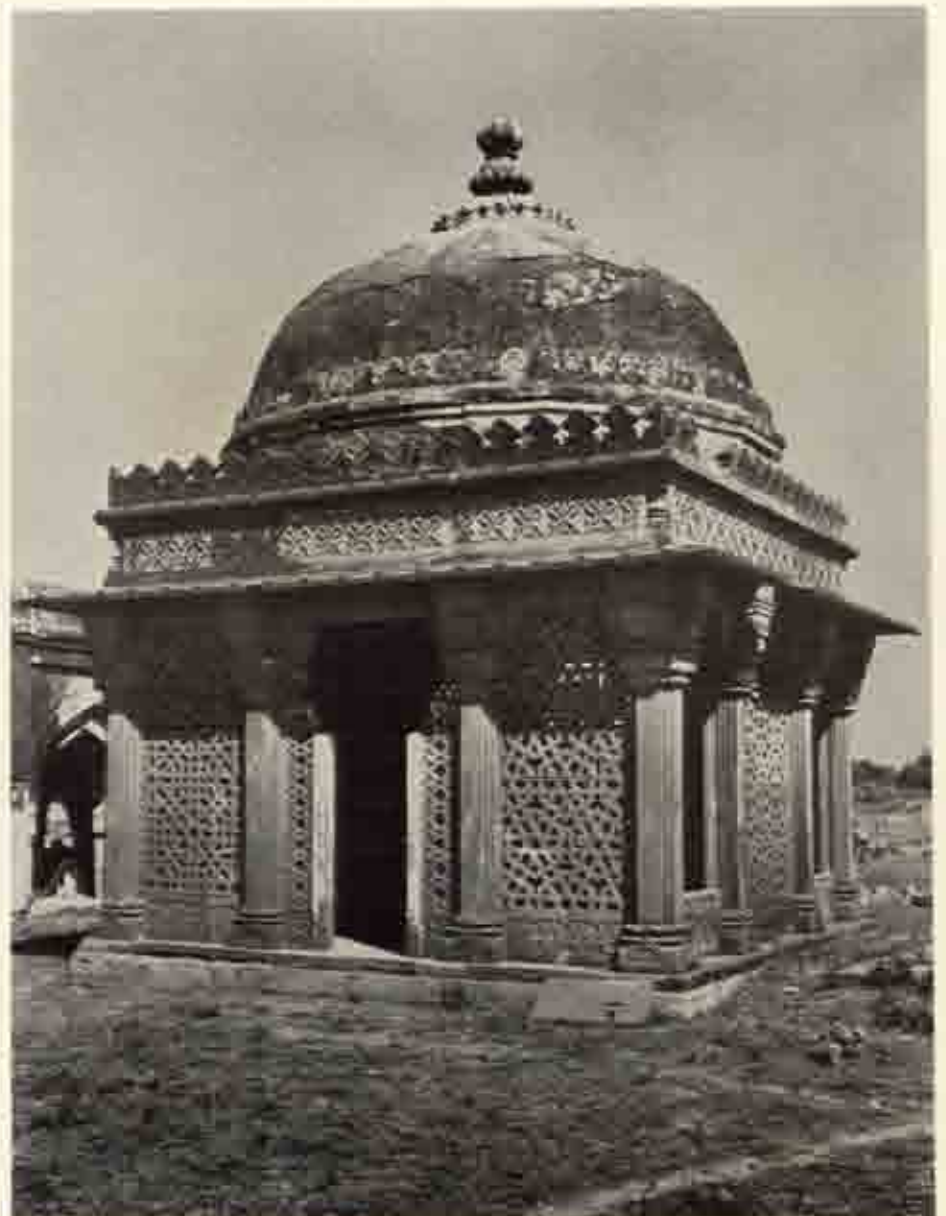
b T.101 墓建築 (?) 南より



a T.102 蘇建築 上の部分 西面



b T.103 タージャーフ・キョーバーイーンズの十二本柱の墓 南面と東面



c T.104 ユースフ・カッタールの墓 南面と東面



a T.105 シャアジャハーン・ムムターズマハールの墓 東面



b T.106 墓建築 東南より



c T.107 墓建築 南面と東面



a T.108 墓建築 回建物と西側のモスク 東北より



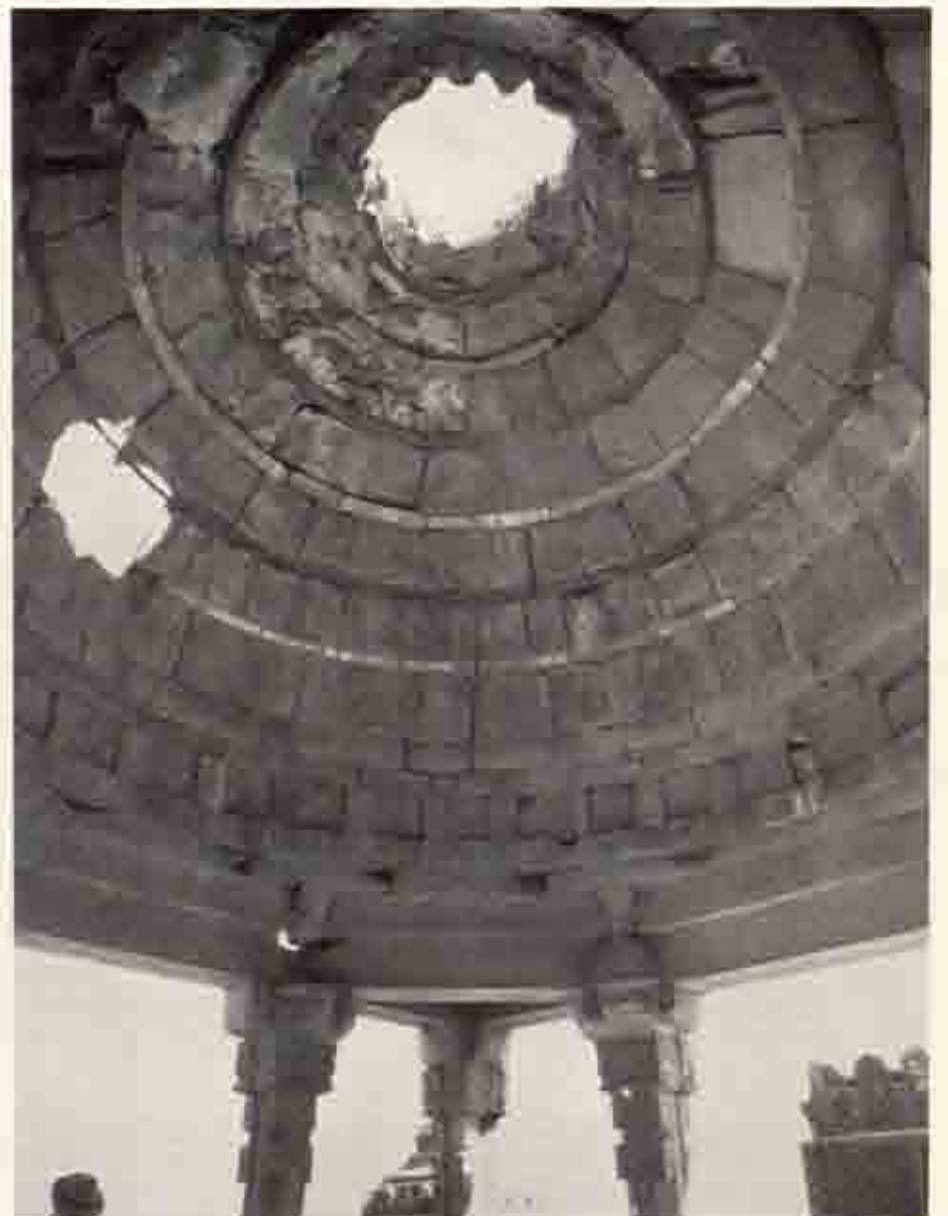
b T.109 シーラー東南のタール・ダグ・ボッド 回建物と回壁 東北より



4 T.110 ヲクステデーの墓 東南より



5 T.110 同上 墓壇の東北隅に立つサナートリ 西南より



6 T.110 同上 ドーム天井



a. T.111 蘇達塔 南面と西面



b. T.111 同左 ドーム天井



c. T.112 蘇達塔 南面と東面



d. T.113 マラーヂ・デリーのグータ・カンパー 南面と東面



a T.114 墓建築 南面と西面



b T.115 墓建築



c T.116 動物公園内の十二木柱の墓



d T.117 墓建築 南面と西面



a T.118 サイトヤツジの墓 北面



b T.119 高建墓 西面と南面



c T.120 高建墓(?) 側より



d T.121 高建墓(?)





a T.122 墓建築 南より



b T.123 墓建築(?) 南より



c T.124 墓建築 北東より



d T.125 ブラーナー=キラ=西北の八本柱の墓 西より



a. T.126 高建築 (ア) 西より



b. T.127 高建築



c. T.128 高建築 東南より



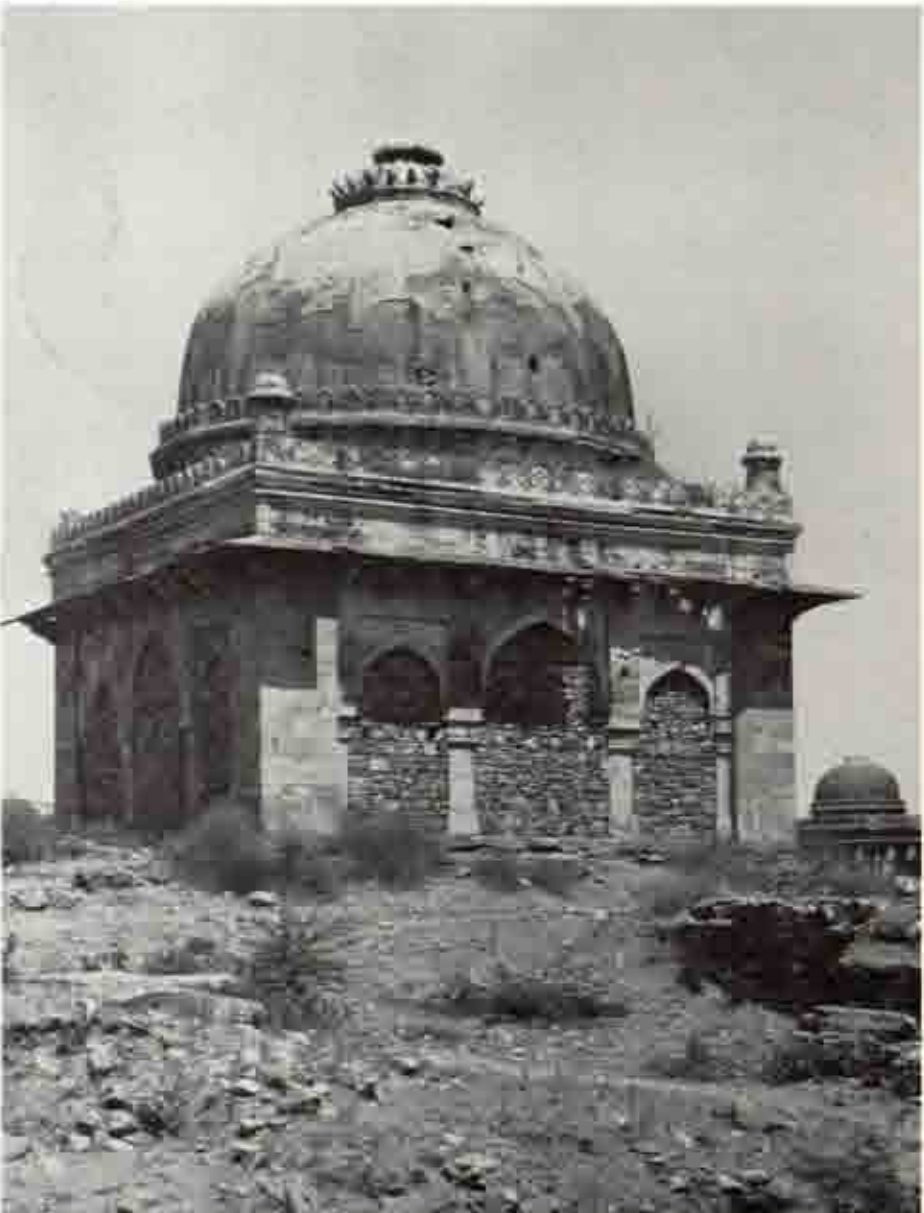
d. T.129 高建築 南面



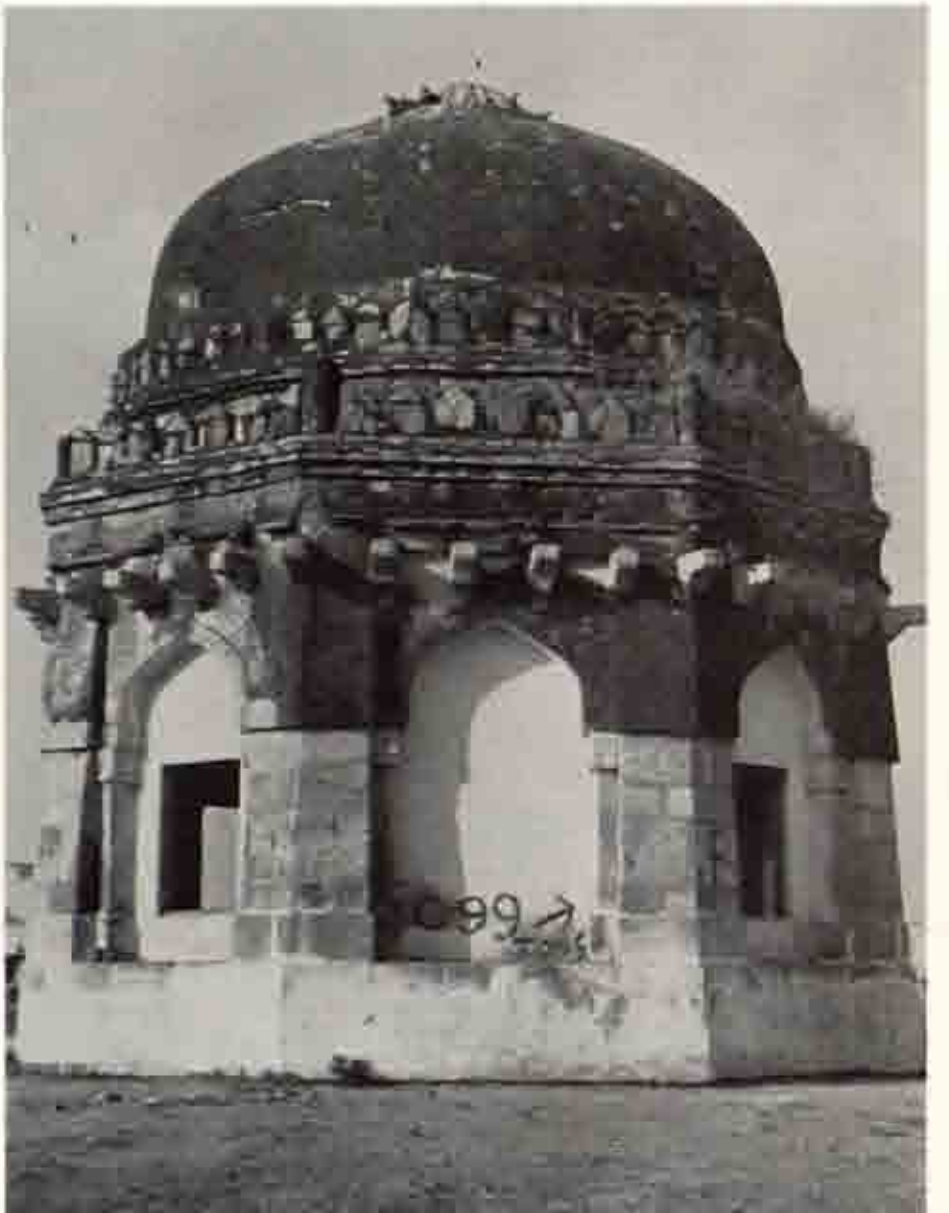
a T.130 シュエイブ・アラー・ワッブ・ディー・ソ・ヌール・タージの墓 南面



b T.130 同左 内部西側



c T.131 墓建築(?) 南面と西面



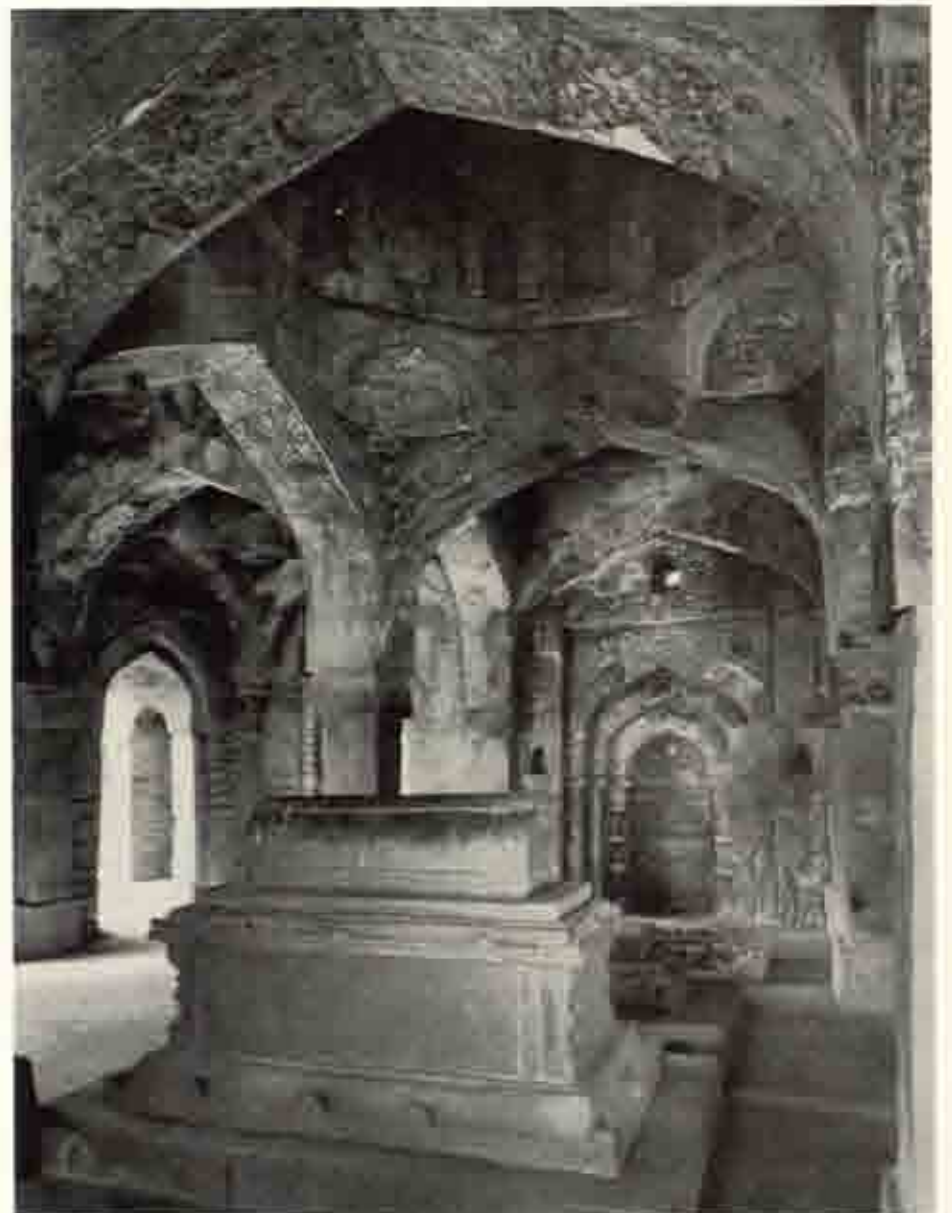
d T.132 墓建築



a T.133 バハロールドーザーディーの墓 南面と東面

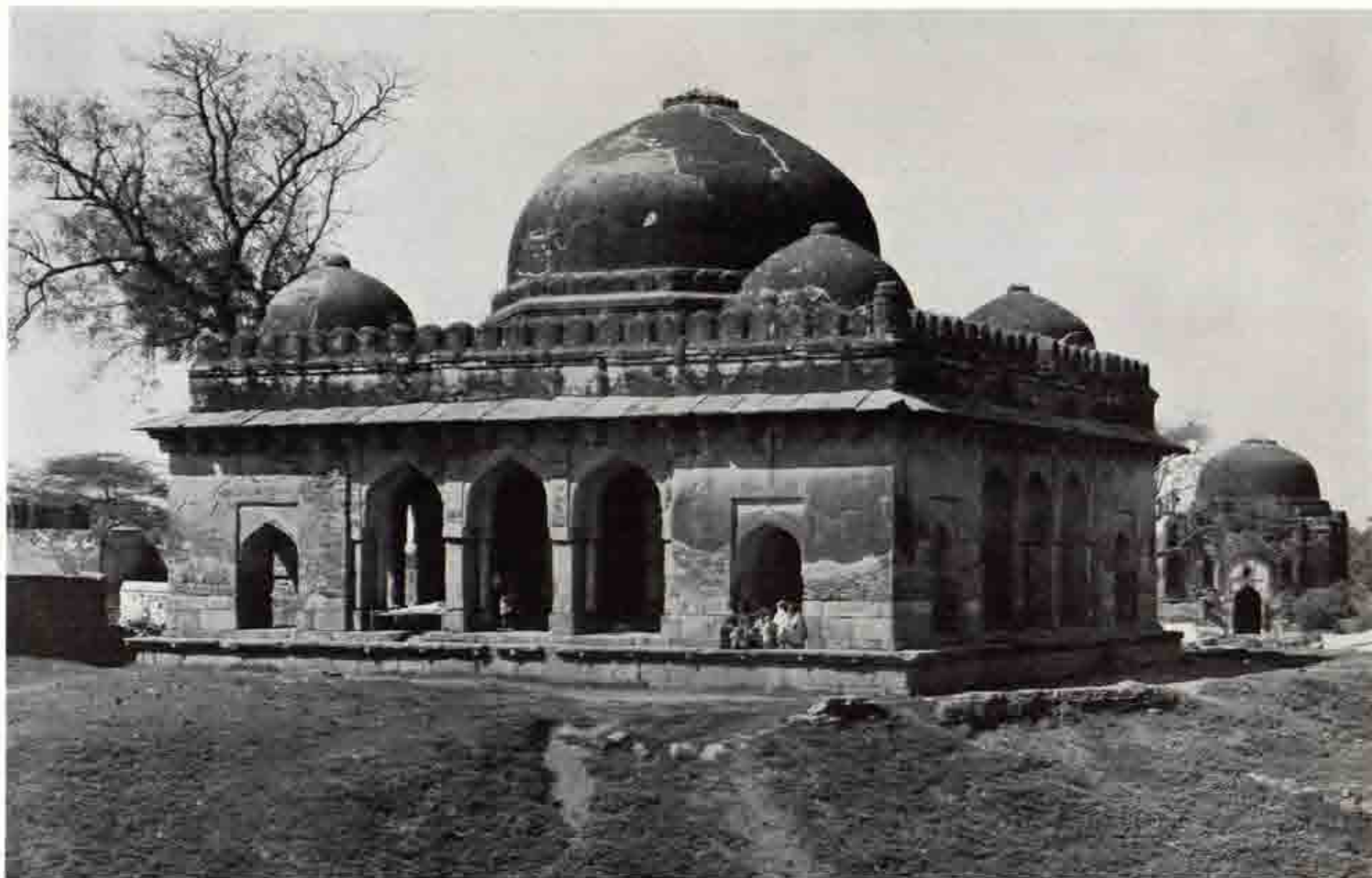


b T.133 同上 ミヘラーブ



c T.133 同上 内部 東北より

e/



a T.134 ニザムッディーンのパラカンパー：東面と北面



b T.134 同上 主室 内部



c T.134 同上 廻廊

## 水利施設



a. W. 1 スルターンブルの円井戸 西より



b. W. 2 トッブルカーボード城壁内の円井戸Ⅰ



c. W. 3 トッブルカーボード城壁内の円井戸Ⅱ



a W.11 チャーヘンバース: 現存する内部北面の石積み



b W.12 グリーン=パークの円井戸: 現存する内部西南部分の石積み



c W.14 ラードー=ケラーイーの円井戸: 現存する内部石積みと廻廊の一部





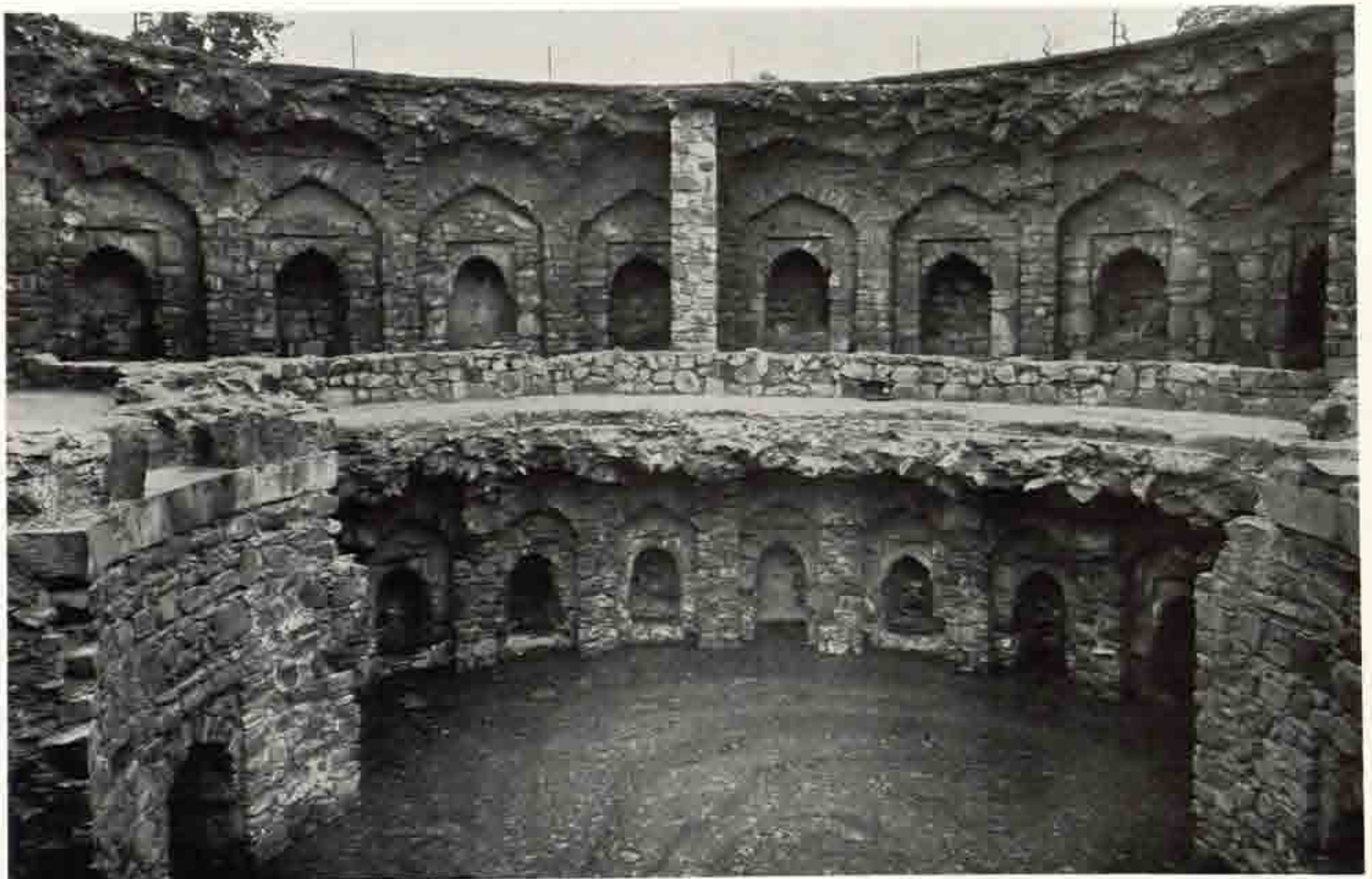
4 W.15 トゥブルカーバードの貯水井戸 北側に残る石積みと揚水施設



5 W.16 ビール・ギーブ西南の井戸 内部 東北の壁



a. W.17. フィーローズ・シャハ・コートラの円井戸、北より



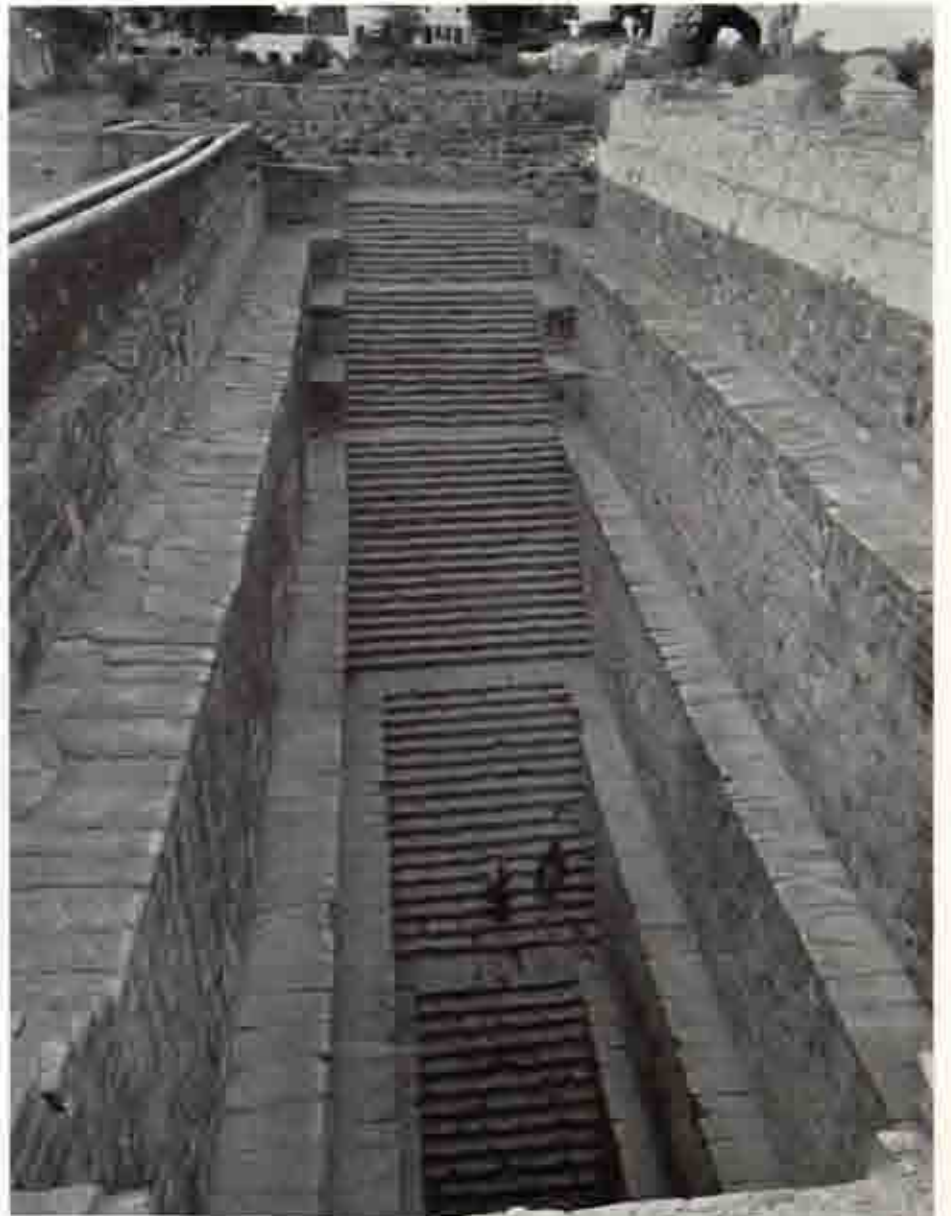
b. W.17 同上 内部兩側



a. W.18 : ガンダラ・クマバー・グロトト 西北より



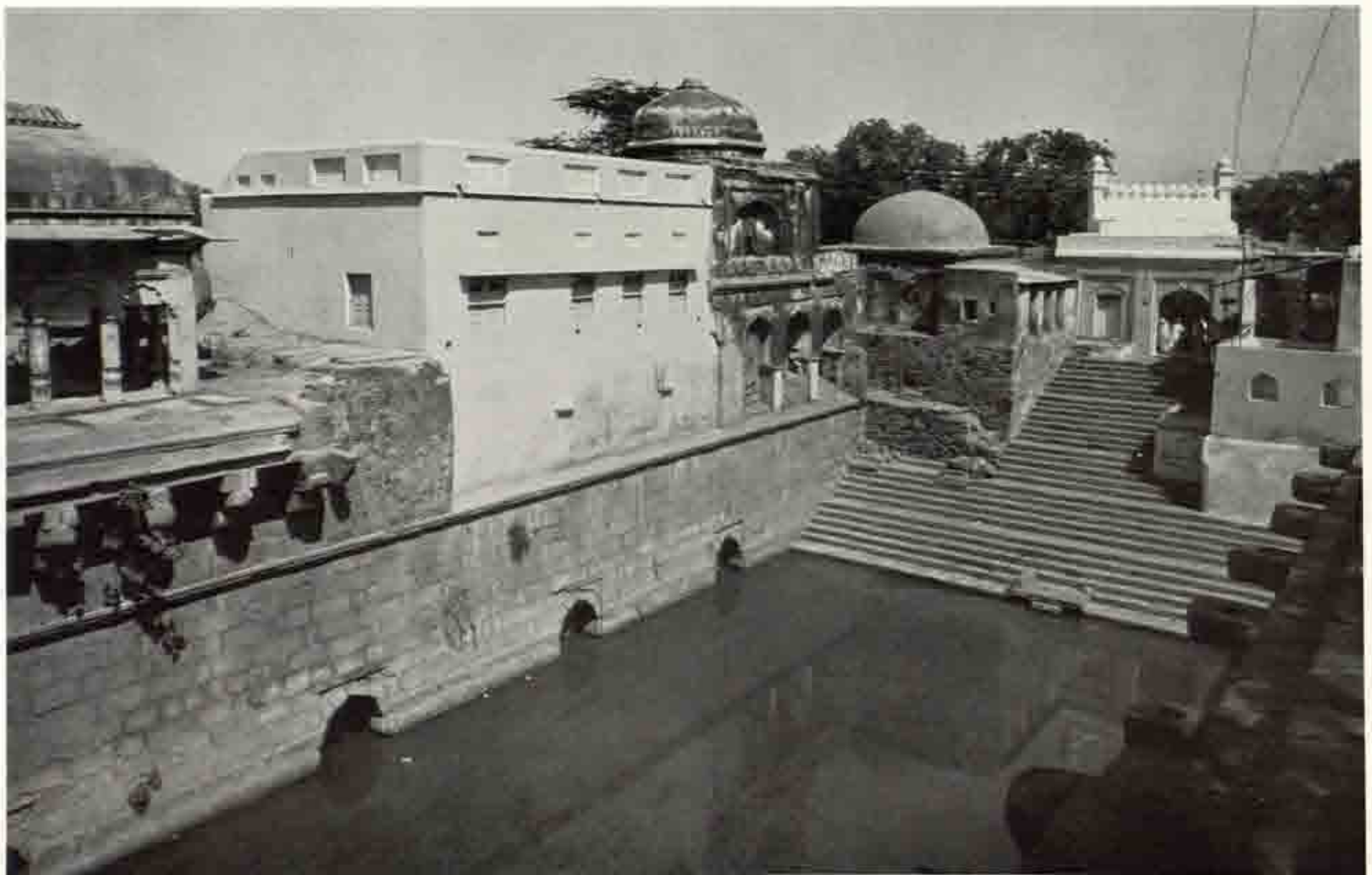
b. W.18 同上 内部南側



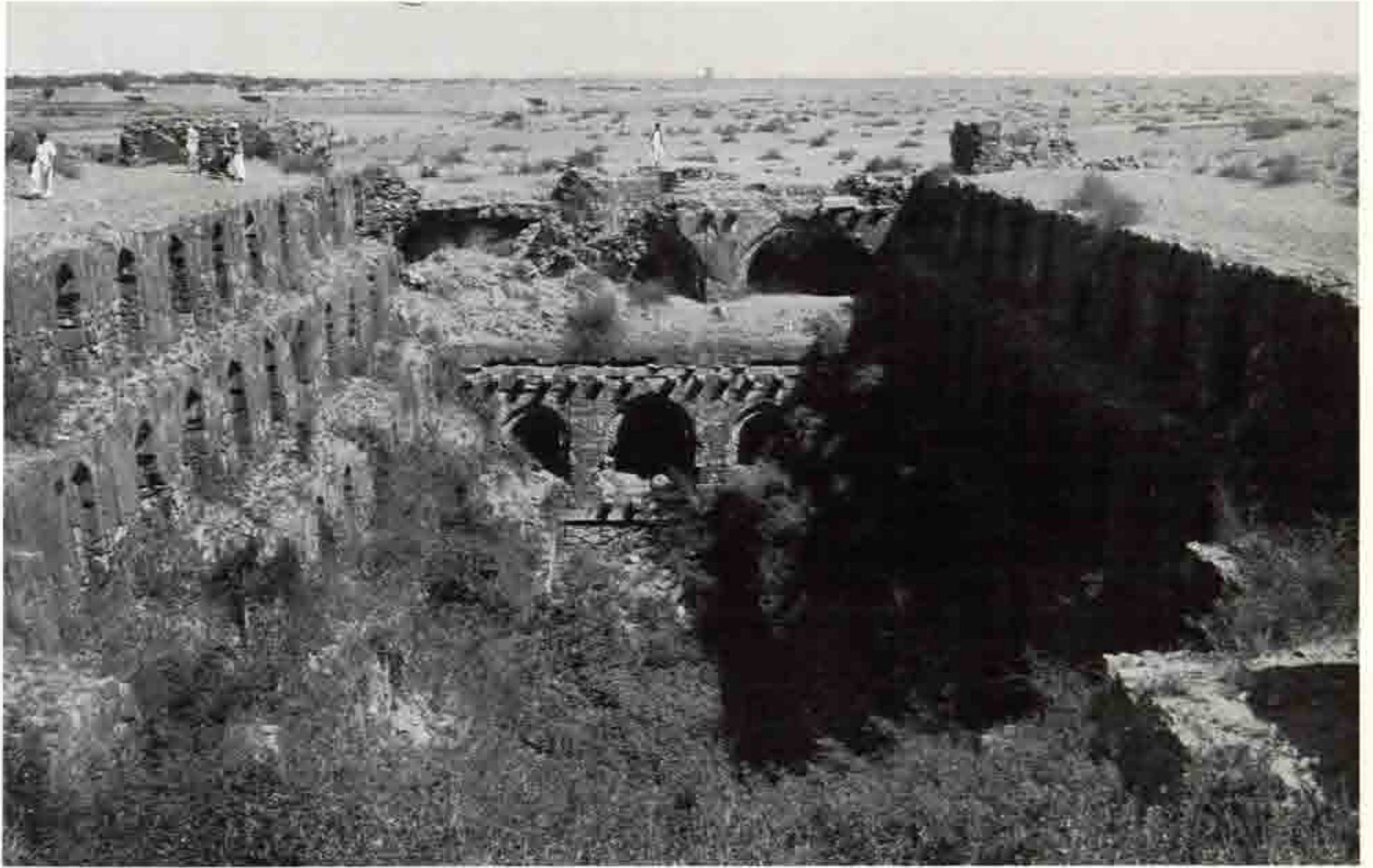
c. W.18 同上 内部北側



a W.19 ニザームッディーンのパオサラー 内部南側



b W.19 同上 内部北側と西側



a W.20 モラダーバード・パルサーのパオリー 内部北面



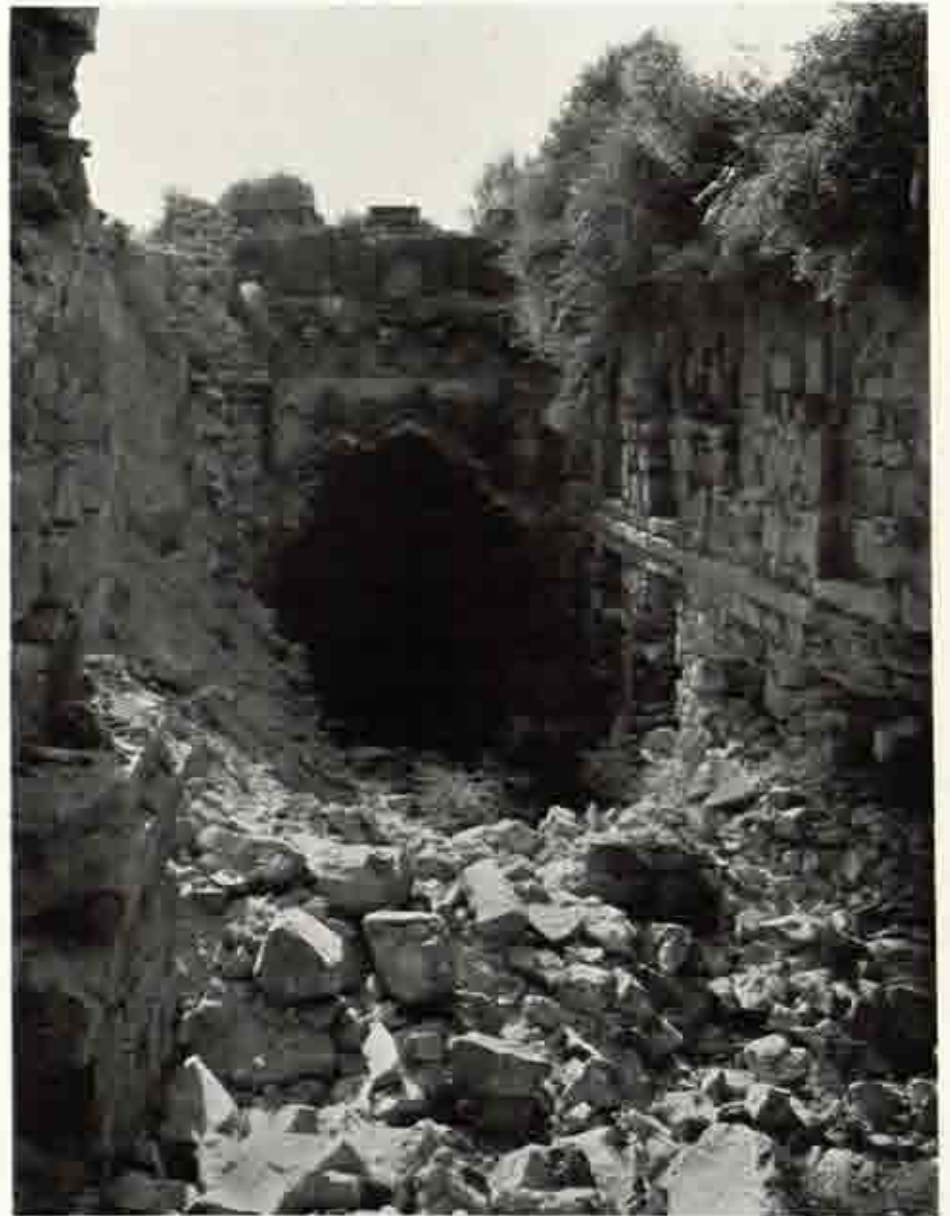
b W.20 同上 内部南側



a W.21 バクズ・ラーニー東南のバーオリー 内部南側



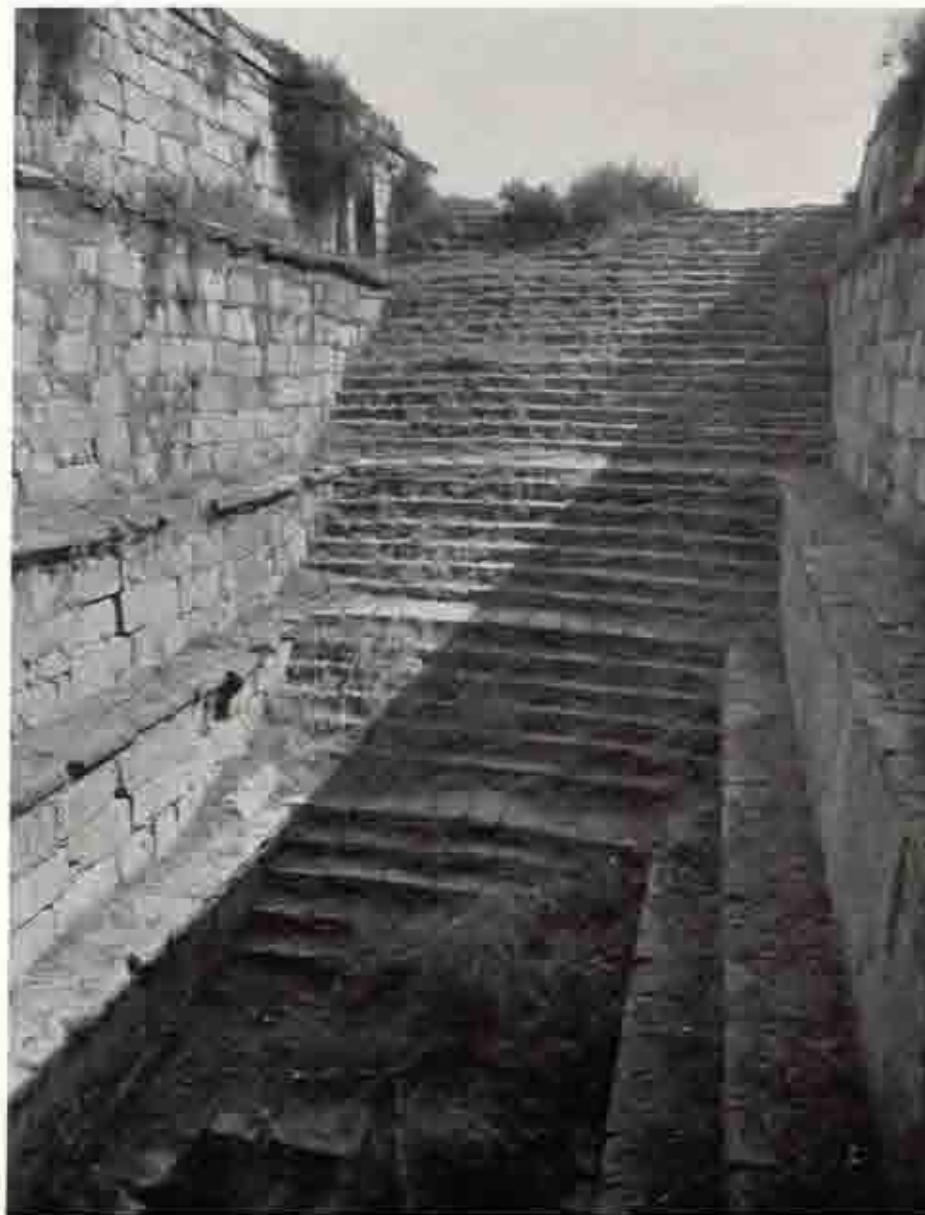
b W.22 チェール・ミーナル南方のバーオリー 内部西側



c W.23 トッダカ・ボード西北のバーオリー 内部南側



a W.24 トッブルカーバード西南のパネロー 内部西側



b W.24 同上 内部東側



c W.24 同上 井戸の部分 西側より



a W.25 スルターンブルのパーオラー 内部 西より



b W.25 同上 門戸の部分 北より





a W.26 ギーザン・シャ・バマン / 同バーオリーとモスクおまび庭建築 北より



b W.26 同上 内部 南側と東側



c W.26 同上 井戸の部分 南より



a W.27 バスマラ・モスクのバリー 残存する部分 西南より



b W.28 アミール・アル・ビハールのバリー 内部南側



c W.29 カスル・サイイドのバリー 内部北側



a W.30 セジールブルカ-アグレバッド南方のパーオリー 東北より



b W.31 アードチーニーのパーオリー 内部西側



c W.32 クトップ北方のL字型パーオリー 内部南側



a W.36 トッブルカーブドの塼壁 残存する西面の石積み



b W.37 トッブルカーブドの塼壁 崩壊の状況 西より



c W.39 スターションワードの塼壁 残存する部分 東南より



d W.40 デリー大学構内の塼壁 残存する部分 西北より



e W.41 サジーラーボードの塼壁 南より



f W.42 マールサヤの塼壁 南より



g W.43 ボーディーパライカリーカマハルの塼壁 残存する部分 東南より



h W.43 同左 樹幹水門 東面



a W.44 マヒバールプルの被災 南の部分 西北より



b W.44 同上 同部分 南東より



a W.47 トコダカカーブ下の水門 東20°



b W.47 同上、西面



a W. 48: サート=ズラ・北面



b W. 48: 同上 南面

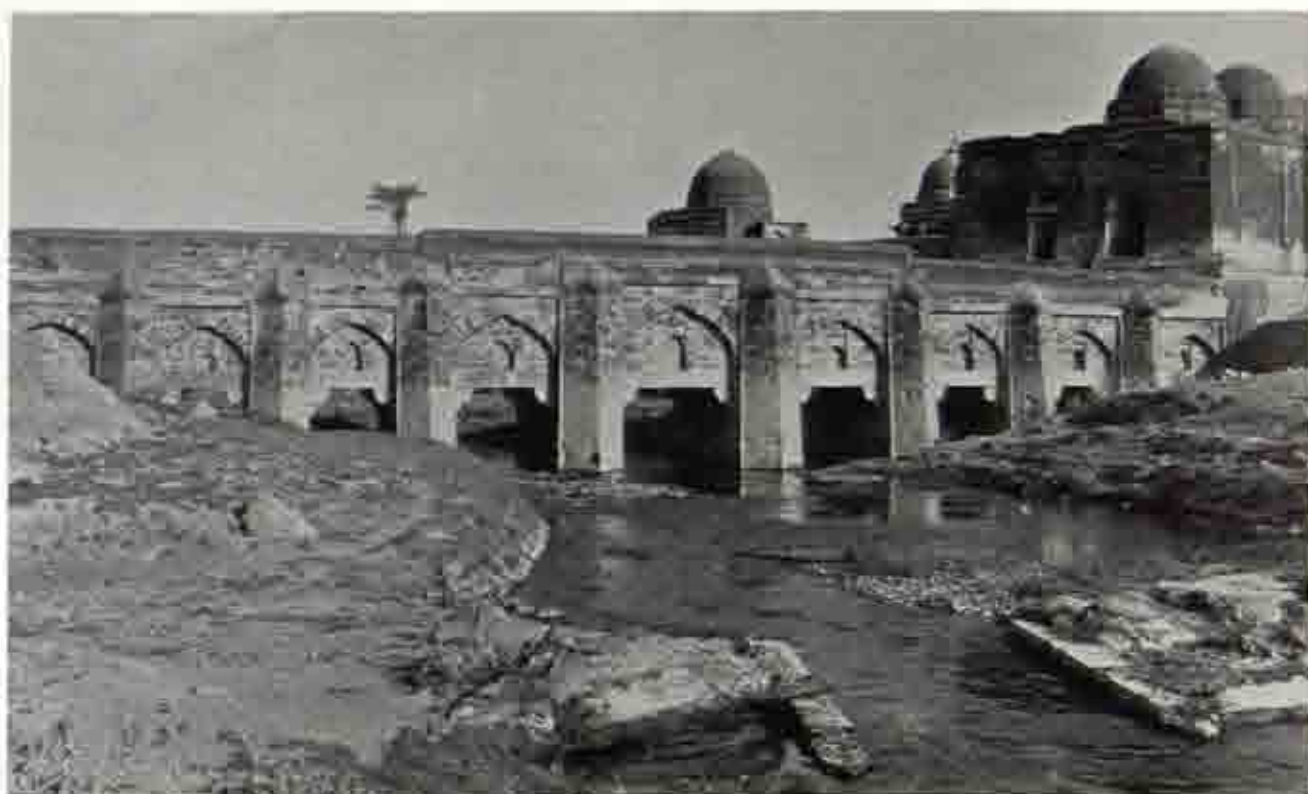


a. W. 49 ヲジ-サーマードの水門 東面



b. W. 49 同上 内部北側





a W.50 セジャーヌーバーダの橋 西より



b W.51 橋 南より



c W.52 橋 東より

## その他の建造物



a. 0.1 シェーラーの城壁 城壁の西南部分・北東より



b. 0.1 同上 城壁の西の部分 南より



c. 0.1 同上 城壁の西南部分のバステイオン 南より



a. O. 2 トゥディムカーバードの城跡 南城壁の一部



b. O. 2 同上 南城壁の一部



c. O. 2 同上 南城壁の一部



a. O. 2 トェブルカーブドの城砦 宮廷地域の城壁の一部、南西より



b. O. 2 同上 宮廷地域の廃墟 南東より



a. O. 3 フェディケーボードの城跡(後方)と帯状城壁(前方) 東北より



b. O. 4 フェディケーボード前方の小城砦 西南より



c. O. 5 シェハンバナーの城壁 南の部分 東より



a O. 6 ビジャイ・マンディール 主要部分 南より



b O. 6 同上 鐘楼風の建物 西南より

9  
✓



a O. 6 同左 主要部分 北より



b O. 6 同上 北側の建物 北西





a O. 7. Palmyra 宮廷地城北部の所設状の建物 東南より



b O. 7. 同上 宮廷地城南部の建物 西北より



a 0.7 同左 宮廷地域に通じる門 正面



b 0.7 同上 城内の建物 北東より



c 0.7 同上 もとジャムナー河に面していた東の部分



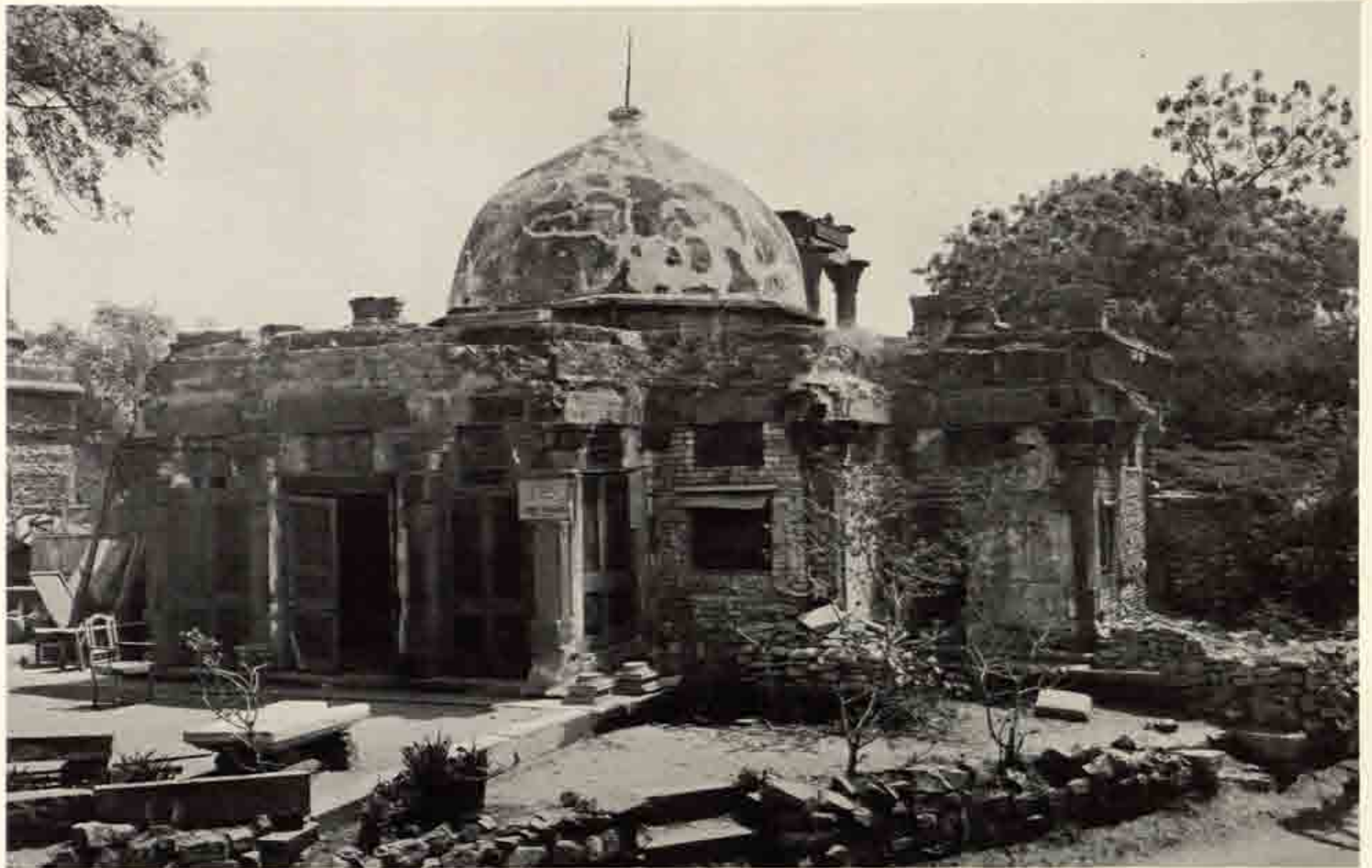
a. O. 8 カダム・シャリーフの故堡 部分



b. O. 8 同上 部分



c. O. 9 エザーム・デ・ジョーン南部の要塞跡 北北西 東より



a O.11 ニザームッディーンのラール・マドハル 西より



b O.11 同上 東より



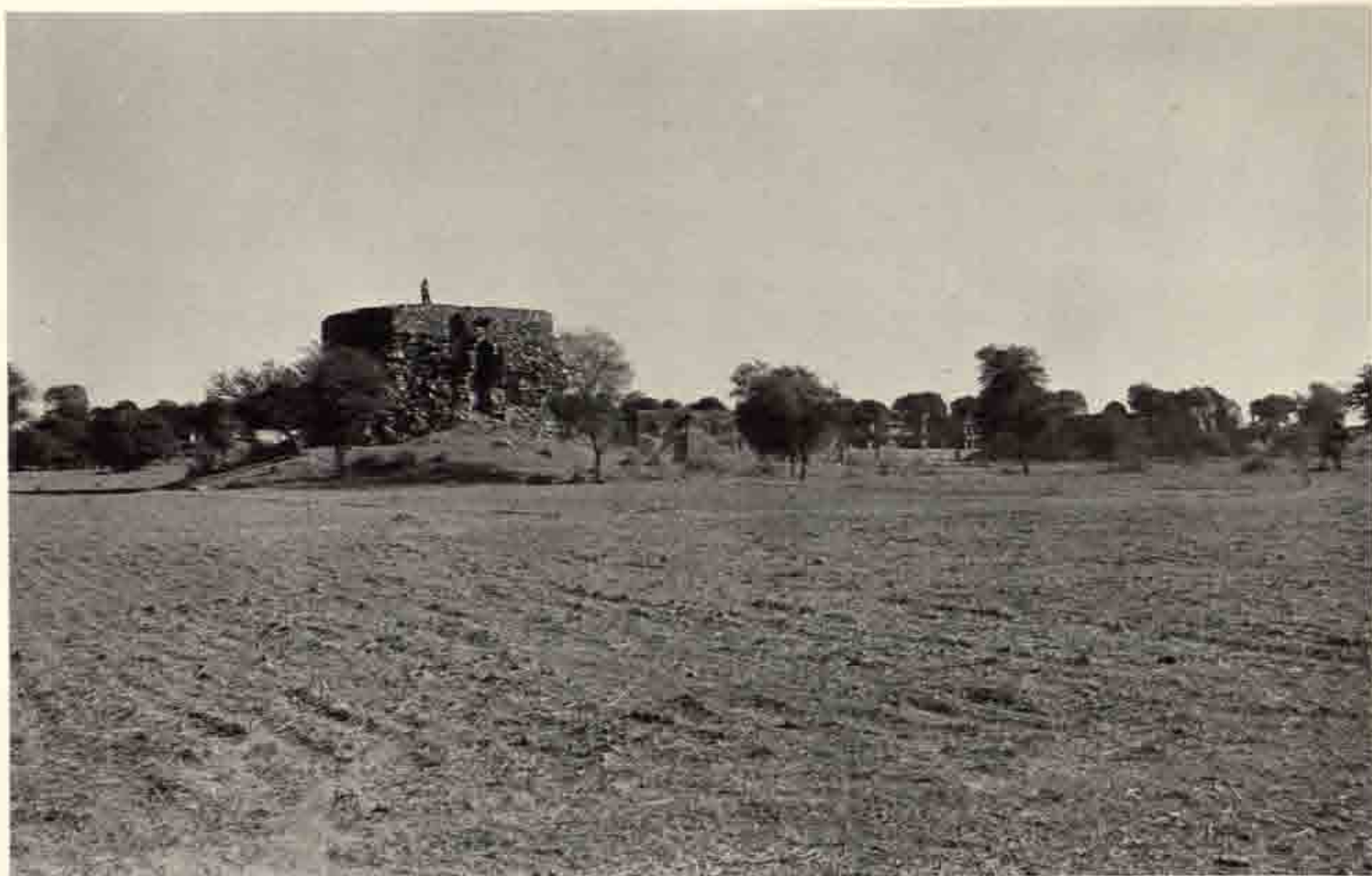
c O.11 同上 招風建物 西より



a O.12 マールチヤ・マハル 正面



b O.13 ビール・ゴープル 北面



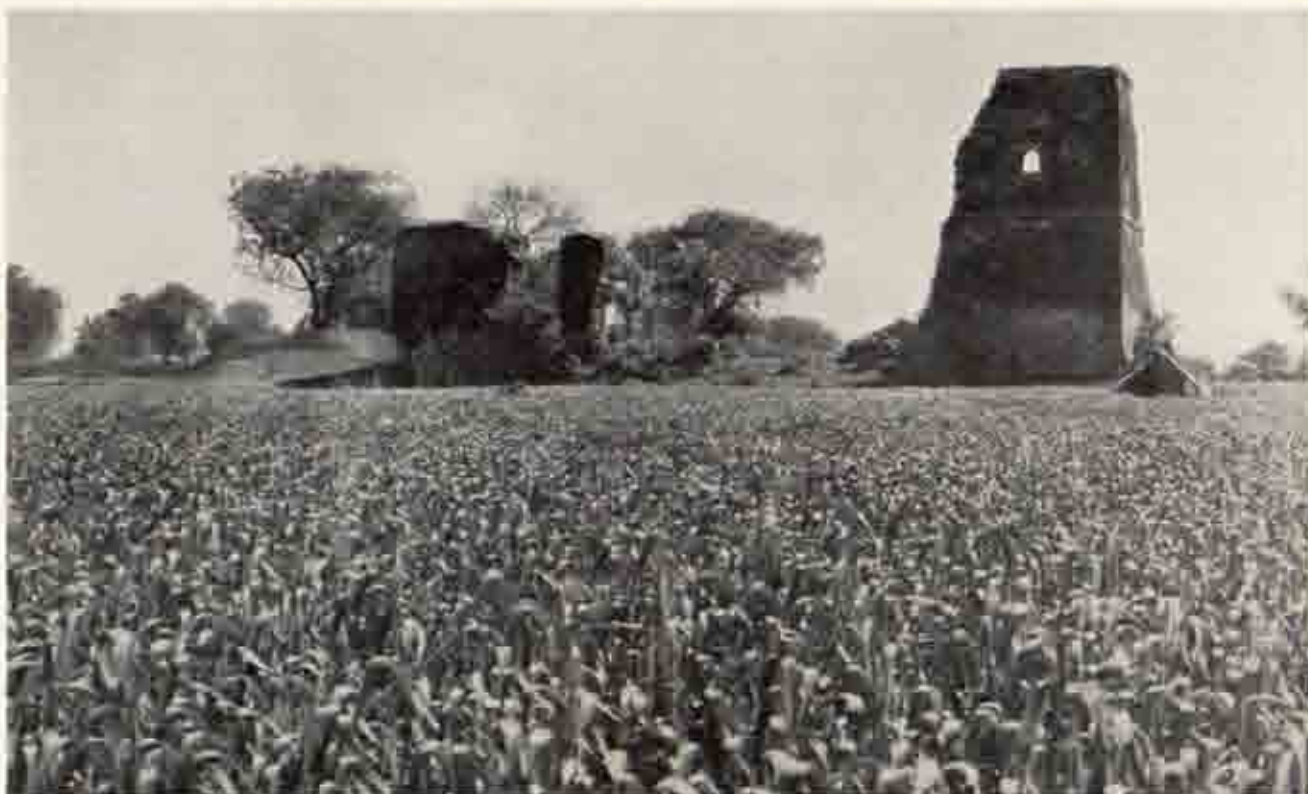
a O.14 ハヤズ・ハースの湖上の亭 西北より



b O.15 ボーリー・パティヤーリー・カ・マハル 東側の一部



c O.15 同左 東北隅にある内門 西面



a O.17 宮廷建造物(?) 崩壊の状態



b O.18 宮廷建造物(?) 残存する部分



c O.19 宮廷建造物(?) 南面



a O.21 ベーガツプル東方のマハル 内庭とそれをとり囲む部屋 東南より



b O.22 シキハーズ・マハル 東面





a O.23 アラー-クッディーンのマドラッサ 西側の部分 東面



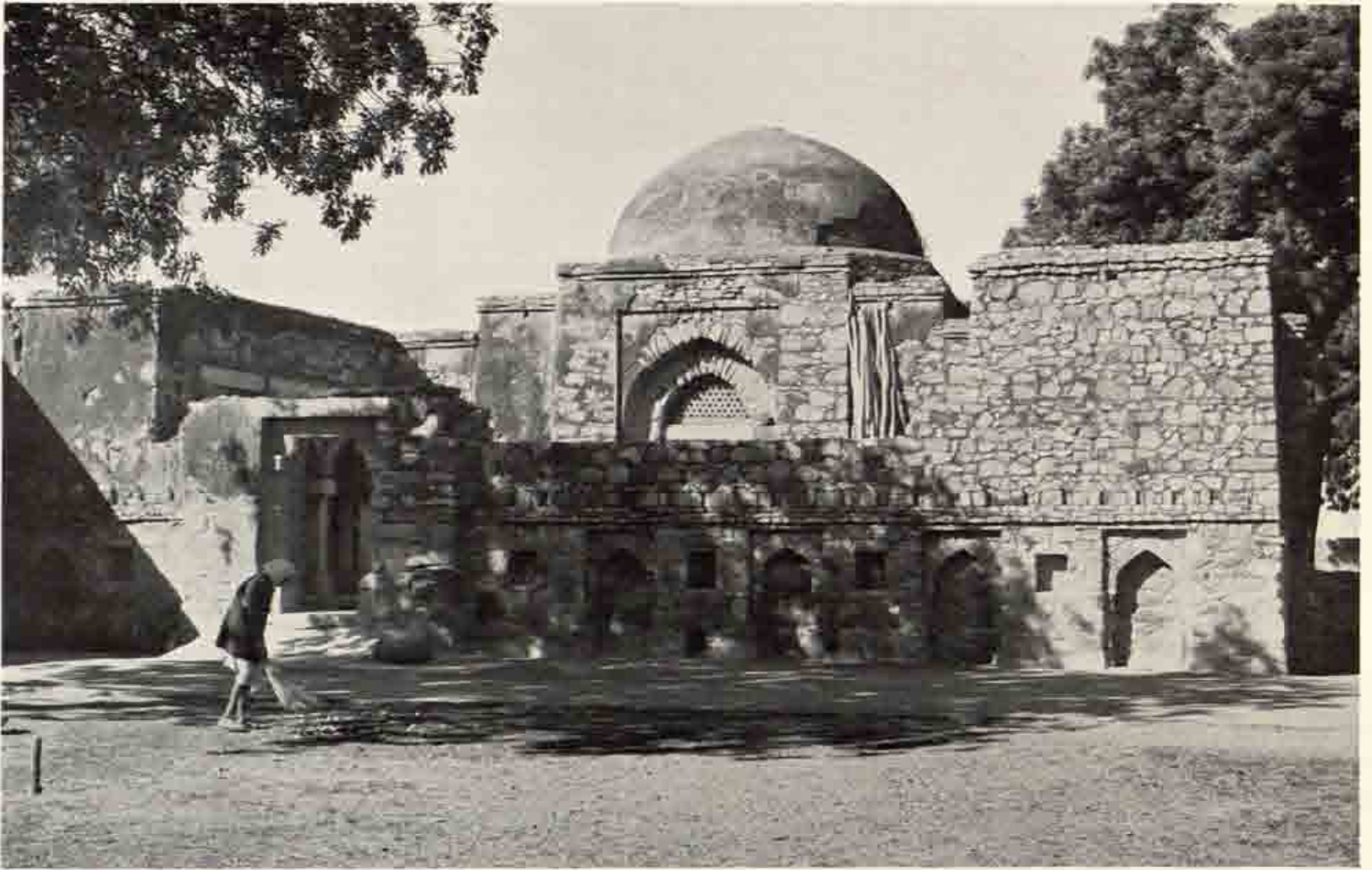
b O.24 ハズ-ナースのマドラッサ 北側の部分 西面



a O.24 ハブズ・ハースのマドラス 西側の部分 北面



b O.24 同上 中核部分 西北より



a O.24 ハサズ・ハーズのマドラッサ 南側の附属建物、東より



b O.24 同上 北側の部分、東面



a O.25 セイイダル-ブジャブのハンカー 北の部分 北面



b O.25 同左 墓壇の上の西側の建物 前面



c O.26 ツーリーのバーサラー 東面



d O.27 宗教施設(?) 崩壊の状態 西より



e O.29 ニゼムッディーン-オーリカーのチャクラー 東面



f O.30 シンガル-ハータ 北面の一部



a O.31 宗教施設(?) 西面



b O.32 宗教施設(?) 崩壊の状況 西より



c O.33 宗教施設(?) 北面



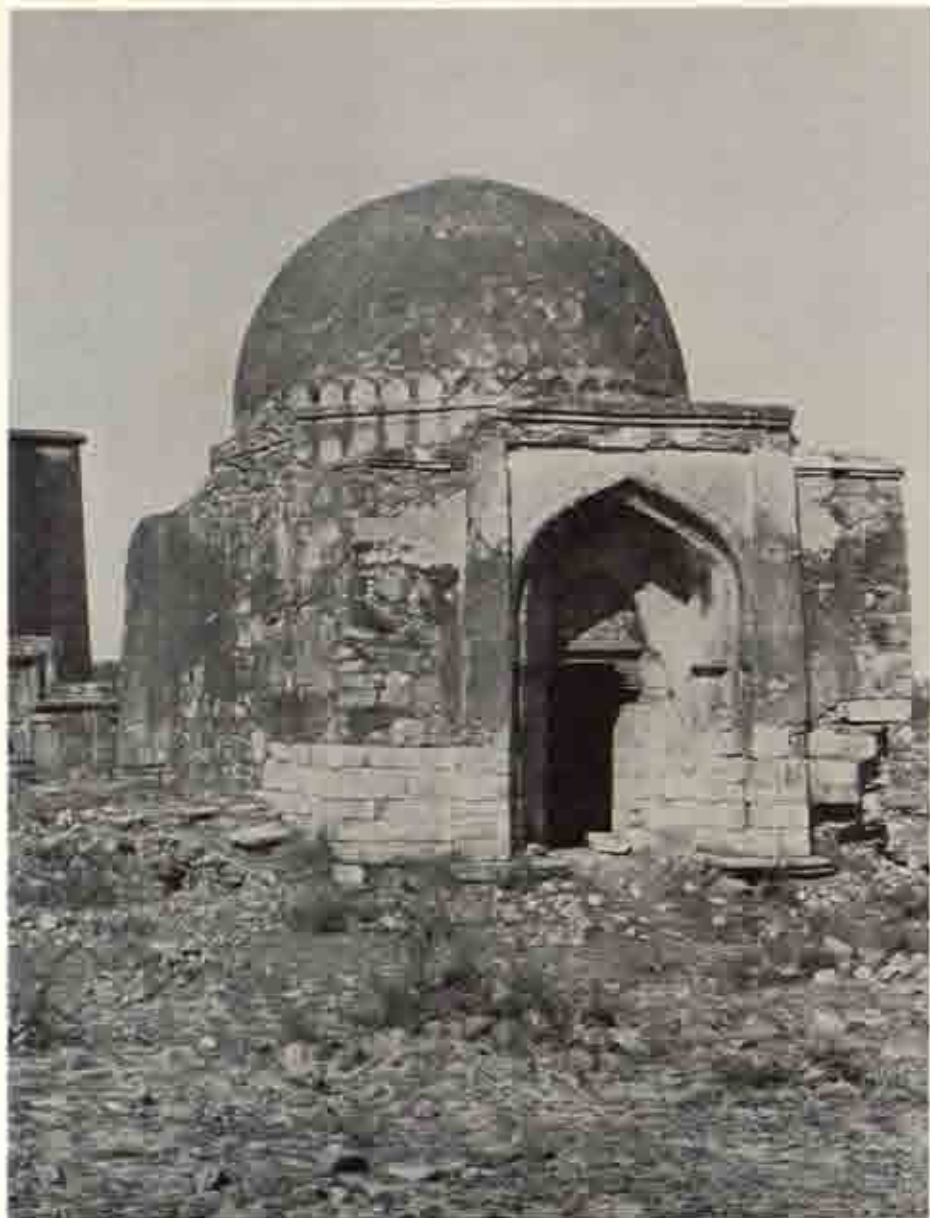
a O.34 ハルプーゼー・カブツバド



b O.35 宗教施設(?) 南面 中央入口附近



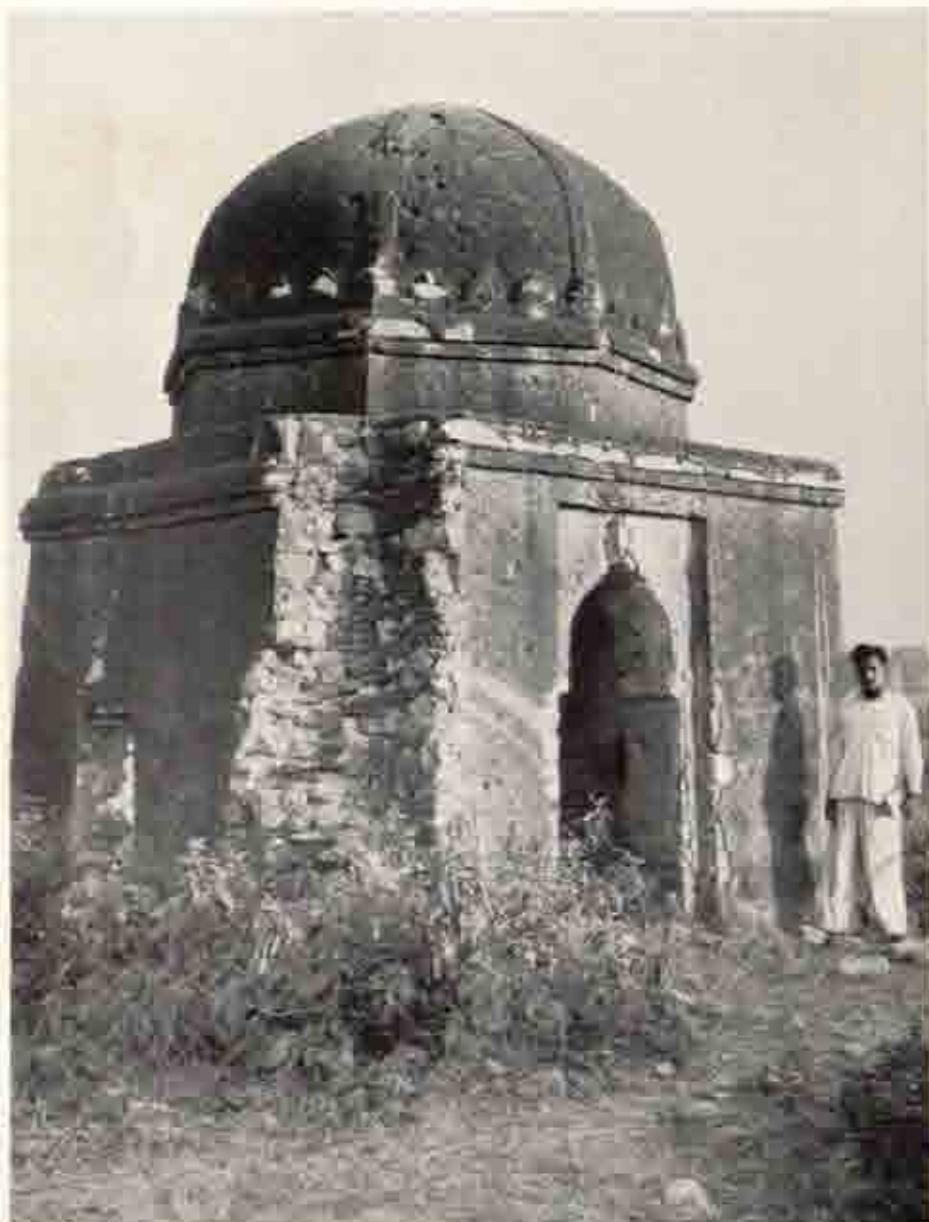
c O.37 宗教施設(中央の建物) 北面



a. O.39 門(?) 東面



b. O.40 門 西面



c. O.41 門(?) 西面之北面



d. O.43 門 南面之東面



a O.44 門 西面



b O.45 門(?) 西面と北面



c O.47 不明の建造物 西面



d O.48 チャール-ミーナール 東面より





a. 0.51 シェイフズルのおツマニム



b. 0.51 同上 内部



a O.52 トゥグルカーバードの地下倉 地表面の状態



b O.52 同上 別の地下倉の内部 天井



c O.52 同上 別の地下倉の内部



d O.53 アーディラーバードの地下倉 別築した上部の状態



e O.53 同上 内部



a O.54 不明の建造物 南より



b O.55 不明の建造物 東より



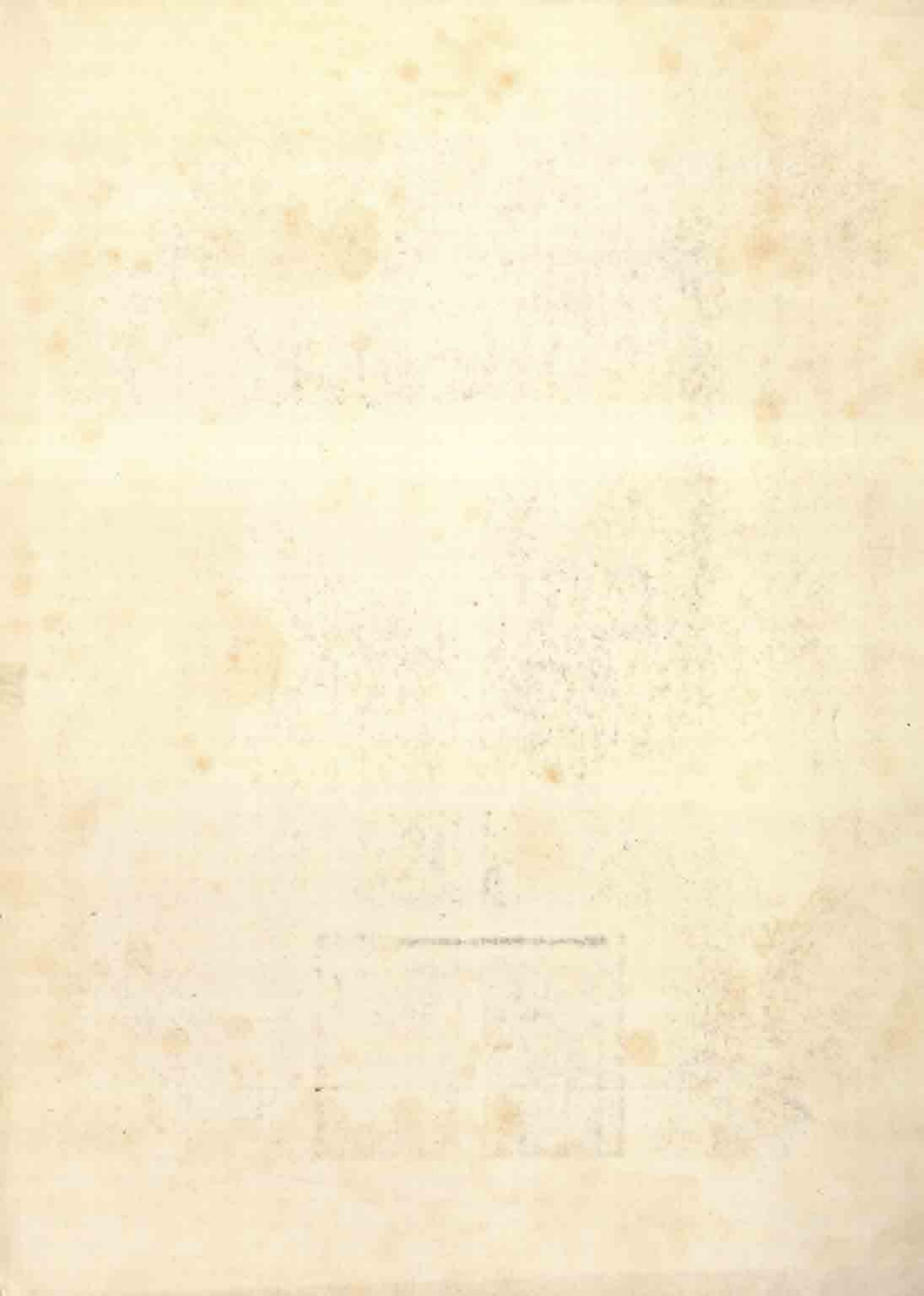
c O.56 不明の建造物 西南より



d O.57 不明の建造物 西南より



e O.58 不明の建造物 南より



1967年3月15日印刷  
1967年3月30日発行

非売品

『一』 追加版目録

発行所 東京大学東洋文化研究所  
製作所 財団法人 東京大学出版会





